〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編
文久三年一月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事輯掌史料」(紙数七三枚)」の記載あり〕

目録


総攬
京師報告
藤井良節大久保一蔵ニ京師ノ事情報告
当時京師ノ形勢
藤井良節大久保一蔵ニ京師ノ事情報告
軍制改革後ノ操練
衣服ノ制度ヲ革ム
衣服制度発布
癸亥正月大久保一蔵江戸報告
癸亥正月九日大久保一蔵中山中左衛門ヘ贈ル書
攘夷策略下問布達
琉球通寶通融布告
茂久公大操練ヲ見ル
軍制変更(御城下六組)
城下士編伍令
吉井友實大久保一蔵ヘ書翰
久光公御上京茂久公他日御上京云々達書
久光公至急御上京ノ勅命
農政奨励布告
禄高所有制限令
金銀貨幣価格変換布告
藩内産業奨励
当時京攝ノ形勢報告
砲術館ヲ廃シ撃剣場トス
御軍役ニ付平常御沙汰ノ趣御別紙ノ通
攘夷策略御下問
放鷹場ヲ廃止(藩令)

安田助左衛門日記抄（軍賦ニ就テ建言）

文久三年癸亥（清暦同治二年 西暦千八百六十三年）

神武天皇御即位紀元二千五百二十七年（〔ママ〕）

孝明天皇（統仁第百二十代〔ママ〕）御即位（弘化四年丁未九月）十七年（御宝算三十二）

将軍家茂公（第十四世）襲職（安政五年戊午十月）六年（年二十一）

忠義公（第二十九世当時修理大夫ト称ス〔ママ〕）知政（安政五年戊午十二月）六年（年二十四実八二十三）

（藩祖忠久公薩隅日三州及琉球国受封（人皇八十二代後鳥羽天皇ヲ対永五年即チ文治二年）六百七十六年）

関白　近衛忠熙公（正月辞職）

同　鷹司輔熙公（十二月免職）

左大臣　一條忠香公（十一月薨）

同　二條齊敬公

右大臣　二條齊敬公

同　徳大寺公純公

内大臣　近衛忠房公

政事総裁職

（前福井藩主）松平慶永（三月罷免）

（川越藩主）松平大和守直克

（丹波亀岡藩主）松平豊前守信篤（九月罷免）

老中

（山形藩主）水野和泉守忠精

（備中松山藩主）板倉周防守勝静

（亀野藩主）脇坂揖水安宅

（唐津藩世子、当時老中格）小笠原圖書頭長行（六月禁錮）

（姫路藩主）酒井雅楽頭忠績

（丸岡藩主）有馬遠江守道純

（長岡藩主）牧野備前守忠恭

（椎谷藩主、文久二年十二月卒）堀出雲守之敏

（笛木藩主、文久二年閏八月免）遠山信濃守友詳

（二宮藩主、同上）加納遠江守久徴

（相良藩主）田沼玄蕃頭意尊

（館山藩主）稲葉兵部少輔正巳

若年寄

（高島藩主）平岡丹波守道弘

（七月老中〈転〉）諏訪因幡守忠誠

（下手渡藩主）有馬遠江守道純

立花出雲守種恭

（長岡藩主）牧野備前守忠恭（六月罷免）

（淀藩主）稲葉美濃守正邦

所司代

京都町奉行

（滝川播磨守具知）

〔永井主水正尚志〕
〔七月目付ヘ転〕
〔池田修理長発〕

〔国　老〕川上筑後久封
　樺山主計久要
○島津大蔵久徴
○島津伯耆久福
　喜入摂津久高
　島津左衛門久徴
　川上式部久美
　川上但馬久運
　小松帯刀清廉
　桂右衛門久武
　岩下佐次右衛門方平
　諏訪伊勢武盛（一時島津ノ称号ヲ許ス）
　川上龍衛久齢
（以上十三名前代ヨリ勤続ノモノハ○印ヲ付ス〔朱〕）

## 二〇四　総攬

文久三年癸亥
正月

元日
本日ヨリ三日〔マヽ〕ニ至ルマテ年首ノ御式執行セラレタリ、独礼家格ノ人々ハ着服素袍・烏帽子、其以下諸士ハ従来ノ正服（麻上下）ヲ用ヒタリ（中古以来古式ハ廃レタルモ、本年ヨリ稍復古ノ式事トナレリ）
太守公ハ御本丸、　国父公ハ二ノ丸ニ於テ慶賀ノ御式受ケサセラレタリ、（昨年十二月十六日ヲ以テ布達ノ如ク、独礼家格ノ人々ハ素袍・烏帽子着用、烏帽子ハ烏津折用フヘシト令セラレタリ、如何ニモ端正雅風ニシテ復古ノ一ナリト、咸人感悦セリ、○烏帽子製造ハ甲冑製作所ニ於テス、同局ハ許多ノ製造昼夜兼業セリ）

## 二〇五　京師報告

正月二日、〔前田斉泰〕加賀中納言京都ヲ発シテ国ニ帰リ、〔徳川慶篤〕水戸中納言上京本國寺ニ館ス、四日将軍着京、二條城ニ入ル、当時出京大小ノ諸侯五十一藩ニ余レリト報ス、

## 二〇六　藤井良節大久保一蔵ニ京師ノ事情報告

年頭之御祝義申上候、扨大事之一条日々案シ、御左右御待申上候、〔朱〕「（何等ノ事乎今知ルニ由ナシ）」
朝使復命ヨリ、春嶽〔松平慶永〕様義ヲ色々ト因循之様被仰立候御模様ニテ、甚残念之仕合ニ御座候、其上越・土両公ト薩ト同論、関東ヒイキト申ス説迄差起リ、強服〔業力〕千万ニ

御座候、尤宮〔朱〕「〔青蓮宮〕」ニモ越・土・薩之説ニ御マヨイ被遊候旨ヲモ申立候由、何トモ不平至極ニ御座候、

御建白之御趣意〔朱〕「〔二十五ケ条〕」ハ勿論、右次第之場所ヘ　御上洛ニテハ、イカ成珍事到来モ難相計被存、先ツ何ニシテモ容堂〔山内豊信〕候早ク御上　京ナクテハ、御同藩之折合モ附兼申候半、何分公武之御形勢篤ト御勘考之上、毎事御周旋平ニ所祈ニ御座候、恐惶謹言、

正月二日　　藤井良節〔正徳〕

大久保〔利通〕様

参人々御中

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

## 二〇七　当時京師ノ形勢

文久三年癸丑正月二日、在京ノ諸侯學習院ニ出テ正朔ヲ賀ス、

## 二〇八　藤井良節大久保一蔵ニ京師ノ事情報告

御早着毎事御周旋被成候半奉恐儀候、京師御立後、即〔朱〕「〔猥慌〕」喜入家御坂着相分リ廿九日御上京、早速　陽明家ヘ御届旁参　殿仕候処、元日ニ参　殿被仰出同道仕申候、尤〔朱〕「〔近衛家〕」御両殿様御一緒ニ拝謁被仰付、御都合ヨク相済申候、扨〔日記参看〕」毎日出会万事寛々申承仕合ニ御座候、　宮様ヘハ三日中参　殿之筈ニ御座候、御残シ置之御書面モ直ニ指出シ置申候、御出立後何モ相変ル義モ無御座候ヘトモ、長・土之辯論ニハ誠ニ込入申候、屹ト暴発モ難計模様ニテ、宇和島老公〔伊達宗城〕・因州〔池田慶徳〕大ニ心配モ御座候ヘトモ、御手モ難被及御模様、扨々込入タル事ニ御座候、彼之御都合少ニテモ相分リ次第、極急飛脚ヲ以被仰越被下度奉祈候、因州・宇和島・阿州・長岡同論ニテ、　陽明家ヘモ一同御参　殿廿八日ニテ、議奏・武伝ニモ御出会ニテ、重畳御議論モ為有之由ト申モ、ヤハリ長・土等御暇之御一策ニテ、各様奉始御一同ニ御暇御願出之事ニ御座候、此事甚難被行勢ニテ不得止候、○長州ヨリ大キニ薩ヲ疑ヒ候事ニ付、　宮様御配慮不一方、是ハ御存之通〔朱〕「〔献芹〕」志々目始人数差上置候処ヨリ様々ト　宮江申上込ミ、正議之御方因循ニ奉成ト之説起リ、大ニ不平ヲ生シ候トノ事、土州武市半平太〔小橋〕甚心配致シ呉候由ニ付、今日同人ヘ参リ談合イタシ、兎角此上ハ三藩ヨリ両三人ツヽ差出候筋、可然ト申談シ置申候、尤モ　宮ニモ其思召ニ御座候、甚不快千万ニ御座候ヘ共致方無御座、何分ニモ公平之処ニ無之候テハ相済不申候ニ付、

先右之通取計申候、尤喜入家ニモ形行申談談合仕申候、ヱモ知レヌ事共差起心外千万御察シ可被下候、

一御国許ヨリ十二月十五日仕出シ之御用封、廿九日相届、廿一日仕出之分今朝相届、両度分御用封極急飛脚差立差上申候間、御受取可被下候、以上、

正月二日　藤井良節

大久保一蔵殿

二白、吉井氏ヘ別段差出シ不申候間、ヨロシク御伝声奉希候、

〔同上書にて校訂〕

## 二〇九　軍制改革後ノ操練

正月六日

本日例規ノ如ク砲術館ニ於テ、歩砲二兵ノ操練及ヒ軍神祭典執行セラレタリ、御名代島津讃岐貴敦、

昨年十一月七日ヲ以テ軍制改革ヲ令セラレシニ依リ、西洋式操練ヲ熄メラレ、御家法ノ軍制ヲ基本トシ、和漢洋大成ノ隊伍ニ編制シ操練ヲナサシム、野戦砲隊ノ操練ハ洋式従来ノ如シ、出役ノ人員等ハ先規ニ異ナルコトナシ、

〔朱〕「〔御親書参照〕」

齊彬公ハ嘉永六年正月西洋式ニ改革セラレタルヲ、即今攘夷鎖港ノ論熾ンナルニ依リテカ、伊地知正治〔季靖〕・中山仲左衛門・大久保一蔵等カ主張スル所ノ、荻野天山流ニ則リ、銃陣ノ編成ニ引劣シタリ〔戻カ〕、心アル者ハ憫笑シ、年ナラスシテ必ス先公ノ編制セラレシニ帰スルナラント窃ニ唱ヘタリシカ、果シテ同年七月英艦ト戦闘ノ際、渠ノ大小砲新式ノ尖弾・後装砲等ノ鋭利ヲ実視シテ、旧式ノ用ルニ足ラサルヲ一般開悟シテ、倏チ新式洋法ニ帰シ、先公ノ明見ニ感シタリ、其間笑フヘキ浅薄ナル挙動多カリキ、

## 二一〇　衣服ノ制度ヲ革ム

本年年首ノ礼式ヨリ、麻袴又ハ羽織袴等着服勝手タルヘキ旨令セラレタルニ依リ、多クハ羽織袴着用ノ者多キニ一変セリ、

## 二一一　衣服制度発布

旧臘発布ノ幕令ニ依リ、一般平服上下一名縱キ上下又ハ絽肩衣トモ通唱スヲ廃シ、羽織・袴・紺足袋等勝手着服スルコト、ナレリ、依テ本藩ニ於テモ重立タル御使者等ニモ、襠高袴・割羽織（一名鞦指羽織トモ云フ）等着服セリ、又供人数モ減シ、閣老ハ

勿論大小名其他幕役乗輿ノ人ナク、乗馬或ハ衣服ハ熨斗目長袴モ廃シタリ、
本藩ハ殊ニ質朴倹素ノ風俗ニ復セラレンノ尊旨ナルカ故綿布ノミヲ用ヒ、寸片ノ絹帛ヲ用ルヲ得サルノ厳令ヲ布カレタルカ故、幕令ヲ俟タスシテ倹素ナリ、齊興・齊彬二公ヨリ連綿質素ノ令ヲ布カレ、当今ニ至リ尚ホ厳令ヲ布カレタルカ故、殊更ニ倹素ノ風行ハレタリ、

## 二一二　癸亥正月大久保一蔵江戸報告

昨日迄ハ別紙通御決定ニ相成候間、早々御注進申上候賦ニテ相認置候得共、亦々左之通御評議相替リ候、町便ヲ以形行申上越候間、早目相達シ可申候得共、尚為念飛脚差立申候、別紙ハ最早無用ニ御座候得共、昨日迄之形行御覧之為其侭差上候、

一別紙通、昨日迄御決定之事候得共、昨日藤井良節別紙〔朱〕「(前記二通参照)」書状到来、色々混雑之模様ニテ不堪心配趣申遣、実ニ長・土之暴論可悪、殊ニ薩ノ名ヲ立候義憤恨之次第御座候、是ハ今般　御建白之御趣意相洩候テ之訳ニハ無之筋ニ候得共、一体土・越ニモ薩之建議相立、且宮様ヘ御借入之一条等、実ハ妬心ヨリ起リ候訳ニ可有之、終ニ
皇国ヲ乱シ候者ハ長ナルベク、就テハ篤ト熟考仕候処、大樹公御上洛御延引被
仰出候ハ、愈物議沸騰イタシ、却テ害ヲ引キ候様之事モ難図、且ハ薩之建白ヨリシテ如此ト、尚以因循トカ何トカ異説ヲ生シ候儀ハ案中ニテ、天下之公論ニ候得ハ、少モ不差構訳トハ乍申、亦嫌疑ニ遠リ候コトニモ無御座候テハ、一人之上トハ違ヒ
御名望ニモ相拘候義、尤モ是ハ長一藩之譏ヲ避クルノミニ無之、御当地一体之論ヲ承候処、暴論家多ク、中ニモ六ケ敷勢之事ニ御座候、依之昨晩越邸ヘ伺候、御両公御揃ニテ色々御議論モ有之、且及建議候訳モ有之候処、御評議之上左之通御決定相成候、

一大樹公上洛、三月初旬ト申処ニ、シバシ之御延引以
朝命被　仰下候様、当分ニテハ二月七日御乗舟ニテ蒸気舶ヨリ御上洛ト申ニ御窮リ相成候、左候テハ
三郎様二月廿日比ニモ御上京ニ候得ハ、御上洛前春嶽公・容堂公篤ト御談判ト申義不被為調、シカシナカラ於関東御延引難被成内情モ有之、殊ニ被為対
朝廷今更御延引ト難被　仰上訳候間、何卒

朝議ヲ以テ被　仰下候様有之候得ハ、別テ御大幸ニ候
間、其筋相含周旋イタシ呉候様ニト之御事ニ御座候、
春嶽公ニハ
御召ノ
命ヲ御待、
三郎様御上京御一緒比ニ上京被成度ト之御事ニ候、
一予参之大名ハ、自国之守禦之術攘夷之基本ニ候間、篤ト
朝廷ヨリ御示諭有之、御差留被　仰出度事、
一容堂公ニハ明十日御乗船ニテ、蒸気舟ニテ御上京之賦
ニ御座候、是ハ
御召ノ
命相下リ候子細ハ三條様長・土之暴説ニ御迷ヒ、越前ハ
因循説ト申事ヲ主張シ、別紙藤井書状之通ニ御座候、
シカシ容堂公ニハ何様之
命下リ候共、
三郎様・春嶽公御上京之上ナラテハ、御一人ニテ御請
難相成趣被　仰上、屹度三條公ナトノ説ニ動キ候存慮
ニ無之、至極之御決心之筋ニ相見得候、於京師宇和島
老公・因州公、肥藩長岡良之助(護美)ト程宜敷由ニ御座候、
宇和島・長岡ハ藤井拝謁イタシ候処、至極
三郎様ヘ依頼ニテ、議論モ少モ異議ハ無之由ニ御座候、
依テ容堂公モ此方々ヘ御談判可被成トノ御趣意ニ御座
候、
一私事モ右之趣相含ミ今日発足仕候、
御趣意通ニ参兼候得共前条次第不得止候、暫時之御延
引被　仰出候義、且予参之大名御差留之義ハ、
朝議モ別段六ケ鋪訳ハ有之マシク奉存候、何分御用済
次第ニハ早々駈下リ候含ニ御座候、
一容堂公・春嶽公ヨリ宜鋪申上越呉候様、且
御上京之義、早目偏ニ御願申上呉候様ト之御事ニ御座
候、
一御発駕御日限モハヤ御窮リ相成候半、町便ヨリモ申上
候得共、此節ハ実ニ不容易御場合ニ候間、威儀十分ニ
被為調　御上京被為在度奉願候、
右之趣、町便ヨリモ為念飛脚差立申上越候間、達
御聴候義共可然御取計可被下候、委事申上度義ノミ
御座候得共、出立ニ付混雑イタシ、要詞迄申上候、何
レ京地ヨリ尚亦可申上候、以上(朱)〔前記藤井書翰対照〕
〔頭註朱〕「再夢紀事参看」
正月九日　　大久保一蔵
中山中左衛門様

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

## 二一三　癸亥正月九日大久保一蔵中山中左衛門へ贈ル書

京地之御模様、追々形行申上越候間、相達候筈ト奉存候、私事旧臘廿五日晩景京地発足仕候処、時分柄之事ニモ有之、殊ニ一橋公其外上京之大小名、諸家女性方通行毎日々々引モ切ラス、案外遅着ニテ漸ク去ル三日出府仕候、然共吉井中助中途ヨリ大早ニテ差立候間、二日早目着ニテ、関白様御内書ハ一日早目ニ越公ヘ相達候、私着直様春嶽公・容堂公ヘ相伺候処、四日晩越邸ヘ罷出候様ト(未)ノ御事ニテ(再夢紀事参看)、翌晩伺候ノ処、両公御揃ニテ拝謁被仰付、篤ト形行申上候様御意ニ候間、関白殿下宮之御内意云々、且内実ハ　三郎様御趣意云々ノ旨、始終ノ曲折打明シ具ニ言上、御建白ノ御書付モ御覧ニ入候処、両公共ニ至極御尤ノ御趣意不堪感伏トノ御沙汰ニテ御座候、御建白御書付之儀、殿下ヨリ御渡、両公ヘハ入御覧候様御沙汰ニ候、思召モ如何ト恐入候ヘ共、詰ル処差知レ候訳故、初ニ打明シ候方屹ト可然存込候間、如斯之取計仕候、何レ両公厚ク御談判之上有無之御答可被成トノ御事ニテ、当夜ハ退出御座候、

(未)「(江戸邸引払)」

年始ノ儀ニモ有之、右之彼是御延引相成、漸ニ昨日ヨリ今日迄ニ御決議相成候、段々六ケ敷内情モ有之、昼夜トナク両公ヘ伺候次第ハ追々可申上候(原註)一御決議之次第ハ上洛御延引之儀至当之御議論、実ニ皇国ノ御為、随テ大樹家之御為不容易訳ニテ御大幸ニ思召候ヘ共、何分時日差迫リ、物議沸騰之憂不一方、此儀段々京師関東ノ形勢熟察仕候処、甚難問之訳ニテ、三郎様御建白通御請之筋ニ昨日迄ハ御決定ニ候処、藤井ヨリ一左右有之、滞京ノ長・土暴論相立不可救之勢之由云々申参リ候、篤ト熟考仕候処、右様人心之処ニ無理ニ被仰出候テハ、論旨至当ナリト雖モ、一利ヲ起シ一害ヲ生スルト申様ナ事モ難図、且亦薩之建白ニ依リ如此ト一同異説申触候テハ彼是故障可有之存候間、屹ト趣意ヲ変ン、昨夜前越邸ヘモ何候、両公御揃ニ候間、尚又建白仕候処、御評議之趣俄然ト相替候、(原註)依之大樹公上洛丈ハ被為在候筋ニテ、大小名予参丈ヲ早々御差留メ、利害得失ヲ得ト御示諭、各武備磨励之儀攘夷之基本ニ候間、先々自国之守禦ヲ肝要ニ致候様、不日ニ(朝命参看)朝命相下リ候様、且亦大樹公上洛、二月七日御乗船ノ御窮リニ候処、何分ニモ　三郎様御上洛以前ニ御談合ト申ス処時日無之、シカシ夫レヲ於関東御延引之事何共御心配之内情、且対京師此方ヨリ延引ト難被仰道理故、何卒三月初旬迄ニテモシバシノ御延引、以朝命被仰下候ヘハ、内実ハ大幸ニ　思召候、左候ヘハ春嶽公ハ御召ノ命ヲ被為得候テ御上京相成候ヘハ、仮令ヒ　三郎様二

月廿日頃ニ御着京相成候テモ、寛々御談判之問合有之、実ニ無此上大幸ニ　思召候ニ付、其筋篤ト相含周旋イタシ呉候様ニトノ御事ニ御座候、依テ今日発足仕候筋ニ御受申上候次第ニ御座候、シバシ御延引ト申ス訳ハ格別人心ニ相拘リ候程ノ事ニモ無之、タトヒ相拘リ候テモ暫時ノ事候間、害ヲ引クト申事ニハ至リ申ス間敷、尤此丈ノ事ハ随分

朝決モ出来候訳ト奉存候、ドウモ

御趣意通ニ不参、甚遺憾之至奉存候へ共、前条之次第ニテ不得止訳ニ付、其中策ヲ取リ候事ニ御座候、

一容堂公ニハ明十日御乗船ニテ御上京ノ賦ニ御座候、是ハ別段御召ノ

勅命相下リ不被得止事ニ御座候、其訳ハ

勅使三條公、長・土之暴説ニ酔ヒ、越前ハ因循説ト申ス事ヲ頻ニ御建白、何レ容堂公ヲ御召有之度由之御事ニ御座候、就テハ容堂公ヲ暴説ニ引キ入レ候内意可有之、畢竟ハ長・土ノ暴論家トモ尻ヲ推候事ニ相違無御座候、何レ　三郎様ナト御上京無之内ニ、何トカ一事ヲ起シ候一計モ有之候半、右之趣篤ト容堂公へ御議論申上候処、己レ所存ハ何様之　命ヲ被下候テモ、一存ニテ御受申上候訳ハ無之、何レ春嶽　三郎公御上京之上、及談判御答可申上趣ヲ以テ、寸歩モ動揺イタシ候含ハ無之候間、懸念イタシ呉マシク、此節上京ハ不容易場合故、屍ヲ京地ニ曝シ候決心之段モ御沙汰トモ有之、尤君側へ両人正義之者有之（乾泰助小笠原唯八）、実ニ純良之者ニテ、涙ヲフルヒ必死ニ相成候、君臣サスカ殊勝ニ見受候、同藩ニシテ京師ニアル土人ハ暴ヲ唱ヘ候訳、大ニ内情モ有之事ニ御座候、上京サヘ相成候ヘハ、土人ノ暴ハ窮テ圧倒スルトノ　思召ニ候、

一前条ノ次第ニ付、春嶽公・容堂公願クハ一日ニテモ早目ニ御上京被下候様、呉々申上越候様御沙汰ニ御座候、

一今度ノ御上京ハ、実ニ不容易御大事之御時宜ニ御座候、自ラ　思召ノ　御旨モ可被為在候得共、実地ノ形勢見聞仕候得ハ、何レニ治リ付候哉、迚モ愚眼之及所ニアラス、就テハドウゾ十分ノ威儀ヲ被為調、御上京被為在度奉誠願候、屹ト一藩ヲ因メ、凛然トシテ不可犯之気有之、初ヨリ諸藩ヲ圧制スルノ御策偏ニ所仰ニ候、

一私事今日発足、京地御用相済次第ニハ奉

命之事候ヘハ、是非御中途迄ニテモ駈ケ付候含ニ御座候、只々心セキテ事不延残恨不少候、御推察可被下候、

右之趣町飛脚ヲ以テ早々御問合申上候、少ニテモ模様決シ次第ニハ、御注進申上候ハ御心得可相成、折角奔走仕候得共、別条之形行ニテ不得止候、段々委事申上度許多之事件ニテ候得共、先ツ要目迄早々如此御座候、達　貴聞候儀共以　御賢慮可然御取計奉願候、別ニ足軽飛脚差立、乍同案為念申上越候、以上「〔宋〕（前記対照）」

正月九日　　大久保一蔵

中山中左衛門様

## 二一四　攘夷策略下問布達

此度以　勅使、攘夷之儀被仰出策略ノ次第ハ、衆議被為尽候上御決策被仰上トノ趣、今般従公儀被仰渡候、就テハ御領内ノ儀専海岸ノ要所ニ候得ハ、諸士一同策略被　聞召上度被思召候、此旨早々可申渡旨被仰出候条、向々ヘ不洩様申渡、諸郷・私領ヘモ早々可申渡候、

但郷士以下タリトモ建白仕度モノハ不苦候、尤来ル廿日限一同可差出候、

亥正月十三日　　式部

## 二一五　琉球通寶通融布告

二一五ノ一
文久三年正月十三日布達

琉球通寶

但裏ニ当百ノ文字ヲ記ス、

右ハ琉球国為通融、　公義ヘ御届ノ上鋳造被仰付候ニ付、御領国中之儀モ通融被仰付候条、壱枚ニ付百弐拾四文ニテ、今日ヨリ御蔵々入払ハ勿論、諸人取遣候様被仰付候、此旨支配中ヘ申渡、奥掛表方ヘモ相達、諸郷・私領ヘモ可申渡候、

正月十三日　　式部川上久美

二一五ノ二
横濱其他開港以来、金銀貨幣ノ濫出甚シキカ故、内国融通ノ道塞リ、価格日ニ月ニ騰貴シ、民庶困頓ニ迫マレリ、然ルニ本藩ニ於テハ、琉球通寶鋳造ヨリシテ商工共ニ融通滑達、上下大ニ弁益ヲ覚ヘタリ、〔宋付箋〕「本文ノ大キサニ書ク」

〔琉球通宝壱枚ハ、資料及職工費等ノ一切三十七文余、三十八文許リヲ以テ元費トシ、而ソテ布達ノ価格ヲ以テ融通スルトキハ、其利益凡八十六文内外ノ算ナリ、大利ト云フヘシ、当百ノ文ヲ以テ通融スヘキハ無論ナリト雖モ、天保通宝ノ価格、本藩ニ於テハ、寛永通宝ト交換スルニハ百二十四文ノ時価ナルカ故、琉球通宝ト重量モ同ン故ニ同価ノ交換ニ令セラレタル者ナリ、○此製造ヲ開カレンヨリ、一般ノ融通潤滑、米価高値ナリト雖トモ困頓ノ声ナン、細民ハ職工ノ業ニ従事ノ、日ニ三千余人ノ工人ヲ使役スルカ故ナリ、其他集成館・火薬製造局・砲台修心等ノ工事多忙役夫ヲ要スル事夥多ナリ、〕

細民ノ生計頗フル安泰ナリ)

## 二一六　茂久公大操練ヲ見ル

文久三年正月十五日

太守公川尻調練場ヘ御出馬、両御旗本・御先手・両御城警衛等ノ諸隊操練ヲ催サレタリ、

## 二一七　軍制変更(御城下六組)

文久三年正月廿一日

御城下六組与替ノ令、左ノ如シ、

高見馬場ヨリ西北　一番組
新上橋ヨリ草牟田村・常盤方限・西田村　二番組
高見馬場ヨリ東南　三番組
高麗町・荒田村・中村　四番組
以上三組(ママ)下方限
竪馬場ヨリ西南　五番組
竪馬場ヨリ東北　六番組
以上二組上方限

右通御城下六組方限被相替候条、此旨表方ヘ致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、

正月廿一日　式部川上久美

右ノ如ク従来ノ組区改正セラレタルハ、毎組区域ノ分界錯雑混淆シ、隊伍編制伍什ノ組織ニ就テ障碍アルヲ以テナリ、

抑モ御城下御目見以上ノ士・御家老組或ハ六組ヲ組織セラレタルハ、今ヨリ二百弐拾四年前寛永十七(九)年十二月、光久公(第十九世)御城下士ヲ分テ十隊ニ組織セラレシニ起因ス、

旧記ニ曰、光久分城下士而為十隊命之、一番組・二番組、毎組定隊長之曰組頭、其下受令テ伝旨于隊中者曰小組頭、外置一隊為家老組、令島津弾正久慶・島津圖書久通長、補家老職者列之、隊下之士ハ与十隊無異、其外有寺社家組、有諸役座組、十組之外十六組都定二十二(六カ)組也、所謂一番組頭島津安藝久雄・新納四郎久辰、二番組頭島津市正忠弘・佐多又太郎(四カ)久孝、三番組頭桂又十郎忠心・吉利下総忠張、四番組頭島津左近久守・樺山又九郎久尚、五番組頭町田出羽忠尚・種子島左近忠時、六番組頭伊集院源介久立・島津美作久基、七番組頭伊集院右衛門久國・川上上野運久、八番組頭禰寝七郎重永・川上将監久将、九番組頭鎌田又七郎政由・

入來院伯耆重高、十番組頭伊勢兵部貞昭・島津中務久茂也、於是所令速於置郵伝内整外備矣、而後正保三年合二十六隊而為七隊也、乃自一番組至六番組外置家老組云々、

〔後編旧記雑録巻九十九にて補註〕

又曰、御家老組被相建、御家老島津弾正久慶・島津圖書久通ニ被仰付云々（御役源記ニ拠ル）、之ヲ御城下組区組織ノ初トス、是ヨリ曩キ出水郷ニ創始セリト云フ、

組織ノ時令スル処左ノ如シ、

寛永十九年十二月十三日ヲ以組々（〔之カ〕）衆ヘ被仰出条々

一一組之衆組頭之下知背間敷事、

一従組頭可被申付儀（〔可脱カ〕）有之時、気任之輩於有之ハ、曲事可被仰付事、

一御出陣或在江戸或ハ狩等之儀可被仰付時、異儀申間敷事〔付出物首尾之事脱カ〕

一喧嘩口論口事等出合候ハン時、組頭ヘ可申入、遅々致間敷事、

一訴訟其外申分之儀、組頭ヘ尋候テ、公義（藩庁ヲ云フ）ヘ可申出事、

又同日与頭衆被仰出候条々、

一組中野心不忠之者可有之時ハ、早々可被致言上候、若組頭油断ニテ於不申テハ、組頭并談合衆同意之心底タルヘキ事、

一与中ヘ喧嘩口事出合候ハ、早速寄合致談合、可為相済事、

一御奉公方之儀談合ニテ与頭ヨリ可申出（〔付カ〕）事、

附出物首尾之事、

一作病其他御奉公方之難渋申シ、気任セ之輩於有之テハ、以談合致言上曲事ニ可申付（〔被脱カ〕）事、

一組中ニ鬼利志端宗并一向宗於有之ハ、致糺明言上可申事、

一組中於緩テハ、与頭談合衆越度タルヘク事、

一訴訟其外申合（〔分カ〕）之儀、与頭ヘ尋不申候テ、気任ニ公義ヘ（藩庁）雖為申出受付申間敷候間、可有其心得候（〔事脱カ〕）、以上、

右各条ヲ以テ組織ノ初トシ、治乱共ニ維持ノ法令細大遺漏ナシ、而シテ正保三丙戌　月　日更ニ又御家老組一組ヲ増置セラレ、而シテ天明六丙午七月組頭ノ名唱ヲ罷メ、御小姓与番頭ト改唱セラレ、今ニ至テ其名唱タリ、（幕府ノ制ニ倣ハレント云）

上文ノ御家老組トハ、国老ヨリ百事直接ニ示達シ、布令書等ヲ達スルハ、大身分触役ノ小吏ヲ置カレ、

大番頭ノ職ハ初メ大御番頭ト唱ヘタリ、此職ハ安永九庚子七月創設セラレ、同(天明)六年丙午十月大番頭ト改唱シ、小番・新番(新番ノ格式此時創設セラレタリ)、一代小番・一代新番(上ト同時ニ創設セラル)等ノ支配ヲ令セラレタリ、

斯ノ如ク御家老組及ヒ小番・新番・御小姓組・与力等ノ階級アリテ、各頭職ヲ置キ、治乱共ニ維持シ、治ニハ文武忠孝ノ道ヲ奬励シ、百事勧懲ノ権ヲ有シ、乱ニ一隊ノ長トナリテ鋒鏑ノ下ニ立ツノ重職ナリ、故ニ創設ノ時ハ公子ノ中ヨリ任セラレ、或ハ門葉ノ中衆望ノ属スル人ヲ撰任セラレ、今ニ至リテモ、門閥ノ中ヨリ撰択スルコト、古ニ異ルコトナシ、然リトヽ雖、昇平ノ流弊モ又少カラサルカ故、弘化ノ初　齊興公軍事改革セラレシ時其弊ヲ一洗セラレ、尋テ齊彬公文武勧奬ノ際ヨリ厳ニ其規則ヲ設ケラレ、而シテ今回ハ殊更宿弊ヲ匡サレ、其任ノ適否ヲ精査セラレ、時勢適当治乱二ツナカラ便宜ヲ謀リ、毎組ノ区域改革セラレタル者ナリ、

此時ニ当テ調査シタル戸口左ノ如シ、

御一門四家及ヒ一所持二十一戸、一所持格四十一戸(家格一所持ノ格ナルヲ云フ)、寄合六十三戸(〔ママ〕)、寄合并十一戸、無格二戸(亀山ノ二戸)、小番七百六十戸、新番二十四戸(一代小番一代新番ハ御小姓組ノ内〔ママ〕)、御小姓組三千九十四戸、総計四千二十戸、毎組ノ戸数ハ左ノ如シ、

一番組戸数五百三十七戸
二番組五百十九戸
三番組六百四十六戸
四番組四百二十四戸
五番組四百九十二戸
六番組四百七十六戸

人口ノ数ハ軍賦ノ条ニ記スカ如シ、

御一門四家及一所持以下寄合并・無格等五級ノ順次左ノ如シ、

島津備後殿(忠鑑重富郷一万四千六百九十四石余ヲ領ス)〔欄外付箋〕「此時始良郡ニ非ス」〔隅州始羅郡、薩州鹿児島郡ノ内〕
島津又八郎殿(久宝九千三百三十八石ヲ領ス)(始羅郡加治木郷一万)
島津讃岐殿(貴政千四百二十一石余ヲ領ス)(大隅郡垂水郷一万五)
島津安藝殿(忠敬旧領一万三千八百三石余ヲ領ス)(指宿・頴娃二郡ノ内今和)
以上四家ヲ御一門家ト称ス、
島津下総(久徴五百六十四石余ヲ領ス)(日置郡日置郷六千)
島津若狭(久敬千〇九十九石余ヲ領ス)(肝属郡花岡郷五)
川上筑後(久封給地高五百余石ヲ領ス)(領地無ノ、普通ノ)

島津織之助久直 領地無シ、普通ノ給地高二千五百余石ヲ所有ス

島津大蔵久徴 領地無シ、普通ノ給地高三百余石ヲ所有ス

島津圖書殿久治 伊佐郡宮之城一万五千七百五十五石余ヲ領ス

島津隼人久芳 伊佐郡黒木郷二千六百九十一石余ヲ領ス

島津主殿久籌 日置郡永吉郷三千五百〇六石余ヲ領ス

島津伯耆久福 給黎郡知覧郷六千九百三十四石余ヲ領ス

島津壬生久清 伊佐郡佐志郷二千八百廿九石余ヲ領ス

島津左膳久元 姶羅郡帖佐郷ノ内小松原村等五百余石ヲ所有ス

新納波門久世 桑原郡踊郷ノ内三体堂村等五百余石ヲ所有ス

椛山相馬久要 伊佐郡闇牟田郷千五百八十九石余ヲ領ス

島津石見久静 諸県郡都城三万四千〇十一石余ヲ領ス

桂右衛門久武 領地無ノ、普通ノ給地高二百余石ヲ所有ス

島津頼母久度 領地無ノ、普通ノ給地高三百余石ヲ所有ス

島津求馬久邦 領地無ノ、普通ノ給地高二百余石ヲ所有ス

喜入攝津久高 川辺郡鹿籠郷四千二百〇三石余ヲ領ス

町田民部久成 日置郡伊集院郷ノ内石谷村九百九十八石余ヲ領ス

島津帯刀久道 領地無シ、普通ノ給地高二百余石ヲ所有ス

島津内記久住 領地無シ、普通ノ給地高百八十余石ヲ所有ス

北郷作左衛門久視 薩摩郡平佐郷八千百三十七石余ヲ領ス

島津主計久宝 肝属郡新城郷千六百五十四石余ヲ領ス

島津矢柄久敏 領地無シ、普通ノ給地高三百余石ヲ所有ス

大野多宮久甫 領地無シ、普通ノ給地高百八十余石ヲ所有ス

吉利仲久包 領地無シ、普通ノ給地高五百余石ヲ所有ス

島津内蔵久厚 領地無シ、普通ノ給地高

伊集院伊膳久文 領地無シ、普通ノ給地高

種子島鶴袈裟久尚 熊毛郡種子島一万〇百六十五石余ヲ領ス

島津式部久之 噌淡郡市成郷三千〇四十四石余ヲ領ス

頴娃織部久武 領地無シ、普通ノ給地高二百余石ヲ所有ス

小松帯刀清廉 日置郡吉利郷三千〇十五石余ヲ領ス

入來院恰公寛 薩摩郡入来郷四千八百十五石余ヲ領ス

比志島静馬範惟 桑原郡踊郷ノ内万膳村

肝付兵部兼両 給黎郡菅入郷五千三百七十四石余ヲ領ス

菱刈杢之介隆徴 領地無シ、普通ノ給地高三百余石ヲ所有ス

諏訪數馬武盛 領地無シ、普通ノ給地高三百九十余石ヲ所有ス

川田將監佐武 領地無シ、普通ノ給地高二百余石ヲ所有ス

畠山主計義制 領地無シ、普通ノ給地高百五十余石ヲ所有ス

鎌田仙千代政雄 肝属郡大給良郷ノ内南村千六百〇五石余ヲ領ス

伊勢雅楽貞章 噌淡郡末吉郷ノ内岩川村四千〇二十四石余ヲ領ス

市田隼人義賢 領地無シ、普通ノ給地高千二百五十余石ヲ所有ス

以上四十二家ヲ一所持又ハ一所持格ト称ス、領地無

キハ家格一所持ニ列スルカ故総称トス、
寄合ト称スルハ左ノ如シ、

義岡主殿道久
山岡齊宮久武知行高千二百余石
島津靱負倫久
島津相馬中久
末川久馬久長知行高二千百余石
島津蔵人名久
〔朱点〕
、、、、、
川上龍衛齢久
川上但馬運久
島津左内成久
島津　登久包知行高三百余石
郷原　轉久寛
川上式部久美知行高千五百余石
新納駿河久仰知行高（菱刈郡大口郷ノ内木ノ内村（抱地ト唱ス）抱地高等混ンテ五百余石ヲ所有ス）
椛山権十郎久高
北郷數馬久徳知行高（波江ノ高ナルヘシ）千百余石
北郷波江久政
桂　内記久浮
島津　仲久房
伊集院静馬久照
町田内膳久憲
伊集院亘久道
新納主税久品
伊集院集衛久温
山田　轉有備
鎌田要人政治知行高千二百余石
平田靱負正智
高橋縫殿徳種
仁禮小吉仲信
二階堂蔀行慊知行高六百余石ヲ所有ス
二階堂源大夫行三
名越左源太盛貞
小林一學政次
北條織衛時有
本田信二郎貞春
相良治部長発
平田正十郎位中
堀四郎左衛門起敬

小笠原兵部長寧
鎌田愛大夫政治
鎌田一藤太政孝
市來次十郎広業
河野八郎左衛門高紀
赤松主水則甫
澁谷喜三左衛門貫峯
宮之原小膳通敦
關山　糺金生
山田新之丞有隣
岩下佐次右衛門力平
上野藤馬敦政
猪飼鉚太郎尚香
稲富數馬広哲（知行高二千八百余石所有ス）
以上五十一家ヲ寄合ト称ス、
寄合并ト称スルハ左ノ如シ、
三崎平太左衛門久慈
倉山作大夫久昌
谷川次郎兵衛久武
村橋　昇久成
北郷宗一郎久明
伊勢平四郎貞行
西　金之助純東
本田伊賀守親徳（敢訪社神職）
井上駿河守長従（尾花社神職）
面高中姓院（牡カ修験道般若院住職）
以上十家ヲ寄合并ト称ス、
御一門四家及ヒ現ニ一所ヲ領スル者十四家、一村ヲ所有スル者五家、寄合及ヒ寄合並六十家、総計七十九家（内万石以上七家千石以上十七家）是ヲ門閥ト通称ス、
一所持及ヒ一村所有ノ者、皆多少ノ家臣ヲ扶持シ、隊伍ヲ編制シ軍務ニ供ス、又寄合又ハ寄合並ト称スル者モ多少ノ家臣ヲ有シ、軍務ニ従事シ、此輩平常ハ農工商ヲ以テ生活ヲ営メリ、（一所所領ノ戸口等ハ軍賦ノ部ニ詳ナリ、○小番家格ノ中ニ諸県郡飯野郷ノ内大河平村在番職、大河平孫八郎隆義ハ一村ヲ所有ノ、家臣百余戸ヲ有ノ、一隊ヲ編制セリ、軍賦ノ部ニ詳記ス）
此外ニ、一百余外城毎ニ多少ノ士分居住スルハ屯田ノ制ニシテ、往昔ヨリ今ニ至テ其制綿々タリ（軍制ノ条ニ詳記ス）

## 二一八　城下士編伍令

文久三年正月廿三日布達、

御城下諸士五人組設立ノ令、左ノ如シ、

一小番・新番・御小姓組打込、拾五歳ヨリ六拾歳迄五人組合致シ、申出候様被仰付候、左候テ可成丈ケハ同組中ニテ組合候様被仰付候、

但他行其外伍人之内一人ハ不苦候得共、二人ハ不相成候、

一寄合以上タリトモ、二男・三男小番ニ準候面々ハ諸士小番・新番・小姓組ノ総唱・御同様組合被仰付候、

一直触御家老組ノ総唱以上・奥向御小納戸以下御小姓・御近習番等ヲ云フ之儀ハ、組合不被仰付候、

一三年ニ一度組合出人之調被仰付候、

右之通被仰出候条、此旨表方ヘ致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、

正月廿三日　式部川上久美

此布令ニ依テ、各同組中組合ノ契約ヲナシ、連署名印ヲナシ、組頭ヘ届出タリ、然ルニ行状不正ノ輩、組合ヲナス者ナク、困却セシ者モ少カラス、人品陶汰ノ一方法トモナレリ、

斯ノ如ク組合ヲナサシメ、平常ハ互ニ患難相助ケ、非常ノ時ニハ伍什合併一隊ヲ作リ、戮力協心敵ニ当ルノ要法ナリ、

伍十ノ組織ハ、天文慶長ノ頃モ設ケラレタル者ト旧史ニ散見ス、治世ニ至リ廃レタリト雖モ、各郷ニ於テハ間々存シタルモアリ、或ハ犯罪人遁亡踪跡調査等ノ事アルニ方リテ、臨機命令セラルヽコトモアリタリ、今回創設セラレタルハ、治乱共ニ維持ノ法ニシテ、伍十ヲ以テ火トシ、火伍ヲ隊トシ、隊二ヲ旅トシ、旅十ヲ団トスルハ、古来御家法ノ編制ニシテ、今回改革ノ隊制其名称ヲ変シタルノミニシテ、旅ヲ陣トシ、幾陣幾十陣ト唱ヘタリ、詳ナルハ軍賦ノ条ニ記ス、

## 二一九　吉井友實大久保一蔵ヘ書翰

尚々別封乍御面倒御願申上候、

御離袖以来愈御堅固、御上　京直ニ御下国之由、珍重奉存候、小子ニモ去ル十八日東武相発、同廿三日上着仕候訳ハ、　春嶽公当月廿二日御乗舟之段、島田近江〔ママ〕ヨリ為知来、直様越邸ヘ差越面会巨細引合申候処、愈其通相違無之、御上京之上ハ　三郎様御上洛御待之筈御座候間、猶又其処尽力相頼トノ事ニテ上京イタシ候間、左様御承知可被下候、関東表之儀ハ其以後如何事モ無之至テ静謐、

当地之儀ハ少人数ノ上旁御用モ多御座候間、似合之周旋モ仕候含御座候、

一今度　三郎様御上京之儀、実以御一大事之御場合中ニ、一通之御手当ニテハ御危殆候、千万甚奉懸念候訳ハ御案内通暴論烈ク御座候間、何卒厳重御手当被為在御張出被遊度頻ニ奉祈候、深ク御承知之事直ニ御見聞之訳御座候間、何卒御尽力奉願候、江戸表ヨリ中山氏（生）「（中左衛門）」ヘ独断ヲ以申越置候趣モ有之候、ヲノヅカラ御聞取相成、御一笑モ為有之筈奉察候、先ハ其後之形行荒々申上度如此御座候、不遠御出張可被成候間、其折御直話可申上候、恐惶敬首、

正月廿四日　　吉井中助

大久保一蔵様

再啓、小松君ハ未御在国欤ト奉存候間、可然被仰上可被下候、中山氏ハ御随従ニテ早御出懸後ト奉存候、自然間ニ逢ヒ申候ハヾ、是ヘモ宜敷奉願候、

## 二三〇　久光公御上京茂久公他日御上京云々達書

文久三年正月廿九日達

太守様御儀、先達テ御参府被　仰出置候得共、此節三郎様御儀御上京被遊候様被　仰出候ニ付テハ、右御用被為済候上、　太守様ニハ被遊御参府候様、於京師一橋中納言様ヨリ被仰渡候条、此旨向々ヘ不洩様可致通達候、

正月廿九日　　大蔵（島津久徴）

## 二三一　久光公至急御上京ノ勅命

文久三年正月廿八日

京師飛報ニ曰、本月十四日留守居御呼出アリ、本田彌（親）右（他）衛門出頭ス、　太守公御参府御猶予　国父公速ニ御上洛アルヘシトノ趣ナリシト、

同報ニ、近衛殿御書翰ヲ以テ、　国父公御上洛片時モ速ナルヘキ旨御依頼アリ、御書左ノ如シ、

## 二三二　農政奨励布告

（二三ノ一）

文久三年正月廿九日布達

勧農之儀ハ、　御先代様（将ニ斉興・斉彬ニ公）ヨリ分テ　御沙汰被為　在、百姓御救助之義モ先年来品々御手厚被仰付候得共、重歛課役等積年之疲労ニ追ハレ、何分潤立候涯不相見得、既ニ諸郷下代蔵役人附属蔵之悪弊ヲモ、被相改憲法之

御仕向ニテ、去秋ヨリ三ケ年御試被仰付、現事ノ取扱ニ依リ、追々御治定可被居置旨被仰渡置候処、段々故障之廉有之、且又諸郷差入之御奉公人数多之人数ニ相及、(城下ヨリ流出ヲ云)送人馬水夫ハ勿論、野菜・油・薪之類入付之費用、年分ニハ多分之出銭相及、其外百姓共痛ニ相成候儀ハ、此節別段之御吟味ヲ以左之通被仰出候、

一御年貢取納方ニ付テハ、御蔵付数十ケ村一緒ニ相成込合候付、(一百二外城ノ内、各所ニ貢納倉ノ設アルヲ云フ、斉彬史安政四年引例ノ部ニ詳記ス)日々持込候丈取納相済候儀ハ無之、無拠数日及滞在、飯料諸雑用モ入嵩候上隙ヲ費シ、百姓共第一迷惑之事候付、当秋ヨリ村取納被仰付候条、庄屋役所又ハ便利宜場所ニ仮蔵相調置、郡奉行地方検者引受、庄屋方ニテ役々致取納置、都合ヲ以不込合様御蔵本江付ケ届、惣俵掛占閹当計リ例メシヲ以テ取納被仰付候、就テハ掛役ハ勿論百姓共ニハ五人ツヽ組合ヲ以テ、縄俵米拵桝目斤目不同無之、厳重取扱行届候様、左候テ、納入亦ハ取扱之所役々名前相記差札入置、尤所役々ヲ始メ、組中迚モ御請書差出候様申付候、右ニ付万一不正之手数相企候者モ候ハ、当人ハ不及申組合ノ者迄モ重キ御取扱被仰付、所役々迄モ屹ト可及沙汰候、且取納振津廻又ハ勘定向等之儀ハ、御勘定奉行・高奉行・郡奉行御代官ヨリ致吟味可申出候、

一御定納外上納米弐升四合之儀、当秋ヨリ壱升相減シ壱升四合(此ノ一升四合ノ米ハ、一俵ニ一升四合ヲ定額外ニ収納シテ以テ運輸ノ費用ニ充ツ、農家ニ於テハ十余里ヲ運搬シ、日子ヲ耗シ費用少カラサルカ故大ニ便益ナルヲ喜ヒタリ)ツヽ、先枡ニテ別段収納可被仰付候、就テハ諸座書役等ヘ被成下候御心附向之御金賦可及不足候間琉球出米代砂糖七拾万斤、御余勢銀御内用金(御内用金トハ財政上特別ノ名義ニノテ、訳言スレハ臨機特別ト云フカ如シ、当時財政上二途ニ分レタルカ如ント雖、敢テ然ルニ非ラス、御勝手方ノ名義ヲ用フルハ定規ニ罹ル者トシ、御内用ノ名義ヲ用フルハ特別臨機ニ罹ルヲ云フ、或ハ政務上ニモ御内用云々ト云ハ、定規外臨時ノ事務ヲ云フ、○這ノ名唱ハ天明ノ末ニ起リ、而シテ漸ク天保ノ中頃、斉興公調所笑左衛門ニ命ノ、財政ヲ一変セラレ、大ニ理財ノ法ヲ起サレシ際、御内用ノ名義盛ナルニ至レリ、如何ントナレハ、出格非常或ハ活潑機敏ノ措置ヲナサヽレハ能ハサルカ故ニ、定規模則ニ泥滞シ機会ヲ失フカ故ナリ、国老其他大小ノ吏御内用掛ト唱フモアリ、或ハ御内用方或ハ御内用計何々局ト唱フモアリ、或ハ出納上御内用ヘ差向ケ、右差足シ可被成下候、(琉球国石高九万余石ニ掛ル出米凡八千余石ナリ、此内黒砂糖七十万斤ヲ取納ス、是レ元来米穀ノ薩少キカ故、年々内地ヨリ数千石ヲ輸送ヤリ、茲ヲ以テ黒砂糖ヲ以テ代納ス、是ヲ大坂ニ於テ売却スルトキハ年々多少ノ利益アリ)

一下代蔵役人之儀、人柄吟味之上申付タル事ニ候得共、多人数之事ニテ、是迄致附属等相勤候者旧習直リ兼候事情モ有之、第一士風ニモ相拘リ候ニ付、当秋ヨリ村取納被仰付候ニ付テハ別段之御吟味ヲ以テ、其郷内亦ハ近郷役々無役郷士ヨリ人柄細々取調之上、下代蔵役人申付、取調之次第ハ前条之通郡奉行所役々引受諸下知致シ、津廻掛渡等締方横目見分ヲ受ケ、所役々出会等

之儀ハ当分通、尚又厳重致取扱勘定相逐（ママ）候様申付候、左候テ御扶持米三石六斗宛被成下、苦労銀員数之儀ハ追テ可申渡候、

一真幸表之儀、近年取分ケ相労レ御高格護モ調兼候者モ不少哉ニテ、右ハ第一御蔵本遠方殊ニ坂道等ニテ致難渋候処、先年御吟味ヲ以栗野中取蔵被建置候処、取納之分ハ埒明難有訳ニハ候得共、翌春本蔵迄津下等ノ儀モ有之、御取救之詮モ無之難最通、当時ハ先年通加治木ヘ負下致取納、連年疲労弥増候ニ付、別段ノ御吟味ヲ以真幸之内ヘ本蔵新規被召建、村々取納米右本蔵江致取納候迄ニテ、御前籾（御所籾トハ君公及ヒ老若君等御食料ノ糧米ヲ云フ、籾米ヲ以テ、御台所ノ倉庫ニ貯蓄スル例規ナリ、○御前米口ト唱ヘ、諸県郡内畝野　加久藤ノ両郷最良ノ地質ヲ撰ヒ種植ス故ニ米質モ良品ナリ、種植セシ土田毎ニ御前米ト記シタル榜標ヲ建タリ）之分ハ、是迄之通御蔵付ヨリ近郷加治木ヘ致津下候様被仰付候、右ニ付テハ取納米津下候道無之、御用米難被振向候ニ付、御当地三町（上町　下町　西田町ヲ云フ）酒屋中ヘ申受被仰付、於真幸表致造酒、御当地ヘ差廻、当分之通致売買候様、尤御蔵米ニテハ是迄ノ造入高ヨリ及不足候分ハ、郷々百姓余米持合之者共ヨリ、相対買入ヲ以造入候様申付候条、御府内（御府内トハ鹿児島中則チ御城下ノ通唱ナリ、薩隅日三州ノ府ナルカ故ナリ）ニ於テハ一切酒造等不相成候、

一山方下目附之儀已来不被仰付抜木（盗伐木ヲ云）取締等之儀ハ、番所詰見聞役山見廻等ヨリ尚亦行届候様申付候、

一諸所移地頭并地頭代抑役之儀、此節御改正之御軍役調練差引、或ハ抜木（抜木トハ官山ヲ盗伐ノ隣国ニ密売スルヲ云フ、諸県郡内或ハ川内等河海運搬便利ノ各郷ニ於テ、往々密売者多キカ故、誠査ノ吏則山方下目附ナル者ヲ派出シタルモノナリ）・抜米・抜馬（抜馬トハ、元来多数ヲ産スルカ故、他邦ニ於テ薩摩馬ト唱ヘ大ニ渇望ス、故ニ年々一千頭ヲ定額トシ、他邦売販ヲ許サレタリ、然レトモ所望多キカ故、密売少カラス、因テ慨局其他ノ吏監戒甚タ厳ナリシ者ナリ、○元来本藩ハ人口ニ比シテ米穀不足ナルカ故、毎歳隣藩両肥、二気ノ輸入ヲ俟チ用ヲ補充ス、然ルニ時ーンテ奸商ノ為ニ価格ヲ左右セラル、ノミナラス、甚シキニ至リテハ輸出ヲ停ムルコトアリ、之ヲ津留ト唱フ、其時ニ方テハ金銀貨ノ流通ハ滞ル尺ナリト雖モ、売穀ナキニ因メリ、茲ヲ以テ国産ノ米穀ハ他邦ヘ輸出ヲ禁セラレタルモノナリ、然ルヲ商賈等犯禁密売スル、之ヲ抜ケ米ト唱フ、○因ニ記ス、人口不相応穀類不足ナルノミナラス、琉球・大島其他各島ハ砂糖産出ノ地ナルカ故穀作ヲナサス、穀類ハ皆内地ヨリ輸送ス、一歳輸送ノ数凡ソ四万石ニ内外セリ、足カ為メニモ内地不足ニ及ノ一端ナリ）其外諸取締被仰付候、

一福山（大隅国福山郷）御牧之儀数ケ郷ニ相掛リ、御普請向繁多ニテ、百姓共公役請負人共江相頼ミ、過分之出銭ニ及ヒ候由ニ付、別段ノ御吟味ヲ以テ此涯御引取、左候テ牧馬八百疋程モ及生育居候由候間、真幸肝付方限等労郷牛馬不持合窮民共江、下料申請（下料申請ト記セリト雖モ実ハ下賜セラレタリ）被仰付候、左候テ地面之儀、当御時節大調練被仰付儀モ可有之候得共、畠作望之者候ハ郡奉行承届差免、其届申出候様被仰候、右ハ百姓御救筋ハ勿論、一統融通之為当時柄御失費相拘候儀モ無御構、右之通御改革被仰付候条、

其旨厚汲受、夫々請持ノ御役場一涯相励、取扱之儀精微ニ尽吟味得差図、聊等閑之儀共無之様可致精勤、此旨支配中へ申渡、奥掛・表方へモ可相達候、

正月廿九日　帯刀小松清廉　式部川上久美

三三ノ二

此布達ノ条件ハ建国ノ本源ナル農耕勧奨ノ要点ナリ、近来世態変遷多事ナルカ故、百姓ノ課役等繁多ニシテ耕耘ノ障碍少カラサルカ故、僅々数件ナリト雖モ其益ハ許多ナリ、中ニ就テ下代蔵役人附属ト唱フルハ、享保ノ末頃ヨリ許可セラレタル者ニテ其弊害寡カラス、概言スレハ、百姓ノ膏血ヲ絞リ吏員ノ生活ヲ助クト云フヘキナリ、或ハ薩隅日三州中、従来牧場多ク大小四十余ケ所アリ、中ニ就テ福山牧場ハ最大畜馬八百余頭ニ及ヘリ、此ヲ廃シテ耕地トセラレタルハ、頗ル国益ヲ起セリ、或ハ諸郷差入ノ御奉公人云々、其役員定規ノ者ハ郡奉行(受持郡奉行又ハ臨時派出ノ二アリ、受持トハ二・三ケ郷乃至四・五ケ郷ヲ引受ケ、農務勧奨・堤防修造或ハ貢納督促等ヲ掌レリ、臨時派出ハ田畠検見測量其他堤防修造等大事件アルニ当テ派出ス)或ハ山奉行(春秋二回巡回シ山林楠其外必用ノ樹木種植ヲナサシメ、或ハ盗伐ヲ誡メ、或ハ民家建設用ノ材払下等ヲ掌リ、是亦定規・臨時ノ別アリ)或ハ宗門改役(耶蘇宗・一向宗等犯禁ヲ検査ス、是又定規・臨時ノ二アリ、臨時派遣ハ犯禁ノ者乱弾等ノ為ナリ)或ハ締方横目(締方トハ大目附ノ目代ニ等シク、則一郷又ハ二・三ケ郷ヲ兼テ視察ヲ掌リ、在勤セリ)又廻勤横目ト名ツクルアリ、七八ケ郷乃至十余ケ郷ヲ一区トシテ巡廻シ、監督視察、締方横目ノ正非曲直、及郷村吏等ノ非違ヲ検査セリ、或ハ地方櫨方ノ両検者モ、一二ケ郷乃至三四ケ郷ヲ兼定規在勤セリ、地方検者ハ受持郡奉行ノ指揮ヲ受ケ、勧農ハ素ヨリ田畠ノ種植収採ヲ勧督シ、或ハ堤防修繕、或ハ貢納ヲ督促、米位検査等一切農務ニ罹ル事項ヲ担当ス、櫨方検者ハ櫨・楮・漆・桐等ノ諸木繁殖、或ハ保護収穫ヲ検査スルヲ掌レリ、或ハ山見廻或ハ山方下目附トハ、各郷山林ヲ検査シ専ラ盗伐ヲ誡メ、或ハ他邦ヘ密売ヲ視察シ、傍ラ米穀ヲ隣邦ニ売出スヲモ兼ネ誡メタリ、其他御鳥見・御鷹方、或ハ寺社方等ノ巡回挙テ数ヘ難シ、此等ノ吏員往来ノ人馬又ハ滞留等、毎吏日々水夫(水夫トハ吏員カ百姓使役スル者ヲ云フ)一二名ヲ課役シ(或ハ汐薪ノ類ヲモ課出ス)、又吏員人ニ依リテハ種々ノ悪弊アリテ、妨碍トナルコト寡カラス、茲ヲ以テ悪弊ヲ除キ冗吏ヲ廃シ、農家ノ疾苦ヲ救フノ要点ナリトス、(馬関田カ)

真幸表トハ諸縣郡内吉松・栗野・吉田・加久藤・飯野等五ケ郷ノ通唱ナリ、元来土地荒漠人口寡少、士農共ニ疲弊ノ地ナリ、然ルニ貢納ノ際ハ加治木郷ノ官庫ニ輸送シ、収納スルニハ十余里、然モ嶮悪ノ道路疲労ノ

駄馬ヲ以テ運送シ、初冬ノ時分中途原野ニ露宿スル等ノ困難アリ、加之日子ヲ耗シ費途モ少カラサルカ故、今回其郷村ニ於テ納収ノ弁ヲ謀レルモノナリ、而シテ城下酒造ヲ罷メ、其郷内ニ於テ醸製ノ法ハ官民ノ両便、加之酒滓ヲ以テ肥培ノ料ニ充ツルトキハ其益又一層ス、封内一百余郷ノ中ニ士農共ニ疲労セシハ真幸五ケ郷、又ハ肝屬郡内串良・高山・鹿屋・姶良・大姶良等ノ各郷ナリ、此地モ人口寡少田畠広ク、剰ヘ地質疲瘦毎戸賦耕セシム、故ニ肥培其他耕鋤甚タ粗漏、随テ収穫寡ク貢納ニ困ムコト毎歳ナリ、此各郷ハ元亀・天正ノ頃迄ハ肝付氏ノ所領ニシテ一小都会ナリシ故、人民モ土田ニ応シ住棲セシニ、肝付氏亡ンテ後漸次民庶散失、土田有余人民乏少ノ村落トハナレリ、

移地頭ト云ヘルハ、国境ノ要衝其他警備ヲ要スル地、則、高岡・大口・志布志・出水・甑島等、抑ヘ役ハ綾・山之口・長島等ノ各所ニ置レタリ、

## 二二三　禄高所有制限令

文久三年正月〔ママ〕日布達

今回御軍賦改正ニ付テ、小番・新番・御小姓与知行高多額所有ノ輩、又ハ大身分等一所所有地外ノ禄高減少ノ令ヲ発セラレタリ、左ノ如シ、

## 二二四　金銀貨幣価格変換布告

文久三年正月〔ママ〕日

金相場替発令、金壱両銭八貫文替ナリシカ、九貫文ニ令セラレタリ、

現今大坂ニテ、金壱両価銀八拾四匁五分内外ニ交換ス、故ニ坂地ノ時価ヨリ凡ソ一貫文内外高直ナラサルトキハ金銀散出シ、融通上不弁ナリ、是本藩ニ於テ経済ノ要トス、

現今大坂ノ銀価八拾七匁ニ上レリ、実ニ未曽有ノ高価ナリ、其因テ起ル所以ハ、当今諸藩主許多ノ人数ヲ率シ上京シ、洛中ノ繁昌一方ナラス、随テ散布スル処ノ金銀悉ク大坂商人ニ借ラサルハナシ、茲ヲ以テ奸商等謀リテ高価ナラシメタリト云フ、果シテ然ランカ、今日ノ形勢上、論者ノ説ニ不日又一層高価ニ上ルヤ疑ナシ、其所以ハ海外濫出ノ一大洞穴アリ、則チ当時各藩ニ於テ競テ汽船ヲ購求ス、其価幾千カ量リ知ルヘカラス、其他大小砲或ハ弄玩ノ器物・布帛ノ類枚挙ニ遑ア

ラス、其代価モ少々ナラス、然ルニ輸出ノ物品ハ僅々数品ニ止リ、品物貿易ノ名ヲ以ヒ難シ、故ニ不年ニシテ内国ノ金銀ハ地ヲ掃フニ至ルヤ必セリト云フ、今ノ形況ヲ以テ考フルニ、果シテ然ラン欤、

金壱両、銭九貫文ニ交換スルトキハ、則左ノ割合トナルヘシ、

弐歩金壱片銭四貫五百文、壱歩銀壱片弐貫弐百四拾八文、弐朱金壱片壱貫百弐拾四文、壱朱銀壱片五百六拾四文ノ割ナリト云フ、

斯ノ如ク金銀貨高値ニ趣キ、米穀其他物品日ニ月ニ騰貴シ、人民ノ困難太甚シキニ至ルヤ明ラカナリ（現今長崎ヨリ支那ニ輸出スル起ン炭一俵ノ価(四十斤内外ノ量目アルモノ)金壱歩位、鹿児島ニテハ壱俵弐百文内外ノ品ナリト云フ）

## 二二五　藩内産業奨励

文久三年

当時富国強兵ノ道、種々手ヲ下サレ、殊ニ質素節倹ノ令ヲ布キ、士庶共ニ絹帛服用ヲ禁シ、京摂等ヨリ絹布買下シヲ禁停シ、国産ヲ以テ弁用スルノ基礎ヲ方法（ママ）ヲ立テ、紡績局ヲ拡張セラレタリ、従来下町ニ在ル三島方（天島其他島々砂糖商法ヲ掌ル局名ナリ、今下町堀江町養穀社ノ辺ナリ）ノ郭内ニアリシヲ、更ニ大門口ニ引遷シ、織工・染工等京坂ヨリ傭役シ盛大ニ開カレタリ、局名ヲ織物所ト名称セラレタリ（文久二年十月ヨリ建築ニ着手セリ）、

御城下居住ノ士、無禄・小禄ニシテ俗務ノ俸米ヲ以テ生活シタル者少カラス、此等ノ曹旧制ニ復シ、土着農稼ノ途ヲ与ラレンノ議ヲ以テ、各郷荒蕪ノ土地開墾ノ令ヲ下サレタリ、二百年来昇平ノ化ニ浴シ士風惰弱ニ流レタルカ故、土着ノ道ヲ開カレ耕耘ニ従事スルトキハ、筋骸健壮風俗朴質ニ帰シ、中古ノ風俗ニ復スルヤ論ヲ俟タサルナリ、第一着手ニ比志島村ノ牧場ヲ廃シ、開墾ノ後所望ノ貧士移住ノ方法ヲ設ケラレ、御小姓与番頭担当シ、旧臘十二月中旬ヨリ着手セラレタリ（各郷ノ荒蕪原野モ同時開拓ヲ許可スルコト、ナレリ）

## 二二六　当時京摂ノ形勢報告

文久三年正月

本月初、京師ノ形勢報知ニ曰ク、昨秋　国父公御退京御下国ノ後、諸大名ニ於テ首鼠両端時勢ヲ傍観セシモ、雷同附和シテ逐日上京

天気ヲ窺ヒ、或ハ尊

王鎖攘ノ説ヲ唱ヘ、世ニ阿諛スル者続々、既ニ熊本侯(細川慶順)ニモ舎弟澄之介・良之介二人ヲ具シ上京セラレ、所論倏チ変シ、或ハ武備ニ汲々トシテ、大小砲ノ製造局等遽ニ設立セリト云フ、

本藩ニ於テ、現今無用ニ帰シタルゲベール銃一千余挺商賈払下、熊藩ヘ売リ渡シ大ニ利ヲ得タリト云フ、如斯廃棄ノ銃ヲ購求スルヲ以テ、従来武備ノ整ハラサリシハ推シテ知ルヘキナリ、

佐賀老侯(鍋島斉正)公関東ハ、参府ノ途次京師ニ立寄リ、天気ヲ窺ヒ、関白殿下・所司代ヘ面接アリシノミニシテ宮堂上方ヘ訪問モナク、僅一二日滞京、直チニ関東江下向セラレシト云フ、同公ハ当時名望アリト雖モ頗ル狡黠ノ名アリ、昨年来藩士カ洛中ニ出ルヲ厳禁シ、或ハ二三ノ藩吏ヲシテ形況視察ノ為メ、商賈ノ姿ニ変シ、京攝ニ来往セシメタルノ説モアリシト、

福岡侯(黒田斉溥)ハ本月初メ多数ノ人員ヲ具シテ上洛セラレ、天気窺ノ後滞京セラレシト、昨年四月　国父公御上洛ノ頃、御参府ノ途次、播州大倉谷ヨリ御病気ノ申立ニテ曳返シ帰国セラレタル、当時ノ街説ニ驚怖セラレ、虚病ヲ以テ引返シ、帰国セラレタルノ説喋々トシテ、大ニ藩名ヲ損サレシカ、天下ノ形勢一変シ、大小藩各上洛スルノ勢ニ変シタルカ故、多数ノ人員ヲ率ヒ上洛滞京セラレタルナリト、亦其説モ種々様々タリ、実ニ藩中人ニ乏シキカ故、如此不名ヲ取ラル、ニ至レル者ナリト云々、

## 二二七　砲術館ヲ廃シ撃剣場トス

文久三年

当時撃剣・槍術等御勧奨ニ付、今般砲術館廃セラレ、演武館(場カ)建設セラレタリ、上方限(御城下ヨリ北ヲ上方、西南ヲ下方ト通唱ス)ノ演習場ト定メラレタリ、

下方限ハ従前ノ演武館ニ於テシ、或ハ一流毎ニ一場ヲ建設セラレ、或ハ師範ノ居邸ニ大小適宜ニ設ケラレタルモアリ、而シテ組頭・御目附或ハ君側ノ吏、演武館又ハ師範居宅ニ臨場シ、修業ノ精粗臨視スル等大ニ勧奨セラレタリ、故ニ夙夜撃剣ノ声喧シ、或ハ修行抜群、品行方正ノ者ハ抜択セラレ、君側其他ノ職ニ登用セラレシ曹モ寡カラス、実ニ奨導ノ道至ラサル処ナシ、

## 二二八　御軍役ニ付平常御沙汰ノ趣御別紙ノ通

御筆ヲ以被仰出候条、一統謹テ可奉承知候旨ニ付テハ、当今士風一涯致振起、文武ノ励ハ勿論ノ事ニテ、衣食住ノ儀弥費用ヲ省キ、質素節倹ヲ相守、兵器粮食夫々分限相応致用意、急場ノ御用無滞可相勤、就中組合中モ和睦信義ヲ専ニ相心得、聊疎意無之、御条目ノ趣堅固可相守候、

右之通可承知候、

亥正月　筑後川上(一)　大蔵島津(二)　但馬川上(三)　式部川上(四)

右之通御書取ヲ以被仰出候ハヽ、第一老中ノ職掌ト兵粮武事ノ不届ハ、我任ノ不被行故ヤト深ク可恥ヲ、用司已下ノ過チノ様ニ申触候儀、如何承知イタシ候テ可然ヤ、当時金銀穀米ハイカヽ、充実寡多ノ次第被相許度事ニ候、

## 二二九　攘夷策略御下問

此度以勅使攘夷之儀被仰出、策略之次第ハ衆議被為尽候上、御決策被仰上ト之趣、今般従公義被仰渡候、就テハ御領内之義専海岸之要所ニ候得ハ、諸士一同策略被聞召上度被思召候、此旨早々可申渡旨被仰出候条、向々ヘ不洩様申渡、諸郷・私領ヘモ早々可申渡候、

但郷士以下タリトモ建議致度ハ不苦候、尤モ来八日限一同可差出候、

正月　式部川上久美

## 二三〇　放鷹場ヲ廃止（藩令）

文久三年正月　日達

近村二十四ケ村、又ハ各郷御鷹場廃セラル、旨令セラレタリ、

従来御鷹場ト称ヘ、放鷹ノ為メ鳥類ノ猟ヲ禁セラレ、中ニモ鉄砲放発ヲ厳禁シ、若犯違ノ者ハ軽重ノ刑ニ処セラル、ノ法規ナリ、故ニ秋ノ半バヨリ春三月頃迄ハ鶴・雁・鴨等ノ諸鳥群集シ、田畑ニ妨害スル少々ナラス、加之御鷹匠・御鳥見等ノ吏巡回シ、違犯ノ者ヲ誡メタリ、然ルニ今回解禁セラレタルニハ農家ノ喜一方ナラス、是ヨリシテ田畠ノ収穫モ多キニ至ラント怡悦セリ、殊ニ谷山・伊作・阿多・田布施・加世田・川辺或ハ近村(伊敷村等ノ各村ヲ云フ)二十四ケ村ハ耕作ニ被害少カラス、農家悲歎スルモノナリキ、(解禁ノ令発スルヤ、其郷村ニ令書ノ達セサルニ先ンシ、城下ヨリ続々鉄砲ヲ携ヘ来テ放発スニハ土人大ニ怪ミタリ、故ニ穫ル処許多ナリシト云フ)

菱刈・真幸ノ諸郷ハ　齊興公弘化ノ中頃ヨリ解禁セラレ、又串良・高山・志布志等ノ各郷ハ、　齊彬公安政ノ初メニ解レタリ、

御放鷹場ト唱ヘ諸鳥ヲ打ツノ禁令ヲ発セラレタルハ、重豪公御代天明ノ初メニシテ、幕府放鷹場ニ擬セラレシ者ナリト云フ、

尾畔御茶屋郭内ニ在ル御鷹部屋ニ、従来飼養セラル、処ノ鷹二十二頭ナリシヲ、今回僅ニ六頭ヲ残シ悉ク放タレ、残リ六頭ノ者ハ御先代ヨリ有名ナル良鳥ナリシトソ、

御鷹方ト唱ヘ一局ヲ設ケラレ、一年ノ費途高三千石ノ定額ナリキ、　重豪公御代ハ五千石ノ定額ナリシヲ、齊宣公御代三千石ニ減セラレタリ、

御鷹方ト唱フル一局創設セラレタルハ、　重豪公御代安永六七年ノ頃ナラン（創設セラレタル年契所見ナシ）、初メ御鳥見頭ノ職ヲ創設セラレ、専御放鷹場ノ検査ヲ掌リタル者ノ如シ、

御鳥見頭ノ職ハ、安永七戊戌正月十一日創設ケラレ（セカ）、天明元年辛丑正月御鳥見頭ノ職ヲ置レタリ、

御鷹匠頭ノ職ハ同年五月初テ置カレ、御本丸御鷹匠頭山下御鷹匠頭ト二様（山下ト旧ニノ丸ヲ山下邸ト唱ヘタリ）、又尾畔御鷹匠頭トモ記セリ、

天明二壬寅六月、御本丸御鷹部屋ヲ山下御鷹部屋ト唱フヘキ旨令セラレタルヲ以テ考フレハ、御本丸御鷹部屋ヲ廃シ合併セラレ、尾畔御鷹部屋ノ二ツヲ存セラレ、安永六丁酉五月、御鷹匠頭尾畔預ト名称ヲ改メラレタリ、

中古以来、放鷹ハ諸大名ノ専ニスル処ニシテ、其費耗寡カラス、加之放鷹場ノ域内ニハ諸鳥ヲ飼養シタルニ異ナラサルカ故、耕作ニ妨害ヲナスコト少カラス、故ニ今回断然放解セラレタルハ経済上ノ要点タリ、

## 二三一　安田助左衛門日記抄（軍賦ニ就テ建言）

軍賦取調書

文久三年癸亥云々（全文アリ）

御城下士ノ儀、寛永十九年十組ニ被相分、毎組ニ組頭弐人ツ、被仰付候処、其後正保三年、当分ノ通六組ニ被相改候、然ニ士株追々相殖、小番・新番・御小姓組ヲシ込ミ、一組九百人余ヨリ千弐百人内外ニ相及、御小姓組番頭一組三人ツ、十八人ニテ、一組ヲ三ツニ分ケ被致支配事候得共、其内江戸・琉球等ヘ被差越置候ニ付、三四人ハ相欠居事モ御座候間、御備組四十八人、

一備ニ一人ツヽ物主相立候ヘハ、物主不足ニ相見ヘ候ヘ共、諸士ノ内ヨリハ御旗本御備ハ勿論、大砲備台場打手大目附以上、御備諸郷物主目附等モ被差越、御城下御留守ニモ相残申事故、御小姓与番頭ノ儀、御備組ニ付テハ随分当分ノ人数ニテ可宜、其上物主不足ノ節ハ当番頭等ノ内ヨリ被相勤筋被仰渡置候付、旁差支有御座間敷奉存候、乍然正保三年諸士六組ニ被相分候時分トハ、士株倍々相重居儀ニ御座候間、今二組モ被相重八組ニ被仰付候ハヽ、組々割并シ旁々行届可申候ヘトモ、追々水軍株モ被召立候ハヽ、相応ノ人数減少可申候間、先今形被召置可然奉存候、(斉彬公創設)

一諸士ノ儀、小番・新番・御小姓与ト三等ニ被相立、小番・新番ハ大番頭支配、御小姓与ハ御小姓与番頭支配ニテ、両御座ヨリ向々ニ御取扱有之事御座候、小番・新番ノ儀ハ夫々御格式被究置、平日モ　御駕籠廻進物番等ノ勤被仰付、何篇格合宜敷御取扱被仰付事ニテ、御備組ニ付テモ　御旗本御馬廻ニ相勤候様御座候ヘハ、治乱共同様ニテ相当ノ事御座候ヘ共、　御旗本御備御馬廻リハ、諸士諸郷ノ内ニテモ、平日士道正敷武芸練達忠勇ノ士ヲ選、可被召列旨被仰出置、当分ニテハ格式ヲ以テ、軍陣ノ取シラヘハ出来兼候儀ニ御座候、然ハ今通向々御取扱御座候テハ、急変ノ節ハ勿論平日諸触方人数シラヘ等、別ケ手間取リ不宜事御座候、一ト御座同席ニテ何篇一列ニ御取扱被仰付度奉存候、以前ハ全体一列ノ御取扱ニ御座候処、寶永年中代々小番家筋被相定、其節ヨリ差等相立候得共、其後天明年中迄ハ小番・新番・御小姓与共組頭ヨリ支配有之候処、天明六年大番頭支配被仰付、其後一往大番頭御引取ノ節、小番・新番共亦々組頭支配被仰付置候処、文化五年小番・新番大番頭支配、御小姓与ハ御小姓与番頭支配被仰付候儀ニ御座候、然ハ寶永以前ノ向ヲ以、差等ノ格式被相除候儀ハ難被成勢ヒト奉存候間、格式ノ儀ハ今通被召置、小番・新番共方限ヲ以テ何番組小与何番ト組入被仰付、天明年鑑迄ノ振合ヲ以テ、大番頭・御小姓与番頭同席ニテ諸事一列ニ御取扱被仰付度、左候ヘハ御通達事等モ一通ニテ相済、進達掛・触支配・小与頭等モ両方ニ被召置ニ不及、旁簡便ノ御取扱ト奉存候、且亦小番・新番ニハ触支配、御小姓与ニハ小与頭ト申名目、甚不並ノ儀ト奉存候間、右通被仰付候上ハ、都テ小与頭ト相唱候様被仰付度、小与頭ノ儀諸御用取次

御通達触方ハ勿論、若輩者共へ何篇教戒、学文・武芸引勧、風俗正敷律儀相嗜候様申諭、其上時宜ニ依リ、人ノ善悪邪正聞合迄モ被仰付事故、折角人材ヲ選可被仰付事候処、当分ニテハ触書ヘ廻シ候ヘハ、被仰付筋ニ相見得、其上奥支配ノ御座・三御座書役等ヘハ組々勤ハ不被仰付由、人材ヲ育ヒ教化ヲ崇ヒ候ハ御国政第一ノ事ニテ、幼少ヨリノ生育郷中ノ風俗肝要ノ儀御座候処、組々小与頭等ハ無扶持ニテ（俸給ナキ者ヲ云フ）軽キ勤方ノ様相見ヘ、畢竟御座柄等ノ面々ハ、御触書廻シ方其外一郷中ノ申談事等面働ノ儀共多候ニ付、何角ニ弁ヲ付、今通相成候半、夫故追々取締人数教導等ノ役職被相建候テ教育方被仰渡候儀、基小与頭御人選無之、且ハ御役場ノ差障有之処ヨリ、今通煩冗ノ御取扱相成候半ト奉存候、当時文武ノ道御引勧メ、風俗改正ノ儀共分テ　御配慮被為　在候御砌御座候間、平日ノ教導方ハ勿論、変事ノ節小頭役等ヲモ相勤メ、組中ノ諸士致納得候人物柄、御役人又ハ御座柄等ノ内ヨリ御選ヒ、小与頭被仰付度奉存候、

一六組小与ノ儀、人数ノ多少有之不並ニ相成居、且又今通ニテハ不弁利ノ場所モ御座候間、小番・新番・御小姓与ユリ並シ、大体相並候様此涯吟味被仰渡度、乍然遠方一マトマリノ場所抔ハ、人数ニ不拘今形被召置可然奉存候、

一寄合以上、二男以下、前条小番・新番ノ向ヲ以テ組入被仰付度、左候テ小番家格相当ノ人ヨリハ、調練其外右ニ類シ候儀組分ヲ以テ同様被仰付度、左候ハヽ物馴ニモ相成可然奉存候、

一物頭ノ儀ハ、往古ハ御兵具奉行ト相唱ヘ、其後物頭ト被相替候処、天明五年物頭ノ外ニ御鎗奉行・御弓奉行・御鉄砲奉行被相立、且又与力・足軽ノ儀ハ、鎗組十組・弓組九組・鉄砲組九組、合テ廿八組ニ相分ケ、右ノ三奉行致支配、足軽・家部ノ者ハ勿論、御雇足軽被召入（後発ニ説明ス）候ヘハ、右ノ三組ヘ繰入支配イタシ候由、全体定数ノ儀、御鎗奉行八人・御弓奉行八人・御鉄砲奉行八人、以上弐拾四人ニ候処、槍組十組・弓組九組・鉄砲組九組ニテハ弐拾四人ニテ候間、定数ニテハ四人不足ニ候、如何様定数ハ右三組不被召立、以前相究居候ニテモ御座候半、然ハ是迄ノ次第ヲ以テハ、物頭廿八人ハ無之候テ不相成筋候ヘトモ、今般御備組御改正、一統惣鉄砲被仰付、槍組・弓組ノ儀ハ不用相成、且又御兵具方

ヨリ二組被差出候、取シラヘニ候ヘトモ、御旗本御備被差出候時節ニハ、旗持足軽・兵粮・玉薬方諸役者付役ノ類過分ノ人数ニ及ヒ、一備被差出候儀、相調申丈無御座候間、今通多人数ノ物頭ニハ及申間敷、乍然御兵具所ノ儀、諸御兵具御格護御手当専要ノ場所柄、殊更物頭ノ儀ハ、諸郷物主ニテ急速出馬ヲモ被仰付、御旗本御使番兼務ニテ、支配下差引ヲモ可被仰付職掌御座候間、夫々御人選ヲ以テ被仰付度、左候テ御槍奉行・御弓奉行・御鉄砲奉行ノ名目、御備組ノ次第ト名義相違イタシ候間、被相除以前ノ通物頭ト申其役目ニ被復、与力・足軽共槍与・弓組・鉄砲組ノ儀モ被相止、一統鉄砲稽古被仰付度、江戸ニテハ諸士詰人数相少候付、御備組ノ内一ツニ組入、出陣ノ賦御座候間、隊列ノ次第ハ勿論、鉄砲打方執行イタシ候儀第一ノ事御座候、

一六人賦・十人賦(後巻ニ説明ス)ニハ間散ノ御役場モ御座候付、御役被成御免程ノ儀ハ無之候得トモ、御役格被相下候人又ハ賦重等(給料増加ノ通唱)被仰付候類、右ノ内ヘ被召入事ト相見候(得脱カ)ヘトモ、御直触以上物頭一列(御家老組トモ唱フ)ニハ間散ノ御役場無之候付、物頭ヘ被召入事ト相見ヘ、物頭ノ儀ハ前条申上候通要務ノ職掌、殊更乱世ニハ格別ノ御役場ニ御座候間、分テ御人選ヲ以被仰付度儀ト奉存候、左候テ前文体無拠物頭不被仰付候テ不相叶人モ可有御座、右体ノ人ハ別段間散ノ御役場被召立候モ、却テ煩敷御事ト奉存候間、物頭席ト申御役名被相立、御兵具方ヘ日勤被仰付、諸御用筋ハ都テ本役ノ物頭ヘ取扱被仰付、何カ定式ノ詰見分事等ノ類寄勤等被仰付候ハヽ、御役場ノ廉モ相立可然哉ト奉存候、

一御当国ノ儀、乱世ノ砌ヨリ郷々ニ郷士罷居、其人農兵ニテ、成周兵制ノ意ニ相当リ、則唐ノ府兵ノ法ニモ相叶申事御座候、个様ニ能制度相立候場所ハ当時余国ニハ有御座間敷、至極ノ御良法ト奉存候、且又御城下組分ケノ次第モ江戸番町組分ケノ仕様ニ稍相当リ、異朝編伍ノ法ハ組立綿密ニハ有之候ヘトモ、御城下当分ノ形ニテモ御手サヘ能届候ハヽ、左マテ相替ル儀有御座間敷奉存候、然ル処、郷士ノ儀、以前ハ何篇御城下士同様御座候処、享保年鑑、御城下士・郷養子ノ御格式被相究、夫ヨリ追々格式相劣リ、就中近来郷横目ハ、締方横目ノ付役同様相心得候様被仰渡、其上年寄・組頭相勤候者モ、糺方ノ節ハ凡下同様ノ御取扱被仰付、(糺弾ノ略唱)頭ラヲ上ケサセサル様相成居候間、小郷ノ郷士共ハ百

姓ノ少シ能様成モノニテ、所中ノ諸御用筋田地普請類ノ儀迄モ、御城下ヨリノ御奉公人不致取扱候テハ、何モ弁シ兼候様相成居候儀、畢竟追々格劣リ相成、御奉公人ヨリハ被押付、廉恥ノ風相廃候処ヨリ、格別ノ御良法モ其詮無之相成候次第、不堪歎息奉存候、願クハ弊風御除キ、御旧制ニ被復廉恥ノ風相立、諸事御城下士ニ不劣様相励ノ郷内ノ御用ハ、成丈ケ彼等ヲ被召仕致御用弁候様相成候ハヽ、郷々御奉公人モ相減シ、第一御軍備ノ柱礎ト奉存候、

右ハ乍恐愚案ノ趣申上候、左候テ諸御役場ノ次第ハ全体急度被相立候儀ニハ無之、差当リ被相立候事ト相見得、当時ニ至リ一々得失難申上、其内組方御兵具方等ノ儀ハ、御手当ニ相掛候場所御座候間、右之通申上候間、宜シク御取捨被仰付度奉存此段申上候、

以上、

〔朱〕「安政五」
午二月　　安田助左衛門〔義宣〕

此書付ハ駿河殿迄　御内命ノ趣有之、取シラヘ方ノ儀致承知、別冊和漢歴代編伍ノ次第、并組々諸士・諸組与力・足軽、其外大番頭方組方諸帳面諸郷ノ事共取シラヘ置候処、不達　御内聴　順聖院様御逝去被為　在、不用相成居候、然ニ申三月江戸ヘ罷登候節、若哉見合可相成哉ト、新納次郎四郎殿ヘ都ヘテノ書付相添ヘ相渡置候処、今年亥正月追々御手ヲ被付候付キ、転役後ナカラモ旧稿見出シ留置候事、

〔旧邦秘録にて校訂〕

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編
文久三年二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」（紙数六七枚）」の記載あり〕

目録

非常警報布告（江戸邸）
城下各組組織変換
五代才介ヲシテ気船ヲ上海ニ買フ
異国船渡来ノ予備
勤務時間延長ノ達書
御供ノ人員服制変更達書
生麥殺傷事件英国人申立ノ趣示達
英艦生麥殺傷事件談判ノ為メ渡来ノ達
英艦渡来ノ準備異国船御手当ノ次第
異国船渡来ノ節御作法左ノ通被仰渡候
英国艦隊横濱ヘ入港応接ノ報
在京本田ヨリ大久保ニ洛中ノ形勢ヲ報ス
鹿兒島湾内要衝ノ地地頭職任命
各郷警衛地達書
海防準備厳警
軍役人員調査
〔諸郷軍役人員調査〕
乘馬数調査
山川郷諸調

## 二三二　非常警報布告（江戸邸）

是迄急変之節ハ、御火之見ヨリ太鼓相図可有之段申渡置候得共、以来御目付御軍賦役ヨリ達シ次第、御兵具所ヨリ相図之貝吹立候様被仰付候条、此旨物頭ヘ申渡可承向ヘモ可相達候、

二月　　登島津久包

〔朱〕〔此ノ達書ハ江戸邸非常準備ヲ更定シタルニ依リテナリ〕

## 二三三　城下各組組織変換

五番

一小与二番　岩崎方限
一小与三番　冷水頭ヨリ紙屋谷迄
右島津仲支配
一小与四番　城ケ谷方限
一小与五番　滑リ川尻ヨリ竪野馬場上ノ原迄
一小与六番　吉野實方・帯迫・菖蒲谷迄
右川上右膳支配
一小与七番　般若院境小路辺ヨリ内之丸廻リ坂迄
一小与八番　廻リ坂上ヨリ中程迄
一小与九番　廻リ頭ヨリ催馬楽迄
右支配寄名越左源太
右ノ通与替被仰付候、

## 二三四　五代才介ヲシテ汽船ヲ上海ニ買フ

二月二十三日、五代才介友厚支那上海ニ於テ購求ノ汽船廻着ス、長二十五間余、百五十馬力、代価八万元、我金ニ算シ凡ソ四万余両ニ当ル、五代ハ正月初長崎ニ出、而シテ支那地方ハ売用ノ船多ク、且ツ価モ廉ナリトテ、英商（ガラバ）ナル者ト上海ニ航シ購求シタリト云フ、果シテ良船ニテ価モ廉ナリシトソ、

## 二三五　異国船渡来ノ予備

異国船前之濱ヘ渡来、櫻島並大門口・祇園州遠見番所ヨリ相図砲打揚之節、御暇（朱）「（遠城後）」後出役之役場左ノ通、

大番頭
御小姓与番頭壱人
右之内月番之人ハ一先勤場ヘ罷出、其外定ノ場所ヘ出役（ト）「（各警衛場ヲ云、以下皆仝シ）」
御側御用人壱人
右之通勤場ヘ可罷出候、
御用人弐人
右御軍役掛壱人并月番壱人ハ勤場ヘ罷出、外掛之儀ハ定之場所ヘ出役、
御側役壱人
御趣法方掛壱人
御納戸奉行壱人
右之通勤場ヘ可罷出候、

御軍役奉行
御軍賦役壱人
右之通勤場へ罷出、其外定之場へ出役、
御船奉行壱人
右御殿へ可罷出候、
御作事奉行弐人
物奉行弐人
御目付御裁許掛弐人
郡奉行弐人
右勤場へ可罷出候、
御台所頭
御春屋役
右都テ勤場へ可罷出候、
御供目付弐人
横目　三人
右御殿へ罷出、勤場へ可扣居候、
右之通被仰付候条、其外之御役場不及出役、組中ニ到迄都テ致在宿、兼テ御手当被仰付置候面々ハ勿論、一統不動揺無用之奔走屹ト不相成候、尤御手当向ニ付テハ兼テ申渡候通堅可相守候、此旨大番頭・御小姓番頭へ申渡、向々へ不浅様急度可申渡候、
二月十四日　〔小松清廉〕帯刀

## 二三六　勤務時間延長ノ達書

寺社奉行
御勘定奉行
御側御用人
御用人
御勝手掛
御用人
右ハ是迄出勤、八ツ時御暇被定置候得共、当時内外多端之御処置御変革之折柄ニテ、繁務之事ニ付、以来七ツ時御暇被相定候、此旨申渡向々へ可致通達候、
但右之外諸役場之儀モ、前条同様繁務之事候ヘハ、御用仕舞次第ニハ、七時ヨリ内八ツ退出不苦候、
亥二月十八日　帯刀

## 二三七　御供ノ人員服制変更達書

御供中其外旅行等ノ節、縮緬羽織ノ儀、袷単共相用候テモ不苦候旨被仰渡置候得共、此節御変革被　仰出候

ニ付テハ、以来御供等ノ節モ致着用候儀一切不相成候、

但

拝領品ノ儀ハ別段ノ事候間、相用候テモ不苦候、

右ノ通屹ト可申渡旨被仰出候条、此旨向々へ可致通達候、

二月　　筑後川上　帯刀小松

大蔵島津　但馬川上

## 二三八　生麦殺傷事件英国人申立ノ趣示達

〔包紙〕
御中途二通

島津主殿殿〔久篤〕　京師

中山中左衛門殿〔実善〕　本田彌右衛門〔親雄〕

御内用

昨戌年八月、嶋津三郎〔久光〕義江戸出立之節、於生麦英吉利人両人打果候ニ付、英吉利人応接方も有之候ニ付、其節之始末存居候者呼出し、理非相糺可申其趣相達候処、未差出候内、此度英国より軍艦差向、別紙申立之通聞届不申候ハヽ、直様戦争可及旨、且将軍留主中之義故、京都迄承りニ差越候日積を以、申立候日より廿日を相待返答無之候ハヽ、直様戦争仕掛可申と之書面ニ御座候、右廿日ハ三月八日ニ相当候、申立之趣は素より難承届儀ニ付、何れも戦争ニ及候は必然ニ付、別て大坂港之義は早々警衛可致、依ては諸大名夫々より差遣候様仕度、江戸之方も和宮御方其外も在城之義に有之、留主中小人数ニては守衛難行届、夫々ノ手配申付度、右ニ付水戸中納言義最早旅中と存候間、早々引返し江戸守衛可致旨、申遣度奉存候、大樹旅中故不取敢此段奉言上候、以上、

尾張前大納言〔徳川茂徳〕
一橋中納言〔徳川慶喜〕

二月廿六日　　松平春嶽〔慶永〕

三ケ条之内大略

一島津三郎誅戮之事、

一薩州へ到戦争之事、

一償金之事、

〔本田親雄書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

## 二三九　英艦生麦殺傷事件談判ノ為メ渡来ノ達

生麦一条ニ付、今般英夷軍艦江戸・横濱へ渡来いたし夷人申立之趣、越前春嶽様より御達有之、右は藤井良節を以巨細申上候通御座候、然処今日陽明御殿より御

用有之、高崎猪太郎〔朱〕〔五六旧名〕罷出候処、昨廿六日尾張前大納言・一橋中納言・松平春嶽御参殿ニて、別紙奏聞を被経候趣、逐一言上被有之候段、　前殿下様より心得にも可相成

御沙汰被為在候故、則形行〔旅カ〕御中途御国許へも申越候様可仕旨申上置候、右ニ付

三郎様御儀、

主上奉始被遊

御待候処、此節之一条ニ付、

中川宮様

近衛様御沙汰之御趣奉承知、何分書面ニ申上尽兼候次第、細詳口上ニて申上越度奉存候、志々目獻吉

御中途迄差上候ニ付、御聞取御披露之処、宜御頼申上候、以上、

京都　　本田彌右衛門

二月廿七日夜

御中途

島津主殿殿

中山中左衛門殿

追て横濱応接之次第ニ付、一橋・越前等御評議にて、何れの筋於江戸攘払可有之との趣意共、猶獻吉へ申含置申候、〔同上書にて校訂〕

## 二四〇　英艦渡来ノ準備異国船御手当ノ次第

一山川〔揖宿郡〕辺へ四艘以上ノ異船相見得、内海ノ様可乗入模様モ候ハ、兼テ郷々ノ小高キ所へ遠見番所・烽火台等取建置、且大炮五発位ヲ打、直ニ烽火可相立候、

但烽火台等取建候場所ハ、山川・指宿〔揖宿郡〕・今和泉〔指宿市〕・喜入〔揖宿郡〕・谷山〔鹿児島市〕・垂水〔垂水市〕・新城、

一右ニ付、前ノ濱〔鹿児島市〕へ四艘以上ノ夷船相見得候得ハ、直ニ諸手当可有之、亦ハ一二艘ニテ碇舶応接ノ上手切ノ模様候得ハ、掛御家老ヨリ御軍役奉行・御軍賦役へ差図次第、早鐘一度ニ二ツ、続ケ打、一呼吸ヲ置二ツ、、此相図ニテ御作事方并上・下・西田町〔同上〕三ケ所ノ太鼓打鳴シ、其外吉野〔鹿児島市〕・草牟田〔同上〕・郡元等ハ二〔欠〕打鳴シ、又ハ馬乗等ニテ庄屋所〔欠〕告候次第、

一右通相図打鳴シ候節ハ、御先手人数一番・二番組辨天波戸、三番組大門口台場、四番組調練場、五番組新波戸、六番組祇園洲台場〔朱〕〔城内祈禱所〕へ早々馳付、御差図可相待候、

一御旗本人数ハ、御本丸下ヨリ護摩所辺へ罷出、右同断、

一三郎様御旗本人数ハ、二丸下ヨリ造士館・南泉院辺ヘ、右同断、

但当分御手当被仰付置候御城下守衛人数、本役ノ場被振向候、

一御城下守衛六組、

右演武館内又ハ御台所御門内辺ヘ、右同断、

右依時機、　御姫様方為御警衛被召付、

一両御旗本人数ノ儀、　御一方様〔朱〕「〔城中ニアラサリノヲ云〕」御留守ノ節迚モ、右集場ヘ罷出御差図可相待候、

一右外ノ人数、拾五歳ヨリ五拾八歳迄ノ間、各御先手与番頭備ノ次ニ相集、右同断、

一諸郷・私領ノ儀モ内外共海岸有之分ハ、地形ノ遠近・険易・兵卒ノ衆寡ニ従テ互ニ可致救応事、

一右ノ通夫々集場ヘ早々馳付、大小炮其外要具相揃戦争ノ致用意、御手切レニ及ヒ征討ノ時機ニ候ハ、御家老ヨリ御軍役奉行・御軍賦役ヘ差図次第、鐘楼ノ太鼓三ツ続ケ打候テ、亦一呼吸ヲ置可打鳴候間、是ヲ手切ノ相図ト可相心得候、

以上

右文久三年亥二月廿八日被仰渡候事、

## 二四一　異国船渡来ノ節御作法左ノ通被仰渡候

異国船渡来ノ節、諸向手当心得ノ儀、去〔朱〕「〔万延元年〕」ル申年申渡置候得共、猶亦此節別冊ノ通被仰付候条、早鐘等ノ相図相鳴候節ハ、早速諸士ノ面々各請持ノ場ニ相集、御小姓与番頭ヘ届可申出候、左候テ万一心得違相図無之内馳出候カ、又ハ兼テ御定ノ場所ヘ到着不致、一己ノ了簡ヲ以テ於他所何様ノ功労有之候共、可為曲事段、組中ノ面々ヘ平日御小姓与番頭・什長等ヨリ厳令可有之段、此旨大番頭・御小姓与番頭ヘ可申渡候、

但依勤場急変ノ節迚モ、出役不相調向ハ其訳早々御軍賦役ヘ可申出候、

文久三年亥二月　〔朱〕「但馬」

## 二四二　英国艦隊横濱ヘ入港応接ノ報

今般横濱江英夷軍艦八艘渡来、応接ニ及候処、去ル廿四日松平春嶽様ヨリ被相渡候御書附之通ニテ、夷人申立之三ケ条、甚以不届之至、泣血憤激ニ不堪次第、申上候モ恐入候訳ニテ、即夜吉井中助〔友実〕差下、早々言上為

仕候ニテ、
三郎様御中途江着、同夜藤井良節ヲ以奉申上候、委細
吉井中助ヨリ御聞取可被下候、外ニ尾張侯御始ヨリ
朝廷江御伺之御書、諸大名江幕府ヨリ御達之書類差上
候、尤今朝松平春嶽様ヨリ御達之儀有之候間、御家老
一人・御留守居一人罷出候様致承知、島津右門・鵜木
孫兵衛罷出候処、別紙一通被相渡、
三郎様御勘弁之処、御申出有之候様トノ御書面ニ付、
今日御中途江モ早々奉申上置候、何分達
貴聞候ハヽ、
御不平ハ素ヨリ旁
御心配ニモ可被為及、只々奉恐入候、乍併元ヨリ幕府
へ之御申立モ先度ヨリ被為在、御覚護之前トハ乍申、
三郎様御旅中之御儀ニモ被為　在、私式ニ至深奉案煩
候、何レ兵庫辺江早々
御迎参上之賦ニ御座候、先日　御中途迄高崎左太郎差
上候得共、日積ヲ以相考候得ハ御国元迄着仕候半欤、
左候テ吉井中助ニモ被差下候間、当地之事情篤ト達
御聴候様御取計可有之奉存、他事ハ相省不申上候、尤
去ル廿六日ヨリ在京之諸大名追々帰国被仰出、攝・播
御警衛場受持之御方ニハ下坂被仰出候、一橋殿ヲ始関
東ニオヒテ応接破拒無之テハ、征夷府之職モ不相叶ト
之御議論ニ御座候、乍併
御国元之儀ハ口実トスル基本ニ御座候得ハ、是非共難
押へ、軍艦回来モ必然之勢ト奉存候、此般之一条ニ付
ハ都下競々之人情ニテ誠ニ不穏次第、彼是ニ付テモ
中川宮様
近衛様、武辺ニテハ一橋殿・春嶽様・松平容堂様ヲ始
一日モ早ク御上着可有之様トノ御事ニ付、
宮様ヨリハ御伝言之趣御促被遊、志々目獻吉　御中途
迄被差越候故、前殿下ヨリモ同断、
御言伝ヘ等奉承知、昨夜八時下之關之様被差立候、右
今日迄之形勢大意奉申上候、可然御披露御頼申上候、
以上、

京都　　本田彌右衛門

亥二月廿八日夜

御国元

御側役衆　〔本田親雄書翰(大久保利謙氏所蔵)にて校訂〕

## 二四三　在京本田ヨリ大久保ニ洛中ノ形勢ヲ報ス

一筆啓上仕候、春暖之節愈御安泰奉恐慶候、然ハ当表之事情并に横濱表英国夷舶来港之趣意共、巨細吉井中助より御聞取被下候半、文略いたし候、誠ニ以夷虜来寇ハ素より覚護之前ニて、今更驚ニ不足といへとも、申立之一条実ニ不倶戴天之讎申ニも難忍、失礼慢慢之兇言切歯ニ不堪次第に候、吉井出立後之形勢、別紙ニ大意申上候間、不贅候、已来時勢情態等機事申上候節も御側役衆と中所ニて、別紙通之振合ニて可然や、何分貴兄一人宛ニては万一他行等之折不都合と存上候故、御差図可被下候、尤

君公御附御側役衆誰々ニて候哉、余り疎外之至候得共

聢と不存位、此段御尋申上候間御返答可被下候、

朝廷之処も爰ニ至てさへ必然攘夷之処置江御卓見も無之、一橋・越・尾等より切々と被仰立候廉も御徹底無之、矢張親兵之何欤と瑣々たる議論紛々ニて、痛歎之至ニ候、乍併精々此両三日建言ニて、周州始警衛場江御越等ニは相成候、何も吉中直話ニ譲候、今日

順聖公御贈官位之位記・口宣等無異条、伝奏より御渡相成、全く所司代等之手ニ不渡相済安心いたし候、大原左衛門督様にも落飾蟄居被仰出候、委細吉井承知ニて力ニ及不申候、裏辻卿も御蟄居也、近来暴論横議之浮浪人益以湧出、等持院より尊氏三代之木像を刎、三條磧ニ梟首いたし候者共、會藩之手ニて廿六日の夜処々ニて召捕ニ相成、大庭恭平 中島英吉類少々ハ愉快ニて候、凡百人計も清川八郎（正明）を始江戸より上京いたし、公然學習院江上書、

朝廷之御不為ニ相成輩ハ此党を以退治可仕との趣意申出候由、然るニ別紙ニも申上候通、精選之士残置候様被仰出、是則親兵之基本ニて、無頼之長袖黒歯輩鳥合之狂兇を語ひ、我意を逞する之小智より、亡命無居之徒尊　王之名義ニ事寄せ、惑溺せしむる所より横議沸騰いたし、此末如何と

朝綱之乱不乱ニ関係する事浩歎に不堪候、御遙察可被下候、来ル九日・十日ニハ

三郎公兵庫御着と奉存候付、指を屈奉企望候、何分切迫之世態、短才之小生種々配慮之事件御愧笑可被下候、乍末毫御帰国之折は不慮之難船、嘸々御驚愕之筈、小松大夫より細々伝承いたし跡以握汗候、乍併無事御上陸、めて度御再生ニて、天いまた薩之誠意を不捨之験ニて候、御書類要用之一品無恙候由、今以彼の舟半沈半浮之由、見苦敷体と存候得共、掛合致方もなく候、

猶其許之形勢御通達奉希候、要用のミ一書奉呈候、恐々頓首百拝、

京師　本田彌右衛門

二月廿八日夜

大久保一蔵様

参人々御中

〔同上書にて校訂〕

## 二四四　鹿兒島湾内要衝ノ地地頭職任命

二月二十八日達、御用人御勝手方掛御用人勤伊集院平治、小根占郷地頭ニ拝ス、〇町田内膳大目附寺社奉行勤、指宿郷地頭職ニ拝ス、両名共ニ至急赴任、海陸軍備或ハ士風振起候様誘導勧奨スヘキ旨命セラレタリ、両郷共ニ御城下咽喉ノ要衝ナルカ故、特旨ヲ以テ命セラレタリ、

## 二四五　各郷警衛地達書

二四五ノ一〔朱〕「〔二月二十八日達〕」

同日達

一伊集院〔日置郡〕

一市來〔同上〕

一郡山〔同上〕

一鹿兒島郡吉田

右之一陣到着之上ハ、壽國寺・千眼寺・笑嶽寺・薬王寺へ止宿之事、

一國分

一嚼吠郡

右之一陣櫻島之内横山・赤水辺へ同断、

一蒲生〔姶良郡〕一組

一帖佐〔同上〕一組

右櫻島之内瀬戸村へ同断、

一伊作〔日置郡〕

一阿多〔同上〕

一田布施〔同上〕

一川邊郡山田

右一陣谷山へ同断、

右ハ異国船内海へ乗入候節ハ、相図其外注進等相達候ハ、兼テ申渡置候御手当ニ基キ、早速右場所へ差越、到着之届物主へ可申出候、此旨地頭並地頭用達へ申渡、可承向ヘモ可申渡候、

二月廿八日　但馬〔川上久運〕

二四五ノ一
同日達

一伊集院
一市來
一郡山
一鹿兒島郡吉田
一國分
一囎唹郡
一蒲生
一帖佐
一田布施
一阿多
一川邊
一川邊郡山田
一伊作

右ハ異国船内海へ乗入候節ハ、注進次第御当地又ハ櫻島等へ夫々出役、受持之場所被相定置候ニ付テハ、早鐘等之相図相鳴候者出役之儀、御軍賦役ヨリ組合郷之内一郷へ可相達候ニ付、直ニ外郷へ相通シ候様兼テ可申談置候、尤物主之儀モ早速受持之場へ馳セ付、着到之人数相円メ御差図可相待候、此旨可被申渡旨、毎郷物主へ可申渡候、

二月廿八日　式部川上久美

上文ニ物主之儀モ早速受持ノ場へ云々、諸郷隊ノ物主モ惣テ城下居住ノ士ナリ、其郷ノ地頭或ハ物頭等ノ内ヨリ特撰命セラレタリ、又旗預(朱)「(参謀トモ云フヘキ役職)」或ハ談合役等モ御城下士ニ命セラレタリ、

## 二四六　海防準備厳警

二月晦日

海防之準備一層厳整スヘキ旨令セラレ、各所ノ砲台修築昼夜兼業、殊ニ五ケ所砲台ハ数門ノ砲増置ヲモ命セラレ、　太守公操練毎ニ御出馬御指揮アラセラル、カ故、咸人奮起勉励セリ、加之毎日褒詞或ハ酒肴種々ノ賜物等懇遇セラレタリ、

## 二四七　軍役人員調査

小番・新番

(頭註朱)「(階書改写)」
一惣家部千三拾六
(朱)
申「年調（万延元年申）」
五拾歳以下拾八歳以上

千拾三人
　但
　　医師并嶋方居住除〔朱〕「（流罪者ヲ云以下悉仝シ）」
内
一他国旅并嶋渡海　百拾壱人　「〔朱〕（藩用ヲ以テ旅行者ヲ云以下悉仝シ）」
一御国旅　百六人〔朱〕「（藩内各所旅行者ヲ云以下悉仝シ）」
一長病人　七人
一極貧者　七拾人
一中宿者　弐人〔朱〕「（城下ヨリ各所ニ居住シ原籍地在ラサル者ヲ云以下悉仝シ）」
　差引
　現人数七百拾七人
　内
一四拾五歳以下弐拾歳以上　五百四拾四人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
　三百四拾弐人
　　一番組
一惣家部五百三拾七
申〔朱〕「年調」

五拾歳以下拾八歳以上
五百弐拾七人
　但
　　医師并嶋方居住除〔朱〕「（仝上）」
内
一他国旅并嶋渡海　五拾壱人〔朱〕「（仝上）」
一中宿者　四人〔朱〕「（仝上）」
一御国旅　五拾五人〔朱〕「（仝上）」
一長病人　五人
一極貧者　拾人
　差引
　現人数四百弐人
　内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
　三百四人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
　百六拾四人
　　二番組
一惣家部五百拾九
申〔朱〕「（仝上）」

五拾歳以下拾八歳以上
五百三拾九人
但
医師并嶋方居住除〔朱〕「（仝上）」
内
一他国旅并嶋渡海　五拾人〔朱〕「（仝上）」
一中宿者　拾八人〔朱〕「（仝上）」
一御国旅　五拾七人〔朱〕「（仝上）」
一長病人　八人
一極貧者　四拾六人
差引
現人数三百六拾人
内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
弐百九拾五人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
百六拾五人
三番組
一惣家部六百四拾六
申〔朱〕「（仝上）」

五拾歳以下拾八歳以上
六百四拾九人
但
医師并嶋方居住除〔朱〕「（仝上）」
内
一他国旅并嶋渡海　五拾五人〔朱〕「（仝上）」
一中宿者　拾弐人〔朱〕「（仝上）」
一御国旅　六拾八人〔朱〕「（仝上）」
一長病人　拾人
一極貧者　六拾人
差引
現人数四百四拾四人
内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
三百三拾五人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
弐百拾壱人
四番組
一惣家部四百弐拾四
申〔朱〕「（仝上）」

五拾歳以下拾八歳以上
四百弐拾壱人
但
医師并嶋方居住除「(朱)(仝上)」
内
一他国旅并嶋渡海　三拾七人「(朱)(仝上)」
一中宿者　五人「(朱)(仝上)」
一御国旅　三拾壱人「(朱)(仝上)」
一長病人　九人
一極貧者　九人
差引
現人数三百弐拾三人
内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
弐百六拾壱人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
百五拾弐人
五番組
一惣家部四百九拾弐
申「(朱)(仝上)」

五拾歳以下拾八歳以上
五百拾三人
但
医師并嶋方居住除
内
一他国旅并嶋渡海　三拾八人
一中宿者　拾八人
一御国旅　三拾人
一長病人　七人
一極貧者　四拾人
差引
現人数三百八拾人
内
一四拾歳以下弐拾歳以上
弐百六拾六人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
百弐人
六番組
一惣家部四百七拾六
申「(朱)(仝上)」

五拾歳以下拾八歳以上
四百九拾人
但
医師并嶋方居住除
内
一他国旅并嶋渡海　弐拾九人
一中宿者　五人
一御国旅　四拾壱人
一長病人　八人
一極貧者　六拾弐人
差引
現人数三百四拾五人
内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
三百拾三人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
百六拾壱人
六組
一惣家部三千九拾四
「申（朱）（仝上）」

五拾歳以下拾八歳以上
三千百三拾九人
但
医師并嶋方居住除
内
一他国旅并嶋渡海　弐百六拾人
一中宿者　六拾弐人
一御国旅　弐百八拾弐人
一長病人　四拾七人
一極貧者　弐百三拾四人
差引
現人数弐千弐百五拾四人
内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
千七百七拾四人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
九百五拾五人
小番・新番・御小姓与
一惣家部四千百三拾
「申（朱）（仝上）」

五拾歳以下拾八歳以上
四千百六拾弐人
但
医師并嶋方居住除
内
一他国旅并嶋渡海　三百七拾壱人
一中宿者　六拾四人
一御国旅　三百八拾八人
一長病人　五拾四人
一極貧者　三百四人
差引
現人数弐千九百七拾壱人
内
一四拾五歳以下弐拾歳以上
弐千三百拾八人
一三拾八歳以下弐拾五歳以上
千弐百九拾七人
一御一門方并家名方五拾歳以下弐拾歳以上、二男・三男・
末子迄
四人
「申〔朱〕（仝上）」
内
壱人　病身
拾八歳以上無
一一所持以下寄合并以上右同
三拾壱人
内
壱人　病身
壱人　山伏
八人拾八歳以上
合三拾五人
内
弐人　病身
壱人　山伏
八人拾八歳以上

## 二四八　諸郷軍役人員調査

二四八ノ一　東目繰出御備組
（宮崎郡東諸県郡）
高岡
〔朱〕「年（仝上）」
申〆弐拾歳ヨリ五拾歳迄

一人数四百五拾四人
外二
病者拾弐人
（宮崎市）
倉岡
一人数九拾三人
（宮崎県東諸県郡）
穆佐
一人数九拾八人
外二
病者四人
（同上）
綾
一人数百六拾七人
外二
病者拾弐人
（同西諸県郡）
野尻
一人数弐百壱人
外二
病者拾弐人
（同上）
須木
一人数百八拾弐人
外二
病者七人
小林
一人数三百拾三人
外二
病者弐人
（宮崎県えびの市）
飯野
一人数百七拾六人
外二
病者拾弐人
（同上）
加久藤
一人数百弐拾弐人
外二
病者六人
（同上）
馬關田
一人数五拾七人
外二
病者五人
諸縣郡
（同上）
吉田
一人数七拾六人

外二
病者弐人
〔姶良郡〕
吉松
一人数百四拾人
外二
病者拾三人
〔同上〕
踊
一人数百拾六人
外二
病者拾六人
〔同上〕
栗野
一人数百弐拾弐人
外二
病者拾八人
諸縣郡
〔宮崎県北諸県郡〕
高城
一人数百八拾弐人
外二
病者三拾六人
〔同上〕
高崎
一人数百四拾五人
〔姶良郡〕
横川
一人数弐百六拾三人
外二
病者拾四人
〔宮崎県西諸県郡〕
高原
一人数弐百弐拾弐人
外二
病者六人
〔同北諸県郡〕
勝岡
一人数弐百三人
外二
病者七人
〔曽於郡〕
末吉
一人数三百七拾八人
外二
病者拾壱人
〔宮崎県北諸県郡〕
山之口
一人数百三拾八人
外二

病者三拾八人
〔曾於郡〕
志布志

一人数三百五拾五人

外二

病者八人
〔肝属郡〕
串良

一人数百九拾五人

外二病者拾弐人
〔同上〕
高山

一人数弐百七拾弐人

外二

病者拾五人
〔曾於郡〕
松山

一人数百三人

外二

病者三人
〔肝属郡〕
内之浦

一人数百弐拾弐人

外二

病者三人

〔曾於郡〕
大崎

一人数三百三拾七人

外二

病者拾五人
〔垂水市〕
牛根

一人数百五拾人
〔肝属郡〕
佐多

一人数百人
〔同上〕
田代

一人数八拾壱人
〔同上〕
姶良

一人数九拾四人
〔曾於郡〕
百引

一人数百三拾八人

外二

病者四人
〔鹿屋市〕
高隈

一人数三拾弐人
〔曾於郡〕
恒吉

一人数九拾八人

外二

病者壱人
〔肝属郡〕
小根占

一人数四百拾七人
〔同上〕
大根占

一人数百四人

外二

病者三人
〔鹿屋市〕
大姶良

一人数九拾五人

外二

病者五人

鹿屋

一人数百三拾八人

外二

病者四人
〔曽於郡〕
財部

一人数三百四拾四人

外二

病者拾七人

國分

一人数八百九拾人

外二

病者拾五人
〔姶良郡〕
福山

一人数弐百弐拾弐人

外二

病者三人

曽於郡

一人数三百七拾九人

外二

病者拾六人
〔国分市〕
敷根

一人数百五拾六人

外二

病者四人
〔同上〕
清水

一人数三百六拾弐人

外二

病者五人

〔給良郡〕
溝邊
一人数百弐拾人
外二
病者九人
〔同上〕
日當山
一人数百五拾八人
外二
病者弐人
〔伊佐郡〕
湯之尾
一人数九拾六人
外二病者弐人
〔同上〕
馬越
一人数九拾七人
外二
病者三人
〔同上〕
本城
一人数百弐拾四人
外二
病者四人
櫻島

一人数五百弐人
外二
病者八人
合郷数五拾ケ郷
弐拾歳ヨリ五拾歳迄
人数壱万百弐拾八人
病者三百九拾四人
二四八ノ二〔熊毛郡〕〔朱〕
種子嶋「(仝上)」
一人数
〔曾於郡〕
市成
一人数
垂水
一人数
〔鹿屋市〕
花岡
一人数
〔垂水市〕
新城
一人数
都城
一人数

合私領数六ケ郷〔朱〕「(御一門四家其他)」
弐拾歳ヨリ五拾歳迄
人数
二四八ノ三 西目繰出御備組
出水
申〆弐拾歳ヨリ五拾歳迄
一人数千百七拾弐人
外二
病者拾七人
〔出水郡〕
野田
一人数百五拾人
外二
病者五人
〔同上〕
高尾野
一人数三百三拾六人
外二
病者三人
〔天口市〕
羽月
一人数百三拾九人
外二
病者壱人
大口
一人数弐百七拾四人
外二
病者拾壱人
〔川内市〕
高江
一人数弐百弐拾壱人
外二
病者弐人
阿久根
一人数弐百五拾八人
外二
病者拾四人
高城郡
〔川内市〕
高城
一人数七百拾六人
外二
病者三拾弐人
〔同上〕
水引

一人数弐百四拾八人
〔天口市〕
山野
一人数八拾弐人
〔川内市〕
隈之城
一人数四百拾弐人
外二
病者拾三人
〔薩摩郡〕
東郷
一人数三百九拾六人
外二
病者弐拾六人
薩摩郡
〔川内市〕
山田
一人数百三人
外二
病者壱人
串木野
一人数三百八人
外二
病者壱人

〔日置郡〕
市來
一人数五百五拾九人
外二
病者四拾人
〔川内市〕
中郷
一人数六拾六人
〔同上〕
百次
一人数八拾三人
〔ママ〕
〔日置郡〕
伊集院
一人数三百九拾三人
外二
病者拾壱人
〔同上〕
郡山
一人数三百三拾四人
外二
病者拾弐人
〔薩摩郡〕
樋脇
一人数三百五人
外二
病者弐拾八人

〔日置郡〕
伊作
一人数五百六拾九人
外二
病者拾弐人
〔同上〕
田布施
一人数三百拾弐人
外二
病者壱人
川邊
一人数三百七拾壱人
外二
病者拾五人
加世田
一人数千百五拾三人
外二
病者四拾九人
〔日置郡〕
阿多
一人数弐百六拾八人
外二
病者三人

川邊郡
山田
一人数弐百七拾五人
外二
病者七人
〔鹿児島市〕
谷山
一人数五百三拾六人
外二
病者拾壱人
〔川辺郡〕
坊泊
一人数百拾九人
外二
病者　三人
〔揖宿郡〕
頴娃
一人数三百七拾四人
外二
病者弐拾三人
指宿
一人数百八拾壱人
外二

病者七人
〔川辺郡〕
久志秋目
一人数百六拾六人
外二
病者五人
〔揖宿郡〕
山川
一人数六拾五人
〔姶良郡〕
蒲生
一人数六百拾九人
外二
病者拾壱人
鹿兒島郡
吉田
一人数弐百三拾六人
外二
病者弐人
〔薩摩郡〕
山崎
一人数百弐拾壱人
外二
病者五人

〔姶良郡〕
帖佐
一人数三百七拾三人
外二
病者七人
姶羅郡
〔姶良郡〕
山田
一人数弐百拾四人
外二
病者七人
〔薩摩郡〕
大村
一人数弐百六人
外二
病者七人
〔同上〕
鶴田
一人数百七拾四人
外二
病者五人
〔大口市〕
曽木
一人数百五人
外二

病者九人
〔薩摩郡〕
上甑嶋
一人数五百拾人
外ニ
病者拾人
〔同上〕
下甑嶋
一人数三百五拾壱人
外ニ
病者壱人
〔出水郡〕
長嶋
一人数四百八拾七人
外ニ
病者拾五人
合郷数四拾四ケ郷
人数壱万四千三百三拾四人
病者四百弐拾六人
二四八ノ四〔川内市〕
平佐
一人数
〔薩摩郡〕
入來

一人数
〔日置郡〕
永吉
一人数
〔同上〕
吉利
一人数
〔同上〕
日置
一人数
〔揖宿郡〕
喜入
一人数
〔指宿市〕
今和泉
一人数
〔川辺郡〕
知覧
一人数
〔同上〕
鹿籠
一人数
〔薩摩郡〕
宮之城
一人数
〔姶良郡〕
重富
一人数
〔同上〕
加治木

一人数
〔薩摩郡〕
黒木

一人数
〔同上〕
藺牟田

一人数
〔同上〕
佐志

一人数
合私領数拾五ケ郷
弐拾歳ヨリ五拾歳迄
人数

## 二四九　乗馬数調査

一乗馬三百拾五疋
内
三拾六疋　御一門方
弐拾七疋　家名方〔朱〕「（一所持ノ一唱）」
七拾弐疋　一所持以下寄合并以上
三拾五疋　大目附以上
四拾五疋　大番頭・御小姓与番頭
八拾疋　小番・新番
拾四疋　御小姓与
但
私領立乗馬除
一小番以下御小姓与以上弐百石以上
一高千五百石以下千石以上
小番　壱人
一同千石以下五百石以上
小番　五人
一同五百石以下弐百五拾石以上
小番　三拾九人
新番　弐人
御小姓与三人
合五拾人
張紙
一小番・新番・御小姓与弐百五拾石以上、五拾人高頭ニ付、馬賦乗馬五拾壱疋之賦、
但
本行小番・新番・御小姓与
現馬数九拾四疋之内
右之五拾壱疋差引迄

四拾三疋
乗馬之儀ハ弐百五拾石ニ壱疋、五百石ニハ弐疋之賦候得共、五百石ヨリ又壱疋ニテ、千石ニ弐疋、千五百石ニハ三疋ト、万石ニテモ右之通賦上候御法ニ御座候、

## 二五〇　山川郷諸調

一郷士惣人数弐百五拾壱人
内
男九拾七人　拾五歳ヨリ六拾歳迄
男三拾五人　拾五歳以下
女百拾九人
一百姓人数三千三拾四人
内
男千九人　拾五歳ヨリ六拾歳迄
男四百三十四人　拾五歳以下
女千五百九拾壱人
一岡・濱・浦人数七百八拾六人
内
男弐百三拾七人　拾五歳ヨリ六拾歳迄
男百弐拾人　拾五歳以下
女四百弐拾九人
一町人数弐百五拾五人
内
男百六拾八人　拾五歳ヨリ六拾歳迄
男八拾七人　拾五歳以下
女弐百九拾壱人
一寺門前人数百弐拾四人
内
男四拾七人　拾五歳ヨリ六拾歳迄
男弐拾六人　拾五歳以下
女五拾壱人
惣合四千四百五拾人
一高四千三拾三石八斗八升八合八勺三才
内
田高六百七石壱斗三升八合五勺三才
畠高三千四百弐拾六石七斗五升三勺壱才
右之内
七百五拾四石七斗八升壱合七勺三才
外ニ

高百六拾九石三斗四升七合六勺四才
但山川郷士持川邊給地高
合高九百弐拾四石壱斗弐升九合三勺六才　郷士持
一船弐拾四艘
内
三枚帆弐艘
弐枚帆拾艘
丸木船三艘
漁船　九艘
一鉄砲八拾五挺
内
四匁以上拾七挺
五匁以上三拾八挺
六匁以上七挺
七匁壱挺
八匁弐拾挺
拾匁壱挺
拾壱匁壱挺
一長刀五本
一鎗拾六本
一鎧六領
一陣笠四拾七
一半首拾六
一百目筒壱挺
一大砲七挺
内
二十挿壱挺
十二封度四挺
七百目壱挺
五百目壱挺
一御格護塩硝弐千四拾八斤壱合三勺八才
一山川惣廻リ七里東西壱里三拾壱町南北弐里
一拾四町　地頭仮屋ヨリ指宿大渡リ迄
一八町　御番所鼻ヨリ指宿大渡リ迄
一弐拾六町　御番所鼻ヨリ指宿大渡リ迄
一七里　山川港ヨリ佐多御崎迄海上〔肝属郡〕
一壱里弐拾四町　地頭仮屋ヨリ今和泉利永境迄
一六里三合　山川湊ヨリ佐多立目迄海上
一弐里　地頭仮屋ヨリ頴娃川尻境迄
一五里　山川湊ヨリ伊佐敷〔肝属郡〕迄海上

一六里〔町カ〕　地頭仮屋ヨリ御番所後御台場迄
一三里七合　山川湊ヨリ小根占〔肝属郡〕境大川迄海上
一弐拾町　地頭仮屋ヨリ成川村八窪御台場迄
一三里　山川湊ヨリ小根占麓迄海上
一壱里　地頭仮屋武山迄
一四里三合　山川湊ヨリ大根占〔肝属郡〕麓迄海上
一壱里弐拾五町　地頭仮屋ヨリ兒ケ水〔揖宿郡〕遠見番所迄
一七　山川湊ヨリ高須〔鹿屋市〕迄海上
一六町　地頭仮屋ヨリ烽火台遠見番所迄
一拾町　地頭仮屋ヨリ成川浜銃薬水車場迄
一弐拾町　地頭仮屋ヨリ成川村川之口塩硝御蔵迄
一五町　地頭仮屋ヨリ福元村塩硝御蔵迄
一四里　地頭仮屋ヨリ頴娃麓迄
一三里　地頭仮屋ヨリ指宿麓迄
一牛馬千六百五拾六疋
内
男牛百九拾五疋
女牛五百弐拾三疋
乗馬弐拾疋
駒五拾八疋
駄八百六拾疋
一当歳牛馬百八拾七疋
内
男牛弐拾壱疋
女牛三拾三疋
駒七拾四疋
駄五拾九疋
此外ニ百余郷、及ヒ私領・持切り在・寺社付等ノ調査書ハ逸ス、

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編
文久三年三月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二二枚）」の記載あり〕

目録


江田平太郎家記鈔
一陣調練ノ次第
忠義公春嶽公ヘ御書翰
茂久公大操練ニ臨マル
久光公御親書ヲ以テ従駕ノ人員ヘ御示達
幕府沙汰書井伊掃部頭ヘ
長崎奉行九州各藩ヘ達書
茂久公御親書示達
久光公御帰国
久光公兵庫御着ノ報大久保小松ニ報告
齊彬公御贈官口宣着魔布達


## 二五一　江田平太郎家記鈔

一大砲　一挺〔朱〕「（五百銭野戦砲）」

什長　江田平太郎
覘役伍長　平田助八
玉薬役　小牟田矢太郎
玉竿役　土持平蔵
口薬役　伊集院孫左衛門
打役　兒玉覺之丞

大砲　一挺〔朱〕「（七百銭野戦砲）」

覘役伍長
土持粮之助
玉薬役
野村十郎
玉竿役
松元兵之丞
口薬役
武仁右衛門
打役
谷元良助

右之通被仰付、三郎様(朱)〔久光公〕御出馬ノ節ハ、御旗本備ニテ可被差出候条、兼テ致用意候(様脱カ)可罷在旨可申渡候、

亥三月　式部(朱)〔川上久美〕

右之通、文久三年癸亥三月六日、四番組頭島津主(久)計(宝)殿御取次ニテ、承知イタシ候事、

## 二五二　一陣調練ノ次第

一御先手指揮御家老、
一両御旗本指揮　御名代、
一御城下守衛指揮御家老、
一壱番貝ニテ戎装、
一弐番貝ニテ御陣前ヘ折敷、
一斥候ノ上　御条書拝聞調練ノ事、
但右筆弘之、
一帰陣ノ後各陣前ヘ折敷、法令役ヨリ姓名呼合セ繰入ノ事、
一貝ノ相図ニテ惣勢御暇ノ事、
以上

右、文久三年亥三月十一日被仰渡候事、

## 二五三　忠義公春嶽公ヘ御書翰

今般横濱ヘ英夷軍艦到来、三ケ条之趣申上、何レニモ難被聞届筋ニ候ヘ共、三郎兼テ申立候趣有之ニ付、実ニ不容易国家之御大事、急ニ可被及応接間、勘弁之処早々申上候様、家来迄御達之御旨承知仕候、三郎儀発足後ニ候得ハ、自ラ上京之上、存慮之程言上可仕儀ニ候得共、既ニ当月八日迄ノ期日ニ、応接有無可相決御義ト奉存候得ハ、不日弊邑ヘ廻舶可致ニテ可有之、就

テハ　皇国之治乱ニ相係候機ニ候ヘハ、実ニ不堪恐懼候得共、全体生麦之事件武門ニヲヒテ不得止之挙動ニテ、曲直分明之訳候間、不仮不与正々堂々之応接ニ及候ハヽ、彼ヲシテ令承伏候ハ必然之義ト愚慮仕候、然ニ理非ノ論ニ及ス、我ニ禍端ヲ聞(開カ)候ハヽ、暴之暴ト可申候得ハ、傾国家誅伐ヲ加ヘ候外無之義ト決家(ママ)仕候、荀モ平穏無事ヲ謀候ニハ、低頭シテ償金ヲ与ヘ、彼ノ望ニ仕候ハヽ、欣然解恨候ハ案中ニ候得共、義之所在、道之所存不可易之訳ニテ、天下後世之公論亦可恥候ヘハ、実不能止仕合、殊ニ於幕府攘夷之勅命、廿日之期限ヲ以被及御請候上ハ、奉対
天朝幕府難相済義ハ奉存候、三郎留主中ニ候ヘ共、兼テ及談合置候間、不日来艦モ候ハヽ、前条之赴(趣)意ヲ以可加指揮候ニ付、此段及御届候、以上、

三月十一日　　松平修理大夫

松平春嶽様

## 二五四　茂久公大操練ニ臨マル

三月十二日、本日川尻砂揚場ニ於テ、先中後三軍及ヒ御城下警衛隊等ノ操練ヲ催サレ、　太守公ニハ巳ノ刻頃御出馬、各軍ハ黎明ニ出場御出馬ヲ待チタリ、御出馬御本陣ニ入ラセラレ、各軍拝謁畢テ諸軍操練ス、先軍(御先手)主将国老川上式部久美、次ニ中軍(御旗本隊)、次ニ　国父公御旗本隊、此二軍ノ主将ハ島津周防殿(忠義、重富郷領主)指揮セラル、次ニ御城下警衛隊、此主将ハ国老川上但馬久運、各軍操練中太守公ニハ御乗出シ、進退駈引御巡覧アラセラレタリ、未ノ刻許リニ終レリ、而シテ　太守公ニハ下町辨天波戸砲台ヘ御出馬、水軍隊操練御覧、申ノ下刻頃御帰城アリタリ、○本日、先中後及ヒ諸隊人員左ノ如シ、旗預廿五人・談合役廿五人・貝役廿五人・太鼓役廿五人・什長百五十六人・兵糧方廿五人・玉薬役廿五人・戦兵千五百六十人・人馬方廿五人・普請方廿五人・医師廿五人・旗持足軽廿五人、総計人員千九百六十六人、此外水軍又ハ砲台或救応・後備・予備等ノ数十隊ナリ、○水軍隊トハ今回創設セラレ、其組織ハ軽舸廿余艘ヲ新製シ、各十八斤銅短砲一門ヲ装置シ、水軍兵ヲシテ進衝追撃ノ為メニ設ケラレタリ、船ノ長サ六間許ニシテ、進退自在軽弁ヲ要トシタル製造ナリ、夷舶来襲ノ時ハ、突進或ハ追撃ノ用ニ充テラルヽ者ナリ、

**二五五　久光公御親書ヲ以テ従駕ノ人員ヘ御示達**

今般英夷軍艦横濱ヘ渡来、不容易重大ノ事件申立、於幕府御許容難相成趣之由、畢竟ハ去秋生麥之一条ト相聞得候、就テハ

皇国之御大難ヲ当家ヨリ事起リ候訳ニテ、別テ恐入次第ニ候、尤モ彼儀ハ曲直分明之事候処、蛮夷之情態可悪之至ニ候条、遂ニ強暴申募兵端相開候節ハ、天下国家之為メ、抽他藩一統粉骨砕身夷賊誅伐有之候様頼存候事、

三月十四日

右御親書ニ対シ、国老ヨリ左ニ添書シテ、従駕人員ヘ達シタリ、

御当地京師之形勢混雑之様子モ有之候条、於御国許被仰出置候趣深ク相守、諸事御滞陳(達)ト相心得、一己之識ヲ不用、一同一和一定之儀専要ニ候条、堅ク可得其意候、

三月十四日　　帯刀小松

此ノ御親書ハ、攘夷御決議幕府循(達)奉各藩ヘ布達シ、其期限モ後見・総裁ノ二職ニ於テ御受アリタルニ依リ、国父公ニハ、設令ヒ暴キニ無謀ノ攘夷ハ下策ナル旨、再三献言セラレタリト雖モ、事茲ニ至リテハ綸言汗ノ如シ、今更如何ントモスルコト能ハス、臣子ノ分尽サスンハアルヘカラズ、特ニ生麥事件目下ニ切迫、掃攘ノ談判ニ先ンシテ彼ヨリ責論ヲ開キタルカ故、爰ニ於テハ他ニ異リテ、攘斥ニ力メサルヲ得ス、加之曲直分明ニシテ、敢テ縮畏スヘキ理由アルコトナシ、彼其曲タルヲ反省セズ我ヲ曲トシ、要求シ熄マサルニ於テハ、我尤モ熄ムヘキニ非ス、彼暴ヲ以テスルトキハ、我モ亦至当ノ処分ナサヽルヘカラズ、剰ヘ這ノ事ナシトスルモ、鎖攘ノ詔ヲ下サレ、幕府循守布告セラレタル上ハ、到底掃ハサルヲ得サルノ今日ニ至レルヲヤ、是ニ因テ御書面ノ如ク決定セラレ、従駕ノ人員ヘ布告セラレタル者ナリ、然ルニ従駕人員中ニモ鎖攘主張ノ者多ク、且懇到ノ布令ニ感シ、身ヲ粉砕シ、先祖来数百年ノ久シキ恩恵ニ浴シタル酬報ハ、此時ニ在リト奮然感発シタリ、実ニ六百年来養成ノ国風盛ナリト謂フベシ、

編者曰、機事密ナラサレハ成ラズ、謀ノ洩レ易キハ禍ヲ招クト、古人ノ言ノ如シ、中ニモ将帥タル人ハ

謹ミ誠メサルヘカラサルノ要点ナリ、　国父公無謀ノ攘夷ハ下策ニアリトノ尊旨、数回献言セラレタル趣ハ、国老及ヒ君側二三名ノ外曽テ知ルモノナシ、茲ヲ以テ国中一般尊王攘夷ノ御所論ニ外ナシト信シ、壮齢血気ノ輩ハ益奮フテ、掃攘ヲ主トシ、少シク老練彼我ノ形勢ヲ識得シタル曹ハ勝算ナキヲ憂ヒ、私語クモアリタリ、編者カ們モ御論旨何レニモアリヤヲ疑惑シ、頗ル憂嘆セシ事ナリシカ、英夷ト戦争ノ後壬戌四月近衛家ヲ以テ御献言、同六月江戸ニ於テ閣老ヘノ御建論、或ハ同年八月朝廷ノ密命ニ応シ、御献策等ノ書ヲ拝読シテ、初テ尊慮ノ在ル処ヲ知リ愕然、茲ニ於テ疑惑氷解シタリ、実ニ宇内ノ形勢、彼我ノ情実洞見セラレシヲ感佩セシコトナリキ、向ニ古人ノ言ノ如ク、機事密ニシテ謀ノ洩泄セサル一賞三歎感佩極リタリ、〔旧邦秘録にて校訂〕

## 二五六　幕府沙汰書

二五六ノ一

井伊掃部頭〔直憲、彦根藩主〕へ

此度江戸表ヘ異国軍艦差向ケ、三月八日迄相待御答生麦事件無之候ハ、戦ニ可及旨申立、右ハ御承引可相成筋無之候ニ付、御一戦之御覚悟ニ有之候ニ付、其方ヘ横濱ヨリ川崎迄御警衛被仰付候、早々人数差出、防禦可致旨被仰出候、

三月十五日

二五六ノ二

攘夷拒絶ノ布告、或ハ生麦事件ニ就テ、〔本藩ハ脱カ〕開港論ナリトノ説アルカ故、御退京御届書ト同時ニ、左ノ書面ヲ呈出セラレタリ、

此節攘夷拒絶之厳令承知仕候ニ付、夷舶一艘ニテモ領内ヘ碇泊致候ハ不及応接、速ニ加誅伐候心得ニ御座候、且依時宜テハ、夷賊為征討軍艦差遣候儀モ可有之候間、右之趣兼テ御聞置被下候様、可申上置旨申付候、此段申上候、以上、

三月十七日　　松平修理大夫内　本田彌右衛門

右御書面三月十七日　国父公御退京御届書ト倶ニ議奏ヘ就テ奉呈セラレタリ、

二五六ノ三

井伊掃部頭

家来江

此度横濱港へ英吉利軍艦渡来、昨年島津三郎家来之者共、英吉利人両人殺害ニ及ヒ候儀ニ付、三ケ条之儀申立、何モ難聞届筋ニ付、其趣ヲ以テ可及応接候間、速ニ兵端相開候儀モ難計、依テハ銘々藩屏之任ニ有之候ニ付、夫々備向手当有之候様、為心得相達候事、

三月十五日

## 二五七　三月十五日ヲ以テ長崎奉行九州各藩へ達書

昨戌八月、島津三郎儀江戸出立之節、於生麥英吉利人両人（両人斬殺ハ誤ナリ、一人ヲ殺シ一人ヲ傷ケタリ、○生麥ニ於テ斬殺セラレタル英商ハ、カルレス・リチャルドソント云フ、傷ケラレタル者ハウイルレム・カラクケ、ウイレム・マルセル此二名ハ深傷ヲ受、外ニホルラデイレ及婦人一名ナリ、合テ五名同行、皆馬乗遊歩セシト云フ、四名ハ辛フンテ通レ去レリ、○其時我行粧中ニ見認メタルハ三名ニシテ、一名ヲ斬殺シ一名ニ傷ケ、婦人ハ逃ケ去リタリト記セリ、諸書記ス所異同アリ、○或ハ英国士官ト記スモアリ、或ハ償金養育金ノ数モ異同アリ）打果候ニ付、同国ヨリ此度横濱港へ軍艦差向ケ、三ケ条（三ケ条ノ事柄ハ前ニ註記ス）申立候、右ハ難聞届筋ニ付、此旨及応接候間、速ニ戦争可相成モ難計候間、此段為心得相達候、

右之通、松平春嶽殿ヨリ被仰下候ニ付、此段相達候、尤モ右ニ付、廉々急便ヲ以テ相伺置候儀モ有之候間、猶相達ニテ可有之候、

三月十五日

## 二五八　茂久公御親書示達

三月十五日ヲ以テ、　国父公於京都従駕、亦ハ在邸ノ吏員及ヒ守衛ノ人員中ヘ御示達ニ基カレ、　太守公御筆ヲ以テ、左ノ令書ヲ発セラレタリ、

今般、英夷軍艦横濱ヘ渡来之一条ニ付テ、於京都御別紙之通、　三郎様御筆ヲ以テ被仰出候趣、御尤之御儀ニ存候、

皇国ノ御大難ヲ当家ヨリ引起候訳ハ、幾重ニモ恐入候得共、畢竟生麥一条ニ就テハ曲直分明、武門ニ於テ不可遁ノ先習候間、万一前ノ濱ヘ渡来候ハ、正義之論ヲ以テ致応接、彼ヲシテ令屈伏候ハ必定ニ存候得共、自然兵端ヲ相開候訳ニモ候ハ、強暴之極ト可申候得共、

三郎様　御趣意奉汲受、天下国家之為メ粉骨砕身・夷賊誅伐有之候様頼存候、就テハ手当向相掛候儀共、猶又於役場手厚ク尽評議候様可有之候、且又一同相心得候訳トハ存候得共、攻守之命令相加候迄ハ如何程之軍艦渡来候共、少シモ動揺不致候儀専要存候事、

〔頭註〕〔日紙スベシ〕
三月　日

## 二五九　久光公御帰国

三月十五日、此度ハ参朝セス御帰国ノ旨仰出サレシカハ、従駕ノ輩驚愕、暫時御延日、形勢御覧アラン事ヲ言上セリト雖モ、御断決ノ事故、其旨従駕員ヘ布達セシニ、一同狼狽セリ、其時高崎佐太郎正風・同猪太郎五六両名モ今数日御滞京、天下ノ形勢御見定ノ上、御進退ヲ決セラレン事ヲ言上セシニ、　国父公仰ニ、言行ハレス策用ヒラレサル時ニ退クハ、古今ノ通義ナリ、豈ニ遅々タルベケンヤ、今日ノ形勢ハ到底治術ナキニ立到レリトノ御言ナリシ故、両名モ御洞見ノ卓絶ナル御決定ノ迅速ナルニ感シテ、再ヒ上言スル詞ナカリシト云フ、従駕ノ輩ハ未ダ荷物モ解カズ、其侭大坂ヘ運致シタリ、

## 二六〇　久光公兵庫御着ノ報大久保小松ニ報告

（城地移転ノ説）

三郎様益　御機嫌克兵庫御着船ニテ、猶御都合能被為御京着候半、恐悦御同慶奉存候、於御当地太守様奉始御子様方　御姫様方被為揃、益御機嫌克被為遊御座、御同然奉大慶候、兵庫　御着船ノ御左右以来、御模様不相分日々奉待兼候、

御着涯ノ御都合如何ノ御事ニ被為　在候哉、

御配慮ハ勿論、　尊公様方之御心配不一方御義ト、実ニ忘寝食奉親察候、何卒　御吉左右伏テ奉願候、何分ニモ這回ハ無御余義御申立ヲ以、御帰国被為　在候処、呉々ニモ奉念願候事ニ御座候、志々目出立后御当地何モ相変候儀無御座、下人気モ別テ静謐、先々大幸無此上御儀ニ奉存候、御仁政被施置候故、御台場ノ御修築モ、上・下・西田町ヨリ男女日々五百人余ツヽ御加勢、夫ト唱ヘ夫立イタシ候間、不日シテ成就相成、実ニ難有御事ニ御座候、諸御役場之処先ツハ格別弛張之廉モ無御座候得共、別段　御立后跡戻リ候ト申程ニモ不至、仕合之至御座候、尚此上之処、折角御趣意不立戻候様ニト、昼夜心痛仕候事ニ御座候、大略之形行ハ中山方ヘモ申越候間、何卒御聞取可被下奉頼上候、

一御立前承知仕居候國分新城御築立之義、

太守様　御先越ニテ被遊　御覧、大抵御治定相成、地面引并シ方トシテ両日中郡奉行被差越候賦ニ御座候、

御屋形御造立之処ハ未画図面モ成就不相成候得共、先ツ大抵之処ニテ新御造立有之、夫々華倉〔鹿児島市〕御茶屋御引直相成候ヘハ、十分之　御一殿出来可相成候、現ニ地形彼是見分イタシ候処、実ニ当時世ニヲヒテハ、寸時モ夫成被召置候場所ニ無之、要害堅固ハ勿論、海岸一里程ヲ隔候上、一里位之浅瀬有之、仮令数千之軍艦寄来候共、枕ヲ高フスル之要地ニテ、東南之眺望ハ比競スルニ類ナク、自然ニ陽気ヲ含蓄イタシ、実ニ無申分候間、屹度御手被召附度義ト奉存候、就テハ

御姫様方御迦場ノ義、蒲生〔姶良郡〕地頭仮屋ノ方ヘ、中村御茶屋御引直之筋

思召モ奉伺居候処、國分地頭仮屋之義、一体手広ニモ有之候上、右通之場所柄、殊ニ地頭仮屋御囲続キニ、往古

龍伯〔義久〕様ノ御殿跡有之、犬追物場之古地堂外聖堂跡ナト相残リ、石垣桝形等之惣構ヘ其侭手ヲ下サスシテ被相用候間、江戸澁谷　御殿廻リニテモ御引直有之候得ハ、忽然一宇之御城下出来イタシ候、府ヲ移ス事ハ中々不容易義ニテ、急々御取起シハ不相叶候得共、只今ヨリ漸ヲ以成ス之御賦ニテ御手相附度、頻ニ所願ニ御座候、左候得ハ中村御茶屋ノ義モ、國分地頭仮屋ノ方ニ被引移候方、別テ之御良計、且ハ國分・蒲生一時ニ御手相附候義モ、余計之御入価ニモ被為及、当時ハ不可欠之事トハ乍申、四方ニ土木之費モ起リ候間、先ツ右通國分之方ニ相円リ候ハヽ、寸分ニテモ可然訳ト奉存候、

御姫様方御迦シ被為在候テモ十分ノ要害相備リ、旁可然其筋ニ

太守様

思召モ　御治定被為在候テ、中村御茶屋御引直之処ニ御手相附申候間、

尊公様宜鋪御汲取被下御執成被為在候処、平ニ奉頼上候、シカシ別段

御深慮モ被為在候御事ニモ御座候ハヽ、早々御申越被下候処、伏テ奉願候、跡越ニモ可相成候得共、蒲生之方ヘ御手相附候処ハ、如何様共致方可有御座奉存候、何分ニモ

思召御伺被下候処宜鋪奉頼上候、

一文武両館御造立モ追々相促シ、随分不遠成就可相成奉存候、

一御帰国ノ節、細島〔宮崎県〕

御着船ニテ、日州筋
御通行　御着城ノ段被　仰出候御趣奉承知候形行、中山方へ申越候ニ付、是亦　御聞取可被下候、
右今日飛脚被差立、大略之形行奉申上越度、尚亦委曲ノ次第ハ、蒸気船便ヨリ申上越候様可仕候ニ付、左様思召被下度奉願候、以上、

三月廿四日　　大久保一蔵

帯刀様　〔大久保利通書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

## 二六一　齊彬公御贈官口宣着麗布達

齊彬公御贈官被　仰出候付、御頂戴ノ口宣明後朔日五時、〔鹿児島市〕福昌寺へ御到来ノ筈候、依之当日火用人猶以可入念候、
一来月三日五時ヨリ大鐘時迄、諸士面々へ拝礼被　仰付候、右ノ通被申渡候様、大番頭・御小姓与番頭へ可申渡候、

三月廿九日　　但馬川上

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編
文久三年四月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料〔紙数九九枚〕」の記載あり〕

目録

京師飛報久光公御帰国ノ急報
神奈川新聞
長崎ノ形勢報告
五ケ所砲台大操練
梵鐘ヲ琉球通寶資料ニ充ツ
小松帯刀大久保一蔵ヘ与ル書
長崎在勤中原猶介四月三日ヲ以テ政庁ヘ報告
台場御手当之次第
御旗本備御手当之次第
〔御先手備御手当之次第〕
御城下守衛御手当向之次第
〔三郎様御旗本備御手当之次第〕
水軍隊御手当之次第
花倉御茶屋立添
各所砲台及ヒ水軍操練
對州警戒達書
八幡奉行等ノ形況報告
久光公御帰国太守公御迎行
島津又之進元服並雑報
三郎様御着城
久光公御着城
藩庁其他諸局出退時刻変換
久光公先塋御参詣
蓑田傳兵衛大久保一蔵江書翰二通
〔攘夷拒絶ノ厳令〕
谷村小吉書翰
小松帯刀家族ヘ与ル書翰

舶来大小砲買入ノ為メ派出
吉野村牧場馬追及ヒ太鼓踊其外牧場由来
英夷申立切迫云々達示
琉球国在留仏人退去届書
大操練御出馬
各所砲台大操練
柴山良助山内一郎ニ送ル書翰
前ノ濱ヘ英国船襲来後ノ手当
新ニ買入レタル船名
麻疹大流行
松平修理大夫様ヨリ伺書
道島正亮紀事抄
大坂物価報告
〔外夷拒絶ノ大令布告ニ備ヘル軍賦条令〕

## 二六二　京師飛報（久光公御帰国ノ急報）

四月朔日布達、昨廿九日京師飛報到達、　国父公不日御下国アラセラルヘキ旨告ケ来レリ、布達左ノ如シ、三郎様御儀、此節　御上京、即日近衛様ヘ御参殿、公武御重職之御方々様御逢御用談被為在、中三日御滞在ニテ被遊　御下向候、勿論被遊　御建白候　御趣意モ被為在候得共、既ニ攘夷　御決定、猶英夷三ケ条申立之趣専ラ御国ヘ相拘リ候儀ニテ、再三　御召留之　御内命被遊　御承知候得共、右様無御拠筋被　仰立、不被為得止早々被遊　御下向候段申来候条、此旨早々向々ヘ可申渡候、

四月朔日　　式部川上久美

## 二六三　神奈川新聞

於日本神奈川千八百六十三年第五月十三日　我ノ文久三年三月廿六日新聞紙

一遠国ノ人ニ日本新聞ヲ巨細ニ記載セハ、数葉之紙数ヲ可得、然共今近邇之人ニ示サレ、為ニ短章ヲ以テ之ヲ述ブ、

一今日本政府至苦ノ中ニアリ、如何トナレハ日本人無故ニ外国人ニ向ヒ非常凶悪ヲナセトモ、其政府ニ於テ感嘆痛哭之無意、不当之所置成故ニ愁ヘキノ理ナリ、

一種々ノ凶悪ヲ重ヌル毎々、只其愁嘆ヨリ一二ノ説ヲ述レ共、是日本於政府襲感ノ意ナク、暴悪人ヲ見逃シ置、其実審セサレハ茲其情実ヲ挙ス、蓋此国ヘ親睦ヲ結フ

各国政府ハ、此国民ヲ親切ニ所置セシニ、於レ此政府ハ之ニ反シ不規則成而已ナラズ、殊ニ外国人ニ向ヒ種々残刻(酷)ナル凶悪ヲナセトモ、之ヲ忍コト久シフス、

一日本之好キ巧智アル政府ニハ、万事温和ニ商議スルヲ善トナシ来レ共、是ハ大ナル過ナリ、我等慮ルニ日本ノ如キ頑固ナル国ハ何国ニモ不非ヘシ、

一此国居留スル外国人ハ、生命ヲ危急(アカ)ヲ忘レテ憤激ヲ含メル事既ニ久シク、日本ヨリ厳強ニ敵対スルヲ種々ノ事ニ於テ観察シ、之ニ因テ其民人ノ為ニ備防ノ術ヲナサントス、蓋シ英国政府、於日本其前非ヲ自ラ悔シメント欲スルコトヲ信実ニ所置ス、

一六月一週ハ、一七日ニ夥敷海軍ヲ帥テ入津ノ異国海軍惣督カ、日本ノ英民ヲ殺害シタル故ニ依テ、女王殿下之命ヲ受、日本政府ニ其価ヲ望コトヲ談スルニ及也、

一英国ヨリ去月六日(我二月十九日)前条之旨ヲ江戸ニ告達シ、夫ヨリ廿日ノ間ヲ決答ノ為ニ準許セリ、○殆ント期限ニ至リ、英ノ公使官コロネル(人名)ニール(Colonel Neale)(陸軍大佐)日本政府ノ使者竹本丹州(甲斐守、大目付カ)(正)来テ、定極タル期限ヲ延引スルコトヲ求ム、是ニ於テ又十五日ヲ許セリ、○此時日本人、或ハ江戸ヨリ神奈川其他各所ヘ、日本政府ヨリ貧賤ノ者ノ為ニ、近邑ニ仮小家ヲ設ケテ之ヲ救ハシメントス、○軍卒ハ其自得セル所ノ武器ヲ江戸ニ運ヘリ、就中全備セル具足ヲ備フ、尤是ハ遠国ヨリ運輸セシト云々、○江戸城下所々ニ堡塞(壘)ヲ設ケテ礮ヲ備ヘシト云ヲ聞ケ共、未タ実否ヲ詳ニセス、

一日本三月十四日ヨリ十六七日迄ノ間ニ、当地之動揺尤モ甚シク、各々家材ヲ運輸シテ近村ニ退居セリ、従テ市中一時寥落貿易断然セリ、或ハ日本之説ニ、此寥落ハ久カラス本ニ復スト言ヘリ、○此等ヲ下ニヨリテ、当日本ヨリ不意ニ侵襲アランカトモ疑ヒ、暫ク其事ノ実ヲ探索スルニ、全ク政府ノ令ヲ受ケ然ルナリト云ヘリ、○外国人ニ使ハレシ奴僕ハ速ニ其館ヲ退去シ、如何トナレハ、其国刑ヲ受ケンカト頻リニ疑惑ヲナシ、彼等其傭銭ノ残リヲ求メテ去ントス、○其頃又日本ヨリ日延ヲ請ハレシニ依テ、英モ又許諾セリ、則来ル日、来ル四月五日ヲ以テ期限トス、○英国政府ヨリ目的トシテ商議ヲ為セル日本大君ハ、京師ニ赴ク途中ニアリシ故、之ニ往復シ、且ツ江戸ニ帰城センニ費スベキ時日有ト云コトヲ名目トス、数度ノ期限ヲ延ル為メニハ、自在ナルヘクト、我ニ於テモ疾ク知覚セリ、

一諸人我等ニ告クルニ、日本大諸侯今頻リニ軍旅ノ用意ヲ成シ、且外国ト和親ヲ絶ントス、大諸侯等日本皇帝輦下ニ参集シテ、外国人ヲ駆逐セント密謀ヲナセリト云フ、

一或ハ日本皇帝外国人ヲ駆逐セントテ、自ラ　輦下ノ兵ヲツノラント欲スルト云々、○又聞大諸侯皇帝ヲ逢迎シテ事ヲ企テハ、大君モ之ニ敵スルコト不能、若シ之レニ敵スレハ、諸侯一時ニ蜂起シテ日本忽チ大崩セント云フ、又方今京師ニ於テ、皇帝ニ奸謀ヲ強ク顕シ、大君之権威ヲ争奪セント欲スル数員ノ大諸侯アリト云々、○此已下ニ記スル者ハ日本政府ニ背キ、皇帝ノ政ヲ扶助セント欲ル所之諸侯ナリ、

島津修理大夫（茂久）　薩州兵員七万七千八百

細川越中守（慶順）　肥後仝　五万五千

黒田美濃守（斉溥）　筑前仝　三万五千

毛利大膳大夫（慶親）　長州仝　三万五千

鍋嶋肥前守（直大）　肥前仝　三万五千

藤堂和泉守（高猷）　伊勢仝　三万五千

蜂須賀阿波守（斉裕）　阿州仝　三万五千

水戸　兵員三万五千

総計三十五万九千八百員、猶此他右之党類数多アリ、「（朱）（此ニ記ス兵数ハ、石高ニ依リテ記シタルモノナラン、想像説トモ云フベシ）」

一奥洲ハ大邦ニテ、其中ニ廿三諸侯アリ、

一加州ハ富国ニシテ税入大君ニ次クト云々、疑クハ我等カ聞如キハアラサルベシ、此度モ又日本皇帝ニ敬服セリト云々、

一方今政府ヲ旧ニ依テ政府ト唱フル外国ノ貿易モ又永続スベシ、然トモ今此政府之何レニ属スル哉モ不知、又国乱ヲ避ルコト成難シト云フ、

横浜新聞紙館文久三年四月朔日コサー人名記之、

品川英輔訳稿

## 二六四　長崎ノ形勢報告

四月二日長崎報知着麗、曰、攘夷鎖港決定セラレ、不日発布アルヘシトノ趣、外国人共ニモ洩レ聞キ、或ハ幕府ヨリ内達ノ旨アリシ由ニテ、神奈河・長崎イツレモ商法ヲ停止シ、随テ内外人共ニ、悒々トシテ戦争近キニアリト、資財ヲ片付ケ避逃ノ準備ヲナシ、布令ヲ待ツノ形況ナリ、斯クノ如クナルニ依リ、幕府ヨリ和蘭人ヘ汽船購求代弁償ノ為メ、銅五十余萬斤長崎会所ニ貯ヘ在リシヲ、本藩琉球通寶鋳造用ニ悉皆買取ラレ、不日廻漕ノ旨告ケ来レリ、斯ノ如ク切迫ノ形況ナルカ故、必ス開戦ノ時機ナラント云「(鋳銭局日記)」

## 二六五　五ケ所砲台大操練

四月二日・・遽ニ五ケ所砲台又ハ汽船ヨリ海陸攻守ノ操練ヲ催サレ、　太守公ニハ申剋頃ヨリ御出馬、親シク指揮セラ・・海陸一同大小ノ砲声、百雷ノ轟クモ斯クコソト思ハレタリ、畢テ水軍兵ノ操練御覧アリテ、日没ノ頃御帰城アラセラレタリ、○本日ノ操練ハ卒然ノ催ニテ、兵士出頭ニ先ンシ御出馬アラセラレ、兵士ハ伍什ノ列ヲ立テ拝謁ノ式アリ、・・畢テ国老川上式部ヲ以テ、本日遽ニ・・・催サレシニ、各速ニ出頭御満足ナリ、然リト雖モ砲発ノ式未タ不練ノ者モアリ、尚研究スヘシトノ趣達セラレタリ、不練トハ、沖中ノ標的ニ向テ破裂弾等着発ノ度適否アルヲ、不練ト達セラレタル者ナリ、是ヨリシテ兵士等一層奮発、・弾着ノ適度ヲ精究セリ、

## 二六六　梵鐘ヲ琉球通寶資料ニ充ツ

四月三日、梵鐘大小二百八十七口琉球通寶鋳造資料ニ充ラル旨達セラレ、本日ヨリ毀滅ニ着手セリ、其他・・・銅製仏具ノ類数万ノ斤数ニ及ヒ、許多ノ通貨ヲ製造セリ、

## 二六七　小松帯刀大久保一蔵ヘ与ル書

御中途ヨリ

大久保一蔵殿　　小松帯刀

「

晦日御仕出之飛脚、今四ツ時分美々津(日州)駅辺ニテ致着、
御問合之趣致承知候、先以
上様御機嫌克被為入恐悦御同慶奉存候、於此方モ
上様御機嫌克、今朝五ツ時細島御立ニテ、津野江八ツ
時分被遊　御光着、尚御機嫌克被遊御止宿、恐悦御同
慶奉存候、然ハ新城(国分郷)之義トモ被仰越趣則申上候処、最
早両日中ニハ　御下向之事ニ付、其上ニ万端御下知可
被遊トノ　御沙汰ニ御座候、御供方并御鉄砲等被差越、
旁御都合ニ御座候、國分ニテ御面会之上ト細事不能御
答候、此段御答迄早々申越候、以上、

四月三日　　小松帯刀

大久保一蔵様

別啓、愈御堅勝被成御勤務珍重奉存候、二ニ小子ニ
モ無異御供相勤申候間御休意可被下候、御細書之趣
忝奉存候、巨細ニ御答申上筈御座候得トモ、モハヤ
不日ニ御逢申上候付、其折ト申残候、サシテ差急キ
申上程之事モ無御座候、取イソキ居公私取交乱筆旁
御高免可被下候、「(朱)(新城移転ハ斉彬公安政五年(マヽ)月和
蘭人ノ上言ノ部参照)」

〔小松帯刀書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

## 二六八　長崎在勤中原猶介四月三日ヲ以テ政庁ヘ報告

前文略ス、当港在留ノ外国人、攘掃拒絶ノ
勅諚、幕府奉命各藩ヘ令シ、手当頻ナル旨夷人共伝承致
シ、残ラス支那地マテ曳取リノ心得ニテ、追々船都合
ヲ以テ、商品又ハ荷物積送リ、或ハ商法取引・・・・
混雑一方ナラス、稲佐製鉄所雇入ノ夷人ハ、幕府ヨリ
内達・・帰国致シ候者モ有之、残リ居候者ハ荷物取片
付船ニ積込、夜分ニハ自国軍艦ヘ致宿泊候、軍艦ハ各
国共昼夜蒸罐ニ火ヲ入レ、大砲ニハ装薬致シ、直ニ放
発ノ手順モ致居候位ノ物騒ニ成立申候、殊ニ近頃浪人
体ノ者多数入リ来リ、或ハ長・土人モ其中ニ交リ居、
攘夷ノ手初ヲナサント唱居候モ有之、夫故奉行ニハ甚
痛心致サレ候得共、手ニ及ヒ兼、却テ暴徒ノ勢強ク、
実ニ幕威ノ衰タルコト意外ニ御座候、外国人モ其趣承
知シ、両三日此方日々各国ノ軍艦入港、只今碇泊ハ英
ノ軍艦二艘、佛国二艘、和蘭一艘、米国二艘皆プレカ(freegat(蘭))
frigate(英))ットニテ、日々操練怠ナク、今朝ハ魯国大軍艦二艘入
津、各国軍艦ヨリ祝砲十二発ツヽ、一時ハ山岳モ崩ル

ヽカ如ク、当港中暫時烟霧ニテ御座候、夫ヨリ魯艦ハ放発操練ヲナシ、一人モ上陸ハ不致何カ疑ヲ懐キタル様子ニ見受ラレ申候、将又先日ヨリ市中ハ皆空家同〔然〕前ニテ、商法モ一切止メ、老幼婦女ハ近村ヘ避ケ去リ、男子ノミ家ニアリテ、スワト云バ、直ニ立チ退キノ手当致居候、其上米穀払底、上下大ニ困窮罷在、売米ハ一切無之、夫故、土人ハ島原〔長崎県〕又ハ諫早〔同上〕・佐賀等ヘ立去リ、誠ニ淋シキ事ニ御座候、浪人体ノ輩ハ人家ニ押入リ、盗或ハ婦女ヲ劫シ候等ノ次第モ有之由、天草〔熊本県〕辺ノ無頼人共モ加居候由、何分長・土人ノ暴悪ハ言語ニ述ヘ尽サレ申サス、又攘夷モ弥近日御下知ニナルトノ事ニテ、外国人共ニハアザ笑ヒ居候、知人ノ夷人申ニハ、長崎ヤ下ノ闕位ノ大砲ハ少シモ恐ルヽニ足ラス、戦争ヲ開キタル上ハ、立派ニ分捕シテ見スヘシナト申シ居候、又軍艦ノ大砲ハ近代〔宋〕発明ノ長弾〔アルムストーン砲〕ノミニテ、是迄ノ円弾ハ一ツモ無之候、小銃モ同様ニテ遠町ニ達シ、先年来ノ仕掛トハ大ニ相違ニ御座候、生麦事件ハ御模様如何ノ向キニ相成候哉、当地ノ形勢ニテハ容易ナラサル勢ニ御座候、又京都ノ御模様ハ、彼我ノ弁識ニ疎キ様ニ存候、兎角一変事有之候上ナラデハ、御目ハ覚メ不申カト奉存候、尚追々探偵ノ事実可申上候云々、

「〔宋〕(事実遺漏ナシ)」

## 二六九　台場御手当之次第

文久三年癸亥

海陸ノ軍備逐次改革セラレ、弾薬運搬ノ準備ハ殊ニ枢要ナルカ故、前キニ定ムル処アリト雖モ、尚ホ担当ノ局員議定上申左ノ如シ、

台場御手当之次第

火薬箪笥四荷

持夫八人

但

壱荷二人持

右大門口〔鹿児島市〕御台場据付大砲壱挺ニ付、三拾発宛入付

右同拾五荷

持夫三拾人

但

壱荷二人持

高張挑灯二張

弓張挑灯拾二張

蠟燭四拾二挺

但

壱張ニ付三挺賦

目印昇旗二本

右大門口台場内、并新射場一番目射場鼠土蔵二軒ヘ銘々火薬簞笥入レ付ニテ、御格護相成、兼テ夫々御手当被仰付置候玉薬役ヘ、蔵鑰迄モ相渡置候様、左候テ持夫之儀ハ、近在諸所ヘ御手当相成居候得共、現事急変之節、速々夫持旁間後ノ懸念モ有之候間、火消方郷中（火消方郷中トハ、町寺門前者、或ハ小番・新番・御小姓与等家来下人、城下市街其他住居ノ輩区域ヲ定メ団結シ、吉凶共ニ互ニ相助ケル一ノ旧慣アリ、風水災等ニ方リテ仕役スル事トセリ、之ヲ郷中中間ト通唱ス、此ヲ郷中ニオトモ唱フ、此輩一種ノ協議法ヲ設ケタリ、中ニモ無常講ト唱ヘ、其連中ニ死亡或ハ疾病其他非常ノ災難忠苦ニ罹レルトキハ、常ニ積金ノ設アリテ之ヲ出シテ其費途ニ充テ、或ハ更ニ課出救助シ、或ハ葬埋ニハ其連中従事ス、実ニ民間ノ良法ナリ、或ハ連中カ神社仏閣ニ参詣スルアリ、則チ例歳五月五日国分八幡社ヘ参拝ス、其時ハ各区標旗ヲ携ヘ一群ヲ為ノ一種ノ謡歌ヲ唱フ、之ヲ御田歌又御田植歌トモ云フ、而シテ社有ノ田ニ稲苗ヲ挿ス等ノ旧式ヲ行フ、其行粧最モ壮観ナリ、麗府中此区域数十アリ、因テ事アルニ方リテ使役スルモ大ニ弁ナリ、茲ヲ以テ近代操練ノ時、火薬運搬或ハ大砲運転ニ使役ス、此輩平常諸職工ヲ以テ活計ヲナセシ故カ、役ニハ尤モ勝レタルノミナラス、雑持スルニ協同ノ規則アルカ故、其頭立タル者ニ命シ、或ハ懲罰スルニ宜シ、又町夫トハ上・下町ニ居住ノ輩、常ニ海岸其他ニ於テ、力役ヲ以テ生業トシ、中ニモ舟船積荷ノ揚卸ヲナノ、或ハ脚夫ノ移ヲナス、此連中モ一種協同法アリ、藩庁営繕方等臨時多数ノ役夫ヲ要スル時ハ、之ヲ備役スル事トス）、并町夫之内ヨリ、兼テ御手当被仰付置祇園洲・大門口相図砲次第、早速御蔵元ヘ駈ケ付、玉薬役差図ヲ受ケ相勤候様、被仰付度吟味仕候、

右装薬運送方之節ハ、一緒ニ繰出相成、甚致混雑人数円リ兼可申候間、昼ハ何方台場大砲装薬、又ハ何方御備組装薬運送ト、銘々目印昇・旗相用、夜分ハ同様之目印高張挑灯相用候様被仰付度吟味仕候、

火薬簞笥拾三荷

持夫二拾六人

但

壱荷二人持

右新波戸台場据付、大砲壱挺ニ付、装薬三拾発宛入レ付、

右同拾五荷

持夫三拾人

但

壱荷二人持

右祇園洲台場前条同断、

高張挑灯二張

弓張挑灯拾壱張

蠟燭三拾九挺

但

壱張ニ付三挺賦
目印昇・旗二本
右祇園洲台場内土蔵二軒へ、銘々火薬箪笥入レ付ニテ、御格護ニテ前条同様、
右御蔵ヨリ運送夫之儀、前条同断、
火薬箪笥四荷
持夫八人
但
壱荷二人持
右大門口台場据付、大砲壱挺ニ付、装薬二拾発宛入付、
右同拾五荷
持夫三拾人
但
壱荷二人持
右辨天波戸台場据付同断、
右同拾三荷
持夫弐拾六人
但
壱荷二人持
右新波戸台場同断、
右同拾荷
持夫弐拾人
但
壱荷二人持
右祇園洲台場同断、
高張挑灯四張
弓張挑灯二拾張
蠟燭七拾二挺
但
壱張ニ付三挺賦
目印昇・旗四本
右四ケ所台場据付、大砲装薬、右之通銘々火薬箪笥入付ニテ、坂元村(鹿児島市)御蔵へ御格護相成居、急変之節ハ早速拘リ役々出張致シ、無滞運送為致可申候、

二七〇　御旗本備御手当之次第左之通リ

装薬玉付八匁紙嚢四万三千八百
但
壱発分二匁壱分宛

右同四匁紙嚢四万三千八百

但

壱発分ニ付壱匁宛

惣人数四百三拾八人

什長并昇預・太鼓役戦兵込ミ一人ニ付二百発宛

右之内

火薬簞笥三拾六荷

但

銘々雨覆相添

玉付紙嚢三万六千発

但

戦兵三百六拾人分

壱荷ニ付千発宛

但

拾人分

壱人ニ付百発宛

右同拾二荷

但書同断

玉付紙嚢七千八百

但

什長・昇預・太鼓役七拾八人分

壱荷ニ付六百五拾発宛

壱人ニ付百発宛

二口火薬簞笥四拾八荷

持夫四拾八人

但

壱荷壱人持

右之通、坂元村御蔵へ御格護相成居、急変之節ハ御定之集場へ足軽才領ニテ致運送、玉薬役へ引渡候賦、

莚包箱荷四拾八

玉付紙嚢四万三千八百

但

壱箱ニ付九百拾三発宛

貫目九貫目位

小荷駄二拾四匹

壱匹ニ二箱負、貫目拾八貫目負

馬桐油二拾四枚

細引四拾八筋

弓張挑灯三拾六張

高張挑灯壱張

目印昇旗壱本
蠟燭百壱挺〔拾脱カ〕
但
壱張ニ付三挺賦
右之通、坂元村御蔵へ兼テ荷作仕調、御格護相成居、
馬負ニテ前条同断、
二封度野戦砲装薬千六百発
但
紙嚢入付
壱発ニ付六拾目宛
二封度野戦砲八挺
但
壱挺ニ付二百発宛
火薬箪笥拾六荷
但
銘々雨覆相添
壱荷ニ付入付品左之通、
装薬百発宛
数玉二拾発宛
実弾二拾発宛
急火管百拾宛
持夫三拾二人
但
二人持
弓張挑灯八張
蠟燭二十四挺
但
壱張ニ付三挺宛
右在持夫ニテ前条同断、

## 二七一　御先手備御手当之次第

八匁玉付紙嚢四万三千八百
但
壱発ニ付装薬三匁宛
四匁玉付右同四万三千八百
但
壱発ニ付二匁宛
惣人数四百五十人
但
什長・戦兵・昇預・太鼓役込ル

壱人ニ付二百発宛
右之内
火薬箪笥七荷
但
銘々雨覆相添
玉付紙嚢七千三百
但
戦兵・什長其外七拾三人分
壱人ニ付百発宛
持夫七人
壱荷壱人持
莚包箱荷八ツ
但
壱匹二箱負
玉付紙嚢七千三〔百脱カ〕
但
壱箱九百拾二発
貫目九貫目位
小荷駄四匹
壱匹二箱負

壱匹ニ付拾八貫目負
目印昇旗壱本
馬桐油四枚
細引八筋
高張挑灯壱張
弓張挑灯五張
蠟燭拾八挺
但
壱張ニ付三挺賦
右前条同断ニテ、祇園洲六番組御手当人数集場へ、
足軽才領付ニテ致運送、玉薬役へ引渡候賦、
火薬箪笥七荷
但
銘々雨覆相添
玉付紙嚢七千三百
什長・戦兵其外七拾三人分
壱人ニ付百発宛
持夫七人
壱荷一人持
莚包箱荷八ツ

但
壱匹ニ付弐箱負
玉付紙嚢七千三百
但
壱箱ニ付九百拾二発入
貫目九貫目程
小荷駄四匹
但
壱匹ニ付二箱負
壱匹ニ付拾八貫目負
馬桐油四枚
細引八筋
高張挑灯壱張
弓張挑灯五張
蠟燭拾八挺
但
壱張ニ付三挺賦
目印昇旗壱本
右前条同断ニテ、新波戸五番組御手当人数集リ場へ
同断、

火薬簞笥拾四荷
但
銘々雨覆相添
玉付紙嚢壱万四千六百
但
戦兵・什長其外百四拾四人分
壱人ニ付百発宛
持夫拾四人
壱荷壱人持
莚包箱荷拾六
玉付紙嚢壱万四千六百
壱箱ニ付九百拾二発
貫目九貫目程
小荷駄八匹
壱匹ニ付二箱負
壱匹拾八貫目負
玉付紙嚢七千三百
但
壱箱ニ付九百拾二発
貫目九貫目程

小荷駄四匹
壱匹二箱負
壱匹拾八貫目負
馬桐油四枚
細引八筋
高張挑灯壱張
弓張挑灯五張
蠟燭拾八挺
但
壱張ニ付三挺賦
目印昇旗壱本
右前条同断ニテ、大門口御手当三番組人数集場へ同断、
火薬箪笥七荷
但
銘々雨覆相添
馬桐油八枚
細引拾六筋
高張挑灯壱張
弓張挑灯拾張
蠟燭三拾三挺
但
壱張ニ付三挺賦
目印昇旗壱本
右前条同断ニテ、辨天波戸壱番組・二番組御手当人数集場へ同断、
火薬箪笥七荷
但
銘々雨覆相添
玉付紙嚢七千三百
但
戦兵・什長其外七拾三人分
壱人ニ付百発宛
持夫七人
壱荷壱人持
莚包箱荷八ツ
玉付紙嚢七千三百
戦兵・什長其外七拾三人分
壱人ニ付百発宛
持夫七人

壱荷壱人持
莚包箱荷八ツ
玉付紙嚢七千三百
但
壱箱ニ付九百二拾発
貫目九貫目程
小荷駄四匹
壱匹二貫目負
壱匹ニ付拾八貫目
馬桐油四枚
細引八筋
高張挑灯壱張
弓張挑灯五張
蠟燭拾八挺
但
壱張ニ付三挺賦
目印昇旗壱本
右前条同断ニテ、調練場四番組御手当人数集場へ同断、

二七二　御城下守衛御手当向之次第左之通

八匁筒紙嚢四万三千八百
但
装薬玉付壱発ニ付三匁宛
四匁右同四万三千八百
但
〔ママ〕
前前条同断
惣人数四百三拾八人
但
什長・昇旗・太鼓役・戦兵等込ル、壱人ニ付二百発宛、
右之内
火薬箪笥三拾六荷
但
銘々雨覆相添
玉付紙嚢三万六千
但
戦兵三百六拾人分
壱荷ニ付千発宛

但
拾人分
壱人ニ付百発宛
右同拾二荷
但
前条同断
玉付紙嚢七千八百
但
什長・昇預・太鼓役等七拾八人分
壱荷ニ付六百五拾発宛
壱人ニ付百発宛
二口合火薬箪笥四拾八荷
持夫四拾八人
但
壱荷壱人持
右之通、坂元村御蔵へ御格護相成居、急変之節ハ、
在夫持ニテ、御定之場所へ足軽才領付ヲ以致運送、
玉薬役へ引渡候賦、
莚包箱荷四拾八
玉付紙嚢四万三千八百

但
壱荷ニ付九百拾三発宛
貫目九貫目程
小荷駄二拾四匹
壱匹二箱負
壱匹拾八貫目負
馬桐油二拾四枚
細引四拾八筋
高張挑灯壱張
弓張挑灯三拾六張
蠟燭百拾壱挺
但
壱張ニ付三挺賦
目印昇旗壱本
右之通、坂元村御蔵へ御格護相成居、馬付ニテ前条
同断、
二封度砲紙嚢千六百発
但
壱発ニ付六拾目宛
紙嚢入レ付

二封度野戦砲八挺
但
壱挺ニ付二百発宛
銘々雨覆相添
壱荷入レ付品左之通
装薬百発宛
数玉二拾発宛
実弾二拾発宛
急火管百拾宛
急火縄二拾本宛
持夫三拾二人
壱荷二人持
弓張挑灯八張
蠟燭二拾四挺
但
壱張ニ付三挺宛
右在持夫ニテ前条同断、

**二七三** 三郎様国父公御旗本備御手当之次第

八匁筒紙嚢四万三千八百
但
装薬玉付壱発ニ付三匁宛
四匁右同四万三千八百
但
同断壱発ニ付二匁宛
惣人数四百三拾人
什長・昇預・太鼓役・戦兵等込ル
右之内
火薬箪笥三拾六荷
但
銘々雨覆相添
玉付紙嚢三万六千
但
戦兵三百六拾人分
壱荷ニ付千発宛
但
拾人分
壱人ニ付百発宛
右同拾二荷
但

前条同断

玉付紙嚢七千八百

但

什長・昇預・太鼓役其外七拾八人分

壱荷ニ付六百五拾発宛

壱人ニ付百発宛

持夫四拾八人

但

壱荷壱人持

右之通、坂元村御蔵へ御格護相成居、急変之節ハ在夫持ニテ、御定之集場へ足軽才領付ニテ致運送、玉薬役等へ引渡候賦、

莚包箱荷四拾八

玉付紙嚢四万三千八百

但

壱箱ニ付九百拾三発宛

貫目九貫目

小荷駄二拾四匹

壱匹二箱負

壱匹ニ付拾八貫目程

高張挑灯壱張

弓張挑灯三拾六張

蠟燭百拾壱挺

但

壱張ニ付三挺賦

馬桐油二拾四枚

細引四拾八筋

目印昇旗壱本

右之通、坂元村御蔵へ御格護相成居、馬付ヲ以前条同断、

二封度砲装薬千六百発

但

紙嚢入付

壱発ニ付六拾目宛

二封度野戦砲八挺

壱挺ニ付二百発宛

火薬箪笥拾六荷

壱荷入付品左之通

装薬百発宛

数玉二拾発宛

実弾二拾発宛
急火管百拾
急火縄二拾本
持夫三拾二人
壱荷二人持
弓張挑灯八張
蠟燭二拾四挺
但
壱張ニ付三挺賦
右在持夫ニテ前条同断、

## 二七四　水軍隊御手当之次第

十二封度砲装薬百発
但
木綿嚢入
壱挺ニ付二拾発宛
銅管六拾
急火管七拾
急火縄拾五本
六封度装薬五拾発
但
同断
銅管六拾
自在砲右同百五拾発
但
前条同断
右之口薬四百五拾目
但
壱挺ニ付七拾五匁宛
合銃薬四百五拾斤四合五勺
火薬箪笥拾二荷
但
壱荷ニ付装薬弐拾五発宛
持夫二拾四人
但
壱荷二人持
高張挑灯壱張
弓張挑灯六張
蠟燭拾八挺
但

壱張ニ付三挺賦

目印昇旗壱本

右之通、坂元村御蔵へ御格護相成居、急変之節ハ物主ヨリ引合次第、在夫持ニテ引渡候賦、

両波戸台場大砲装薬津畑迄届之上、運漕船之儀ハ目印昇旗二本宛、上・下町年行司共へ兼テ引渡置、異船渡来之節ハ、御定之相図次第直様船二艘宛致手当、上町ハ新築地石燈籠下辺、下町ハ石燈籠下辺へ右目印旗相立、町役人壱人・水主二人宛乗付居、火薬坂元村御蔵等ヨリ津畑迄而(届カ)次第、右目印旗ヲ目当ニ致シ、早速積入無遅滞致運漕候様御手当相成居候間、此段御届申上置候、

惣合火薬箪笥三百二拾五荷

内

百八拾六荷壱人持

百三拾九荷二人持

惣合持夫四百六拾四人

内

百五拾八人、郷中又ハ町夫

外ニ

助夫三拾二人

右前条装薬繰出之節、在持夫ニテハ間後可罷成候間、御当地(御当地トハ鹿児島ヲ云)火消方郷中(前ニ註記ス)夫之内へ兼テ御手当被仰付置、急変之節ハ銘々申渡置候受持之御蔵元(ヘカ)ハ無遅滞駈付、夫々指図ヲ請ケ相勤候様被仰付置度、尤モ至其期無緩怠可相勤旨、組合ヲ以御受書為差出候様被仰付度、右様平常法令厳重無之候テハ、急変之時ニ至リ動揺混雑モ難計、右ニ付兼テ銘々へ鑑札相渡置人数相円メ、玉薬役ヨリ差引致弁達候様仕度、左候テ主人持(主人持トハ、小番・新番・御小姓組等家来下人ノ主人ヲ云フ)之儀ハ、当主ヨリ其訳証文為差出置度候、

但方限火消夫并町夫・在夫之儀モ同様、其支配ヨリ取締申付候様致度御座候、

右夫三百六人

外ニ

助夫四拾六人

右御城下四ケ所台場据付大砲、装薬壱挺ニ付三拾発宛ハ、台場近辺御蔵へ格護之賦候、余ハ坂元村御蔵へ御格護相成候間、持夫トシテ下伊敷村・坂元村・下田村・吉野村在夫之内へ兼テ御手当被仰付置、急変之節ハ早速右御蔵へ駈(ケカ)セ付候様被仰付度、尤モ遠

在へ御手当相成候テハ、急ニ相揃兼可申候間、右四ケ村在夫ハ、外御手当向ハ被差免、混(屹カ)ト右方へ被振向置度吟味仕候、

惣合小荷駄九拾六匹

外ニ

助馬四匹

右御備組大砲・小銃装薬前条箱入レ付之上、莚包ニテ坂元村御蔵・下田村・吉野村之内へ、兼テ御手当被仰付置、急変之節ハ早速右御蔵へ駈付候様被仰付置度吟味仕候、

惣合銃薬壱万三千弐百弐拾斤七匁五才

内

大砲装薬八千弐百五斤五合七匁五才

小銃装薬五千拾四斤半

惣合大砲五拾七挺

惣合装薬入箱百九拾弐

惣合木管千弐百弐拾九本

惣合急火管五千弐百七拾五

惣合急火縄千五百本

惣合銅管弐百六拾五(千弐脱カ)

惣合小銃千七百五拾弐挺

惣合高張挑灯拾七張

惣合弓張挑灯弐百拾七張

惣合蠟燭六百八拾壱挺

惣合目印昇旗拾七本

惣合馬桐油九拾六枚

惣合細引百九拾弐筋

右ハ此節御軍賦御変革ニ付、銃薬方詰持之御手当向評議仕候処、右通御治定相成度吟味仕、此段申上候、

以上、

亥四月三日

一往銃薬方掛

吉村才之丞

銃薬方掛見聞役

有川喜左衛門

磯永孫四郎

伊集院四郎

木場休五郎

伊勢仲左衛門

税所四郎左衛門

門司為兵衛
町田甚助
竹山正右衛門
寺師次右衛門

申出之通申付候条、早々致手当可申出候、

四月九日　式部川上久美

## 二七五　花倉御茶屋立添

四月四日達、花倉御茶屋ノ内二ノ丸ヘ御引直シノ外家々、國分御仮屋地ヘ此涯御引直シ相成候ニ付、取調申出候様御作事奉行ヘ達セラレタリ、又攘夷御決定不日発布ノ内達アリ・・、本藩ハ目前生麥事件ニ就テ・・・・・・・・・侵来スルハ必定ナルカ故、藩力ヲ尽シ争戦ノ御決定ナリ、依テ　姫君方御避乱ノ予備トシテ、花倉御茶屋内ノ家屋ヲ、國分郷御仮屋内ヘ移転ニ着手セラルヽ旨、上文ノ如ク其筋ヘ達セラレタリ、

## 二七六　各所砲台及ヒ水軍操練

四月四日、五ケ所砲台演習ヲ催サレ、・・・・・・・・・・・巳剋過ル頃　太守様御出城、下町辨天波戸砲台ニ入ラセラレ、各砲台及ヒ水軍演習御覧畢テ、　御親ラモ三十六斤・八十斤砲各四発信管等一切御調製試験セラレ、未ノ下刻頃御帰城アリタリ「（水軍トハ小舸ニ大砲一門ヲ備ヘ、突進攻撃ニ備ヘタルモノナリ、其構造ハ戦争ノ部ニ記ス）」

## 二七七　對州警戒達書

文久三亥年四月五日

水野和泉守（忠精、老中、山形藩主）旅宿ヘ銘々家来呼出シ、書付相渡之、

松平美濃守（黒田斉溥、筑前藩主）
松平修理大夫（島津茂久、薩州藩主）
有馬中務大夫（慶頼、久留米藩主）
細川越中守（慶順、熊本藩主）
立花飛騨守（鑑寛、柳河藩主）
松平肥前守（鍋島直大、佐賀藩主）
奥平大膳大夫（昌服、中津藩主）
小笠原大膳大夫（忠幹、小倉藩主）
中川修理大夫（久昭、岡藩主）
内藤備後守（政挙、延岡藩主）
松平主殿頭（忠和、島原藩主）

伊東右京大夫〔祐相、飫肥藩主〕
稲葉右京亮〔久通、臼杵藩主〕

對州表之儀ハ絶海ノ孤島ニ付、外夷襲来候儀モ有之節、援兵并糧食運送等相心得候様、松平大膳大夫〔毛利慶親〕・松浦肥前守〔平戸藩主〕・小笠原佐渡守〔長国、唐津藩主〕・松浦豊後守〔篤、平戸新田藩主〕被仰付候得共、九州ハ近海ノ儀ニ付相互ニ申合、応接可致心得ヲ以、兼テ手配可被致置候、

## 二七八　八幡奉行等ノ形況報告（在京本田）

一筆致啓上候、首夏暖気之気候、益御勇猛御精務奉恐慶候、随テ小生無異相勤候間、乍憚御放念可被下候、乍恐　三郎様益御機嫌能、疾ニ　御先着之筈御同然恐悦奉存上候、此節ハ暫時之御滞京ニテ残念之至、何事モ御推察可被下候、此般藤井良節着候付、当地之形勢猶又細詳御直問可被下候、尤　御発駕後差テ相変ル事モ無之、八幡行幸去ル四日ハ御延引被　仰出候処、又々来ル十一日ト被　仰出、上向色々評議被為在、警衛人数等モ厳重ニテ加茂ノ御次第トハ替リ居候、右モ子細有之事ニテ、良節ヨリイ細御聞取可被下候、実ニ御相談申上候テ、共ニイタシ度事柄共ハ折々有之候得共無致方、可也衆議之上独断モ仕居候、此末尚又心配之事件モ可有之欤ト、御案内通之不肖生痩馬ニ重荷、万事御推計可被下候、扨先比御頼申上候進藤式部ヨリノ谷山刀〔朱〕〔(波平)〕之調工、何卒御多用ノ央ナカラ、早目出来候様御頼申上候、私ニモ何廉厚意ニ被申呉候付、当分ハ差タル御用向モ双方ナカラ相少ク候得共、去年来懇意罷成候故、出来候ハヽ、私ヨリ進呈之心組ニ御座候付、宜御頼申上候、先ハ右御願旁御安否伺迄如是御座候、恐惶謹言、

京都
本田彌右衛門〔親雄〕

四月六日

大久保一蔵様〔利通〕〔朱〕〔(容八)〕

尚々当分税所子在京折々取会、大ニ旅愁ヲ慰申候、〔本田親雄書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

## 二七九　久光公御帰国太守公御迎行

四月八日　国父公御下国御迎ノ為メ、　太守公・・汽船ニ召サレ、國分郷マテ御奉迎アラセラレタリ、国父公ハ去三日、兵庫ヨリ汽船ニ召サレ、日州細島ヘ御直航、同所ヨリ御上陸、高岡筋御通行、来ル九日御

着城ノ予定ナルカ故、本日ヨリ御奉迎ノ為メ御出向アラセラレタリ、

## 二八〇　島津又之進元服並雑報

四月〔ママ〕日、　国父公ハ佐土原〔宮崎県〕へ一日御滞留、嫡子又之進忠亮殿元服加冠ノ式願ハレシトソ、○同家ハ代々元服加冠ノ式ハ、宗家ニ就テ執行セラレタルニ依リ、今回ハ幸同地御通行故、先規ノ如ク願ハレタリトソ、○佐土原城下釈迦堂ニ在リシ、伊東修理大夫義祐寄附ノ銘文アル大梵鐘一個、琉球通寶鋳造資料ノ為メ廻送ノ旨達セラレタリ（右ノ梵鐘ハ日隅薩三州太守修理大夫藤原朝臣義祐寄進云々ノ銘文ヲ記セリ）、○同時ニ穆佐〔宮崎県〕郷悟性寺ニ在ル大梵鐘一口、是モ同シク鋳銭資料ノ為メ廻漕セリ、其量目六百四十二斤、這ノ梵鐘今回鋳銭資料ニ破壊セシ数百個ノ中ニ、尤モ古製ニシテ形状モ尋常ノ梵鐘ニ異レリ、依テ銘文ヲ記シテ参考ニ供ス、

聞鐘声煩悩軽、智慧長菩提生、離地獄出火境、願成仏度衆生、伏願仏日重興国家、安寧兵革、頓息万民康泰、専祈右檀那福寿、増長宗門繁栄、伏冀当時食法両輪、共転真俗二諦〔諦カ〕同唱、時永徳元年辛酉黄鐘二十日、開基大檀那伊東藤原氏臣駿河祐満、日本国日向穆佐院洗心山悟性禅寺、開山住持沙門長僊置之、

ト記セリ・・・・永徳元年辛酉ヨリ文久三年癸亥ニ至テ、凡ソ四百八十三年ニ充ツ、今回鋳滅シタル大小数百口ノ中ニ、古製ノ第一トス、其他ハ寛永以降ノ製ニ罹レル者ナリキ、

## 二八一　三郎様御着城

三郎様御儀、明九日　御光着之筈被仰出候ヘ共、去ル五日高岡〔宮崎県〕へ被遊　御光着候処、川々満水ニテ同所ヘ被遊御滞留候段申来候、此旨可承向々ヘ可申渡候、

四月八日　　式部〔本〕「川上」

## 二八二　久光公御着城

四月十一日未ノ下刻、　国父公御着城アラセレタリ〔ラ脱カ〕、昨十日重富〔姶良郡〕御泊、白金坂、吉野筋御通行、従駕国老小松帯刀〔清廉〕、御側役島津主殿〔久篤〕・中山中左衛門〔実善〕等、御着城ニ付、先規ノ如ク御一門家其他大身分諸士登城、太守公　国父公ヘ恭賀式執行、○今回ノ御上洛ハ天下治乱ノ分ル処、国威ノ揚墜ニ関シ、国是決定ノ時ナルカ故、　国父公ハ御定論ノ如ク、無謀ノ攘夷ハ不可ト

セラレ、昨年来
朝幕ノ間ニ、屢々御献言ノ旨ヲ、今ニ至テ毫モ異動セラレス、内政ヲ整治シ、出テ制スルノ国力ヲ保チ、而テ後攘否如何ンノ議ニ及ヒ、何ソ遅シトセンノ御立論ナリシト雖トモ、時勢奈何セン黠藩暴徒ノ煽動ニ依リテ、遂ニ鎖攘ノ大令ヲ布レ、幕府循奉セラレシカ故、御献論水泡ニ帰シタリ、然リト雖モ事茲ニ至リテハ、前論ニ拘泥セラレ、違否セラルヘキニ非ラス、普天ノ下王土ニ非ラサルナク、殊更尊
王ノ大義少シモ誤リ玉ハサルハ無論、加之生麦事件ニ付テ、英夷ハ幕府ニ就テ猖獗責論ノ際ニ方リテ、攘夷忌避ノ名ヲ取ルハ、国名ヲ穢スニ立到ルカ故、断然攘斥ニ決セラレタル者ナリ、茲ヲ以テ国中一般大ニ振興、中ニモ、元来鎖攘主張ノ士寡カラサルカ故、其曹ハ踊躍シ、来寇セハ撃砕セント競ヒタリ、

**二八三　藩庁其他諸局出退時刻変換**

四月十二日布達、御三役以下被定置候御役人、七ツ時御暇被仰付置候得共、此節時刻被召替候ニ付、明日ヨリ以前之通四時出勤、八時御暇ニ被　仰付候、当分時刻之儀、一日七時割ヲ以テ於鐘楼撞来候得共、明日ヨリ日一杯六時割ニ被召替候、

右之通被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

四月十二日　　帯刀小松清廉

**二八四　久光公先塋御参詣**

四月十三日、　国父公福昌寺恵燈院・浄光明寺御廟参アラセラレタリ、御下国初テノ御参詣ナルカ故、本御行列ナリ、

**二八五　蓑田傳兵衛大久保一蔵江書翰二通**

大久保一蔵様　　蓑田傳兵衛
奉復

貴翰忝拝見仕候、先々御堅栄奉欣賀候、陳ハ何ヨリ之美酒被懸御懇意、御恵贈被下置難有、兼テ好物之品ニ候、拝賞可仕候、拝眉可奉深謝候得共、御礼答迄早々不悉、

四月十三日

再啓、野生義昨夜ヨリ持病之疝癪差起、腹痛等ニテ別テ難義仕、今日ハ出勤之体無御座候間、何卒御助務被

成下度、精々養生仕度、乍序御願申上候、別段伊集院（平治平）氏ニハ御願申上越賦ニ御座候、

## 二八六　攘夷拒絶ノ厳令

四月十六日

三郎様京都　御立之節、攘夷拒絶之厳令被遊御承知候ニ付、異舶一艘ニテモ、　御領内ヘ致碇泊候ハ不及応接、速ニ誅伐可被召加、且依時機夷賊為征討、軍艦可被遊御差向ト之趣、

朝廷幕府ヘ被為在　御届候間、一同其通可相心得候、

就テハ何分公武之御命令モ可有之儀、且ハ攻守ノ術ニ於テ、遠大之　御趣意モ、屹ト被為在　御事候間、自然異船渡来候節ハ、決シテ不動揺（致脱カ）可奉待　御命令旨、御直ニ承知仕候、誠ニ奉恐入次第之事ニ候、右ニ付テハ夷舶渡来ノ節儀ニ付、是迄追々　御筆ヲ以テ細々被仰出置候通、聊　御趣意不致乖戻様可相守候、此旨向々ヘ不洩様早々可致通達候、

四月十六日　　帯刀（小松清廉）　式部（川上久美）

## 二八七　谷村小吉書翰

薩製トテ軽蔑ヲ受ンヨウニ念入（朱）〔何品ナルヤ今知ル由ナシ〕注文方モ仕置候、御一笑可被下、将亦御付届御用ノ細上布、御小納戸方ヨリ差上候間、着ノ上御落掌可被下、奈良原（朱）〔幸五郎〕ニモ去十一日ヨリ日州富岡ヘ被差越故ニ、懇々ト相話人モ無之、至テ寂寞青柴ノ陰ニ閑居罷在申候、御憫察奉願上候、右同人書翰差上呉候様ニトノ事ニテ預置候間、差上候、御入手可被成下候、猶追便可申上ト申上置候、書他五代（朱）〔才助〕ヨリ何モ御聞得被下候ヤウ奉懇願候、恐々頓首、拝具、

四月十九日認　　谷村小吉（冒武）

呈上

松大夫
閣下

為御笑覧進詠一寸相認候、

薄暮卯花（ママ）

夕月の光とのミもおもひしハ
卯花さけるかきねなりける

奇名所祝

大王のみよと共にも澄かえる
みもすそ川の水のさやけき

## 二八八　小松帯刀家族ヘ与ル書翰

カヘスガヘスイトイ候ナサレヨウゾンジ参候、二条文ニテ申入イラセ候、マツ〳〵アツキニ相成候ヘトモ、何ノサハリモナク、サヘ〴〵シククラシノハツトイカ計候、幾久シク早々ノ事候ゾンジ参候、コヽ元ニテ

中将様御機ゲンヨク、一昨十八日京都　御発駕、当日七ツ時分大坂ヘ　御着遊サレ、尚御機ゲンヨク入ラセラレ、今日迄御滞坂ニテ、明日川口ヨリ平運丸ヘ　御乗船、　御出帆ノ筈ニ御座候、則前ノ濱ヘ御着船ノ御賦ニ御座候、二ニ拙者ニモ無異相勤、此節ハ暫ク御跡ニ相残候様仰付ラレ、不調法者ケ様ノ時勢被召残、アリカタキ事ニ御座候、シカシ大坂迄ハ御内用ノ義コレアリ、召列ラレ候段仰付ラレ、御当日御供ニテ下坂イタシ居、無異相勤居候マヽ、少シモ御案シナサレマシク候、サテマタ去ル十七日、二條御城ヘ御老中水野和泉守様ヨリ御用之儀有之候間、四時罷出候様前日御達ニ相成候付罷出候処、槍ノ間御掾(縁カ)ヘ水野和泉守様御出ニテ、昨秋以来国事ノ義ニ付、骨折イタシ候ニ付、拝領物被仰旨仰渡サレ再罷出候処、御奏者番ヨリ御時服二枚拝領仰付ラレ、アリカタキ事ニ御座候、右ノ御衣裳ハ御ノシメ并羽二重ト相見候ハヽ、御袷葵花ノ御紋付、左候テ扣処ヘ引取候、ロウ下ニテ大目付土井備前守殿(書院番頭土井備中守利用カ)ヨリ御達ニ、和泉守殿ヨリ

公方様御目見仰付候間、暫ク相扣居候様致承知相扣候処、暫ク間アリ、

御白書院ノ方ヘ相廻候様仰出サレ、表御坊主案内ニテ罷出候処、大目附・御目附・御奏者番ヨリ一通御礼序等相習置候処、

公方様出御ニ相成、罷出候様相達候ニ付、御三ノ間ヘ罷出御礼申上候処、御奏者番ヨリ名前披露アリ、御奏者番ハ引取ラレ候処、　御直ニ永々在京国事周旋等御満足ニ被思召段、細々

御懇ノ義、

上意何トモ恐入候次第ニ御座候、何辺都合ヨク相済、別テ仕合ノイタリニ御座候、ケ様ナ先例モナキ事、誠ニ〳〵アリガタク候、何トモ恐入候、是モ

中将様ノ御庇様ニテ幾重ニモ恐入候、其方ニテモ嘸々アリガタカリ候半トゾンジマイラセ候、クワシキ事ハ、此節便ヨリ治衛(宋)旁(「家来ノ名」)ノ左右申遣候半トゾンジ差

下候マヽ、当人ヨリキヽトリナサレ、清太モ下リ候（朱点ノ〻〻）（朱）「（全上）」（ココロ祝カ）
マヽコレマタキヽナサレ、ヲノツカラコラ祝ヒナサ
レ候事トハゾンジ候ヘトモ、此セツハ誠ニアリカタ
キ事ニ御座候、コロ祝ヒハナサレコウニゾンジマイ（ソカ）
ラセ候、此方ニテハ当日ハ至極取込ニテモノ事モ相
叶ハズ、近々帰京ノ上ニ祝ヒハイタシ候半トゾンジ
参候、拙者ニモ　御出帆ニ相成候ハヽ、両日ハ爰元
御用モコレアリ候マヽ、廿三日方ニ帰京ノ賦ニ御座
候、御跡ニ相残リ候事思ヒヲラメ（アキ脱カ）候得共、既ニ
御立ニ候マヽ折角念入相勤候事トゾンジ参セ候、来
々月方ニハ、下リニ相成候ハントゾンジ参セ候、品
々遣シ候マヽ、請取ナサレ候、何モ細々ノ事ハ治衛ヘ
申含遣シ候マヽ、ヨク〳〵キナサレ（キ脱カ）候、申遣シタキ
事ナレト、御滞坂中イソカシクアラ〳〵申遣シ参候、
マツハ折カクヲイトイ候ナサレ候様呉々モゾンジ参
候、幾久シク万年モト、メデタクカシク、

四月廿日　　小マツ帯刀

於時ドノ　　無事平安

人々

御用ハ高崎両人ヘモ（朱）「（五六及ヒ正風）」御衣裳拝領、カクハ同様ニ仰
付ラレ候、コホヒシンタケサモ（マ）（マ）天気ノハツクヒ玉
遣シ候マヽ、ヨロシク申置ナサレ候、ヨウ肌持モ
ナヲリ、ヒトヘニテヨロシク御座候、少シ力モ出
ス事ニ御座候、カヘス〳〵留主ハ中モサビシク、
カタ〴〵心配トゾンジ参セ候、何モ細々ノ事ハ治
衛ヘ申付候マヽ、態ト相ノソキ候、別紙遣シ参セ
候、早々メデタクカシク、

## 二八九　舶来大小砲買入ノ為メ派出

新納嘉藤二
南部彌八郎
柴山良助（道懿）

右ハ舶来武器買入ニ付、談判ノ訳有之、来ル廿四日ヨ
リ横濱表ヘ差遣候ニ付、御番所相断能通候様仕度御座
候間、印鑑六枚相添、此段奉願候、以上、

松平修理大夫内
西村喜作

四月廿日

## 二九〇　吉野村牧場馬追及ヒ太鼓踊其外牧場由来

四月廿一日晴、例年ノ如吉野牧馬追張行セラレタリ、

太守公及ヒ　姫君方御出輿アリタリ、○馬追ハ遊観ノ如シト雖モ、元来操練ノ一端ニシテ、馬匹追捕ノ駈引ハ、軍法ニ擬シ組織セラレタル者ニシテ、　太守公御出馬ノ時ハ、御行粧モ本式ニ備ヘラレタリ（太守公御出馬ナキ時ハ御厩掛若年寄及ヒ御用人其他吏員、数名出役執行セリ）、○暐姫君（テル）　典姫君（ノリ）　寧姫君（ヤス）ニモ御見物アリテ、頗ル賑ヒタリ、殊更天気晴朗ニシテ、遊観登場ノ人夥ク、或ハ騎術演習人モ数百名ニ及ヒ、寛急従意馳駈スル者最モ盛ナリ、　姫君方ニハ初テ御覧セラレ、特ニ御興アリシトナン、○本藩ニ於テ壮観ナルハ、四大祭及ヒ馬追ヲ以一歳ノ盛事トス、四大祭ノ其一ハ、則毎歳正月廿八日、諏訪社々頭ニ於テ神舞ヲ催シ、大祭ノ式アリ、其舞踏種々アリト雖モ、剣舞或ハ田ノ神舞等ハ最モ興アル者ナリ（田ノ神舞ノ謡歌ハ、成形図説ニ記ス）、第二、七月朔日ヨリ同二十八日ニ至迄祭式アリ、頭殿・居殿ト唱ヘ、左右二名ノ祭主ヲ設ケ、二十八日ニ至テ大祭執行ス、其間同月二日ヨリ十一二日迄、毎日近在二十四村ノ農人等太鼓踊ヲ催シ、頭・居両殿ノ仮屋ニ至ル、踊ノ組織ハ鼓鉦大小数個ヲ携ヘ、種々造リ花ノ帽ヲ頂キ、或ハ鳥毛ヲ竹竿ニ挿置セルヤバタト唱フ背負ヒ、拍子ヲナシテ踊躍ス、頗ル愉快ノ形容ナリ、其中ニ小山田村ノ拍子ハ、尤モ壮快ナル者ニシテ、鉦鼓ノ響耳ヲ穿ツカ如シ、又櫻島踊ト唱フルハ、鉦鼓大中小数個、太鼓ノ如キハ粗造ノ製ナリト雖モ、大ナルコト直径四尺ニ下ラス、実ニ古雅ナル製ニシテ一種異形ナリ、響ハ甚タ佳ナラスト雖モ、又一種雅音アリ、児童ハ鉦鼓ヲ以テ拍子ヲナシ、頭ニハ種々美麗ノ造華ノ笠ヲ頂キ、古体ノ歌ヲ拍子ニ添、円圏巡環謡踏ス、此ヲ十余日間最終ノ躍トス、如此頭・居両殿ノ仮屋ニ興行シ、而テ後城下ニ至ル、其時　君公ハ、角ノ矢倉又ハ内庭（御休息所御庭トモ云フ）ノ堤上ヨリ見玉フヲ例規トス、畢テ二ノ丸表門前、次ニ南泉院（城西今鶴ケ嶺神社及熊野社ノ地ニアリタリ）、次ニ福昌寺（現今鼓川町長谷場山下歴代御墳墓ノ地ニ在リタリ）、次ニ浄光明寺（現今竜尾町ナル丁丑ノ戦死者西郷等カ墳墓ノ地ニ在リタリ）、次ニ興國寺（現今冷水通町ノ山上ニアリタリ）、次ニ妙國寺（現今下伊敷村玉里邸ノ近傍ニアリタリ）、次ニ南林寺（現今山口馬場町松原神社ノ地ニアリタリ）、次ニ不斷光院（現今下竜尾町ニアリタリ）、是等ノ寺院ヲ回踊セリ、　齊興公玉里邸ニ隠棲セラレシヨリハ、同邸ニモ召寄ラレタリ、斯ノ如ク回躍スルハ、歴世藩主ノ廟ナルカ故、国家安寧・五穀豊穣ヲ禱ルノ為ナリト云フ、此踊同月十一二日迄ニ終レリ（年々異同アリ、二十四ケ村ノ内二三村四五村連合シ、一二三ヨリ十余番号迄、先末ノ順番転換アリ、或ハ頭殿掛リト唱ヘ、祭典ニ従事スルアリ、其時ハ踊ヲナサス、祭式ノ仕丁其他ニ従役ス）、十八日ニ法楽能興行セラレタリ、其時ハ若年寄職出張シ、興行

ナサシムルヲ例規トス、二十八日ヲ大祭ノ当日トシ、御参拝アラセラル例規ナリト雖モ、事故アルニ当リテハ、御代拝御一門家ニ命セラレ、或ハ若年寄ヲ初トシ、数名ノ吏員出頭シテ祭式ニ預ル、当日頭・居両殿ハ束帯ノ服式（服式官等ニ則レル者ナリヤ否ヤ詳ニスルニ由ナシ、依テ今束帯ト書スハ束帯類似ノ服ナルカ故、其形状ヲ以テ記ス）行粧ヲ調ヘ、社頭ニ臨ミ、社司本多ヲ初数十ノ神職各官等ノ冠服ヲ着ケ、其式最モ厳ニシテ、且ツ壮観ナリ、神馬或ハ角力等ノ興モアリ、素ヨリ神饌供撤、或ハ　御代拝、或ハ頭・居両殿進退等ノ際奏楽アリ、此祭式ハ所謂御狭山祭ニ擬セラレタリト云フ（御狭山祭ハ、則信州諏訪社祭典ノ名ナリ、詳ナルハ該社縁起ニ記スルカ如シ）、此祭式ハ第五世　貞久公ヨリ連綿、廃藩置県ニ至迄虧絶ナシ、第三、十一月三日例歳、稲荷社ノ大祭ナリ、祭式最モ鄭重、御参拝ノ例規ニシテ　御親参ナキ時ハ、御代拝御一門家ニ命セラレ、若年寄其他役員数名出頭、而テ流鏑馬二騎ヲ興行セラレ、這騎者ハ犬追物射芸ヲ允サレタル家格ノ者ニ命セラル、規則ニシテ、年々交替ス、因テ犬追物射術師範御預ケノ川上十郎左衛門担当ス（諺ニ厄年ト唱フルアリ、則チ四十一歳ヲ以テ受厄ト通唱ス、之為メ三十六騎ヲ張行スルヲ中古ヨリノ例規トス、這ノ張行ハ犬追物騎術者連中、請願シテ張行スル者ナリ）、第四、六月十五日祇園祭ナリ、祭式供饌ハ藩庁ノ支弁ニシテ、其他ハ城下三町（上・下両町、西田町）ノ寄進ニ罹レリ、其概況ハ上・下二町ノ中ニ祇園屋敷ト唱フル地所アリ、其地ニ同神ヲ勧請シ、年々各地ニ仮殿新営遷座（上町ニ六ケ所、下町ニ十二ケ所）スルヲ慣例トス、故ニ十八年ニシテ初ノ町邸ニ遷還ス、例祭当日ハ本社（清水馬場町永安橋詰ニアリ）ヘ神輿ヲ会祭ス、其時三町ノ経費ヲ以テ、山（京都又ハ東京等ニテ出シト唱フル者ヲ山ト通唱ス）数台ヲ本社ノ近傍迄張行ス、其山ニハ男女一種ノ楽人ヲ載セテ、行ク〳〵拍子興行ス（祇園囃シト通唱ス拍子ハ各異レリ）又町踊ト唱ヘ、八九年、十三四年頃迄ノ女子数名、社前ニ於テ舞踏ス、其謡歌又ハ拍子モ一種アリ（謡歌又ハ手引人ノ仮面ハ光久公御作ナリト云フ）、又舞踏ノ女子等カ乗ル処ノ者ヲ、花駕籠ト名ツケ、駕籠類似ノ製ニシテ、種々ノ造華或数色ノ布帛ヲ以テ粧飾ヲナシ、尤モ美観ナリ、斯ノ如ク様々ノ興行其費用ハ悉ナ三町ノ負担ニシテ、藩庁ノ関スル処ニ非ラス、三町内ニ在ル数所ノ邸地ヲ借地トシ、其地代等ヲ貯蓄シタル者ヲ以テ費用ニ充ツト云フ、之レヲ祇園金ト唱ヘタル者ナリ、今ニ至テモ例歳稍昔時ノ如シト雖モ、山ノ数或ハ女子踊・華駕籠等ノ壮観ハ、廃藩ノ時ヨリ省減シタリ、或ハ三町ニ在リシ祇園屋敷モ其時売却シ、去ル明治十七年迄各町道傍ニ仮殿ヲ設ケ祭式ヲナセシニ、其後旭町ニ一社ヲ創立シ、神輿ヲ出シ

テ祭典セリ、是レヲ鹿兒島ニ於テ年中ノ四盛事トシ、観覧ニ出ル者夥シ、時勢ノ変遷転換ニ依テ、盛衰ハ古今歴々中ニモ、諏訪社ハ丁丑擾乱ノ際兵燹ニ罹リ、一小仮殿ヲ造営シ祭事ヲ為スト雖モ、昔時ノ十分一ニモ及ハサルナリ、神人共ニ栄枯ハ相ヒ同シキ者ナリ、又今ヨリ七八十有余年前ニ三大興行ト唱ルアリ、則御関狩・士踊及ヒ馬追是ナリ、其後馬追ノミ例歳張行セラレタリ、○因ミニ其概略ヲ記サンニ、御関狩・士踊ノ二ツハ、　重豪公御代ニ中止セラレシヲ、　齊興公御再興、尋テ　齊彬公御知政御就封ノ秋、吉野原ニ於テ再興セラレ御出馬、猪・鹿数頭ヲ獲ラレタリ、其時先規ノ如ク、城下士ハ素ヨリ、各郷士・百姓等数千ノ人員出場シ、実ニ近世ノ盛挙ナリ（斉彬公伝ニ詳記ス）、中止ノ間モ、年々春季吉野原ニ於テ其式ノミ存セラレ、御用人・物頭支配下ノ足軽ヲ率ヒ登場執行セリ、○士踊ハ　齊興公嘉永三年（マ）月（マ）日、上下両区ニ各別シ、興行ヲ允サレ御覧アラセラレタリ（斉興公御伝ニ詳記ス）、馬追ハ古ヨリ毎歳初夏四五月ノ頃催サレタリ（起因ハ後葉ニ概記ス）、其催日ヲトシ上申スルハ、御厩吏員ノ掌ル処ニシテ、畜馬二歳ニ充チ、健全馳駈ノ度ヲ見定シ申言ス、尤二歳牡馬ハ、悉ク捕獲シ払下ケトスルノ例規ナリ、牡馬（牝カ）ハ依然牧置シ、播殖ヲ要スルノ方法ナリ、追捕ノ概況ハ追躡者ヲ串目ト云フ、此ノ串目ナル者ハ各郷ノ百姓、或ハ御城下三町ノ役ニシテ（上下両町西田ノ三町ナリ）、各其郷村或ハ町名ヲ記シタル標旗ヲ用ヒ、中ニ三町ノ曹ハ大小旗数十ヲ立列ネタルハ、恰モ軍画ヲ見ルカ如シ、而テ牧司（牧場吏名）ノ牟禮ノ岳ヨリ貝ヲ鳴ラシテ相図ヲナシ、各所ヨリ馬ヲ追ハシム、其時騎術練習ノ人ハ、縦横ニ馳駆追躡ノ形況頗ル壮観ナリ、又本日牧神ノ祭式アリ、御馬預参拝ス（牧神ハ牟礼岳ノ頂上ニアリ）、御桟敷ハ葛掛原ニ設ク、其近地ニハ諸役員或ハ門閥家ノ桟敷ヲ建列セリ、亦追集メタル数百ノ中ヨリ、二歳牝馬ヲ捕フル形況、尤モ壮観ナリ、捕フルニハ甚タ危険ナル者ナリ、御口之者（御口ノ者トハ取者、君公乗馬ノ口取スル者、厩局附属ニシテ一種ノ格式ニ与ヘ俸禄ヲ給スルモノナリ）群屯馬匹ノ中ニ跳入リ捕フルモノナリ、数百ノ馬匹群屯シ、踉捕交モニシテ、負傷或暈絶スル事モアリ、其形況甚危険ニシテ且壮観ナリ、捕ヘ終リテ後、埒ヲ開ヒテ放遣ス、概略斯クノ如クニシテ、観覧ノ男女夥ク、広漠タル原野モ隙地ナキ程ナリ、又騎術練鍛ノ人ハ、帰路大龍寺馬場（現今上竜尾町ナリ）ニ於テ馳駈ス、之ヲ見ル者又夥シ、是等ヲ三興行ノ其一存シタル者ナ

リシニ、廃藩置県ノ後、明治五年牧場ヲ廃シ開墾地トシ、或ハ牧馬ヲ熄メ、開墾或ハ放牛場トナシタルカ故、馬追モ茲ニ至テ全廃セリ、○舊乗ニ記ス処、御関狩ノ因テ起レルハ、天正元癸酉九月、伊地知周防之助重興・禰寝右近大夫重長・肝屬省釣ト同意シ、島津家ニ対シ叛逆セシ故、　太守　義久公、伊地知カ居城垂水郷早崎城ヲ攻メ玉ヒ、退治セラレ、令弟中務大輔家久君ヲ早崎城ニ残シ置レ、在城中操練ノ為メ、牛根ノ山林原野ニ於テ、兵士其他土人ヲシテ猪鹿ノ狩ヲ催サレ、進退聚散ノ駈曳隊伍ヲ定メ玉ヘリ、之レ御関狩ノ起源トス、而シテ軍事操練ニ適シタルヲ以テ、同二甲戌年二月吉野原ニ於テ催サレ、其時尚節制号令ヲ制定セラレ、教戦ノ要ト規定セラレタリ（家久君御合戦日記ニ拠ル）、或ハ初メ組織シ玉ヒシ時、　義久公　家久君議シ玉ヒ、古　頼朝公富士野ノ狩ハ教戦ノ一端、騎・歩二兵ノ操練ヲ本旨トシ玉ヘルニ基カレタリトモ記セリ、是ヨリ御代々例規催サル、事トナリタリ、○又馬追ハ其後吉野ニ於テ催サレ、或ハ福山（姶良郡）又ハ伊集院（日置郡）春山等ニモ催サレタリ、御関狩モ吉野又ハ谷山・櫻島・春山等ニ於テ張行セラレ、中ニモ　光久公　綱久公　綱貴公ニハ、毎々御出馬アラセラレシト記セリ、○吉野牧場ハ、川上筑後祖先代ヨリ所有ノ牧場ナリシニ、慶長七年川上上野介久隅家久公ヘ献呈シ、馬追ノ式モ被定御出馬、久隅モ扈従シタリ云々、其前ニモ　義久公　義弘公御出馬アラセラレタル事舊記ニ散見ス、○当時モ御出馬アラセラレサル時ハ、国老（当時御老中又ハ年寄衆又御談合役トモ唱フ）一名、惣奉行一名、川上家ヨリ一名、御目附（当時横目衆ト唱フ）二名出役スルノ定規ナリシニ、寛永三年御名代其他出役ト記シ、享保八年癸卯七月、御名代及ヒ若年寄其外役員出張ト規定セラレ、今ニ至テ連続セリ（川上久隅献呈縁故ヲ以テ、毎歳駒一頭ヲ下与セラル、例規ニシテ、近世ニ至リテモ然リ）

○士踊ノ起源ハ、文禄ノ初　義弘公　家久公朝鮮征討御渡海中、寺澤志摩守（広高）・宇久大和守（五島純玄）ト御懇交アリシ故、御帰朝ノ後、二人共ニ御礼ノ為メ来麗ノ時、扈従ノ士ニシテ五島踊ヲ興行セシメタリ、其際櫻島野ニ於テ御関狩張行饗応セラレ、而シテ後五島踊伝習ノ為メ、税所與助入道一和・奥山某二名五島ニ遣サレ伝ヘ来リ、此ヨリ鎧具ヲ着シ、操練ノ組織ニ変シ玉ヒシト云、謡歌ノ如キハ五島ヨリ伝ヘタル者ト本藩ニ於テ製シタル者ト、混淆シ用ヒタリト云フ、或ハ諏訪社神事二十四村太鼓踊モ、五島ヨリ伝ヘタリトモ云フ、○諏訪・稲

荷両社祭典ノ起源左ノ如シ、

諏訪神社ハ鹿児島郡鹿児島坂元村ニ鎮座（建御名方命　事代主命二座）、当社ハ第五世　貞久公信州太田庄地頭職兼任セラレシ時、信州諏訪社分霊ヲ薩州山門院ニ勧請シ玉ヒ、暦應四年閏四月、第六世　氏久公鹿児島東福寺城ニ移リ玉ヒシ時、今ノ地ニ遷宮、鹿児島ノ宗廟ト定メ玉ヒ（延文年遷宮）、夫ヨリ御代々御崇敬、毎歳七月大祭執行セラレ、御参拝奉幣ノ式厳重ナリ、（諏訪社祭典ニ、頭殿、居殿トハ則チ祭主ノ如キ者ニシテ、其因テ起ル所以ハ詳ナラスト雖モ、祭主ニ設ケラレタル者ナルハ、祭式ノ一般ヲ以テ知ルニ足レリ、又慶長七壬寅社役云々ニ、両殿ヲ左右ニ分チ、左頭殿図書殿宅、右頭殿本田与兵衛殿宅ト記シ、或ハ左頭殿新納助右衛門嫡子、右馬頭殿猿渡嘉右衛門嫡子云タト記セリ、或ハ上井登兼日記中、天正十二年申六月ノ条ニ、当年当所御頭殿之儀、左忠棟之次男、右村田雅楽介息タルヘキ由定候ナリト記セリ、是ヲ以テ考フルニ、頭居両殿ヲ左右ニ分チ唱ヘタルハ、古キ事ニテ、廃藩置県迄モ依然左右ノ唱アリタリ、〇頭屋地ヲ戸柱辺ニ設ケラレタルハ何ツノ頃ヨリナリヤ詳ナラス、慶長ノ頃ハ門葉家ノ宅ナリノハ旧史ニ記スカ如シ、又祭典ニ幣ノ役ト云フアリ、慶長七年ノ記ニ、御名代幣ノ役、左平田与九郎殿、古平田五次右衛門殿、右外社役左宿滝聞宗蓮老、右宿平田九郎左衛門之事ト記セリ、又社役ノ家筋伊集院　伊地知川上・長野・町田・本田・新納・鎌田ノ八家ニテ、年々二組合ヲ以テ勤タルモ古代ヨリノ事ト見ヘタリ）〇元禄九年六月、神祇道管領従三位ト部朝臣兼連卿神位正一位ヲ授ケラル、同十三年四月、近衛右大臣家熙公染筆、諏訪大明神ノ額ヲ両花表ニ掲ケラル、是第二十世　綱貴公ノ請ニ依テナリ云々（薩藩名勝志）、而テ五社ト定メラレ崇敬尤モ重シ（五社ハ諏訪社ヲ第一トシ、第二祇園、第三稲荷、第四春日、第五若宮此レナリ）、〇稲荷社モ神位正一位ニシテ、鹿児島坂本村ノ内精木川ノ上流（稲荷川ト通唱ス）ニ鎮座（倉稲魂神・瓊々杵尊・伊弉冉尊三座）、当社ハ島津氏氏神ニシテ、第一世忠久公攝州住吉社地ニ於テ誕生セラレシ時、末社稲荷神ノ擁護アリシト謂フヲ以テ、氏ノ神ト尊崇シ玉ヒ、薩隅日三州ノ封ヲ請ケ玉ヒ、山門院ニ御下向、後チ日州島戸ニ移ラセ玉ヒシ時、同地ニ勧請セラレ、建久八年九月十九日、遷宮ノ式執行セラレ、而テ後承久三年薩州市來院ニ（市来郷湯田村ニアリ）勧請セラレ、第九世　忠國公今ノ地ニ遷シ玉ヘリ（一説ニハ天文年中トモ云フ、又一説ニ天文七年二月後迫稲荷ケ尾ノ地ニ遷シ、天正年中今ノ地ニ遷宮トモ謂フ、諸説同シカラス、何レカ是ナルヤ知ルニ由ナシ）、何毎歳正祭ニ流鏑馬張行セラルハ、文禄ノ初朝鮮役勝運ノ祈願ヲ立ラレ、御帰朝ノ後慶長三四年頃（流鏑馬ノ張行ハ、朝鮮役御帰朝ノ後ト旧記ニ記スト雖、年契詳ナラス、蓋シ再役御渡海帰朝後ナラン、然ル時ハ慶長二丁酉再ヒ御渡海、同三年戊戌十二月御帰朝、其翌年則チ同四年己亥ヨリナラン歟、初ハ十六騎ト記セリ、何レノ頃ヨリ二騎トナリシヤ詳ナラス）、第二十世　綱貴公諏訪社ト倶ニ吉田兼連卿ニ請ヒ、正一位ノ神位ヲ授ケ玉ヒ、同十三年四月、近衛右大臣家熙卿神号ノ額ヲ掲ケラレタルモ諏訪社ト同時ナリ、〇祇園社（今八坂神社ト唱フ）濱崎城趾ノ海浜ニ鎮座（浜崎城ハ東福寺城ノ山続キ、南端多賀神社ノ辺ナリト云フ今多賀山ト、山城国愛宕郡八坂郷祇園社素盞嗚尊・稲田姫八王子ノ数座）勧請年月詳ナラス、鹿児島五社ノ第二ナリ（明治三年町内ノ分社ヲ本社ニ合祭セラレ、六月十四日町内ノ仮殿ニ神輿ヲ出シテ祭典ヲ行ヒタリ）、以上四大祭（七月一日ヨリ廿八日迄諏訪社、六月十五日祇園社祭、十一月三日稲荷祭、是ヲ鹿児島ノ四大祭トシ、外ニ吉野原馬追合セテ五、壮観ナリシモ、廃藩置県ノ後ハ、僅ニ其式ヲ存スルノミ）、

## 二九一　英夷申立切迫云々達示（久光公御引留メ云々）

英夷申立候条、追々切迫之及形勢候間、何時近海へ蘭入之程難測、京師御警衛向　御不安心　思食候付、滞京守衛有之候様被仰渡候、最早発途之趣ニ候得共、早々帰京可有之　御沙汰候事、

右之通、三月十八日夜半過、坊城大納言（俊克）殿雑掌平田大學奉参、本田彌右衛門役宅へ被差越、

右之通被　仰渡候由ニテ、翌早朝ヨリ本田并高崎猪太（五六）郎下坂有之由御座候得共、右御承知無之以前、又々一通御届書被差出候筋之御都合欤ニテ、中二日之御滞坂モ一日ニテ、廿日早天　御乗船相成候由承申候、右跡ヨリ御届書ハ未拝見不仕候得トモ、大抵御呼返可相成哉モ難計候得共、下坂之上承候得ハ、国元へ夷賊軍艦差向候風聞承及、早々出船罷下候トノ御趣旨哉ニ承事ニ御座候、

## 二九二　琉球国在留仏人退去届書

（頭註）「琉球在留ノ外国人退去」

一五月四日緋竜舟漕（先）候儀（「方言ハレコキト唱フ」）、異国人引取候ニ付、以前之通勝負漕等可有之、此儀前代ヨリ国土ノ公務ニ相懸候旧式ニテ、其慎ヲ以律儀無之候テ不叶、跡々麁抹ノ仕形ニテ、終ニ為及喧嘩モ有之、格別成旧式執行之場ニ、右体ノ挙動別テ不成合之段ハ勿論、御政事之妨不可然事候、此程多年規式迄ヲ漕、此節ヨリ以前ノ通相成候付テハ、勇立差過何カ不勘弁ノ儀モ可有哉ト、別テ御念遣ノ事候条、件ノ次第厚得其意、末々迄モ兼々堅申付、左候テ其当日頭立候面々差越為致、不知随分律儀相勤、曽テ麁抹ノ仕形無之様可被取計候、右ニ付テハ横目并平等方役人（監察役）共ヘモ、分ケテ取締被仰渡置候ニ付、自然於令違背ハ屹ト可及御沙汰之条、聊無緩疎相守候様、厳重取締可被致旨御差図ニテ候、以上、

文久三年癸亥
四月廿五日

## 二九三　大操練御出馬

四月廿五日、甲突川尻操練場ニ於テ大砲遠撃ヲ催サレ、太守公御出馬アラセラレ、遠近弾着ノ御指揮モアラセラレタリ、

## 二九四　各所砲台大操練

四月廿九日、本日下町辨天砲台ニ於テ、一番・二番両組大砲演習ヲ催サレ、　太守公巳上刻御出馬アラセラレ、両組操練畢リテ後、三十六斤砲及五十斤臼砲各五発、御親ラ沖漂的ニ向テ試発セラレタリ、〇過日不練云々ノ命アリテヨリ、兵士等夙夜研究シタルカ故、本日ハ漂的ノ命中弾丸破裂ノ度ニ至ル迄、頗ル練熟シタルニ依リ、賞詞ヲ下サレタリ、〇斯ク練熟セルハ、過日不練云々ノ御督責アリシヨリ、物主初メ什・伍長等請願シ、各隊日々(火脱カ)薬局ニ出頭、火管ノ製造或ハ弾道ノ理ヲ講シ、或ハ試験等只管研究シタリ、又砲台ニ於テ隔日演習等非常ニ勉励シタルカ故、不日ニ其術進歩シ、賞詞ヲ下サル、ニ至レリ、

## 二九五　柴山良助山之内一郎ニ送ル書翰

尚々向暑ノ折御自愛専要奉存候、

一筆啓上仕候、先々御途中御首尾克御安着被成御座、大慶(ママ)御奉存候、二ニ野生不相替無異罷過申候間、乍憚御消慮可被下候、偖御出立ノ砌ハ甚不行届儀ニ御座候処、深々挨拶等被仰聞、却テ赤面ノ至リ奉存候、先ハ御着ノ御祝儀申上度、如此御座候、恐々謹言、

亥四月廿九日　　柴山良助

山之内一郎様
参人々御中

二白、御地向モ色々紛乱ノ砌リ柄、彼是御心配御座候半、御出立時分御談合申上候儀等、只今ニテハ案外ノ儀ニ罷成、

三郎様御上京ノ事件等誠ニ意表ニ出候訳ニテ、一身ノ御都合向承及候処、

朝廷ノ事モ最早雨ヲ見掛申候、乍恐愚存仕候処、纔奉懇願候ハ　宮様御一人ニテ、此御方何レ関白職等ヘ御出、市橋ハ大坂御眼代ト申様罷成、

三郎様ノ処、京都御守職ニテモ被遊モノ御座候ヘハ、十分可然、左候テハ第一　公武ノ御一和ハ、先キニ暴戻ノ説ヲ以迫リ候様ノ輩ハ、悉ク御誅戮、天下ノ事大小トナク

主上ヘヒタツケニ御断判無之候テハ、間ニ合申間敷、

然上ハ只今ノ

朝政トモニ囚(猶カ)順被遊候様ニテハ、今モ同然ノ儀ニテ、

何レ左ナクハ機已ニ去ルノ勢ト、実ニ慨歎ノ次第、如何御見留付申候哉、只今ノ処テハ攘夷ノ攘字モ有之間

敷、若又今ヨリ以テ事ヲ破リ候ヘハ、四分五列ノ勢、
実ニ不可救ノ域ニ至リ可申、此節生麥一条等緩勢ニ向
候様子、先ツ今ノ処ニテハ幸トモ可申、将又此節八幡
行幸ニ付、治兵トモ可申ラザル企等御座候由、片時モ
早ク根締ヲ御謹被遊度儀ト奉存候、誠ニ可悪輩、往々
右様ノ取企等ハ眼然ニ差見得、実ニ如命危急存亡ノ時
トハナルベシ、何レノ処ニ帰着ノ機モ不被計次第、即
刻御細左右被成下度伏テ奉願候、

## 二九六　前ノ濱ヘ英国船襲来後ノ手当

一打揚ニテ居宅、
一早鐘ニテ御定ノ場ヘ繰出、
一戦争ノ模様候ハヽ、千眼寺（鹿児島市）
御両殿様御本陣、
但太守様御旗本五組ハ
川田将監（佐武）辺、
中将様御旗本六組ハ
新上橋辺ヨリ草牟田入口辺、
一右之節圖書殿（島津久治）御登城、諸惣差引被成候ニ付、
太守様御旗本ノ内ヨリ一組ハ　御城内ヘ相堅候事、
御番所辺
一御城下守兵五組
護摩所　一組
二　丸　一組
御楼門辺　一組
但圖書殿御手勢者
御殿内供屋
桝形辺　一組
新橋辺　一組
但宿陣之儀ハ是迄御定之通、
一組　島津小平太
右下演武館
一組　二階堂（行慎）郡
右二之丸
一組　入來院（公寛）恰
右御楼門辺
一組　新納　波門（久世）
右新橋辺
一組　島津　相馬（久平）
右護摩所辺

右之通急事之節、堅場究置候旨被申出候事、

伊集院　二組

市　來　一組

右南林寺坊中寺陣ニテ、下方限洲崎迄陸上之堅、

樋　脇　一組

郡　山　一組

山　崎　一手

右壽國寺辺陣所ニテ、砂揚場辺中村迄同断、

鹿兒島郡

吉田　一組

溝邊　一手

姶羅郡

山田　一手

右福昌寺坊中陣所ニテ、上方限同断、

蒲生　二組

右大乗院坊中陣所ニテ、磯方限同断、

## 二九七　新ニ買入レタル船名

一青鷹丸

右御召蒸気船

一白鳳丸

右蒸気船

右之通御船名被相唱候様、此御掛　船奉行へ被申渡、可承向々へモ可申渡、

四月　帯刀　式部

## 二九八　麻疹大流行

四月中旬比ヨリ六月初比迄、鹿兒島及ヒ諸郷ニ至ル迄、麻疹大ニ流行、死亡寡ラス、京攝其他モ同シク、従駕ノ輩モ鹿兒島ニ於テハ、四月末ヨリ五月中旬比迄ハ、日ニ三十余名ノ死亡アリト云フ、諸局ハ夫レカ為メ稍閉局スルモアリ、是ニ依テ御手許ヨリ予防又ハ治癒薬施与セラレ、組頭担当シテ配与セラレタリ（古老ノ言ニ斯ク流行シタルハ、凡六十余年ノ後ニアリシト云フ、鹿兒島中ニ於テ一日ノ死亡、平均三十余名ニ及ヒタルコト凡ソ十五日間許リナリシト云フ）、○太守公ニモ未タ御煩ナキカ故（疱瘡ト同シク一回煩ヘハ再感セスト云フ）、君側ノ曹ハ、看護ニ関シタルモノモ登城遠慮スヘキ旨布達セラレタリ、○六月十五日、例年ノ如ク祇園祭ノ例日ニテ、上下両町例年手踊等ノ興行モ、麻疹ノ為メ為シ得ス、祭典ノミナリキ、○京都留守居田中仲右衛門ナル者モ、同症ニ罹リ死シタリ、故ニ本田彌右衛門伏見御仮屋番

ナリシカ、田中カ後職ニ拝シタリ、

## 二九九　文久三亥年四月松平修理大夫様ヨリ伺書

（偽書）

今般英国軍艦致渡来、以書翰難題之儀申立候趣被致承知候、右ハ去秋東海道於生麦、縄手一門島津三郎家来、英人無礼之所行有之候間、難捨置及殺害候儀ヲ、英人心外之旨ニテ、三郎一類之首級ヲ刎、其上多分之金子ヲ申請度段、御所置無之ニヲイテハ、開兵端可申由申立、対　公辺修理大夫深奉恐入候、依テハ三郎儀先慎罷在候様申渡置候、然処三郎申出候ニハ、英人任望我等首級ヲ相渡、　公辺御安堵ニモ可相成儀ニ候ハヽ、早速出府仕立合戦争之上ニテ首級為取申度、此度之儀ハ国家之重事ニモ候間、厚御評議被成下、急速御差図御座候様被致度、此段従国許申付越候付、申上候、以上、

松平修理大夫家来

四月　　島津将監

二階堂　蔀

猪飼順之輔

〔朱〕「斯書ハ偽造ナルハ、当時其出所ヲ糺シタルモ分明ナラス」

## 三〇〇　道島正亮紀事抄

筑前侯ヨリ御借入ノ蒸気船ノ事ヲ承ルニ、前ノ濱出帆ノ時分ヨリ決テ乗組ノ者共ニ挨拶旁不行儀ニテ、彼者共モ不都合ニテ候付、大坂川口御出帆ノ砌、三郎様御召船并公儀ヨリ御借入ノ舟モ始終蒸気相立候得共、筑前ノ舟ハ白熊其外御手道具等多ク積入相成候蒸気立模様無之、加治木清之丞・大迫吉左衛門抔乗組ニテ、其不審ニ存候処、筑前ノ者共一人ハツシ二人ハツシ、段々ト上陸イタシ候付、何様ノ事ニテ出帆ノ手当無之ヤト相尋候処、此節ハ我々共、細島迄ハ御受合ハ難致、勿論主人モイマダ不見舟ニテ、自侭ニ乗廻候儀モ不相成トノ返答ニ付、夫ニテハ此方ニモ不相済、モハヤ主人モ出帆ニ付、左様ニ不被申是非出帆イタシ呉候様、分テ及相談候得共、一円合点不致、再三ニ及候処、左様ナラバ我々共自侭ニハ不相成、京都ヘ家老相詰候付、彼方ヘ御相談有之、差図次第可致旨申事ニテ、加治木清之丞亦々早駕籠ニテ京都ヘ差越、筑前ノ家老ヘ相談ニ相成候得共、矢張同様ノ向ニテ、主人未見舟ニ候得ハ、迚モ我々共ヨリ

御受合ハ出来兼候由返答ナリ、定テ舟中ニテ打合置候半ト相見得候、右様モハヤ手切ニ相成、其節ノ心配切ナキ次第ニテ候ヨシ、左候テ舟ニ乗付、是非下ノ關迄差送リ呉候様無和利相頼、漸ク受合兵庫ヘ差越候処、モハヤ外二艘ハ出帆ニテ、迚モ追付事不相叶、舟中ニテマチ〳〵ノ相談相成、豊後ノ者夫々乗組居、其者申ニハ、中国ヨリウラ道ヲ廻リ候得ハ近道有之、随分早ク可被廻トテ、又讃州ヨリ飛脚ヲ相立候由、其上夷舟ハ跡ヨリヤハリ付来リ、気ビノ悪シキ事ニテ相走候処、一昼夜ニテ下ノ關ヘ乗付、夫ヨリ陸ヘ上リ、人馬相雇陸地通行イタシ、漸ク細島ヘ駈付、御道具抔打廻候迄ハ、三郎様御待被成、此節ノ様成難儀ハ生涯無之トテ、大迫カ嘶候ヨシソ承候事、

## 三〇一　大坂物価報告

四月中旬大坂物価報左ノ如シ〔朱〕「（左記ノ銀価金一両銀六十匁替）」

肥後米一石　百六十二匁
薩摩米一石　百五十四匁
大豆　一石　百三十五匁
〔マヽ〕麦安　一石　八十五匁
小豆　一石　百三十五匁
小麦　一石　百十匁
黒砂糖琉球上　一斤　一匁五分五厘
生蠟　一斤　三匁八分
菜種　一石　百五十匁ヨリ百四十五匁迄
煙草　枯葉　一匁三四分ヨリ二匁四五分迄　本葉　二匁四五分ヨリ四匁五六分迄
鰹節　大　三百五十匁　小　二百六十匁　中　二百八十匁
椎茸　上　五百五十匁　下　四百五十匁　中　五百匁
綿　二百八十八匁
水油　六百八十匁

京坂ノ時価此ノ如ク、鹿兒島ハ玄米一石価百三十五匁ニ内外シ、加之匱乏一般困頓、金銭アルモ買求シ得サルカ故、肥筑ノ間ヨリ数千石ヲ買入ラレ、市街ノ価ヨリ一升代三十二文下直ニ払下ラレ、上下共ニ仁恵ヲ感戴セリ、○如此米穀匱乏ナルハ、昨秋八月大風ノ損害ヲ受タルニ依レリ、他藩ニ於テモ同時風災ニ罹リ、全国一般ノ困頓ナリ、

## 三〇二　〔外夷拒絶ノ大令布告ニ備ヘル軍賦条令〕

外夷拒絶ノ大令布告セラレ、殊ニ本藩ハ生麥事件、英夷幕府ニ就テ請求ノ趣ニ依リ、閣老小笠原圖書頭（長行、老中格）専断ノ名義ヲ以テ償金ヲ渡シ、一旦ノ困責ヲ免レ、妻子養育金ハ本藩ニ向テ請求スヘキヲ密示シタルニ依リ、英佛ハ封内ニ廻航ノ形勢ナルカ故、若シ渡来セハ理非論判シ、渠傲慢ニシテ省服セス戦端ヲ開カハ、我亦至当之処分ナサ、ルヘカラス、茲ヲ以テ軍備厳整セラレ、鹿兒島湾内ハ素ヨリ、封内東西ノ沿海要衝ノ地悉ク予備整成セリト雖モ、尚ホ遺漏ノ有無検査ノ為メ、御軍賦役及ヒ郡奉行・火薬局ノ吏員巡回ヲ命セラレ、六月六日一同出発セリ、○東目海岸、則櫻島ヨリ垂水（垂水市）・新城（肝属郡）・大・小根占（同上）・佐多（同上）・内ノ浦（曽於郡）・志布志迄、御軍賦役大山格之介（綱良）、御軍役方書役亀山甚助及ヒ郡奉行一名、火薬局員寺師宗道次右衛門、西目海岸、谷山ヲ初メ指宿（揖宿郡）・山川（同上）・頴娃其外出水迄御軍賦役折田平八、書役田代孫九郎、郡奉行一名、火薬局員竹山正右衛門、東目重富（垂水市）ヨリ牛根迄（給良郡）御軍賦役坂本廉四郎、書役野村某、火薬局員國分某、又他領境大口ヨリ諸縣郡ノ諸所、高岡及ヒ都城等モ坂本・野村巡回検視セリ、火薬局員ハ各所砲台ヲ検査シ、弾薬ノ精粗ヲ試ミ、粗劣ナルハ改善シタリ、御軍役方員ハ予テ規定ノ軍令条書ヲ示シ、或ハ夷船渡来スヘキ要地ニ於テハ調練モナサシメタリ、○予テ規定ノ軍令条書ハ文久元年ノ冬改正、同二年尚大成セラレタル者ニシテ、左ニ記載スルカ如シ、此令条書ハ軍賦ノ人員、毎半年交替ノ度毎ニ拝観セシメ、或ハ改革セシヲ告示スルノ例規ナリ、然ルニ今回ハ掃攘ノ大令アリシノミナラス、英夷渡来ノ形勢切迫ナルカ故、一層厳令セラレタリ、将タ長州ニ於テハ　勅諚循奉ト称ヘ、既ニ去月（五月十日）初メ亜・佛等ノ通艦ヲ掃撃シ、本藩ハ殊更英夷ト一大葛藤ヲ結ヒタルニ依リ、国力ヲ尽シ掃攘シ、国名ヲ隕サ、ルニ注意スル事尤モ厚ク、昨秋来海陸ノ軍備他事ナク、漸ク整理セリト雖モ、今回精査センカ為メ、此ノ如ク吏員ヲ派出セラレシ者ナリ、巡回ノ吏員至急巡視シテ、各十余日ニシテ終レリ　○鹿兒島各所砲台及ヒ陸軍操練ハ、毎隊隔日放発訓練怠ルコトナク、実ニ盛ナリト謂フヘシ、○軍賦条令拝聞、御春屋郭内客屋ニ於テ、毎組物主・談合役・什伍長等出頭、本月朔日ヨリ六日ニ至リテ、一日一組宛召換拝聞セシメタリ、○軍賦条令左ノ如シ、

〔朱付箋〕「本書大ニ書ク以下全ノ」
〔軍律条規ハ徴物主及物主・談合役ヲ限リ拝見ヲ允サレタリ、這ノ軍賦及ヒ条令ハ、弘化丙午三年十月、斉興公改正セラレ、嘉永五六年ノ比、斉彬公増補ン玉ヒ、文久元年冬、大守大成セラレ、本年春大小砲其他器械ノ精粗、人情適否ヲ慮ヒ取捨セラレ、軍律ノ如キハ今回殊更ニ改正セラレタル者ナリ〕

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編
文久三年五月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料」(紙数一〇三枚)」の記載あり〕

目録


忠義公御親書訓令
御側役ヨリ御小姓与番頭ヘ口達
琉球通寳鋳造ノ事実
実地試験操練
出陣相図ノ諭達
太守様三郎様御上京云々布達
蛮夷掃攘ノ為一橋中納言出発藩達
操練及ヒ軍賦
在京田中仲右衛門報告
芝屋敷家作取毀届書〔(新納)〕
久光公御帰国届書
茂久公大操練御出馬〔(江田平蔵日記鈔)〕
大坂藩邸報告
英艦渡来ノ準備
軍事ニ関ル事情
安田助左衛門日記抄
生麦ニ於テ英人殺傷償金事件伺書
英艦渡来ノ形勢演達
〔参考〕中山中左衛門日記鈔
本田彌右衛門中山大久保ヘ書翰〔(生麦事件)〕
〔仝上照会〕
〔癸亥五月十四日〕在京本田親雄報告御親兵一条等
本田彌右衛門報告
藩内穀価騰貴
二番三番ノ二タ組操練
御親兵賦
在崎中原猶介藩庁ニ報告

洋式紙幣発行
吉利高橋等進退
勝姫君帰国
銃器大変革
鵜木孫兵衛暗殺セラル〔(道鵜正亮紀事抄)〕
齊彬公御贈位
千眼寺慈國寺合併〔(戦争準備)〕
大操練
鈴木其他進退
汽船白鳳丸大坂へ進航
姉ケ小路少将遭難報告〔(本田弥右衛門大久保中山へ)〕
中山中左衛門大久保一蔵へ書翰〔(細島ヨリ)〕
喜入摂津小松帯刀ニ与ル書
〔忠久公霊祀〕
英艦渡来ノ形勢諭達〔(藩内布達)〕
開戦ノ準備
当時藩内ノ人気
英国艦隊襲来準備
攘夷期日布令
中川家謝詞

〔参考〕伏水大黒寺有馬新七等墓碑ノ傍ニアル石燈ノ歌

## 三〇三　忠義公御親書訓令

家老中へ

当時天下之形勢致一変、軍政急務之場ニ立到候処、万国大道之明不明ニ依リ、国家之盛衰存亡相分候得ハ、イツレ名分ヲ正シ、修理ヲ蹈ヘ候義強国之基候間、各誠心ヲ開、国是相定候様、忠精ヲ尽呉候様偏頼存候、右ニ付テハ事多端ニ渉候テハ、其力専一ナラス候故、夫々掛リ申付候間、苦思焦慮セシメ、事之体用ヲ弁別シ、時態ニ応シテ所置可致候、勿論掛之事件委任不致候テハ、十分之働出来兼候付、事之成否ヲ以褒貶可致候間、屹ト差ハマリ諸役場振立、職掌相励、国威相立候様勉励可有之候事、

亥五月朔日

## 三〇四　〔御側役ヨリ御小姓与番頭へ口達〕

五月朔日、御側役ヨリ御小姓与番頭へ口達、
近日中、御城下諸士非常演習ノ為メ、勢揃可被仰出儀モ可有之旨被仰出候、時宜ニ依リ　御出馬総勢御引率、

福山原辺マテ行軍、大操練被催儀モ可有之、尤其節ハ鐘楼護摩所内ニアリ早鐘打鳴ラスヘク、是ヲ相図ニテ各得道具、或得道具トハ、各自得意ノ弓槍鉄ノ類兵糧ヲ携ヘ、定メノ場所ヘ集リ、各与頭御小姓組番頭ノ略唱ヘ名刺ヲ以テ、着到届出ツヘシトノ趣ナリ、

依テ当日左ノ如ク布達セリ、

近日中、御城下諸士勢揃可被仰付、時宜ニ依リ惣勢御引率、福山原辺迄御出馬、大調練被相催儀モ可有之旨、今朔日御側役ヨリ相達候、尤兼テ被定置候御先手、両御旗本并御城下警衛予備救応等、諸隊又ハ諸台場兵士ハ被定置候通ニテ、鐘楼・早鐘打チ鳴候者、是又兼テ被定置候通一番・二番・三番ト夫々心得、罷在候様可有之候、其外諸士老若ニモ其心得ニテ、銘々得道具・兵粮等用意致シ、定メノ場所ヘ馳集候様可有之候、此旨早々致通達候、

五月朔日申刻　　御小姓組番頭

各組頭名略ス、

什長

伍長

旗預

右布達ニ依リ、什・伍長等ノ輩当夜各組頭宅ニ集会シ、予メ其準備ヲ議定ス、

勢揃ハ往古ヨリ時トシテ執行セラレシニ、　齊宣公御就封ノ時催サレ、以来御城下ニ於テハ中絶シ、諸郷ニハ出水・大口・高岡郷等時トシテ張行セリ、去ル嘉永四年辛亥五月、　齊彬公御知政初メテ御就封ノ際、出水郷ヘ御入国ノ時、該郷ニテ催サレタリ、

抑モ勢揃トハ、早鐘等ノ相図ヲ以テ士庶共ニ招集シ、不虞ノ変ニ備フル制ニシテ、士タル者ハ戎具ヲ着ケ、得道具ヲ携ヘ御城下ヘ馳付、諸郷ハ地頭仮屋地頭仮屋トハ一郷ノ政庁トモ謂フヘキナリ、地頭代ヲ置レタル地ハ、其職員郭内ニ居住ノ、置カレサル地ハ、其郷ノ年寄　組頭其他ノ吏員日々出頭、事務ヲ取リ、或ハ文武修練場等ヲ設ケタリ、君公御巡見等ノ時ハ、必休泊セラルノ設アリ、一百余外城皆同ン、ニ馳集ルノ慣例ナリ、出水郷ハ山田昌巌・大口郷ハ新納忠元地頭職タリシ時、創設セリト云フ、

出水・大口・高岡等ニ於テハ、相図ノ早鐘又ハ号砲ヲ聞クヤ、農耕ヲ出タル者ハ耒耜ヲ携ヘ、農服ノ侭其場ヘ馳付ケ、妻女ハ鎧冑其他弓槍銃ノ類ヲ負担シ、夫ヤ父兄等カ着到ノ場ニ馳セ行キ、或ハ糧食ヲ炊キ携ヘ行モアリ、百姓ハ斧・鉈・鎌・鍬ノ類或ハ棒ヲ携フルノ慣例ナリ、

士タル者ハ鎧・冑又ハ陣羽織、或ハ陣笠・半首等ヲ着

ケ、騎歩交々ニシテ、平常備フル処ノ器具ヲ携帯シ、而シテ後操練スルモアリ、或ハ着到ノ遅速ヲ検査シタルノミニシテ退散ヲ命スルモアリ、時機ニ依テ異同アリ、

今回ノ催ハ、先般布令セラレタル軍賦ニ則リ、一番早鐘ニテ出軍ノ用意ヲナシ、二番早鐘ニテ出宅、予テ定メノ場ニ着到シ、三番早鐘ヲ聞ヒテ隊伍ヲ整ヘ、物主引キ纏ヒ御城下ヘ屯集シ、御指揮ヲ待ツノ予定ナリ、則チ御先手一陣、御城下下馬札辺ノ供屋前、御旗本一陣ハ御楼門橋詰、国父公御旗本一陣ハ二ノ丸本門下、御城下警衛ノ諸陣一・二・三・四番ノ四組ハ、造士館門前ヨリ南泉院（今照国神社ノ辺）下迄、五・六番ノ二組ハ岩崎口門ヨリ吉野橋詰、御厩下辺ニ屯集シ、又老若軍賦定員外ノ者一・二・三・四番組内ノ者ハ、演武館前ヨリ枡形辺、五・六番組内ノ者ハ、島津圖書門前ヨリ新橋辺迄ニ集リ、御指麾ニ従テ進退スヘシトノ定令ナリ、

此発令アルヤ、戸々各今ヤ相図アラント糧食ヲ用意シ、戎具ヲ揃ヘ、昼夜心ヲ用ヒ、我人後レシト注意シ、婦女子ハ拝観セント、今ヤ遅シト相ヒ待タリ、

今回ハ、先般布達セラレタル夷舶渡来ノ時、早鐘相図ノ令ヲ布レタル百事実場試験ノ為メ、催サレタル者ナリ、数十年廃絶ノ事ナルカ故、悉ナ人ニ後レサルヲ競ヒタリ、

## 三〇五　琉球通寶鋳造ノ事実

五月二日、琉球通寶鋳造局上申ニ曰ク、

昨壬戌十二月廿二日開局、本年四月廿九日ニ至リ、凡百一日間鋳造ノ総額、弐拾三万弐千百五十二両三歩余（旧邦秘録には、弐拾三万二千五百五十二両三歩とあり）ニ及ヒタル旨届出タリ、

現今内外多難ノ際、富国強兵ノ法方盛ニ着手セラレ、国政改革・海陸軍備、或ハ御上洛、或ハ京師警衛兵ノ費用、或ハ京都二本松藩邸創建ノ費途、或ハ汽船購求、或ハ士民ノ救助、或ハ産業奨勧等百事多端ノ経費ニ及ハレ、殊ニ汽船購求、又ハ京師藩邸ノ建築、御上洛ノ費途、兵士上京等ノ事ニハ、金銀貨ニアラサレハ用ニ充ルコト能ハス、国中ニ於テノ費用ハ、琉球通寶ヲ以テ足レリトス、而シテ隣国日・肥ノ間ハ、琉貨通融ノ道開ケタルニ依リ、大ニ弁益ナリ、茲ヲ以テ国中ノ融通ハ尤モ好機ニ趣キ、上下大ニ賑ヒタリ、

琉貨鋳造ハ、僅々一百余日間ニ斯ノ如キ巨額ニ及ヒ、

其利益少々ナラス、加之無用ノ梵鐘・仏具、或ハ釜鍋ノ類、或ハ古製ノ砲器ヲモ毀ラレ、資料ニ供セラレシニ依リ、無用ヲ転ンシ有用ニ充ラレタルハ、稀世ノ英断ニシテ、凡庸佞仏者等ノ為シ得ヘキニアラス、実ニ千載ノ一勇断ト謂フヘキナリ、

## 三〇六　実地試験操練

五月三日

操練場(川尻砂場)ニ於テ、御先手・両御旗本・御城下警衛等諸陣ノ物主其外諸役者、什・伍長等ノ操練ヲ催シタリ、本日ハ什・伍長ノ員ヲ戦兵ニ、物主ヲ什・伍長ノ場ニ組織シ、終日訓練セリ、是レ実場ニ於テ戦兵ノ進退・集散ヲ試験シ、尚ホ改良ヲ加ンカ為ナリ、

## 三〇七　出陣相図ノ諭達

不時　御備立　御覧、依時宜ハ

御出馬被遊儀モ可有之候条、兼テ其心得可罷在候、出陣相図等之儀別紙被　仰出候、此節之儀攘夷ハ勿論、夷国御征伐、彼ニ置降伏不致候テハ

神州ノ御武威難相振、旁

御両殿様御配慮之　御旨趣被為　在候御事候条、猶又一同精神ヲ凝シ、

御趣意貫通・一致一和ヲ本トシ、追々被　仰出候、姑息偏固ノ旧習ヲ失シ、忍小盛大ノ四字熟考肝要之事ニ候、万一モ不可遂ノ非礼ヲ受候トモ御軍律有之候間、私ノ義論一切可為無用候、此旨可申旨被仰渡出候、

御定場左之通

一両御旗本

右楼門并二丸御門ヘ可参着候、

一御先手

右下馬辺ヘ可参着候、

一御城守兵

右一番ヨリ四番迄造士館ヨリ南泉院前迄、五番ヨリ六番ハ岩崎御門前可参着候、

一一番早鐘

右方限貝之役吹頭、

右相図ニハ組々方限ヘ可相集候、

一二番早鐘

右相図ニテ御定場ヘ可参着候、

以上

不時　御備立　御覧之儀、　御別紙弐通之通被　仰出
候条、　御深慮之程一涯謹テ可承知、名々別紙之通早
々可被達置候、

五月四日　大蔵〔朱〕「島津」「二△」
二帯刀「小松」
三但馬「川上」「△四」
四式部「川上」

## 三〇八　太守様三郎様御上京云々布達

太守様当春
御参勤之儀、
三郎様御上京被
仰出候付、右御用済被遊
御参府候様被
仰出置、
三郎様被遊
御下国候得共、方今不容易世態、御手当向旁御直ニ御
下知不被遊候テハ、不被為済折柄ニ付、此涯不被遊
御参府旨御届書、於大坂御老中水野和泉守様ヘ被差出
候処、御落手相成候、此旨向々江可致通達候、

五月　　帯刀小松

## 三〇九　蛮夷掃攘ノ為一橋中納言出発（藩達）

蛮夷掃攘トシテ、一橋中納言殿明廿二日当地発途、関
東下向被致候、此段向々ヘ可被相触候、

四月

別紙ノ通幕府ヨリ被　仰出候付、是迄申渡置候通、愈
征夷ノ為粉骨砕身、可尽誠忠モノ也、
攘夷ノ儀付、別紙弐通ノ通従　公義被仰渡、猶亦　御
別紙ノ通　御筆ヲ以被　仰出候条、一統謹テ可奉承知
候、

五月

大蔵〔久徴〕島津
帯刀〔清廉〕小松
但馬〔川上久運〕
式部〔川上久美〕

## 三一〇　操練及ヒ軍賦

五月六日
去ル朔日、示令ノ如ク勢揃催サレ、午ノ上刻頃相図ノ
早鐘ヲ鳴ラシ初メタルニ依リ、一般待設タル事ナレハ

奮ヒ競フテ、予テ布告ノ如ク二番相図ヲ待チタリ、城中又ハ諸局ヘ出頭セシ輩ハ帰家シテ、準備スルモアリ、或ハ家族従者カ戎具粮食ノ類ヲ携ヘ馳セ行クモアリ、実ニ言詞ニ尽シ得サルノ盛況ナリ、軈テ二番相図ヲ聞テ、各定メノ場所ヘ着到、隊伍ヲ整ヘ、三番相図ニテ御城下ヘ屯集シ、命令ヲ待チタリ、而シテ未ノ中刻頃〔宋付箋〕「本書大ニ書クベシ、以下仝シ」太守公御服飾、鞭差羽織、野袴、陣傘召サレタリ御楼門ヨリ御出馬、御床机廻ノ人員、成規ノ如ク扈従扈従又ハ諸役ハ悉ナ立揚、陣傘半首等ナリセリ、而シテ御楼門橋詰ニ御床机ヲ立ラレ、各陣物主及ヒ什・伍長等拝謁、総勢着到ヲ聞召シ、御点検ノ式畢リテ、本日ハ川尻砂揚場ヘ御引率、操練スヘキ旨仰出サレタリ、国父公御名代ハ島津圖書殿久治ニテ、御旗本・御床机廻其他ノ総勢着到、点検ノ式アリタリ、而シテ先・中・後ノ諸陣、順次操練場ニ向テ進行ス、御城下ヨリ矢来御門前・二ノ丸・下枡形ヲ出、千石馬場筋、谷山街道ヲ南ニ武ノ橋ヲ越シ、川上式部邸川下ニ添ヒ、操練場ニ進軍セリ、行軍ノ順次ハ御軍賦役二騎折田平八・坂本廉四郎先導ス、次ニ野戦砲一隊砲数八門、弾薬箱等各附属ス、次ニ先陣小銃隊六隊〇一・二・三・四・五・六番組一与一隊、次ニ御旗本一陣人員四隊人員百二十名、此内戦兵六十人百十人御旗一流八幡大菩薩ト記ス（御旗ノ由来ハ後ニ記ス）御旗奉行伊木七郎右衛門（御納戸奉行職）御旗指東郷源四郎、今重持ト唱ス（御小姓役）

次ニ一本杉御馬標由来後ニ記ス、次ニ御床机廻先・中・後御備図式図末ニアリノ如ク、騎歩数十名、御持筒六挺、御弓台一肩、御長刀一振、御手槍二本、玉薬箱一荷、御床机一脚、御手傘・御草履・御草鞋、御鎧箱二荷、御茶・弁当一荷詳ナルハ御床机廻人数、賦後条ニ記スカ如シ、次ニ国父公御旗本一陣大小砲銃隊太守公御旗本隊ト同数ナリ、御名代島津圖書殿ハ自家ノ馬標金色幢鐙形、次ニ後軍小銃隊一陣、大砲一隊及ヒ後備隊一陣、順次行軍ス、操練場ヘ諸陣着到、太守公御本営ニ入ラセラレ御本営ヲ設ケタリ、諸隊ノ陣営モ咸同ン、圖書殿ニハ国父公御本営ニ入ラレタリ、而シテ暫時御休憩、此時諸隊粮食ヲ給セラレ粮食ハ軍賦令条ノ如ン畢テ各陣同時ニ寛急ノ進退放発操練ス、太守公ハ中軍御旗本隊ヲ率ヒ玉ヒ御乗出シ、圖書殿モ続ヒテ乗出サレタリ、各隊大小砲銃ノ響ハ山海ニ轟キ、実ニ百雷落ルカ如ク、操練場ノ広場モ一時砲烟ノ為メ呎尺モ弁セサリキ、終リテ少時ク御休憩、而シテ申ノ刻過ル頃凱陣、行軍ノ順次出陣ノ時ニ異ナラス、初メノ如ク御城下ニ繰リ入レ、御楼門橋詰ニ御馬ヲ止メラレ、御軍役奉行新納次郎四郎〔久俊〕ヲ召サレ、惣勢予テ定メラレタル条例ニ違ハス迅速ニ集リ、操練ニ於テモ克ク整練、御満足思召ストノ趣ニテ御暇給ハルノ旨達セラレ、御帰城ア

ラセラレタリ、圖書殿ニモ御軍役奉行ヘ万事遺漏ナク整ヒシ旨、言上ニ及フヘシトノ旨達セラレ、二ノ丸ヘ出頭セラレ、而シテ諸隊ハ退散セリ、両城警衛（御本丸二ノ丸）隊ハ、御出馬中御城下亦ハ二ノ丸御門前ニ布屋ノ陣営ヲ設ケ、警衛シタリ、其他後備・予備ノ人員ハ、御城下供屋内ニ在テ警衛セリ、如此諸事実場ノ試験ナルカ故、夷船渡来ストモ、防戦ノ準備ハ素ヨリ人数ノ着到、或ハ行進給粮、其他百事整頓セリ、因ニ記ス、八幡大菩薩ノ御旗ハ御家貴重品ノ第一ニシテ、御代々御譲十二流ノ中第一等ノ品ナリ、　頼朝公ヨリ　忠久公御拝領、文字ハ僧文覺カ書ナリ、第二、時雨ノ御旗ト唱フル者ハ、　貴久公諸所ノ戦場ニ御指セアリテ、御勝運ノ佳例ナリト云フ、時雨ノ画キタルカ故名唱トス、第三　貴久公御旗、第四白御旗（藤原朝臣貴久、天文十五年丙午五月吉日ト記サレタリ）、第五　義久公白御旗（藤原朝臣義久、慶長三年戊戌五月吉日ト記サレタリ）、第六　繼豊公御写時雨ノ御旗、第七白御旗、第八御写八幡大菩薩御旗、第九一文字御旗、第十十文字御旗、第十一　綱貴公御旗、第十二　同公御証拠ノ御旗、以上十二流ヲ御譲旗トス、文久元年辛酉十二月、御床机廻御人数賦其他御出馬等ノ規模、御制定簿ニ御旗四流、

但

一頼朝公御旗

一時雨ノ御旗

右　貴久公天文十四年　太守公ニ御定リ、始テ御出陣之節御指セ被成候、

一白御旗

右源家御嘉例　貴久公モ御持セ、

一義久公御実名有之御旗

右毎御出馬御用意、臨時以　思召一流可被遊為御持、被為在　御沙汰候事ト記セリ、

今回ハ、第一八幡大菩薩之御旗御指セアリシ者ナリ、一本杉御馬標ハ、第十七世　義弘公朝鮮国　御在陣中御製造、泗川ノ大戦ニ始テ用ヒラレタリ、此戦ハ寡ヲ以テ衆ヲ破リ、大捷ヲ得ラレタル故、以来御佳例トセラレ、御代々御譲リノ御馬標ト定メラレタリ、

泗川ノ大捷ヲ揚ケラレシヨリ、此ノ御馬標ノ向フ処敵ナク、一目敗走セリト謂フ、実ニ異域本朝名誉ノ御馬標ナリシハ、咸人知ルカ如シ、

当日　御出馬行軍ノ式拝観セント、老若男女路次ノ諸街、操練場ノ広地ニ至ル迄群集シ、尺寸ノ隙地ナク、

実ニ人ヲ以テ山ヲ築キタルカ如ク、殊ニ御家ニ於テ貴重ナル御旗・御馬標其他　御出馬ノ形状ヲ拝シ、涙ヲ流シタルモアリ、洵ニ人ヲシテ感セシメタル御催ナリキ、殊ニ八幡大菩薩ノ御旗・一本杉ノ御馬標ハ、悉ナ人容易ニ拝覧スル事能ハス、初秋風入レ（七夕御虫干シトモ唱タリ）ノ時、改服シテ拝見ヲ允サル、者ナリキ、

御床机廻御備立ノ図左ノ如シ、（記載なし）

## 三一一　在京田中仲右衛門報告

今日致承知候三ケ所、上京之模様早々手ヲ付候処、讃州高松松平讃岐守（頼聡）様、来ル八日京都廻ニテ伏見駅ヘ通行ノ段、表向先触ハ無之候得共、伏見・大津内々手当有之候処、今日俄ニ水口ヨリ着京相成候、日限相替候由所々聞合致候付、全体伊賀路ノ国一条ト申ス事ニテ、（朱）「何事乎知ルニ由ナシ」、陣屋兼テ受持之由、先ツ滞京之模様ニ相聞得申候、以下略ス、

五月六日　　田中仲右衛門

小松帯刀様

## 三一二　芝屋敷家作取毀届書（新納）

今般攘夷拒絶ノ御所置ニ付テハ、追々切迫ノ趣モ被仰渡候処、芝居屋敷之儀、海辺ニテ攘夷ノ節ハ妨ニ相成申候間、家作取除澁谷屋敷ヘ引直、右ヲ居屋敷ニイタシ、陣屋仝様ノ心得ニテ罷在候段可及御届旨、修理大夫申付越候間、此段御聞置可被下候、以上、

五月六日　　松平修理大夫内

新納嘉藤二

## 三一三　久光公御帰国届書

五月六日、御用番井上河内守様江差出、

島津三郎事、蒙

御内命致上京居候処、彼地発足、先月十一日鹿兒島江致下着候段申越候、此段御届申上候、以上、

松平修理大夫内

五月六日　　新納嘉藤二

## 三一四　茂久公大操練御出馬（江田平蔵日記鈔）

文久三年亥五月六日昼四時分、早鐘ノ相図有之、俄ノ事ニハ候ヘトモ、兼テ御手当被仰付置候御城下人数一

統、急速彼定置候受持場所江相揃、二番早鐘ニテ御城下御定ノ場所ヘ相揃候処、
太守様御対面所御楼門御出馬、御先手備順之繰出シ、御旗本備順之御道筋、加治木屋敷門前枡形、千石馬場、谷山街道武之橋ヨリ左リ、（川通リ脱カ）調練場ヘ被為入、御床机被為召、調練被　仰付候、
三郎様御名代島津圖書（久治）殿ニテ、二丸御出馬、御備組其外御出馬同様ニテ、御道筋
太守様御跡引続ニテ、調練之儀モ引ツヽキ被　仰付、
上様御腰兵粮　御床机ニテ被召上、外一統ハ尚更腰兵粮ニテ、七ツ半時分御出口之通御帰殿ノ事、
早鐘相図ニテ、一統急速人数相揃候次第、感心之儀ハ挙テ致評判候事、平蔵儀ハ前条当職無滞相勤候、
平太郎儀ハ
三郎様御旗本大砲組什長、喜平次事ハ□（同戦カ）兵ニテ相勤候事、

## 三一五　大坂藩邸報告

五月七日、尾老公（徳川慶恕）・一橋公（徳川慶喜）御対顔、越前老公（松平慶永）ニモ御登城　御目見、御政事向御相談可被成候間、折々御登城有之候様被仰出、翌八日ニモ御登　城ニテ、（久世広文）關宿様ト夜入過マテ御用談被遊候由、（松平容保）會津様ニモ御同様被仰出候由、
一其砌ヨリ御老中・若年寄方増供列之儀、都テ御曳取相成、此以前之通御召列ニテ、諸事御変革之御模様ニ候、
一御上洛　御名代ハ、弥一橋公ト申事ニ候、
一關宿様ニハ御上京之儀被成御承知候処、頻リニ　御辞退ニテ、御当職モステニ御引キ被成候筋御内心御座候処、尾老公其外様御出会何歟之儀、御打合御吹込相成候処、至極ニ御差ハマリニテ、弥御同所様来ル廿日頃江戸御出立、御上京之筋相成候由、
一五月八日夜、酒井右京亮（忠毗　敦賀藩主）様御宅ニ於テ、（本）「（新参ノ医師）」安田轍三ヘ御沙汰相成候趣ハ、此節ハイツレ京都所司代之上ニ、今一人禁裏守衛職出来申筈、右ハ　和泉様ヘ可被　仰出御内定ニ相成候由、御内話有之候、申出候、

## 三一六　英艦渡来ノ準備

五月八日、組頭宅ヘ什・伍長及戦兵・諸役者召喚、攘夷鎖港ノ
勅諚書及ヒ幕府布令書拝聞セシメ、而シテ口達ニ、仮令

ヒ夷船渡来ストモ、決テ動揺スルコト勿レ、予テ令セラレタルカ如ク在宿シ、相図ニ依テ夫々定メノ場ヘ出張スト雖モ、軍令ニ違却セス謹ンテ命令ヲ俟ツヘシ、若シ違フモノハ厳重ノ処分アルヘシトノ趣ヲ達シ、而シテ左ノ軍令書、各心得ノ為メ拝聞セシメタリ、

掟

一我隊伍之列ヲ離テ、他ニ不可入交事、
一大小用其外無拠可相後砌ハ、其訳什長并同伍ヘ相断用事仕舞次第、早速本之列ニ可馳付事、
一脇道スヘカラサル事、
一押買無用之事、
一昼飯并泊リ之宿ニ着キ候節、兼テ定之合図相背間敷事、
一役者ノ外、猥ニ声ヲ立間敷事、
一喧嘩・口論停止之事、
一酒停止之事、
一何時ニテモ貝ヲ鳴シ候者可折敷、旗昇押立太鼓打候時ハ可歩行事、
一危地行軍之時、旗ハ太鼓之調子ニ依リ、士卒之足并旗之遅速ニ従フヘキ事、
一田畠踏荒ス間敷事、
一無下知放火乱妨無用之事、

右之条々堅固ニ可相守者也、

文久三年五月

掟

一物主ノ免許無之我陣所ヲ離レテ、他之小屋ニ入間敷事、
一営門出入之作法、従卒タリト雖モ伍・什之組合無之、又ハ宰領不付者、或役所之許札無之者出入無用之事、
一速ニ発出之格護、油断有之間敷事、
一喧嘩・口論停止之事、
一役所之免許無之飲酒停止之事、
一旗・貝・太鼓之令相背間敷事、
一夜隠ハ夜廻リ人数之外、往来無用之事、
一出火之節ハ、本営詰之人数并火消役、其小屋限之外不可立騒、若難消止大火ニ及候ハヽ銘々小屋前ニ折敷、相図之下知ニ随ヒ、兼テ定之場ヘ一組宛可相迦事、
一陣場割渡之外、猥ニ大声ヲ不可立事、
一陣場割渡之節、私之好悪申出間敷事、

一賊中ノ事実探得勝敗之事、
一存寄候趣於有之テハ、速ニ可申出、悪キトテ罪スルニアラス、善キ事ハ可取用事、
一役所之免許ヲ得ス、親族タリトモ敵中ニ書信ヲ通スヘカラサル事、
一降参之者致殺害間敷事、
一先手接戦候トモ、下知無之内諸隊之人数致動揺間敷事、
一病人有之節ハ、速ニ同伍ヨリ役所へ可申出事、
一猥ニ吉凶勝敗之説申触シ、或占術ケ間敷事相唱間敷事、
一放馬且火用心可致事、
一夜打其外騒動之節ハ、其小屋一組限ニテ取鎮之格護タルヘシ、其外ハ下知無之ニ騒立間敷事、
右条々堅固ニ可相守者也、
文久三年五月
此ノ条書ハ、着陣又ハ毎朝惣勢拝聞セシムヘシ、
掟
一首級器械ヲ得候共、受持之場所ヲ迦間敷事、
一小指持参ニテ、臨時之下知相伝候者、物主タリト雖違背有之間敷事、
一物主戦死之節ハ、惣勢当之敵不相破ハ、可為戦死之格護ノ事、
一帰陣之貝ヲ吹キ候ハ、何時タリトモ旗昇ヲ目当ニ、太鼓之調子ニ応シ可引取事、
一号令ヲ不待、鉄砲相放間敷事、
一定置候追留メ之場所ニテ合図有之候節ハ、踏越間敷事、
右条々堅固ニ可相守者也、
文久三年五月
右接戦前惣勢拝聞スヘシ、
掟
一勝軍之後ニハ、尚以営舎之規則可相守事、
一帰着之節、下知ナキニ私宅へ帰間敷事、
右之趣堅固ニ可相守者也、
文久三年五月
此条書ハ帰陣之節、陣前ニ於テ惣勢へ拝聞セシムヘシ、
掟
一旗・太鼓・貝之令相背間敷事、

一物主臨時之令相背間敷事、
一自身之陣伍ヲ離テ他ニ不可入雑事、
一帰陣之星合不相済内帰間敷事、
右条々堅固ニ可相守者也、
文久三年五月
此条書ハ教戦之時、繰出前惣勢ニ拝聞セシムヘシ、
掟
一応遠近触レ之刻限ニ相後間敷事、
一鉄砲其外之要具欠クヘカラサル事、
一酒停止之事、
一着到之後、物主之不得差図隊伍ヲ相迦間敷事、
一喧嘩・口論堅令停止候事、
右条々堅固ニ可相守者也、
文久三年五月

## 三一七　軍事ニ関ル事情

五月九日
御軍賦役野村彦兵衛、御勘定方小頭ニ貶ラレタリ、元来荻野流砲術師範ナリ、青山愚知ト異論アリテノ故ナリト云フ、野村ハ幼年　照國公御膝辺ニ奉職シ、其頃櫻井大五郎荻野流砲術家ナリカ門ニ入ラシメ玉ヒ、砲術ヲ学ヒ得達セルカ故、其後師範ニ列セラレタリ、

## 三一八　安田助左衛門日記抄

一文久三年五月九日
御兵具奉行席　安田助左衛門
右之通リ御役替被仰付、御役料米是レ迄ノ通リ被下置候、
五日　帯刀〔朱〕〔小松〕

## 三一九　生麦ニ於テ英人殺傷償金事件伺書

癸亥五月九日知邸本田彌右衛門ヨリ
朝廷ヘ御伺書及ヒ御附紙左之如シ、
今般於関東、英夷江償金被差渡候哉ニ伝承仕候、昨年生麦一条之後、英夷申立ヨリ被差渡候儀ニ可有之、右申立之箇条ハ何レモ御採用難相成段ハ、
幕府御重職様方ヨリ被遂
奏聞候儀ニテ、今更償金被差渡候次第、如何ニモ不審奉存候、尤醜夷

神州ヲ奉汚蔑候事、多年被為悩
宸襟、既ニ攘夷拒絶之
勅諚被相下、
大樹公御請ニテ、其期限ヲサヘ
奏聞有之、遍天下ニ御布告ニテ
皇国之士民ニ至、挙テ夷狄掃攘
神州多年之汚辱ヲ雪候事、千載難得之機会此節ト踊躍
振起仕候折柄故、於
天朝ハ猶以償金之事
勅許可被為　在御訳トモ不奉存、勿論
神州之大恥ニ相成候儀ヲ、於
幕府不被奉経
奏聞、右之取計ニ及候儀、弥以無之筈ニテ、重畳疑惑
仕候、乍併何様之御訳柄ニ依リテカ
奏聞之上、
勅許被為　在候哉ハ不奉存候、
付紙ニ、勅許之儀決テ無之候、
抑生麥ニテ弊藩之者英夷ヲ誅戮仕候儀ハ、彼ヨリ法外
之失礼傲慢ヲ極候付、不得已ニ出候事故、理非曲直元
ヨリ明白ニテ不竢論儀ニ候、唯今ニテモ生麥之如キ処
業有之候ハヽ、則切捨申ス覚悟ニ候、是全
皇国之威武ヲ不貶之義当然之事ニテ候、然ルヲ償金被
差渡候儀ハ、醜夷之無礼不法ハ度外ニ被措、
皇国之大道廃棄ニ至ヲモ不被為顧訳ト存候、依テ右件
勅許之儀ニ候哉、亦ハ
幕府ニテ御取計之上、其訳
付紙ニ、去ル五日尾張大納言・水戸中納言ヨリ、不得已次
第ニテ差遣候由、殿下江言上有之候、
奏聞ヲ被奉経候哉、左候得ハ右之
天裁如何被　仰達候哉、右等之次第
付紙ニ、去七日松平肥後守、水野和泉守江御尋有之候処、
幕府江ハ一切不申来旨返答、其後再三詰問有之候処、猶以
同様候、重大事件大樹江注進無之段甚以御不審ニ　思召
候、
勅許無之儀取計候段、於幕府如何所置候哉、急速ニ可有言
上申達候事、
御沙汰之趣奉伺上、早速修理大夫（島津茂久）并島津三郎（久光）江申遣、
公武之御趣意為奉承知度奉存候間、卑賤之身トシテ、
誠ニ奉恐入候得共、
神州之大道興廃ニ関係仕候儀、且薩藩ニオヒテハ、英夷

申立ニモ的当仕候得ハ、旁難黙止、此段奉伺候、以上、

松平修理大夫内　　本田彌右衛門

五月九日

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

## 三二〇　英艦渡来ノ形勢演達

五月十日演達、

今般攘夷決定ノ旨幕府ヨリ布達セラレ、殊ニ本藩ハ生麥事件、或ハ昨年来無謀ノ攘夷ハ不可ナルノ趣、再三御建論アリシカトモ、長・土・水ノ三藩士、或ハ浮浪士輩ノ暴論ニ動カサレ玉ヒ、遂ニ勅命ヲ下レシ故、

綸言汗ノ如シ、実ニ已ムコトヲ得サセラレス、一向ラ攘斥ノ準備厳令セラレ、本月中百事成頓届出ツヘキ旨、軍事関係ノ諸局ヘ達セラレタリ、

## 三二一　参考　中山中左衛門日記鈔

巻封

大久保一蔵様　　中山中左衛門

要用急キ

近衛様ヨリ只今横田罷帰申候、然処折柄　御参内中ニテ、御書并御看ハ御用人林日向介ヘ相托置候ヨシ御座候間、形行　御内聴ニ　御達可申上、将又　大納言様御事、今日左大将御兼任被仰出候由、右ニ付早速為御知可申上候得共、取込及延引候付、其内横田ヨリ止出呉候様トノ事之由申出候間、是又早速　御聴ニ　御達可申候、実ニ天下之仕合ト奉存候、何モ貴顔細事可申上候、此旨早々御願申上候、謹言、

五月十二日

## 三二二　本田彌右衛門中山大久保ヘ書翰（生麥事件）

先達テ生麥償金一条之書面差上置、其後猶又遂評議候処、此事実事ニ於テハ無此上

皇国之汚辱ト相成、其上御国ニオヒテ大関係之筋ニ御座候故、得ト情実致探索、曲直非理之名分相正シ不申候テハ、不相叶儀ト致評決、折柄

大樹公御滞坂中ニ付、去ル八日高崎左太郎・村山齊助両人致下坂承合候処、来ル十一日

御帰洛之由承リ、十日早朝板倉周防守〔勝静、備中松山藩主〕様旅館江致推参、遂面会候テ、ケ様之廻状致伝承、如何之次第ニ可有御座哉、及尋問候処、此事関東ヨリ内分申来候得共、巨

細之儀ハ不相分、勿論此方ヨリ致指図候訳ニテモ無之、関東御留守中役人共評決之上、水戸中納言殿江申上候テ御聞済ニ相成候由、併弥償金相渡候哉、未相渡候哉相分リ不申トノ趣ニ御座候、依テ色々及論談、何分御失体之次第

朝廷ハ不及申、天下一統江対シ甚敷御失錯之御処置ニテ、殊ニ弊藩ヘ曲名ヲ被為負候訳ニ相成、何分ニモ何人之建議ニテケ様ニ相成候哉、是非火急ニ御詮義被下候テ、厳罰ニ被処度旨申入候処、尤之次第ニハ候得共、何分情実相分リ兼候間、其為御目付池田修理（長発）ヲ関東江差下シ候付、罷帰リ候ハヽ、委曲相分リ可申ト之趣被申候、何分不審之廉モ不少候得共、別ニ詮義之致方モ無御座、夫形ニ致退出、同日乗船、直様罷帰申候、左候テ此事公義之御裁断トハ乍申、畢竟生麦一条ヨリ起リ候儀ニテ、可致傍観訳ニ無之ト存シ候故、十二日早朝三條中納言様（実美）江村山齊助致拝謁、右之始末委細申上置候、左候テ松平備前守様（池田茂政）ニハ水戸中納言様御実弟之儀ニ付、高崎左太郎罷出候テ、右之次第申上、虚実探索之儀重畳申上置、御尽力之程返々御勧メ申上候、此事件色々多端ニ御座候得共難尽筆頭、猶松方助左衛門（旧名正義）ヨリ委曲可申上候、右形行申上候、以上、

京都　　本田彌右衛門（親雄）

五月十四日

御国元

中山仲左衛門（実善）様

大久保一蔵（利通）様

（島津忠承氏蔵本にて校訂）

## 三二三　仝上照会

今般関東ニテ英夷ヘ償金被差渡候由、趣意畢竟不好戦ヨリ起為申候事候欤、左条之通今日迄之次第申上候、一去ル六日中川宮ヘ参殿之節、安達清一郎（正声）ト申ス因州ノ留守居ヨリ入御覧候書附一通有之、於関東償金被相渡、且諸大名ヘ閣老ヨリ御達申渡書取、松平左兵衛督（吉井信発、矢田藩主）・松平大和守（直克、川越藩主）様方ヨリ之廻状ニテ、先便右書面写差上置申候、相届為申筈ト奉存候、右因州ヘ承合候所、大広間席御大名ヘハ江戸ニテ廻達相成候由、当御屋敷ヘハ江戸ヨリ為何事モ不申来候得共、不容易一条実説無相違形ニ候間、公武共ニ伺取候次第共一先申上候、去ル九日三條中納言殿ヘ謁見仕、今般償金一条云々之書面有之、浮説共不相見得、就テハ

皇国之御恥辱無此上モ事、公武御廟議之次第不残奉承知、国元ヘ直様申遣度趣致演達、別紙伺書差出候処、朝廷ニ於テハ全ク御存モ無之、件々細々承知奉リ候、乍併重大之事一言誤候テモ不相済候ニ付、御附札ヲ以テ被仰渡度御内意申上候処、去ル十一日御付札被相渡候別紙差上申候、初発京師ヘ相知候儀ハ、尾張大納言殿・水戸中納言殿御連名ニテ、　関白殿下ヘ左之通御届相成候、

写

奉謹呈候、向暑之節ニ御座候得共、益御機嫌能奉恐悦候、然ハ英艦一条ニ付諸有志共ヘモ段々申合候所、一体生麦之事ハ全ク別事ニ有之、攘夷之応接ト相混候テハ、曲直名義之筋相立不申候ニ付、英国ヘハ償金差遣シ、然ル上鎖港之談判ニ取懸候筈評決相成申候、償金之儀、兼テ之見込トハ相違仕候得共、事情不得止、慶篤ヘハ兼テ被仰出候趣意モ有之、　大樹ニモ外夷所置之儀委任被致候事ニ付、臨機之取計仕候段、宜御推察被成下候様奉願上度、依之奉捧寸楮候、誠恐百拝、

四月廿八日　　水戸中納言〔徳川慶篤〕
　　尾張大納言〔徳川慶恕〕

鷹司関白様〔輔熙〕

右之書面当月五日方京着之由ニテ、則ヨリ武家ヘモ御尋向御付札之通ニテ候、

一去ル十日昼　幕府ヘ御達之一通、別紙写并水戸中納言殿ヘ御達之御書面別紙写一通差上申候、

右同日夕刻

中川宮御初惣参

内被　仰出、

御宸翰ニテ一書之

勅諚御達被為　在、

宮様ニハ御不参之処、御廻文ニテ参候ヲ拝借仕リ、写差上申候、右ハ

御宸筆之侭ニテ、前以役人列ヘ被召下候テ、御加筆等申上候儀ニテモ無之、真ノ

勅意ナリトノ趣、内々

中川宮御沙汰ニ候事ニテ、誠ニ

天気恐入奉存候次第、此末関東償金之論ヲ立候ハ、進退如何之所置相成可申哉ト奉存候、左候テ去ル八日村山齊助・高崎左太郎両人下坂ニテ、幕府之情実閣老衆ヘ謁見及窺候、板倉周防守様ヨリ何分

大樹公ヘモ御伺ニ被及儀無之、事実不相分、夫故御目附池田修理ト申ス者急ニ東下被仰付、右不罷帰内ハ何共分リ兼候ニ付、夫迄相待呉候様、分リ次第速ニ為知可申ト之返答承届帰京イタシ、右首尾書別紙ニ申上候、一体此節之伺等之始末・委細之情実、松方助左衛門（正義）ヘ申含候間、御直ニ御聞取可被下候、

一去ル十一日　大樹公大坂ヨリ御上京、昨十三日参内被　仰出候処、御病気ニテ御不参之事、

但御実病不詳（虚カ）下之由、

右償金之一条大概如此御座候、書余御直聞奉願候、以上、

京都　　本田彌右衛門

五月十四日

御側役衆

二ノ丸

御側役衆

## 三二四　癸亥五月十四日在京本田親雄報告

（御親兵一条等）

御親兵一件ケ条書ヲ以奉伺上候得共、御規則之儀ハ今以御決定無之候、当分之処ニテハ、御高割六十二人差出置候筋申出置候、今両日之間ハ万事御治定可有之模様ニ付、大尾之上可申上越候、御問合之ケ条逐一奉得其意候、先日高割ニテ大砲・乗馬・小銃差出候様被仰出、右ハ琉球高相除、御国役六十二万石之割ニテ、御当家ヨリ大砲六挺・乗馬十二匹・小銃十八挺ニ及申候、此品々ハ守衛兵ノ外ニ被差出事之由、猶右御達ニ付窺出置候ケ条、未御返答モ不被仰達候儀ニ有之候故、取究テ之処、後日相窺可申上候、御守衛兵ハ追々ハ別ニ屯所被召建哉之御模様ニテ候由、右ニ就テハ二本松町御屋敷ヲ御用ニ御申付之御内評慥ニ聞キ出シ候故、段々吟味勘考之趣、猶松方助左衛門ヨリ御聞取可被下候、

一細島一条未タ黒白相分リ不申、右同人ヨリ可申上候、（朱）（御預リ所ノ辞令書参看）

一粟田御領山内拝借之事吟味之趣、同人ヨリ可申上候、

一公辺ヨリ二本松御屋敷御用地之響合有之、京町奉行永井主水正（尚志）ヨリ承居候間、昨日同人ヘ面接、決テ難差上趣断申出置候、委細松方ヨリ御聞取可被下候、

一尾張前大納言殿京師ニ於テ、去月下旬頃ニモ候哉、御政事御輔翼被仰出候、一橋卿之御代リト被察申候、成瀬（正肥、犬山藩主）隼人正・田宮彌太郎（嘉輝）、専要路ニ事ヲ執候由ニ御座候、

一尾張〔徳川茂徳〕大納言殿、関東ヨリ当月二日出立ニ付、自国ヘモ不立寄上京、大樹ヘ直ニ伺候事有之旨被仰立候由、一円其訳尾老〔徳川慶恕〕侯ヘモ御相談ナク、

朝廷・幕府ニモ其子細今日迄ハ不相分候、拒絶之期限五月十日之処延々相成、其次第ヲ言上欤ナト、評判仕候、大抵ハ蘭人迄モ可拒絶哉伺度ナト申様子ニモ候、トカク関東ニテモテアモシ〔マ〕候形之由、水人私書中ニモ粗其意モ相見得申候、一橋卿〔朱〕ニモ償金一条〔生麦殺傷事件〕ハ全ク御存ナク、道中ニテ御聞及ニテ、大坂ヘ早々伺越ニ相成、是非破約攘夷之談判ニ及度、償金論之主本被相糺度候得共、差迫リ期限故、先ツ跡ニテ之事ニ被成ト之御意中ト承候事ニ御座候、何分関東之偷安説、其本ハ朝議紛々ニテ、幕論モ随テ動揺スルニヨリ、東住之閣老等窃ニ惰気ヲ起候ト被察候、太田道淳〔資始〕閣老〔朱〕ヘ三出之由、更ニ其意ヲ不得事ニテ候、是モ東住之閣老吟味ニテ吹挙之事ト被承候、水府当侯ハ暗愚、家臣声ヲ呑、悲涙〔朱〕〔孫太郎〕大息イタシ居候由、梅澤〔朱〕ト申ス者正義之者ニテ、宮ヘ内々言上、此節之罪状主家ニ於テ逃レカタク存候間、出格之御慈悲ヲ以テ、御教諭之一書備前守〔朱〕〔全上〕・餘四郎丸両人〔朱〕〔全上〕ヘ頂戴仕度歎願、其情実誠ニ可憐次第ニ候得共、御断ニテ候、

一橋本宰相〔実麿〕中将殿関東ヘ　御使ニテ、当月下旬御下向、和宮様ヘ参向被仰出候事、

右和宮様頻ニ御上京之儀ヲ被仰上越候由ニ付、御留メ之事、

御内命ヲ被相含候由ニ候、

一当時ニ至リ、暴論之堂上、今以テ依然之形ニ候、乍恐宸襟ヲ被為悩候御事此一儀ニテ、実ニ歎息慷慨之極ニ奉存候、一天之

君ニモ　思召ニ不被為任事、

御膝下ニ有之、何共言語ニ絶申次第ニ御座候、兎角大機会ヲ生候ヲ待申候外無之、此事誠ニ苦心中之苦ニテ、残念千万ニ奉存候、

右今日迄之形勢大略如此御座候、猶追々可申上候、

以上、

京都　本田彌右衛門〔親雄〕

五月十四日

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

## 三二五　本田彌右衛門報告

〔番号三二九と同文により削除〕

## 三二六　藩内穀価騰貴

五月中旬頃

藩内米穀置乏、上下共ニ困頓セリ、銭百文（寛永通宝百文ハ九十六枚ヲ以テ百文トス）ニ白米二合八九勺ヲ買ヒ得ルノ時価ナリ、中ニモ山川（同上郡）・指宿（同上）・頴娃・加世田辺ノ各郷ハ殊ニ欠乏、僅一二合ヲ購ヒ得ルニモ難ク、細民ニ至テハ米粒ヲ食フ者ナク、雑穀類其他草根・木皮ヲ以テ露命ヲ繋キタリト云フ、斯ク置乏ナルハ昨年ノ凶作、加之近国ノ輸入ナキニ依レリ、茲ヲ以テ、政庁ヨリ肥・筑ノ両所ヘ特ニ輸入ノ道ヲ開カレ、中ニモ熊本ヘ輸送ノ談ニ及ハレシカハ、許多ノ石数ヲ運致セリト雖モ、価甚不廉ナリ、然リト雖モ本藩ハ金融滑沢アルカ故、高価ノ苦ヲ告ル者ナシ、是全ク官庫ヲ開キ、治乱ノ政務ニ耗スル処夥シキカ故、自ラ上下ノ流通宜キヲ得タリ、

## 三二七　二番三番ノ二タ組操練

三二七ノ一
五月十七日

二番・六番ノ二組、川尻調練場ニ於テ操練ヲ催サレタリ、辰ノ刻着場ノ約束ナリシニ、　太守公巳ノ刻頃ヨリ御出場アラセラレ、本日ハ何ノ御達モナク、卒然ノ御出馬ナリ、操練終リテ後、鉄板射擲ヲ命セラレタリ、夷舶鉄製ナルカ故、試験セラレタル者ナリ、操練人員ハ午ノ下刻頃退散ヲ命セラレ、　太守公ニハ御親ラ鉄板御試験アラセラレ、未ノ下刻過御帰城アリタリ、

三二七ノ二（朱）〔前紙ニ添フ〕
別紙ニ申上候通、国役高六拾弐万石余之儀、爰元江悉皆仕候石高相分居不申候付、国許江取調方申越置候間、相違可仕儀モ難計候付、兼テ其段被聞召置可被下候、此段為念申上置候、以上、

松平修理大夫内
本田彌右衛門

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

## 三二八　御親兵賦

三二八ノ一
一御守衛兵士六拾弐人
内

弐人　隊長騎馬役
拾人　伍長
五拾人　兵士
一率馬拾弐疋
但馬具付
一大砲六挺
内
弐挺　七百目
但要具玉薬相添
弐挺　五百目
但書同断
弐挺　四百目
但書同断
一小銃拾八挺　四匁玉
但要具玉薬添
外ニ
一倍卒弐拾弐人
但隊長弐人内之者ニ御座候
一右同拾弐人
但伍長兵士同断

右弐行倍卒之儀ハ、以来交代之節ハ不同可有御座候間、兼テ御断申上置候、
一別紙姓名書一通
右ハ此節攘夷拒絶期限御決定ニ付、何時兵端相開候儀モ難計候間、御守衛兵士早々可差出旨被仰渡趣承知仕候、依之国許江早速申越置候間、人数罷登迄之間、御当地江罷在候者之内ヨリ、急変之節ハ御用相勤候様手当仕置候付、別紙姓名書相添差上申候、尤国役高六拾弐万石余ニ付、此段申上候、以上、

松平修理大夫内
本田彌右衛門
〔同上書にて校訂〕

五月十八日

三二八ノ二
〔朱〕
「御親兵予定人名」

隊長
島津弾正
村田源右衛門
〔朱〕
「右二人ハ城下、以下ハ皆諸外城ノ輩ナリ」

伍長
本田権右衛門

長野九八郎
柚木崎六郎
原六右衛門
石塚為兵衛
新穂仁左衛門
是枝仲蔵
鮫島新兵衛
篠原伊藤次
有馬彌兵衛

兵士

有馬正右衛門
宇都良助
二見源兵衛
海老原龍右衛門
石神満右衛門
田中郷右衛門
徳丸宇助
田尻仲左衛門
西平一
春田八右衛門

杉尾宗左衛門
長野四郎太
二之宮仁壮太
房村雲章
阿多静讜
山口平右衛門
楠元六之丞
宮路正兵衛
江口善次郎
池田周助
上野武左衛門
古城壮太
松下清右衛門
是枝次右衛門
田實平右衛門
春成仲左衛門
吉峯惣右衛門
鮫島加次右衛門
岩元作左衛門
小田原武左衛門

本田卯右衛門
指宿仲右衛門
有馬文蔵
有馬量右衛門
面高利兵衛
佐藤休蔵
馬渡隆次郎
山下矢之助
有馬雄之進
是枝吉蔵
井尻甚五左衛門
宇都正太郎
重信良右衛門
安楽才右衛門
里川万左衛門
木佐貫十五郎
上原直助
實吉助次郎
村田十左衛門
松崎十次郎

以上六十二人(朱)「(島津・村田ノ外悉ナ諸郷士ナリ)」

## 三二九　在崎中原猶介藩庁ニ報告（五月廿日）

攘夷鎖港ノ

勅諚幕府循奉ノ説外国人聞知シ、逐日軍艦渡来、警備甚厳重、中ニモ英国ハ生麦事件ノ重事アルカ故、日本海ヘ軍艦二隊（一隊ハ大小八艘ナリ）ヲ差向ケ、内一隊ハ全ク生麦事件談判ノ為メ、一隊ハ攘鎖ノ説アルニ依リ、警備ノ為メナリト云フ、仍テ横濱・長崎・函館・新潟或上海等ノ各所ニ往来ス、

軍艦一隊トハ則チ大小八艘ニシテ、其内大軍艦（フレカット トナリ）一艘・中形軍艦四艘・報知小船三艘（破船トモ云フ）ナリ、長崎港ニ於テモ現今昼夜蒸気ヲ立テ、大小砲ニハ装薬シ、直チニ放発ノ準備ヲナシ居レリ、其他米・佛・蘭等三四艘乃至二三艘絶ヘス碇泊、警備最モ厳ニシテ、水夫其他ノ上陸ヲ止メタリ、商船ハ各国合テ八九艘碇泊シ、館舎ヲ引払ヒ悉ク船中ニアリ、鎖港ノ布告ヲ聞ヒテ、上海等ヘ向テ出航ノ議定ナリト云、夫故商法モ全ク停止シ、随テ市中ノ人気恟々、今ヤ砲声ヲ聞クナラント、老幼婦女ハ悉ナ山手ノ方ニ避遁シ、日々家財類ヲ運搬

スルニ従事シ、実ニ雑踏ヲ極メタリ、又生麦事件ニ就テハ、現今ノ形勢ヲ以テ考フルニ、果シテ麗港ニ渡来、難題申立ルナラン、幕吏ハ己ノ難ヲ遁レンカ為メ、廻航ヲ促スカ如キ密説アリ、宜シク注意アルヘシトノ趣ナリ、

## 三三〇　洋式紙幣発行

五月廿一日

諸縣郡ノ中、高岡郷其他三ケ郷（関外四ケ郷ト通唱ス、関外ト云フハ、去川村ノ関外ナルカ故ナリ、）通用ノ為メ、新ニ発行ノ紙幣製造法、洋式取調方（朱）（寺島宗則旧名）松木安右衛門ヘ命セラレ、製造方ハ琉球通寶鋳造局員担当スヘキ旨達セラレタリ、之ヲ藩内紙幣発行ノ嚆矢トス、

## 三三一　吉利高橋等進退

五月廿一日

当番頭吉利群吉・同高橋要人、御小姓与番頭ニ拝ス、御馬預川上箭七郎、御役人并ニ貶セラル、

## 三三二　勝姫君帰国

五月廿二日

（朱）「（斉興公妹）」勝姫君御下着、（鹿児島市）玉里邸ヲ以テ御棲居ト定メラレタリ、江戸邸御発輿ハ四月□日、五十余日ニシテ御着ナリ、江戸邸ニアラセラレシ　姫君方等ハ、残リナク御曳取、在勤ノ吏員モ昔日ノ十分一ニ減シ、随テ費途大ニ減省セリ、加之斯ク騒々タル世態ナルカ故、速ニ御帰国アリタルニハ、咸人安堵セリ、

大小各藩ニ於テモ多クハ帰国シ、江戸中寂莫、商人等甚タ困頓セリト云フ、元来江戸ノ繁盛ナリシハ、諸大名在府、花美驕惰ノ風習ニ依リテ、遊手徒食ノ者多カリシニ、倏チ変遷シタルニハ困却スル無論ナリ、

## 三三三　銃器大変革

五月廿三日布達

当時不用ニ属シタルゲベール銃（一名剣銃）数千挺、悉皆払下、望ノ者御兵具奉行ヘ就キテ出願スヘシトノ趣令セラレタリ、故ニ商賈争フテ請願シ、隣藩或ハ浪花等ヘ売販シ、巨利ヲ得タリト云フ、一挺ノ価銭四貫文ニ払ヒ下ケ、売販セルハ三両余ニ及ヒタルモアリシトナン、廣島ニハ五百余挺ヲ一時ニ買入タリト云フ（武備不整、是ヲ以テ知ルヘシ、）

## 三三四　鵜木孫兵衛暗殺セラル（道嶋正亮紀事抄）

鵜木孫兵衛ハ横目職ニテ、京都ヘ四五ケ年モ相勤詰居、殊ノ外軽働ニシテ発言イタシ候哉、先月廿四日トヤラ、当月四日トヤラ三本木トイフ上ケ屋ヘ差越、帰リニ二條ノ後ウラ町トヤラニテ、真向ヲ被打割即死候由、残念千万ニ候、列合ハ本田彌右衛門・上田何某ニテ、評判モ不宜候、

亥五月廿四日記ス、

## 三三五　齊彬公御贈位

五月廿五日

齊彬公御贈官之神号及ヒ偏額、関白近衛忠熙卿ヨリ贈下ラレ、本日松方助左衛門正義、汽船白鳳丸ヨリ護シテ着麗セリ、左ノ如シ、

贈権中納言齊彬

照國大明神

額二面

正陽

照徳

前関白忠熙卿

此国をてらす光を仰くその
人の誠は世々につたへて

黄門齊彬カ国忠ヲ感テ左近衛大将忠房

いさをしを仰けは高く見ゆるかな
あきつ島根の国を照らして

松方ナル者守護着麗、直ニ登城、　太守公　国父公御披拝ノ式アラセラレ、同十三日御墓前ニ於テ、奉告ノ式執行セラレタリ、

神号ハ勿論、偏額ノ文何レモ　公ノ至誠ヲ表セラレ、間然スル処ナシ、中ニモ照國ノ文ハ、最モ御徳義・御精神ニ於テ広フシテ且照明、当時

皇威回復、国光煌輝ノ緒ヲ経始セラレシハ、他言ヲ要セス、不幸ニシテ天年ヲ仮サス臨終、　国父公ニ遺サルヽノ条、尊

王ノ大義回復、　太守公ヲシテ統継、此ノ二ツヲ主要トス、以来　国父公夙夜心思ヲ労セラレ、千計万慮、辛酸ヲ厭ヒ玉ハス、遂ニ壬戌ノ春断然英決、上洛セラレ、建言シ玉ヒ、今日ニ至リ海内一般貴賤共ニ迷夢ヲ醒シ、尊

王ノ方向ヲ定メ、七百年前鎌倉覇府大権掌握シ以来未曽有ノ美事ナルハ、贅言ヲ俟タサルナリ、実ニ　公ト国父公

皇室ニ大勲アル、普ク衆ノ知ルカ如シ、

白鳳丸ヨリ下麗セル松方助左衛門ハ、中川宮（青蓮院尊融法親王）ノ密翰ヲモ護シタリ、是レ宮ヘ　国父公御上洛ヲ促カサルノ密

勅ナリ、宮ハ御細翰ヲ以テ、当今ノ形勢

叡慮御苦悩ノ趣ヲ以テ至急御上洛、鎮定ノ御方策アラン事ヲ御倚頼　思召ノ旨ナリ、御書翰左ノ如シ、

追日暑気相加候、弥御多祥珍重ニ候、過日ハ登京、其節ハ久々ニテ得面展、色々承悦入候、早々帰国誠ニ遺憾不少候、併以良節（藤井正徳）・助左衛門両人、禁中飽テ被助之由被申越、於尊融誠ニ安心、猶此上之処、為

朝家天下尽力呉々モ御頼申置候、扨過日来種々御心入之品々被恵、永可致重宝、毎々ニハ不申入、取束荒々謝入候、亦方今之形勢ニ付、定テ深謀モ可有之、賢考頼入候、猶良節・助左衛門両人ヘ申聞候事共被聞取、猶又以良節賢慮承度候、先ハ要々計申入候也、

恐々謹言、

二白、過日給候　勅書写且御請共御目ニカケ候、

是等モ宜賢慮被存候事、

五月十二日　　尊融

（島津久光）三郎殿

宸翰左ノ如シ

連日快霽薄暑催候処、倍云々々々々々、扨ハ神斉中云々、今日一封差進候筈之処、及遅云々々々差越辱存候、如御申社参モ先々無異ニ相済、重々以安心候、実ニ深神助之処、誠ニ以奉謝ニ無限事ニ候、実ハ過日一封ニテ密ニ中入候後、段々ト心痛之廉相増候余持病之咳暈相発、十日之云迚モ遠路ノ乗輿重大之義勤難、大心痛ニテ、臨期延引之義、十日ノ期関白云々之通候処、於関白モ尤モニハ存取云々ニテ云々、発言成カタク候間、叡慮決云々被出様返事候、無間三條乞面会、即押テ逢候処、同様関白ニ承候由ニテ、実病虚病尋候テ不承知之様子、乍御違例御決定ナクハ申事故、其後決定之趣意両役ヘ差出候処、急ニハ無返事処、関白入来ニテ面会万々話合候処ヘ、参政・国事寄人ヲ云々ニテ、御違例タリ共是非行幸有之様、全虚病云々少允ニ召寄、尋御

留申スヤウ申聞云々之此上ハ、云々御内議ヘ踏込、其上共無御承引ハ直ニツレダシ、鳳輦ヘ入ル、ヤトケシカラン大強勢之由、恐レ入候ヘ共、此上ハ御決心次第致方ナクト、関白モ大ニ心痛之次第ニ候、其大騒キ之用ニ済候後、両役返事ニテ、何卒御所労押テ行幸有之候様トノヌラクラ返事ニ候、其故誠ニ心痛候、十一日行幸候処、全神助ニテ少々之逆上ハ候得共、予始下々無異ニ相済候テ、先以安心之事ニ候、実ニ是計ニ不限、血気之堂上此侭ニテハ万事ニ只々我意募候テ、予関白失権、両役ハ云々々堂上ニ次第ニ相成、

朝廷云々ニ付此上云々々、右之次第荒々乍御話申入候、何卒此上ハ一廉之御智謀ニテ、実々薩州ヲ招寄、予始三郎ト一致ニテ、暴論ノ堂上キト目ノアキ候様イタサネハ迚モドモナラス、日々夜々心配候、何分参政・国事寄人云々々止ニ相成候テ、一廉改革ニ不成候テハ、迚モ〳〵国乱之基ニ候、何卒此辺得ト御密計有之度、内々其宮迄申込候間、決テ不洩様、策ヲ帷幕之内ニメクラシ、成功ヲ千里之外ニ御輝シ頼置候、余リ心配之余又々申入候、決テ関白ヘモ誰ヘモ先無御沙汰頼入候事、先ハ荒々御申入候也、

四月二十三日

中川宮　宸翰ニ対セラレタル御書、左ノ如シ、

昨日ハ

勅書給致拝見候、今朝モ快晴薄暑ト被存候、弥　御機嫌ニ被為有、恐悦ニ候、今日ハ敏宮ニモ移住、是又恐悦ニ存上候、扨昨日被

仰下候条々、誠ニ恐入候次第何共々々絶言語、実々御他言不被為様、伏テ従尊融モ願置候、此頃之模様ニテハ

朝威日々ニ衰恐入候、併唯今之処ニテ三條等ヘ彼是申候モ無益ト被存、唯々時節御見合被為有候様存上候、於尊融ハ行末ヲ奉助ノ外謀略無是、実ニ此時ハ彼ニ悪ヲ積シメ、天誅ヲ御待被為有候様伏テ願置候、三郎之義ハ篤勘考仕置候故、猶伺公之節言上可仕候、日夜之御苦心恐入候、唯々此上ハ数々伺公モ致兼候故、以勅書御沙汰被為在候様願置候、御請荒々申上候、恐々謹言、

四月二十四日

## 三三六　千眼寺慈國寺合併（戦争準備）

五月廿五日達、

千眼寺（鹿児島郡西田村ニ在リ）、同宗慈國寺（鹿児島郡武村ニ在リ）へ合併、千眼寺知行高四百余石ハ、救士用途ニ官収セラレ、目今壽國寺ヨリ、寺番タルヘシトノ趣達セラレタリ、

斯クノ如ク合併セラレタル所以ハ、夷舶渡来、若シ開戦ニ及ヘル時ハ、御本丸・二ノ丸何レモ海岸ニ近ク、碇泊場ヨリ僅七八丁、十五六丁内外ノ距離、加之高地ナルカ故、殿閣或ハ角ノ矢倉、大奥ノ二階、其他悉ク標的ニ等シク、渠カ弾撃ノ好標ナルカ故、同寺ヲ以御陣場ニ予定セラレタリ、

鹿児島ノ地タルヤ、東西北ノ三面ハ国境二十余里ヲ距リ、殊ニ大小各外城ニ土着ノ士アリテ、砦堡ノ設ニ等シト雖モ、南方ノ湾口佐多（肝属郡）・山川（揖宿郡）ハ咽喉ニシテ、直径凡六七里、守禦ノ道ニ乏シク、一走鹿児島ニ来侵シ、城中ヲ目的トシ放発スルトキハ、拱手シテ撃潰セラルノ地ナリ、故ニ照國公モ心ヲ用ヒ玉ヒ、國分郷遷城、或ハ神瀬（照国公御事蹟録ニ詳記ス）ニ砦堡築造セラル、ノ尊旨アリタリ、

又和蘭人ハントウェーンナル者来麗ノ時、諮問セラレシニ、神瀬ニ大砲壕ヲ築キ、櫻島洗出ニ大砦堡建築・城郭遷転等ノ義ヲ上言セリ、依テ安政五戊午ノ夏、神瀬ハ既ニ試築ニ着手セラレタリ、斯クノ如キ地形ナルカ故、今回ハ開戦ニ至ランモ知ルヘカラサルカ故、予メ撰定セラレタル者ナリ、

千眼寺ハ黄檗禅宗ニシテ、重豪公御代創建セラレ、齊興公天保ノ中頃殿閣堂宇壮大建築セラレタルカ故、御座所等ノ設、其他数百ノ兵ヲ置クモ弁利ナリ、加之近傍ニハ三四ノ支坊アリ、或ハ外夷トノ戦ハ必ス上・下町、或ハ城下内外郭ナルヘキ地形ナルカ故、同寺ヲ本営トスル時ハ頗ル便ナルノ地ナリ、

生麦事件ニ就ヒテ、前ニ記シタルカ如ク曲直判然タル事由ニシテ、渠礼譲ヲ失ヒ、猥リニ我カ行粧ヲ侵シタルニ起レル者ナリ、然ルニ其曲ヲ反省セス、傲謾ニ要請スルハ、畢竟軽蔑ノ太甚シキト謂フヘキナリ、幕府ハ癸丑以来外夷ノ恐嚇ニ畏怖シ、曲直理非論判スルコト能ハス、却テ其困惑ヲ我ニ負シメントスルハ、大権掌握ノ任ニ於テ不当ナル、素ヨリ論ヲ俟ス、本藩ニ於テハ曲直分明ナルヲ以テ、敢テ屈スヘカラサルノ定論ナルカ故、麗湾ニ廻艦シ戦端ヲ開クトキハ国力ヲ尽シ応戦シ、熄マサルニ決セラレ、守防交戦ノ準備ニ他事ナシ、海陸ノ交戦恐ラク全敗ヲ取ラサルハ、一般信シ

テ疑ハサル所ナリト雖モ、只一ツノ遺憾ナルハ、海軍未タ備ハラス、軍艦未タ之レナク、追撃スルコト能ハサルノ一典ナリ、渠尤モ長スル処海戦ニアリ、然ルニ我カ地形ハ海岸ニ接シ、殊ニ城郭ノ如キハ、渠艦上ヨリ砲撃スルニ適宜ノ距離ナルカ故、焼燹ノ具ヲ装置セルニ等シ、故ニ交戦ニ至ラハ両城ハ焼燼スル者ト予定セラレ、又上下市街モ海岸ニ沿ヒタルカ故、焼具ト予視シ、臨機自焼戦場トシ、或ハ渠ノ尤モ所長ノ海戦我ノ尤モ短ナル処ナルヲ以テ、海陸ノ一戦ヲナシ、而シテ渠ニ上陸セシメ、我カ所長ノ短兵ヲ以テ屠殺セントノ計画ナリ、設令ヒ渠陸戦ニ長シタリト雖モ、主客ノ勢アリ、故ニ必勝ニ疑ナシト予決シ準備厳令セラレタリ、姫君方ニハ其時ニ方リ、一時玉里邸ニ移棲セラレ、交戦ノ機顕ハレタル時ニ方リ、花尾山平等王院ニ避座セラルヽノ予定ナリキ、

## 三三七　大操練

三三七ノ一
五月廿五日

各砲台演習卒然催サレ、当日黎明ニ布達セラレ、各組頭ノ什・伍長宅ニ通知シ、什・伍長ハ兵士ノ宅ニ奔走シ触達シタリ、予テ悉ナ人注意厚キカ故、巳刻頃ニハ悉ク着到セリ、　太守公ハ巳中頃御出馬、　悦之助君久封後忠封　真之助君久済後忠済ノ両公子モ御出馬アリ、本営太鼓ノ相図ヲ以テ、辨天砲台ヨリ放発ヲ初メ、続ヒテ新波戸・祇園・大門口操練場等ノ各砲台同時ニ放発、其響百雷ノ如ク山岳ヲ震動セリ、沖中十四五丁ノ距離、標的命中多ク倏チ壊沈セリ、畢テ水軍隊ハ軽舸数艘ヨリ放発演習ス、終テ午ノ下刻　御帰城アラセラレタリ、

三三七ノ二
第三回五月廿六日

又上町商賈柿本某大坂ニ在リテ、帰路下關ニ滞在中、佛船ノ戦争ニ会シ頗ル困難ヲ極メ、二里計山手ノ民家ニ避レ、軍散シテ後下關ニ出タリシニ、市街悉ク避遁シ、一食モ為スコト能ハス、因テ大里ニ渡リ宿泊シタリ、戦争ノ時ハ山上ニ登リ遥ニ見物シ、初メ引キ島又彦島トスニ砲声アリテ、双方凡三十発計ノ後、直ニ關ノ前海ニ乗リ入リ、亀山八幡又ハ阿彌陀寺、其外市中ノ土蔵或ハ大家ニハ残ラス一二発モ打チ懸ケ、砲台ニハ勿論数十発、或ハ汽船ニハ数十発打チ懸ケ、汽船乗組ノ兵士ハ海ニ飛ヒ入、陸ニ上リ逃行ク形状ハ尤モ見苦シカ

リシト、汽船沈没スルトキハ、前田・壇浦砲台ノ兵モ悉ク山手ニ逃去リタリ、

夷船ハ大砲十六門計リヲ備ヘ、甲板上ノ大砲ハ尤モ大ナル者ナリシトソ、而シテ壇ノ浦砲台初メニ破レ、兵士モ這々山手ニ遁去リ、其時夷人ハ脚舟ヨリ砲台ニ上陸シ、大砲ノ火門ニ釘ヲ打チ、火薬ハ海中ニ打捨、小銃或ハ旗・槍ノ類ハ本船ニ運ヒ、次テ夷人ハ砲台近辺ノ民家ニ放火シ、而シテ徐々ト本船ヘ引取リ、一時許リノ間砲台前ヲ徐カニ乗廻リ、瀬戸内ニ向テ発航セリ、其時ハ未ノ下刻頃ナリシトソ、此船満珠島辺ニ走セ行頃、長州ノ応援兵二百人計リ甲冑・陣羽織等ヲ着シ、小銃・弓・槍ノ類ヲ携、貝・太鼓ヲ鳴シ押出シタリ、然レモ夷船出航ノ後ナルカ故、両所砲台ヲ巡視シ、後阿彌陀寺ヲ宿陣トシタリ、此隊将ハ毛利能登（元美）ト云フ門閥ノ人ナリト云フ、

門司・小倉辺ハ何事モナク、皆人海辺又ハ山上ヨリ見物ノ人夥ク、何カ祭式ニテモ見ルカ如シ、下ノ關ニハ手負、又ハ流丸ニ当リ死シタルモアリ、各家屋ヲ破ラレ、悲歎スル者多シト、実ニ門司（福岡県北九州市）大里ノ人民ハ対岸ノ火ヲ見ルカ言ノ如クナリシト、

又小倉駅出張村山某（鹿児島下町商人ナリ）報信ニ曰ク、下關ニ於テ五月十日夷国（亜国）蒸気船一艘、横濱ヨリ長崎ヘ廻船、下ノ關近ク乗リ来候処、長府受持ノ台場ヨリ不意ニ大砲打掛ケ候ニ付、商船ノ事故武器ノ備無之、三ツ四ツノ大砲ニテ船ノ胴ヲ打レ候ニ付、如何様水入リニ相成候半カ、其時夷船ヨリ小舟一艘ヲ卸シ、水手五六人ニ、頭立候夷人二人白キ小旗ヲ振リ立テ、台場ニ向ヒ漕来リ、上陸ヲ心懸候様子ニテ候処、台場ヨリ大小砲ヲ以テ見澄シ打掛候ニ付、小舟ハ打砕カレ、乗組人残ラス沈没（沈没ニアラス）致候由、其時本船ノ甲板ヨリ何カ声ヲ上ケ、両手ヲ命（合力）セ拝ム様ノ事ヲ致候由、如何様助命ヲ乞ヒ候仕方ニテモ候半ト噂仕候、台場ヨリハ強ク大小砲ヲ打掛候ニ付テ、船ヲ返シ逃ケ去リ候由、夷人ハ何心モナク台場近ク来リ通候ニ付、誠ニ不意ノ事ニ相違無御座ト評判仕候、此台場ニハ、近頃ヨリ中山侍従様隊将ニテ、浪士六七十人御引列御受持ニ相成候由、外ニ萩・長府ノ人数モ、関中諸所ノ陣屋ニ凡五百人計集リ候由ニ相聞得申候、中山様ハ先頃ヨリ下ノ關阿彌陀寺内ニ御滞在ノ由、攘夷御見届ノ為メ御下向

天朝ヨリ御遣シト申ス事ニテ、市中御通リノ節ハ皆下座

仕候、大形毎モ御歩行ノ時ハ、浪人十二三人モ御供ニテ候由、折節ハ遊所ヘモ御出有之候由、
朝廷重キ御使者モ、乱世ニハ別段ノモノトノ評判ニ御座候云々、

## 三三八　鈴木其他進退

五月廿六日
本日、御小納戸鈴木宇左衛門（朱）「初直子ト呼リ」　御使番ニ、同藤井良節御広敷御用人　貞姫様（近衛忠房公御簾中）へ附置レ、御小姓奈良原幸五郎（繁）御小納戸見習ニ、御小姓松方助左衛門御小納戸ニ拝ス、

## 三三九　汽船白鳳丸大坂ヘ進航

五月廿七日
汽船白鳳丸大坂ヘ進航ス、
本日御用人市来次十郎・当番頭伊集院静馬両名、御勝手方掛御用人ニ拝ス、
当時気候不順、眼疾大ニ流行、感染シテ悉ナ人苦メリ、斯ノ如キノ流行ハ、近代希有ノ事ナリト云フ、

## 三四〇　姉ケ小路少将遭難報告（本田彌右衛門大久保中山ヘ）

尚々御両者折角御自愛専一奉存候、
御揃御安康珍重奉存候、乍恐
御両殿様益御機嫌能被遊御座恐悦奉存上候、爰元中川宮　陽明殿益以御機嫌能、御同慶奉存候、然ハ去ル廿日夜姉小路少将（公知、国事御用掛）殿刃傷之事、不取敢先日申上越候通ニテ、何者之所業トモ不相分、然処其場江無鞘之刀壱腰落居候、姉小路家ヘ持返リ相改候処、刀銘奥和泉守忠重ト有之、拵之模様一体薩刀ラシク有之ナト評判、其内肥後藩士之鑑定ニテ、一奸策ヲ以、薩刀ラシキ拵ノヲ落シ置タルヘシ、其場之始末刺客ニモ成程之者、如何ニモ落ス筈モナシト申タル由ナトヽ、風評承事ニテ候、然処昨朝坊城殿ヨリ之差図ニテ、朝命ト申処ニテ、會津藩ヨリ東洞院御取添屋敷江参リ、田中新兵衛（近来雄平ト致改名居候由ニテ候）・仁（朱）禮源之丞（「景範旧名」）并同人僕十人ヲ御用召ニテ、坊城家ヘ列越タル由、其朝御用ニテ
中川宮江、拙者ニハ参　殿中ニテ、御屋敷之人数モ一人モ不存、右通之次第故子細承候処、去ル廿日夜之御

不審ト申事ニテ、公武ヘ伺又ハ諸次第別紙ヲ以、筋々申上越候通ニテ誠ニ驚愕之次第、何共筆紙ニ難尽、就ハ此末如何様之時宜欤ト存候内、田中新兵衛儀ハ、東奉行所ニテ自裁イタシ相果候、此次第モ別紙ニ申上候通之事ニテ、子細全ク不相分、弥右ニテハ薩藩之受カブリト申様ニ相当リ候姿ニ可相成、何共苦心遺憾、小生心中モ御憐察被下度候、邸中人心疑惑ハ勿論事、如是ニ至テハ又不可救之勢ト罷成、浩歎之外無之、尤此般之一条夫々微細ニ別紙ニ申上越候付、外方引合等之儀、別紙通ニテ遺洩無之候、右ニ付税所容八（篤旧名）事同宿ニテ、其朝不在故免カレ候ト申ハ、全体田中雄平（新兵衛変名）外ニ両人・僕十人ト、坊城家ヨリ會津承知ニテ、姓名モナク人相書等モナク候故、跡ハ尋方モ先無之様子、乍然朝廷ヨリ御疑念モ有之、御用ト申候ハヽ速ニ罷出、青天白日更ニ無曇旨申迄之事、若万々一実事ニ候ハヽ、一身ハ始ヨリ擲タル筈之事、何分

御名目ヲ奉丙テハ、毫厘モ不相済事勿論ニテ、今般之事容八ヲ隠シ、早ク下シ候様ニテ、疑念ヲ被重候テハ、御為恐入候訳、且旅宿近辺之者共モ、今日迄モ罷居候事ハ皆々明白相知リ居候次第故、他之幕奸ヲ誅候欤、島田如キヲ討候欤ト、全ク類ヲ同シカタク、武士義理至情ヲ以一旦之災ヲ赦候訳ニハ尤難至、此上一疑念ヲ被掛候テモ、甚不容易事ト深ク吟味ヲ尽シ、一往大坂迄ハ罷下リ候得共、伏水御屋敷江罷居候様致シ置候、尤右之同宿之人ニテ跡以繁々出入致候テモ、隣家モ有之不宜候付、右通ニテ是迄公武ヨリ御探索モナク、新兵衛一人江疑念モ有之様子見切候ハヽ、早速差下候様可取計候、唯今之処ニテハ万一容八御尋ト相成候処ヘ、先日差下候トカ、行衛不相知ト欤申事ニ申立テヽモ、却テ是ハ　内命ヲ受候仕業欤ト不容易大疑ニ及可申、ケ様之変同宿之者江掛候ハヽ、兼テ可差下モ可留筈ト申ニ至可申、彼是百方熟評ヲ遂候上、右通取計候、尚両日之処ニテ、見切ヲ以早々差下候様ニ有之候方可宜機会ニ候ハヽ、無上之事候間、又計様モ可有之被存申候、此般之一条ニ付ハ、

宮様

陽明様甚御配慮ニテ、何共恐入候次第、事爰ニ至リ新兵衛割腹ハ難申之至難ヲ生シ、何分不容易至変故、士両人飛脚被差立候、右ニ付壱人高崎猪太郎儀ハ口上ニテモ可申上候付、御聞モ可被下候、尾州侯ヨリ丁寧之

御使モ参リ候、此内ヨリ　大樹公御暇、東帰之御願有之候処、尾州ヨリ頻ニ、夫ニテハ東西忽ニ隔絶ニ相成、不相済ト一盃之尽力候得共、幕議沸騰、帰心不可止ニ付、今日ハ表向御暇之事被仰出御模様、尾州・會津随従被仰出哉之模様ニ御内決ニテ候、守護職ハ御取止ニテ、巡番之三諸侯ヨリ相勤候様、左候テ長州ヲ御呼寄ニテ、屹トイタシタル職掌御命被成筈ト欤、左候テ三(実)條(美)ヲ非常ニ関白職江御推任ト申極内之説頻ニ伝承候、只々天下之形勢一大変ニテ、攘夷ナラテハ度外之事、(朱)「(朝廷　幕府ヲ云フナラン)」全ク東西之云々ニ可相転之形隠然胚胎、最早今日大樹公東下之命ヲ以、天下瓦解氷裂之境ト可相成欤ニテ候、是亦実ニ無根之浮説、貴公様方江可申上儀ニテハ無之候得共、隠微之間感通髣髴カクナルヘキ之有様ニ思ナサレ候侭、不取敢筆紙ニ認メ遣申候、只々胸中ニ御含可被下候、決テ漏洩被下間敷候、所謂痴人面前ニ不可説、夢ニテ御両所限ニ奉願上候、申上度条モ候得共、短筆之及所ニ無之候、何事モ天数之然ラシムル事欤、人力精神限アル者ニテ、安堵イタシ存乏進退只命ニ任居申候、御遙察奉願上候、書不尽言、恐惶百拝、

亥五月廿七日　　親雄頓首

中山君

大久保君

御連名御免

〔本田親雄書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

## 三四一　中山中左衛門大久保一蔵へ書翰（細島ヨリ）

三條初暴論モ　御上京相成候処、胆モツブレ候由ニテ、心替ニテ中川公等ヘ参上、是非　君公御召留被遊度ト再三言葉モ被尽候由、外押テ御察可被下、勢ヲ抜コトハイト安ク、恐クハ三日ヲ経スシテ当座一新ハ差見得候、シカシ遠大之御深謀モ被為在、此御都合ニイタリ候、尤幕役共ハ、小松家一言ニテ胆モ魂モ飛去、アワレ成有様ト被伺申候「(朱)(放言ニ過ク)」貴翰相達具ニ拝承仕候、先以上々様方御揃被遊御機嫌克、御同慶難有奉存候、貴兄ニモ弥御安康御奉職奉珍重候、於爰元　三郎様益御機嫌克御滞在被遊、御同慶奉存候、御供舟間違之義有之、イマタ出舟不致無御拠于今御滞在之御事、実ニ忍兼候仕合ニ御座候、

一京御都合之義ハ何モ御掛念被下間敷候、時世ニハヨキ御上都合ニ御座候、

一重富等御名代一条ハ、先当分ニテハ及不申候、(島津備後珍彦旧名)

一國分迄御出馬之段承知仕候、可成其日ハ早目参候様可仕候、一刻モ早御目ニ掛度御座候、

右アラ〳〵取込ニマカセ、早々申上候、已上、

廿八日　　中左衛門

一蔵君

何モ御直ナラテハ、書ハ中々尽兼候可祝、

〔中山実善書翰（大久保利謙氏所蔵甲東叢紙）にて校訂〕

## 三四二　喜入摂津小松帯刀ニ与ル書

返ス〳〵時季御厭被成候様ネンシ上申候、イツモナカラ乱筆幾重ニモ御海恕被下度奉存候、乍慮外伊集院ヘモ、宜御鶴声願上申候、暑中御マキラレ候品物何欤見立差上度存候得共、此節ハ間ニ逢兼申候、後便ヨリサシ上候様可致候、アラ〳〵カシク、

四月廿九日貴墨、去ル廿五日相屆辱致拝誦候、中春之節御座候得共、弥御安清被成御精務候由、大慶奉存候、於其御地上々様被為揃、倍御機嫌克入ラセラレ候段、承知仕候得共難有奉存候、随テ小子無異致連勤候間、乍慮外御安意被下度奉存候、　シカレハ御地攘夷之一件、何地ヘ消失候哉、只今其沙汰無之、御国人数モ引取申渡相成候ハ昨日ニ御座候、左候得ハ直ニ違　勅之取計候様相見得候、幕評如何之事ニ候哉、不埒之次第御座候、然共小笠原侯又候大坂ヘ被罷越候由候間、同様相替儀カト存計御座候、偖又当使ヨリ当地珍敷品々御恵投被下、別テ難有奉存候、御厚情之程不浅、忝深ク御礼申上候、将又於御国許何モ御静謐之由、幾重ニモ恐悦此事奉存候、当分御軍政之儀、勿論何篇多端ニ御手付サセラレ、且御造営并御殿御休息御建替、最早御手付為申事ニテ有之ヘク奉存候、如何計カ御繁雑奉察候、調練之儀〔久〕モ御新法〔斉彬公ノ洋式ヲ革メ御家流ト唱ルヲヒ〕盛ニ被行申筈ト想像被申候、御繁雑之折柄御覧モ御面白ト奉存候得共、旁々御礼時候御尋申上度如斯御座候、恐々再拝、

五月廿九日　　喜入摂津

小松帯刀様

閣下

〔喜入摂津書翰集（東京大学所蔵）にて校訂〕

## 三四三　忠久公霊祀

浄光明寺之義、猶昨日モ参謁拝見仕候処、　御沙汰之通御書院前ニテ、少モ御差支ハ有御座マシク相考申候、尤カレヘトノ　御沙汰ニ御座候間、御社一時ニ御取付

有御座度、ケ様ノ折カラ折角　御鼻祖(忠久公)　御崇敬之訳モ
相立、旁可然御儀ト乍恐奉存候、是モ寺社方計ニテハ
迚モ不参候付、御手元御許ト申物ニテ有御座度、尤徳(南林寺)
豊殿御同様被仰出候付、御賢考偏ニ奉合掌候、猶得ト
御勘考モ可被下候、

## 三四四　英艦渡来ノ形勢諭達（藩内布達）

不時
御備立(朱)「(前巻参照)」
御覧、依時宜ハ
御出馬被遊儀モ可有之候条、兼テ其心得可罷在候、
出陣相図等之儀、以別紙被
仰出候、此節之儀攘夷ハ勿論、夷土御征伐、彼等悉
降伏不致候テハ、神州之御武威難相振、旁
御両殿様御配慮之
御旨趣被為　在候御事候条、猶又一同精心ヲ凝シ、
御趣意貫通一致一和ヲ本トシ、追々被
仰出候、姑息偏固之旧習ヲ失除シ、忍不成大之四字
熟考肝要之事ニ候、万一モ不可忍之非礼ヲ更候共、
御軍律有之候ニ付、私之議論一切可為無用候、此由
可申渡旨被
仰出候、
文久三亥(朱)「五月」

## 三四五　開戦ノ準備

三四五ノ一　御定場左之通
一両御旗本
右、御楼門并
二之丸御門ヘ可参着候、
一御先手
右、下馬辺ヘ可参着候、
一御城下守兵
右、一番ヨリ四番迄
造士館ヨリ南泉院前迄、
五番・六番ハ岩崎御門前可参着候、
一一番早鐘
但方限貝之役順次
右相図候ハ、組々方限ヘ可相集候、
一二番早鐘
右相図ニテ御定場ヘ可集着候、

以上、

本へ通達留ヨリ

不時

御備立

御覧等之儀ニ付、

御別紙二通之通被

仰出候条

御深慮之程、一統謹テ可奉承知、此旨向々へ不洩様早々可致通達候、

文久三亥

五月

〔島津久篤〕大蔵

〔小松清廉〕帯刀

〔川上久遵〕但馬

〔川上久美〕式部

三四五ノ二 〔本〕書添「(本田弥右衛門)」

償金一件ニ付三條殿へ罷越候処、昨夜関東ヨリ着之由ニテ拝見、別紙一通水戸中納言殿ヨリ殿下へ被差上候ト之御沙汰ニテ候、償金ハ不渡筋ニ評決之趣、去ル七日付之書面ニテ、尤御私書トモ公用トモナク、ケ様之重大之事件右通平々底之次第故、関東之廟議御察可被下候、是モ此一書ニテ弥被相渡候哉、イマタ評決マテニ不相渡候カ取々ニハ候得共、自然三五日中ニハ関東ヨリノ一左右モ可有之、別紙書面写相添差上申候、武田耕雲(正生)斎早々江戸へ着ニテ、一橋其外京師之形勢ソレニテハ不相済ト申ス論ヲ立候テ、不相渡筋ニ再度相決候哉ニモ風評仕候、去ル四日頃江戸仕出シ、水戸士等之書翰写一通差上申候、関東モ償金論ハ紛々之事ト相見得申候事、

本田彌右衛門

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

## 三四六　当時藩内ノ人気

馬關ニ於テ数回夷船砲撃ノ説、逐日伝播シ、元来鎖攘主張ノ士握腕シテ、攘夷ノ先魁長州ニアリ、我藩魁タラサルヲ遺憾トシ、若シ英艦渡来セハ直ニ砲発粉砕セン、命令ヲ待ハ後レタリトスルノ形況ナリ、茲ヲ以テ藩庁大ニ憂慮シ、命令ニ違ヒ、軽忽ノ所為アル事勿レ、若違背スル者ハ同伍・什同罪タルヘキ旨、操練終テ物

主ヨリ厳令ヲ下シタリ、斯ノ如ク士気ノ奮興ハ喜フヘシト雖モ、又大ニ憂フル処ナリ、殊ニ生麦事件英夷無礼ノ言ヲ以テスルノ説ヲ聞キ憤懣シ、或ハ長州外夷ノ為メ国辱ヲ取レリ、其恥辱ハ本藩ニ於テ雪キ、而シテ長藩再ヒ口ヲ開クコトヲ得サラシメント競ヒタリ、実ニ盛ナリト謂フヘシ、

## 三四七　英国艦隊襲来準備

〔番号三五一ノ一と同文により削除〕

## 三四八　攘夷期日布令

一攘夷之儀、五月十日可及拒絶段御達相成候間、銘々各之心得ヲ以テ自国海岸防禦筋、弥以テ厳重相備、襲来候節ハ掃攘イタシ候様可被致候、

右之趣、万石以上・已下之面々ヘ不洩様可被触候事、

四月

一別紙通幕府ヨリ被　仰出候ニ付、是迄申渡置候通、愈征夷之為、粉骨砕身可尽誠忠モノナリ、

一攘夷之儀ニ付、別紙二通之通従　公義被仰渡、猶亦御別紙之通　御筆ヲ以テ被仰出候条、一統謹テ可奉承知候、

文久三年五月

小松帯刀
川上但馬
川上式部

右之通亥五月仰渡相成、写置候事、

## 三四九　中川家謝詞

小河彌〔一色〕右衛門列其御屋敷ヘ滞在中、御家来中ヨリ彼是厚ク御世話ニ預リ候趣、是又帰郷之上申出忝存候、右御挨拶軽微之至ニ候得共、別紙目録之通致進入度、宜被　仰達可被下候、

目録左之如シ、

御肴代　金千匹
大豆　百俵

中川修理大夫〔久昭、岡藩主〕

島津三郎様

## 三五〇　参考　伏見大黒寺有馬新七等墓碑ノ傍ニアル石燈ノ歌

豊後国岡

小河彌右衛門一敏

ともしひの光もそへなん万代に
かゝやきわたれますらをのたま

後れしとおもひしものをなからへて
いかに手向なん言の葉もなし　一敏

南豊　矢野勘三郎

藤原義和

忠魂兼家魄　刃下死当休　清見淀川水　英名千歳流

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編
文久三年六月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料」(紙数八七枚)」の記載あり〕

目録


本藩商賈村山某報知書牘六月朔日
小倉村上銀右衛門報告六月二日
姉ケ小路少将殿刺客嫌疑者仁禮源之丞云々藩達
小松帯刀其他沖ノ小島砲台巡視
小倉本陣村上銀右衛門ヨリ中村吉左衛門村田與兵衛ヘ報信
小倉人某書翰六月五日
姉ケ小路暗殺ノ嫌疑者
肥後球磨相良家ノ使者来覲依頼ノ条件六月七日
英人金時計ヲ太守公ヘ送ル
祇園祭六月十五日
馬關ニ於テ長藩夷船砲撃ノ始末在崎中原猶介友人ヘ報告書
茂久公御参府御奉書
松木弘安ヨリ中越候書状之写六月十七日
五ケ所砲台装置砲数
諸所砲台操練
〔参考〕大小砲数及費用表
在江戸喜入攝津同僚ヘ報告
喜入攝津小松帯刀ヘ書翰
英艦渡来申立云々達書
汽船青鷹丸延岡藩砲発
〔参考〕道島正亮紀事抄
茂久公御近習三名ノ不都合御内沙汰
神奈川碇泊英艦鹿兒島ニ発航達書
喜入攝津一橋殿ヨリ英艦鹿兒島ヘ発航ニ就テ平穏云々演達

英艦渡来云々其他報告
江戸西丸炎上其他浪士横行等ノ報
京都雑報
京師ノ形勢報告
五ケ所砲台及ヒ水軍隊大操練
英艦隊渡来ノ事由ヲ問ハシム
英艦隊当日ノ形況
〔参考〕安田助左衛門日記鈔
各砲台其他準備
各郷ノ兵隊各持場ニ出張ス
櫻島ノ警衛
兵糧弾薬ノ準備
英国軍艦七艘鹿兒島湾ニ侵入ノ形勢

## 三五一　〔本藩商賈村山某報知書牘六月朔日〕

第四回本藩商賈村山某報知書牘ナリ六月朔日〔朱〕「（事柄全シキ故彙記ス）」

前文略ス、米国ノ蒸気軍艦一艘、先日不意ニ打ラレ候ニ付、今度ハ横濱ヨリ態々馬關ニ押来リ、壇ノ浦台場近ク乗リ懸リ、直チニ放発致候、此日萩ノ方ニ近頃買入相成候蒸気船壬戌丸御乗試ミニ三田尻辺諸方乗廻シノ御手当ニテ、御嫡長門守〔毛利元徳〕様御乗込相成リ、間モナク夷船相見得、台場ヨリハ俄ニ打立候ニ付、御見物被成居候由、尤長州蒸気船ハ前田台場ノ方、一艘ハ田ノ浦ノ方ニ掛リ居候真中ヲ乗通リ、夷船ハ大砲左右同時ニ打放シ、御嫡御乗船ノ胴ヲ打貫キ、銅庫ヲ打破リ候ニ付、死人二十余人モ有之、長門守様ニモ早々御上陸、山手ノ奥ニ御遁ケ入リ相成候由、其外数発打掛、一艘ハ水涯ヨリ下ヲ打貫キ、水入リト相成リ沈ミ、今ハ帆柱ノミ少々相見得居申候、夷船ノ方ハ左右ニ大砲八挺程備有之、合テ十六打ニテ候、大方左右一緒ニ打放シ、台場ヨリモ数打ノ大砲ヲ打放候ニ付、凡ソ一時余ノ間ハ山々モ崩ル、様ニ有之候、後ニハ夷船ノ方ヨリ台場近ク乗リ付打掛、之レニ長州方モ弱リ候由、台場ヨリモ手稠ク打掛、手負・死人多ク、夫故引取リ申候トノ評判ニ御座候、此時夷船ハ小舟三四艘ヲ卸シ、直ニ台場ニ上陸、大砲ノ火口ニ釘ヲ指シ、在家ニ火ヲ掛ケ、小砲・旗・幕・槍・刀ノ類ハ本船ノ様運ヒ取リ、夷人モ三四人ハ死候由、夷人台場ヲ引取リ候跡ニハ、横文字ニ書タル張札有之候ヲ、和解ニ相成候処、長州人ハ軍ヲ好ムト見得候得共、台場ノ構悪シク大砲モ宜シカ

ラス、兵士モ逃足早シ、此様ニテハ後日数艘渡来シテモ心足ラス、今一涯用意シテ相待ツヘシトノ趣ニテ御座候由、小倉ノ方ハ全ク手出不致候ニ付、何モ差障リ無之、皆遠方ヨリ軍見物致居候、前田・壇ノ浦等ノ台場ヘハ後詰ノ人数二三百人、太鼓・貝ノ行列ニテ甲冑・陣羽織・鉢巻等ニテ、大小ノ旗押立出懸ニ相成候得共、夷船曳取リ後ニテ興ノ醒タル次第、市中ノモノハ物笑ニ致候、

〔毛利慶親〕長州様ヨリ〔小笠原忠幹〕小倉様ハ、加勢ノ御掛合ニテ双方ヨリ挾打ノ手段ニ候処、小倉ヨリハ未タ　公義ヨリ攘夷御日限モ御達無之、京都ヨリノ御達ハ、世上ノ噂同然ノ事候ニ付キ難被応、又此後　公議御達シノ上モ、挾ミ打チノ御差図ニ任セ申スヘシト突キ切リ候ヨシ、ケ様ノ掛合、長州方ニテハ中山〔忠光、国事寄人〕侍従様ノ御差図ニ御座候ヨシ、久留米・柳川・福岡・秋月様等ヘモ御加勢ノ掛合ニ、使者罷越シ居リ候、如何様ノ御答振リニ相成候カト申ス事ニ御座候云々、

## 三五二　〔小倉村上銀右衛門報告六月二日〕

イキリス英国ニ非ラス仏ノ誤聞ナリ軍艦壱艘

六月朔日八ツ頃、上方之方ヨリ参リ、下之關ヘ繋船仕、〔尤カ〕左長州様之御手船異国作リノ船弐艘繋船之処、両艘之間ニ乗付、双方ヨリ大砲打立戦相（相ハ争ノ誤書ナラン）ニ相成及大乱、イキリス舟ヨリ打出シ候玉薬三ツ玉根（玉根ノ二字不解）相用、長州様御手船庚申丸ハ底ヲ打抜水入リ、柱計見ヘ居申候、壱艘之蒸気船之方ハ友（友ハ艦ノ誤書ナラン）ヨリ打込、蒸気之竈ヲ打抜七分通入水、散々之大破、怪我人数拾人之由、此御手配蒸気船ハ、長州様之表殿様（表殿様トハ若君ノ意ナラン）先日下ノ關ヘ御乗廻シ、昨日御乗船ニテ三田尻ヘ御越被遊候賦ニテ、御仕構御備立ニ相成候ニ付、御本陣ト見請候哉、別テ此御船ニ打放候故、此御船伊岐（伊岐トハ地名ナラン）之様逃候処、追カケテ追打ニ数発相放候テ、右之在合ニ御座候、

依之細江丁（細江丁ノ三字不解）、此前之通ニ玉数相込、破損所多ク御座候、表殿様ハ昨日陸路御行被遊候由、

一イキリスヨリ打放候玉、数ケ所下之關ヘ当リ、家蔵破損多ク、壱弐ケ所焼出申候、

一イキリス船数々打放、下之關之地方ニ寄テ続打ニ相放タル事ノヲロシヲ（此辺誤脱アラン）揚ケ、上方之方ヲサシテ罷通候付、近海数船参居申候テハ有之間敷哉ト風〔説〕節

仕候、勝時ヲ揚ケ逃立候趣ニ御座候、
先日以来四度ニ及、イツレモ下ノ關目当ニ参候、大騒仕候、下ノ關ヘハ、商内（商内ハ商売ノ誤書ナラン）家・定問屋皆々近在ヘ逃去、漸々壱軒ニ壱人位ツヽ居申候、
一先達以来下ノ關御滞留被成候中山殿御二男、昨日飛船ニテ御帰京被遊候由、
一長州様ヨリ昨夜久留米様（有馬慶頼）・筑前様（黒田斉溥）下之關ヨリ御使差立、五人程右早打ニテ御通行御座候、此人数之内弐人ハ、久留米水天宮之社家牧（牧ハ真木ノ誤ナリ）和泉守（保臣）同類ノ浪人有之候由承申候、
右之通昨日之次第、荒増御内々御注進申上候、先日ヨリ最早四度ニ及ヒ、此末之処如何ト案労仕候、イキリス地方ニ於テ打放候故、下之關山手之御台場ヨリ打放之玉ハ船ヲ越、海中ニ入申候、前断之仕方御注進申上候、以上、

六月二日　　村上銀右衛門

## 三五三　姉ケ小路少将殿刺客嫌疑者仁禮源之丞云々藩達、

三五三ノ一
先月廿六日朝、於京師姉小路少将（公知）殿刺害之嫌疑ヲ請、仁禮源之丞（景範）・島津織部家来田中新兵衛（雄平）儀、伝奏坊城宰相中納言（俊克）様ヨリ御達之旨ヲ以、所司代家中同伴ニテ、右坊城様御宅江御預相成候段申来候、就テハ不容易重大之事柄、御名目ニモ相係、被為対
天朝
御両殿様深
御恐懼之御事候得共、昨年来
尊王之
御忠誠
御尽力之御偉業ハ、一同奉承知通ニ候間、此末之処一時之浮説流言、如何様致沸騰候共、尚永年
朝廷尊奉之
御至誠御卓立之
思召ニ候間、諸士末々迄疑惑ヲ不生、愈　御趣意奉汲受、忠勤相励候様可申達旨
御沙汰被為
在、誠ニ以難有次第之御事候条、此旨一統奉承知候様向々江可致通達候、

六月　　大目附江
帯刀（小松清廉）

三五三ノ二
今度英国人来着之筈候ニ付テハ、幕府ヘミニストルヨリ御届之上御免相成候訳ニテ、公然御引受之都合ニ相運候ニ付、英人共ニ対シ無礼之振舞等屹度無之、取締向ニ付テモ厳重行届候様被仰出候事、
右之通被仰出候条、御趣旨之程一統奉承知、再重申渡候通、聊不法之儀共屹度有之間敷候、此旨不洩様向々へ早々可致通達候、
六月　日　　攝津喜久高

## 三五四　小松帯刀其他沖ノ小島砲台巡視

六月五日、国老小松帯刀及ヒ御軍役奉行御側役中山中左衛門・大久保一蔵等其他当局ノ吏員、沖小島砲台ヲ巡視シ、放発操練ヲナサシム、櫻島各砲台モ同シク巡視セリ、○本日ノ巡視ハ水雷沈設ノ儀アルニ依リ、洋学者石川確太郎(正竜)其他集成館局員一同出張セリ水雷ノ製式ハ照国公指麾シ玉ヒ、電気点火ノ製式ナリ、詳ニ同公御事蹟録ニ記セリ

## 三五五　〔小倉本陣村上銀右衛門ヨリ中村吉左衛門村田與兵衛ヘ報信〕

第五回六月五日（全上）
小倉本陣村上銀右衛門ヨリ中村吉左衛門・村田與兵衛ヘ二名共ニ御趣法方筆者、予ネテ用向往来ノ者ナリ五月十五日ノ報信左ノ如シ、
前文略ス、去十日七ツ時分、アメリカ軍艦一艘豊前田ノ浦沖ニ参リ、暫時ノ後下ノ關ト長府ノ間前田村台場ヨリ大砲打放チニ相成リ、双方大打合ノ上、右船ヨリバツテラ四艘ヲ卸シ、大砲三四挺積入レ、凡百人計リ乗リ付前田村台場ヘ上陸、台場人員ハ散々ニ逃去リ候ニ付、御仮屋ヲ初メ村中凡ソ六十軒計リ焼払、分捕等沢山イタシ本船ヘ曳取候由、田ノ浦ヘハ初メ小舟ヲ以テ夷人ヨリ長州ト戦致候ニ付、此方ニハ妨一切不致候ニ付、鎮リ見物可致旨及挨拶候由、日本仮名書ノ書付一通差出候由、之レハ妨不致トノ趣ニテ御座候、右通十分ニ分捕致、日入前頃上方ノ方ヘ出帆致候、左(尤)田ノ浦ニテ日本語ヲ以テ、遠カラス数十艘ノ軍艦渡来可致、其内試ノ為今日ハ小軍ヲ致シ、又海陸測量ノ為ナリト申出候由、
一日入過頃ヨリ長州ノ人数五六十人門司浦ヘ参リ、夷船再ヒ渡来ノ向候故、豊前地ノ方ヨリモ挾打ニ仕掛候手配ニ御座候、

一中山殿御二男、此内ヨリ下ノ關ヘ御下リ御滞在、久留米等ヘモ國司信濃〔親相〕ト御出、真木和泉其外浪士二十人計リ御召列レ、去ル二日上方ノ様御出帆相成候（此後大和暴動ニ出テタルナラン）

一國司信濃モ四五十ノ人数ニテ、先月廿五日ヨリ久留米ヘ差越居、今五日小倉通行下ノ關ヘ罷渡候、國司ハ家老ト申候得共、実ハ大番頭ニテ候由、攘夷掛リニテ、家老名前ニテ取扱候ヨシ、今日家来ノ者ヨリ承及申候、

一長州ニモ遠カラス数艘ノ夷船渡来可致トノ用意致シ居候処、此節ノ負軍ニテ人気モ進兼候由、尚追々御注進可申上候、末略ス、

尚々有川市左衛門殿・坂本休右衛門殿（有川・坂本ハ本藩ヨリ事情探偵ニ出サレタル者ナリ、）今夜着、直ニ下ノ關ヘ渡海見計相成候間、委細ハ御両人様ヨリ御注進可相成候、

以上、五回ノ事実ハ誤謬アルト雖モ、今回長州ニ於テ攘夷ノ手始ナルカ故、記シテ以テ参考ニ供ス、此レヨリシテ長州ニ於テハ、党派分裂軋轢甚タシク、稍敵視ノ勢アリ、攘夷論ノ勢強ク、加之中山忠光朝臣・高杉晋作其他攘夷家ト倶ニ藩主父子ノ刦迫シ同論トナシ、吉川等ノ論ハ後レタリトシ擯斥シタリ、斯ノ如ク四五廻ノ戦ニ一回モ勝利ヲ得タルコトナシ、中ニモ亜・佛両国ノ為メ大ニ敗ヲ取リ人気甚タ挫ケタリトナシ、而シテ遂ニ元治元年甲子八月、亜・英・佛・蘭四ケ国連衡シテ、大小ノ軍艦十八艘ヲ以テ馬關ニ迫リ、長州大敗ヲ取レリ（元治元年八月ノ部ニ詳記ス、）

## 三五六　〔小倉人某書翰六月五日〕

（三五六ノ一）第五回（小倉人某カ書翰ニ拠ル）六月五日〔朱〕「（仝上）」

佛国軍艦一艘下ノ關ニ乗リ掛ラントセシ時、壇ノ浦・杉谷・前田ノ三砲台ヨリ放発シタリ、佛船モ予メ期シタル事故、応発シナカラ下ノ關近ク乗リ掛リ、進退旋回シテ砲台或ハ長州ノ汽船ヲ撃チ、其近傍ニ碇泊ノ和船三艘ハ同時ニ撃チ沈メラレタリ、此和船モ旗標或ハ槍類ヲ備ヘタルカ故、守防ノ船ト認メ撃タリト云フ、其他市中各所ニ撃チ掛ケ、家屋・土蔵ノ類大ニ毀壊シ、砲台ニモ多少ノ死傷アリ、然シテ台場ノ方先キニ砲発ヲ止メタリシ故、佛船ヨリ小舟ヲ以テ上陸シ、長府ノ方ニ進軍セント大小砲隊ヲ備ヘ、台場近キ人家数十軒ニ放火シタルノ際、長州ノ陸兵応接ニ来リ、日モ暮レタルカ故暫時戦ヒテ帰艦シ、当夜瀬戸内ノ方ニ向テ航

シタリト云(応援兵ノ隊長ハ高杉晋作ナリシト云フ)、長州ニモ本日ハ意外ニ敗走シ、死傷多ク、兵気大ニ阻喪セリト云フ、市街ハ損害ヲ蒙リ、怨嗟悲歎ノ声ノミニシテ、他日又必ス数十艘来港スルヤ疑ナシト、制止モ耳ニセス諸方ニ避遁シ、悉ク空屋トナレリト云々、

斯ノ如ク二三回ハ撃走セシカトモ、佛軍艦ノ攻撃ニハ頗ル敗戦シ、人気甚タ衰ヘ、重テ数艘来侵セハ全敗必定ナリトテ軍備ヲ厳ニシ、或ハ巷説ヲ禁シ、或ハ小倉ト挾撃ヲ議シタリト雖モ応セサルカ故、大ニ怨恨ヲ懐キタリ(後日長兵小倉ヲ侵シタルハ、此怨恨ニアリ)、或ハ馬關破ルヽトキハ、萩城ハ馬關ヲ距ルコト十余里、殊ニ北海ニ望メルカ故、若南北同時ニ敵ヲ受クルニ於テハ保チ難シト、城ヲ山口ニ移セリ、此地ハ大内氏ノ居城ニシテ国中第一ノ要害ナリ、匆卒ノ遷城ニテ、寺院或ハ民家ニ寄宿ヲ設ケタリ、是ヲ移城ノ初メトス、而シテ馬關其他海防ノ要衝ハ砲台ヲ増築シ、新古交々ノ砲ヲ増置シ、或ハ遽ニ鋳造ニ着手シ、頗ル忙シキ形況ナリ云々、

又長・防二州ノ人心ハ大ニ沸鼎、毛利ノ名家モ外夷ノ為メニ、亡ルノ時至レリト擾々トシテ、攘夷論家ヲ除クノ議ヲ立ルノ一党モ茲ニ於テ起リ、或ハ末藩長府・清末或ハ岩國等ハ頗ル憂苦困惑、暴徒及除ノ計画ニ他事ナシ、斯クノ如ク党派分立セシ故、暴論家ハ頻リニ人心ヲ纏メ所論ヲ完フセントシ、或ハ恐嚇シ、或ハ遊説シ、百方力ヲ尽セリト雖モ、表ニ承服ノ姿ヲ示シ、内ニハ避遁セントスルモ多シト云フ、

斯ノ如ク危迫ノ形況ナルカ故、守禦ノ道モ又少シク調ヒ、再来セハ必至ニ戦ハントノ準備ナリト云、

三五六ノ二

亥六月六日日入ノ時分、高崎佐太郎(正風)・木藤彦次郎ト申スモノ、大急ニテ京都ヨリ着イタシ候由、去月廿七日京都出立ノ由承候得共、琁ト不相知候処、八ツ後粗承候得ハ、外ニ野津七次(道貫)・赤塚源六(真成)トイフモノモ着イタシ、京都ノ大変奥向ヨリ風説有之候、姉小路殿害ニ逢レ候儀ハ此方ノ者共ニテ、仁禮源之丞被召捕、田中新兵衛トイフモノハ島津内蔵殿家来ニテ、此者モ一列ニテ、是ハ被捕候時自殺イタシ候由、其外段々徒党可有之、誠ニ一大事ニ候、右ニ付　近衛様御方ヘ被召付候モノモ御免被成、伏見ノ御仮屋ハ藝州ヘ御預ケ相成候由、中山中左衛門ハ来ル十日上京ノ筈候処被召留、高橋縫殿上京被致候由承候事、

一京都御留守居助太田彌兵衛モ、去ル九日晩着イタシ候由、姓名ヲ青木市ノ助ト替候テ着イタシ候由「(何等事由乎今知ルニ由ナシ)」

一薩州人近衛様御方出入御差留ノ由、一人モ京都ヘ不召置トノ風説ノヨシ「(訛言)」

一先月廿六日朝、於京師姉小路少将殿刺害ノ嫌疑ヲ受、仁禮源之丞・島津織部家来田中新兵衛、伝奏坊城宰相中納言様ヨリ御達ノ旨ヲ以、所司代家中同伴ニテ右坊城様御宅ヘ被召出、其侭東町奉行所ヘ御預ケ相成候段中来、就テハ不容易重大ノ事柄ニ付、御名目ニモ相係リ被為対

天朝、御両殿様深御恐懼ノ御事ニ候ヘ共、昨年来尊辺ニテ御忠誠御尽力ノ御偉業ハ、一同奉承知通ニテ、此末ノ処一時ノ浮説流言如何様致沸騰候哉、尚永年朝廷尊奉ノ　御至誠御卓立ノ思召ニ付、諸士末々迄疑惑ヲ不生、愈御趣意奉汲受、忠勤相励候様可申達旨御沙汰被為在候、誠以難有次第ノ御事ニ候条、此旨一統奉承知候様、向々ヘ可致通達候、以上、

六月八日　　帯刀小松　取次　平田伊兵衛

右ニ付勘訂、是程国家重大ノ御大難ハアルヘカラス、此已前井伊カ殺害ニ逢ヒ、薩人徒党ニ入候儀トハ同日ノ論ニアルヘカラス、彼ハ夷国内通トイフヘシ、是ハ

朝廷ノ近臣国中一時ニ恐懼ノ色ヲ生シ、直様国家ノ大臣一二頭モ上京シ、明ニ明弁降和シテ此憂ヒヲ可解ト、城中・城下共ニ平常ニ不替、砲声雅楽ノ音不絶儀ニ少モ恐懼ノ色ナシ、此仰出全ク尊　王ノ実意無之、却テ

朝廷ヲ軽蔑スルノ文意ニ候半、深可勘訂モノ也、

一前件ノ難事到来セサル前、中山中左衛門六月十日蒸気船青鷹丸ヨリ上京ノ筈候処此一事到来、則被差留、大目付高橋縫殿上京被仰付、御小納戸ハ岸良七之丞ヘ被仰付、十五日方上京ノ筈候旨申事候得共、其後度々飛脚等参リ候得共全ク不相洩、夫故ニ高橋上京ノ儀モ被召延、追テ日限可相知トノ由、右ニ付ヨシアシ全ク不相知事、

一右ニ付ヒソカ成ル噂ニハ、此節ノ事国家ノ一大事ハ扨置、実ニ日本ノ大事ニモ可相及故カ、粟田口宮様ト近衛様ナリ、

天朝ノ御逆鱗ハ御尤成儀ニ御座候ヘ共、薩摩ヲ御見捨

被遊候テハ、実ニ日本ノ一大事無此上事ニ御座候間、是ハ私共両人ヨリノ御願ニテ、是非御救助被成下、三郎罷登候様可致トノ御評議ト、夫故京都ノ事能程相成候トノ事ニ候「(朱)(事実ニ近シ)」

但実ニ左様ノ御計略モ無之テハ難相済、中々御大国ノ難有サハ実ニ恐入事ナリト、人々是ヲ評判ス、

一税所喜三(篤)左衛門・仁禮源ノ丞・田中新兵衛同宿ニテ、最初田中新兵衛殿ハ被居候ヤト申事ニ付、罷居候段相答候処、所司代ヨリ御用ニ付被召出候様、夫ニ付右両人モ同宿ノ儀ニ付、同シク嫌忌相掛同伴可致トノ事ニテ候ヨシ、源之丞ハ居候得共、税所ニハ不被居候由、夫故三人トノ評判ニテ候、疑ト込入タル事ハ不相知候得共、田中ニハ手疵ヲ負居候ヨシ、姉小路ノ家来ニモ別テ手ノ利タル働イタシ、狼藉者ノ内一人ニ手疵ヲ負セ候間、是カ証拠ナリトイフ事モ聞得候間、田中ハ直ニ自殺イタシ候半、実ニ田中ハ本人ナルヘシト申事ニテ候、仁禮抔ハイカヽ相成候ヤ、此節迄ハ不相分、公辺モ麁忽成取捌ハ決テ不致筈ナリ、評判マチ〳〵ナリ、

但京都御留守居太田彌兵衛ハ、青木市之助ト姓名ヲ替、六月十二日方罷下候由、シカレハ嫌忌相掛リ候半、然処十五日ニハ御勝手方御用人席被仰付、却テ都合向宜トノ評判ナリ、尤京・大坂・江戸ノ御留守居ハ、是迄罷下ル節ハ御使番方ヘ罷出候処、此節ヨリ已来御国許ノ御用人席ヘ相詰、御用人同様御用取扱被仰付、御側ヘモ罷出候様被仰付候、

## 三五七　姉ケ小路暗殺ノ嫌疑者

六月七日布達、先月廿六日朝於京師姉小路少将(公知)殿刺客暗殺セラレタルハ五月廿日夜ナリ之嫌疑ヲ受、仁禮源之丞後チ平介景範ト称スト(部カ)衛家来田中新兵衛両人儀、伝奏坊城宰相中納言様ヨリ御達ノ旨ヲ以、所司代家中同伴ニテ右坊城様御宅ヘ被召出、其侭東町奉行所ヘ御預相成候段申来候、就テハ不容易重大ノ事柄ニテ、　御名目ニモ相係リ、被為対天朝　御両殿様深御恐懼ノ御事候得共、昨年来尊王ノ御忠誠御尽力ノ御偉業ハ、一同奉承知候通候間、此末ノ処一時ノ浮説流言如何様致沸騰候得共、尚永年朝廷遵奉之御至誠御卓立之　思召ニ候間、諸士ニ至迄疑惑ヲ不生、愈　御趣意奉汲受、忠勤相励候様可申達旨、　御沙汰被為在候、誠以難有次第ノ御事候条、此旨一統奉承知候様、向々ヘ早々可致通達候、

六月七日　帯刀小松清廉

布達ノ如ク、姉小路殿ハ四月廿日ノ夜退朝ノ途次、有栖川宮邸前ニ於テ、賊徒ノ為メ暗殺セラレシニ依リ、朝幕ノ捜索厳密ナリシニ、廿六日朝本藩士仁禮ヲ初メ、田中（下町ニ居住ス、幼年ノ時森山新助カ手伝トナリタル者ナリ）及ヒ仁禮カ僕淵田太市嫌疑ニ罹リ、伝奏邸ニ召喚セラレ、後町奉行ヘ預ケラレタリ、嫌疑ヲ受ケタルハ、其場ニ本藩刀工奥和泉守忠重在銘ノ刀棄アリシニ因レリト云フ、而シテ数回糺問ヲ受ケタリト雖モ、素ヨリ形跡ナキ事ナルカ故、仁禮ハ松平安藝守（茂長）殿ヘ、僕ナル者ハ上杉弾正大弼（斉憲）殿ヘ預ラレ、田中ハ如何ンノ訳ナリシヤ、町奉行所ニ於テ屠腹シタリ、夫ヨリ益同人等カ所為ナラントノ嫌疑ヲ以テ、乾門警衛ヲ罷メラレ、藩士一同九門内立入ヲモ禁セラレ、同月六月十一日十一日ニ至リテ其寃氷解シ、九門出入ノミハ允サレタリ、其時滋野井侍従公壽朝臣及ヒ四辻中納言公績卿御内ノ侍二人嫌疑ニ罹リ出奔シ、仁禮等カ嫌疑モ少シク薄ンスルカ如シト雖モ、放免セラル、ニハ至ラス、藩士九門出入ヲ允サレタルノミナリキ、斯ノ如ク嫌疑ニ触ル、モ、又姉小路殿ノ禍ニ罹ラレシモ抑モ故アリ、姉小路殿ハ三條實美卿其外十余卿ト倶ニ黠藩浮浪ノ徒ニ団結シ、無謀ノ鎖攘ヲ主張シ、朝議ヲ左右シ、叡意ヲ矯シ、正議ノ人ヲ擯斥セシ等ノ巨魁ナリシ故、天ノ見ル処人生感スル処ナキニ非ラス、天網恢々粗ニシテ漏サスト、信ナル哉、

又本藩士カ嫌疑ニ触タルハ、一ニ刀剣ノ銘ニ依レリ、尋テ田中屠腹セシヨリ倍々深キニ至レリ、此卿ハ十三卿ノ中ニ於テモ目的トセシカ故、善悪ノ誹評ヲ受ケラレタルカ故、本藩士壮齢ノ輩、常ニ罵詈ノ甚シキ言モアリシトナン（姉小路殿ハ五月廿日夜戌刻比（本年二十五歳）退朝ノ途次、朔平門前通行ノ際、三名ノ抜刀者顯レ出、直ニ切リ掛リレリ、其時笏ヲ以テ支ラレンカトモ、素ヨリ不意ノ事ナリシ故、敢ナク其場ニ斃レ玉ヒタリ、従者金輪勇ハ太刀持ナリシカトモ驚怖逃去リ、吉村右京ハ少シク戦ヒ、手負シ声ヲ揚ケタルニ依リ、有栖川宮ノ邸ヨリ走礼キシニ、賊ハ足早ニ立去リタリ、跡ニ一刀ヲ棄タリ、是薩州住奥カ鍛ヒシ銘アリシトソ、茲ヲ以テ本藩士ノ所為ナリト認メラレタル者ナリ、亦仁礼・田中等カ嫌疑ニ罹レルハ、其前刻同所通過シタルニ依レリト云フ、〇異本ニ姉小路殿ハ笏ヲ以テ賊刀ヲ受ケ流シ、深手ヲ受ラレ云々、侍吉村右京ハ賊ト戦ヒ一刀ヲ奪ヒシニ、三人ノ賊ハ敵シ難ヤ思ヒケン、逃去リタリ云々、吉村ハ主人ヲ助ケ帰リ治療センカトモ、遂ニ其暁死ン玉ヘリ云々ト記セリ、又金輪ハ主人ノ難ニ臨ンテ、逃去リタルヲ以テ獄ニ下サレ、吉村ハ黄金幾千ヲ賜リ賞セラレタリト云々、其実ハ本文記スルカ如ク、其場ニ斃レタリトソ、

## 三五八　〔肥後球磨相良家ノ使者来麗依頼ノ条件〕

六月七日、隣藩肥後（球磨）相良家ノ使者来麗、依頼ノ条件数項アリ、中ニモ当時ノ世態百事補助ヲ仰キ、命ニ従テ

進退セント、或ハ此回彼城修繕ノ為メ、大工三十余名一時拝借懇願セラレタルニ依リ、御作事方下目附一名(野村仁左衛門)、大工二十余名ヲ率ヒテ出張セリ、○玖磨ハ山間ノ小藩ナリト雖モ少シク義気アリ、従来熊本ノ指麾ヲ受ケ、久シク軽蔑セラレ、殊ニ昨年　国父公御上洛ノ後熊本ハ幕府ノ密旨ヲ受ケ、本藩ノ挙動ニ注意シ、玖磨モ本藩ニ往来否ヤノ嫌疑ヲ受ケ、益々圧制ヲ加ヘルニ依リ、相良家ハ不平ヲ懐キ、近比ハ陽ニ我藩ニ依頼ノ姿ヲ顕シ往来セリ、如此ノ形勢ナルカ故、城楼修繕ノ職工ヲモ借用スルニ及ヒタリ、哀ムヘシ、山間ノ小藩独立スル事能ハス、適々倚頼スル処ノ熊藩ハ蔑視抑圧スルカ故不平ヲ鳴ラシテ、本藩ニ稍臣トシ附従セントノ懇願ナリ、実ニ一樹ノ庇蔭ニ宿ラントスルモ、已ムヲ得サルニ出タル者ナラン欤、

## 三五九　英人金時計ヲ太守公ヘ送ル

金製袂時計　一ツ
　但鋳相添

右ハ英人ゴラールト申者、是迄長々爰元(長崎)逗留仕居、諸御買入物等被仰付(毒ミニベール銃)、別テ奉蒙　御厚恩、難有奉存候付、近比恐多次第ニ御座候得共、為御礼右之品　太守様ヘ進上仕度奉存候間、差上呉候様私方迄差出申候間、箱入付ニテ今日爰元詰足軽才領申付、右品差上申候間、御披露相成候儀共宜御取計被下度御願申上候、此段申上越候、以上、

六月十五日　　蓑田傳兵衛(長胤)

中山中左衛門(実善)殿

大久保一蔵(利通)殿

「(朱)蓑田ハ当時御使番ノ本職ヲ以テ、長崎御附人兼務在勤タリ」

## 三六〇　祇園祭

文久三年癸亥

六月十五日例歳祇園神社ノ大祭ニテ、本年ハ殊更ニ賑ヒタリ、姫君方御下国初メテノ祭典ナルカ故、市街ノ出シ山モ数台、女子ノ手踊囃シノ興行モ例年ヨリ盛ナリ、出シ山ハ毎歳五六個、遽仕立ノ者一二個ニ止レルモノナリシカ、本年ハ十余個ニ及ヒ、市街ノ曹経費ヲ厭ハス、御覧ニ供ヘント競ヒタリ、　姫君方ハ角之矢倉ヨリ御覧アラセラレタリ、

## 三六一　馬關ニ於テ長藩夷船砲擊ノ始末在崎中原猶介友人(市來)ヘ報告書

前文略ス、然ハ下關ニ於テ夷船砲擊ノ趣ハ、追々御承知之筈トハ奉存候得共、当地ニ於テ内外之諸説御勘考之御一端ニモ可相成候間、要用之廉々申上候、偖

皇国ニ於テ外夷ノ為メ恥辱ヲ取リ候ハ、此節長州カ初メテニ可有之、元来長州人ハ弁口ニ達シ驕謾ニ有之、口ト胸トハ別々ニシテ、誠ニ奸智深ク、己ハ味ヨキヲ食ヒ、人ニ苦キ物ヲ与ヘ、人ノ困ヲ喜フトモ申ス国風ニ御座候間、今回ノ戦争ニ毎度大敗ヲ取リ、国辱ヲ引キ出シタルニハ、少シクロモ利ケ申間敷トノ評判ニ御座候、然レトモ是ハ内国中互ノ嫉妬説ニテ、素ヨリ憂国ノ人申スヘキ語ニアラスト奉存候、又海岸手当向砲台砲数等モ太粧等敷承及候処、此度夷人ノ説承候ニ、迚モ夷船ヲ打沈メ候程ノ備ハ無之候、大砲ハ十二斤短砲カ上リノ由、陸兵ハ尤モ拙キ由ニテ軽蔑セラレ候、御国ノ御備ハ、是ヨリハ十倍行キ届キ候ト相考申候、爰ニ至唯遺憾ナルハ、神瀬ノ事ノミニ御座候間、願クハ少ナクモ三四門ヲ備候位ニテモ、速ク御築キ立有之候ハ、御在合ノ砲ニテ随分軽蔑ハ致サレ申間敷、馬關ハ双方ノ距離十四五丁ニ足ラス、其中間ニ乗込タルヲ打ニハ、御国ノ砲ナレハ容易キ事ニ候得共、鹿兒島海ハ櫻島等ノ距離一里ニ余リ候ニ付、二十四斤以上ノ長砲ナラテハ用立兼候半、因テ前車ノ誡ニ御座候間、諸君ノ御心得ニ申上候、二十四斤モ五六門ハ出来居候半、一日モ速ク台架御出来御備付相成度事ト奉存候、伊地知正治氏ヘモ大略申越候ニ付、尚御論談有之度事ニ奉存候、

一長州ハ近頃勢ニ乗リ暴行甚シク候故、衆人ノ悪ヲ受候故、此度馬關ノ敗戦ニハ気味能キト申ス人多ク、気之毒ナル事ニ御座候、此後各国申合セ、数艘渡来スルハ必定ト奉存候、其時又這々ノ目ニ逢ヒ可申、夫ヨリシテ一体動作モ一変可致ト申事ニ御座候、当年中ニハ必ス参リ可申、其間ニ如何程日夜手当ヲ急キ候共、格別ノ事ハ調ヒ申間敷、二十四斤以上ノ大砲車架迄五六門ハ、迚モ出来申スマシクト存候、

一先日ノ戦争ヨリ国中ノ人気大ニ挫ケ、皆逃ケ構ノミ致シ、然ルニ聞フル高杉ナトノ党俾ノ人数ニテ、暴

威暴行ヲ以テ押ヘ居候由、中山卿ノ御二男下長馬關ニ在テ暴行ノ由、攘夷ノ為メ内勅ヲ以テ出張ノ旨被申、初ノ程ハ左様カト尊敬致候得共、行状正シカラス、毎日毎夜遊所通ヒナトヨリ、土人モ勅使トハ偽ナリト覚リ、近頃ハ咸飽キ果候由、

一偖御国ニモ生麥一件ニ就テ遠カラス大事ノ模様、追々当地ヘモ相聞得申候、何分幕府モ日本国ノ恥ナルヲ知ラス、外国人ヘ内密後押スル様ノ勢モナキニアラス、長州モ薩州モ同シク　朝廷ノ国土ニテ、幕府ハ政事取扱ノ役人タルコトヲ弁セサル様ノ向ニテ、誠ニ存外ナル次第ニ御座候、且英船若シ鹿兒島ニ廻ル時ハ、多分当地ニ船揃致シ差向ケ候事ト存候間、其節ハ乗組ノ通弁ハ知人シーボルト(Alexander Siebold)中少年ニテ、則チ有名ナル和蘭国シーホルノ子ニ御座候、日本語ハ少シモ日本人ニ相替リ不申、何様入組候事柄モ弁別致候、又サトウト(Ernest M. Satow)申者ハ仏人ニテ日本語ニ通シ、幕府陸軍ノ教師ニ傭入ノ者ニ御座候、此二名通弁ノ為メ英船ニ傭入ノ由、弥此二人其通ニ於テハ見込ノ趣談判可致ト存、蓑田氏ヘモ申談罷在候(蓑田伝兵衛ト云、政庁ノ筆史ヨリ当時長崎附人ニ昇進在崎ス)又幕役人モ果シテ乗込居可申、旁見込論談ノ心得ニ御座候、此段ハ御他言ハ決テ御無用奉願候、

一英人モ鹿兒島海ノ地理ハ不案内ニ相違無之候間、水先案内ニハ日本人ヲ傭入候半、多分天草又ハ茂木・島原辺ノ者ニ可有之、長州ニモ日本人カ案内致候由、之ニモ見込ノ趣有之候、

一水雷御設ノ事ハ御手相付候哉、近代西洋ニ於テ海陸戦共備防ノ第一ト致候由、既ニ御先代様(本)(斉彬公)御製造ノ器械、集成館ヘ御格護相成候半ト奉存候、愚考仕候ニ神瀬近辺ヘ内外七八ケ所モ伏セ候ハ、容易ニ内海ヘハ乗入間敷、又若シ伏道ニ掛リ候ハヽ、如何ナル大軍艦モ砕ケ候由ニテ、洋人ハ大ニ恐レ候由ニ御座候、此旨蓑田氏ヘ申入レ、要路ノ方々ヘ被申越候由、尚亦貴公ヨリモ(本)(正愈)伊地知龍氏等ヘ御咄シ相成度奉存候、(本)「(伊地知正治談話記参照)」

一御国ハ長州ナトノ御手当ヨリ十分調候趣ハ、西洋人モ承及候ニ付、彼等モ其心得ニテ渡来可致ト被存候、又水・地二雷モ製造相成候事ハ、和蘭人(ハントロエーン)御先代ノ時ヨリ能ク存居候ニ付、其心得ニテ渡来可致ト存候、自然渡来ノ上ハ測量探索可致ハ案中ト奉存候、

一御存ノ如ク西洋諸国砲術一変シ、大砲ハ従前ノ円弾ハ全ク用ヒ不申、惣テ長弾ニ相成リ、小銃モ悉ク尖弾ニテ、当分碇泊ノ夷艦皆其通ニ御座候、就テ残念ナルハ、新式ノ大小砲備ハラサルノミニ御座候、三四ケ月モ致候ハヽ、如何様ニカ致シテ一二丁、小銃モ二三百丁位ハ手ニ入リ候道モ可有之ト奉存候、是以伊龍氏（正治）等ヘ御進メ被成間敷哉、厚ク御勘考奉願候、

一御国之士気振ヒ候事ハ、恐ラク日本中比類ハ有之間敷トノ事ハ誰モ皆承知致シ、外夷モ和蘭人ヨリ伝聞致居候ニテ、随分彼モ用心、手抜ナクシテ参リ可申ト奉存候、然ルニ何分残多キハ大小砲ノ器械、彼ノ一千八百五十年前後ノ法ニテ、長尖弾ヲ用ル砲器未タ備ハラサルノミ欠事ト奉存候、私ニモ十匁銃ハ多年少々修練仕候ニ付、近代新法ノ銃ト打試候ニ、甚タ甲乙有之、同日ノ談ニハ相成不申候、蓑田氏ト毎々各国軍艦調練見物致候処、同人ハ大ニ目ヲ開カレ申候、先達テ高島先生（茂敦）（旧名四郎大夫喜平）ヨリ書状来リ、幕府モ未タ新法ノ器械不相備、嘆息ノ趣ニ御座候、先生ハ当春将軍家御供ニテ上京被致候、江川先生（英龍）（太郎左衛門）モ同ク御供ニ候由、此モ先日書状被遣候、軍備ノ事又ハ京都ノ事情モ粗申来候、何分長州人ト浪人共ノ事ハ大ニ心配ノ趣ニテ、迚モ無事ニハ治ル間敷クト有之、又近頃公卿様方ノ下手御奮発ニハ、幕府モ困リノ由ニ相聞得、攘夷ハ何ンデモナイモノヽ、様思召サレ候趣ニ有之候、序ニ御国生麥事件ハ必定モノナルヘシトモ被申越、此事ハ直話致度事モ有之候間、蓑田氏ヘ其書状入一覧候処、御国許ハ申上見可申トノ事ニ候間、若シ御免共有之候ハヽ、走登リ可申ト存候処、将軍家モ御暇ニ相成候間、定テ御供ニテ候半、就テハ江戸ノ様上リ不申候テハ不相成カト存候得共、未タ何分モ相分リ不申、若シ御免相成候ハヽ、走上リ可申、又京坂、又ハ下關辺長州人ノ事情モ随分相分リ可申ト奉存候、彼国風ハ中々魂多ク、口ハ達者ニ有之、探索事ニハ手抜無之、御国人ノ様正直一篇ニハ無御座、油断相成不申、能々御用心有之度ハ此事ニ御座候、然レトモ当分国中人気一致不致、無暗ノ攘夷ニハ拙策ト申ス人気ニ相成候由、余リ利口ニマカセ、傍ニ人ナキ様ニ立廻リ候ヨリノ事ト奉存候、

一二ノ丸様（国父公）御上京ノ御催促頻リニ候トノ趣、追々

伝聞仕候、誠ニ難有次第ニ御座候、兎角早ク御上京、今一ト涯御尽力不被遊候テハ、ヌカ公卿畑水練ノ攘夷論家ヲ押ヘ付候人ハ外ニ無之ト、当地ニテモ心アル者共歎息仕居候、生麦事件処ニ無御座、日本国治乱ニ相拘候時節ニ御座候、今日ノ姿ニテハ應仁ノ乱世ノ如ク相成ルモ難計、京都ハ戦場トナリ、恐ナカラ吉野ヘ御幸ノ様ナ事モ無之トハ不被申、事破候上ハ其時ト違ヒ、外夷ノ憂有之候ニ付、正成何人出ルトモ詮ナキ様ニ可有之モ難計ト奉存候、江川・高島ヨリモ御上洛一日モ速ク不被在候テハ、益不治ノ病重リ候トノ趣被申遣、幕役中有志ノ人モ段々有之、建言モ致候得共、行ハレサル事勝ニテ嘆息被罷居候趣ニ御座候云々、以下略ス、

六月十五日

## 三六二　茂久公御参府御奉書

御坊主關長三ヨリ別紙之通為知申来候間、相添此段申上候、以上、

亥六月十七日　　岩元太右衛門

摂津様

〔朱〕〔松平修理大夫〕其方儀参府時節ニハ無之、大儀被　思召候得共、無程御帰府ニモ相成候ニ付テハ、御相談之儀モ有之候間、早々江戸表江参府候様被　仰出候、

〔品津忠承氏蔵本にて校訂〕

六月十六日

右各通奉書ニテ御達相成、左之御方々、

加賀中納言〔前田斉泰、加州藩主〕
上杉弾正大弼〔斉憲、米沢藩主〕
南部美濃守〔利剛、盛岡藩主〕
佐竹右京大夫〔義堯、久保田藩主〕
丹生左京大夫〔丹羽長国、二本松藩主〕
津軽越中守〔承昭、弘前藩主〕
南部遠江守〔信順、八ノ戸藩主〕
松平飛騨守〔前田利益、大聖寺藩主〕
溝口主膳正〔直溥、新発田藩主〕
真田信濃守〔幸教、松代藩主〕
土井能登守〔利恒、大野藩主〕
堀左京亮〔信民、新田盛岡藩主〕
南部美作守〔右〕〔之美、椎谷藩主〕

以上十三方

## 三六三　松木弘安ヨリ申越候書状之写 六月十七日和蘭出立之前夜認

前略、此地ハ小国トイヘトモ数百年之親ヲヲモヒ、饗応至テ丁寧ニテ、日々処々ヘ見物ニ参リ申候、併巴理仏京・龍動英京ヲ見シ末ナレハ、我輩ノ眼ガ肥ヘ見ル物毎ニ甚驚カス、故ニ蘭人モ亦不審ニヲモウ様子也、書類モ見候得共、一向珍書無之候、小生ハ龍動ニテ金子遣ヒ切リ、此処ニテ何モ買入出来不申、見ル物コトニ買タケレト、空嚢ヲウラムノミ、近来兵備之第一ハアルムストロング訳前ニアリト、蒸気台場ニ越ス者無之、諸侯方ニテ右之用意有之様御説得可然奉存候、或ル仏人云フ、来年ハ佛ヨリ朝鮮ヲ攻撃スト、近火逼リテ恐ルヘシ、其外之様子何分昼寝ノ出来ヌ時節、是亦御同〔衆カ〕臭ヘ御説キ可被下候云々、

## 三六四　五ケ所砲台操練

○六月十九日、五ケ所及ヒ櫻島砲台并水軍放発操練ヲ催サレ、沖中ニ標的ヲ浮ヘ同時ニ放発セリ、　太守公巳刻過辨天台場ヘ御出馬アラセラレタリ、本日ノ操練ハ殊ニ盛ニシテ、夷船来侵掃撃ノ実場ニ擬シタリ、

○各砲台物主其他兵士人名左ノ如シ、

一惣物主御家老　川上式部美久
一同　川上但馬運久
一惣物主若年寄大目附勤　川上龍衛齢久
一祇園洲砲台物主　島津権五郎馨久
一同所談合役　新納休右衛門
右六番組士ノ内守衛ス、
一新波戸砲台物主　川上右膳賢久
一同所談合役
右五番組士ノ内守衛ス、
一辨天波戸砲台物主　北郷数馬徳久
一同所談合役
右二番組士ノ内守衛ス、
一大門口砲台物主　相良治部発長
一同所談合役
右三番組士ノ内守衛ス、
一砂揚場砲台物主　島津織之介直久
一談合役
右一番組士ノ内守衛ス、
一水軍隊物主　仁禮舎人〔仲信〕

一談合役　有川彌九郎

右下町波戸内ニ備フ軽舸十二艘、各十八斤・廿四斤砲一門ヲ装置シ、追撃ノ準備トス、

一櫻島三ケ所砲台（洗出・横山・鳥島等ノ三ケ所）　肝付兵部（兼両）

一御軍賦役　大山格之介（綱良）

一談合役　郡山一介

一沖ノ小島砲台　青山愚知（旧名善助）

青山弓五郎（愚知長男）

右青山門人数十名ヲ以テ守衛ス、

右ノ人員衛兵ナリ、沖ノ小島ハ青山ヘ委任セラレ、門人数十名ヲ以テ守衛ス、姓名後ニ記ス、

**三六五**　〔諸所砲台装置砲数〕

諸所砲台装置砲数左ノ如シ、

一祇園台場　八門

内二十四斤長砲　一門

八十斤爆砲　一門（ボムベ、カノント唱フ）

二十四斤短砲　二門

三十六斤爆砲　一門

二十九拇（トイム）臼砲　一門

二十拇臼砲　一門

十八斤短砲　一門

十二斤短砲　一門

辨天波戸砲台　十三門

内二十四斤長砲　一門

十八斤短砲　二門

二十四斤短砲　二門

十二斤短砲　二門

八十斤爆砲　一門

三十六斤同　二門

二十九拇臼砲　一門

二十拇臼砲　一門

六斤野戦砲　一門

新波戸砲台　十七門

内二十四斤長砲　二門

十八斤短砲　二門

十二斤短砲　二門

二十四斤短砲　三門

三十六斤爆砲　二門

八十斤同　一門

二十九拇臼砲　一門
二十拇臼砲　二門
三十斤短砲　一門
六斤野戦砲　一門
大門口砲台　六門
内二十四斤短砲　一門
十八斤短砲　一門
三十六斤爆砲　一門
二十九拇臼砲　一門
二十拇臼砲　一門
十二斤野戦砲　一門
砂揚場砲台　十一門
内二十四斤短砲　二門
十八斤短砲　二門
三十六斤爆砲　二門
八十斤　同　一門
二十拇臼砲　二門
六斤戦砲　二門
櫻島洗出砲台　六門
内十八斤短砲　一門
十二斤　同　二門
十斤野戦砲　一門
六斤野戦砲　二門
櫻島横山砲台　四門
内二十四斤短砲　一門
十八斤　同　二門
十五拇忽砲　一門
同島内鳥島砲台　三門
内十二斤野戦砲　二門
六斤野戦砲　一門
沖ノ小島砲台　二ケ所　十五門
内三貫目砲　五門
百目砲　十門
合計八十三門（製式ハ和蘭・亜米利加等ノ式、或ハ青山ハ天山流式ナリ、）

以上十一ケ所各砲台装置スル処ノ砲数ナリ、沖ノ小島外十砲台ハ、実弾・榴弾各九拾発ヲ砲台内ニアル爆薬庫ニ備ヘ、其他ハ欠乏ニ臨ンテ、火薬局ヨリ運搬スルノ予備ナリ、又砲台ノ外各要衝毎ニ、大小砲隊或ハ砲兵ノミ臨機備フルノ軍賦ナリ、〇弾丸ハ実・榴ノ二弾或ハ焼弾・葡萄弾ヲ備ヘタリ、其他火具一切寡虧アル

コトナシ、○火薬局又ハ集成館ニ於テ、予備ノ車架・要具・火具ノ製造日夜兼業、幾十日ノ連戦モ虧乏ヲ告サルヲ要セラレタリ、

## 三六六　参考　大小砲数及費用表

今回海陸軍備厳整セラルニ就テ、弘化二年乙巳夏ヨリ以来製造セラレシ大小砲ノ数及ヒ製造費等、集成館上申左ノ如シ、

一百五拾目野戦砲壱挺
　但製造費、車架其他要具一式、壱挺ニ付凡四拾弐両程
一二百目野戦砲六拾四挺（此内ヨリ各郷御備相成候）
　但製造費、車架其外要具一式、壱挺ニ付凡六拾九両余、
　　合計金四千三百弐拾六両
一右同軽砲弐拾四挺
　但壱挺ニ付凡七拾九両余（以下製造費・車架等ノ字略ス、皆壱挺分ノ費ナリ）
　　合計金弐千百三拾三両
一三百目野戦砲弐挺
　但凡八拾弐両余
　　合計金百六拾四両
一五百目野戦砲百七拾挺（此内ヨリ各郷及私領へ御渡相成候）
　但凡百拾八両程
　　合計金弐万〇〇六拾両
一七百目野戦砲五拾五挺（此内ヨリ各郷及私領等へ御渡相成候）
　但凡百五拾五両余
　　合計金八千五百弐拾五両
一六斤重野戦砲三拾壱挺
　但凡弐百五拾壱両程
　　合計金七千七百八拾壱両
一十斤重野戦砲弐拾挺（亜米利加式）
　但凡四百九拾両程
　　合計金九千八百両
一十八斤重野戦砲四拾壱挺
　但凡五百九拾両程
　　合計金弐万弐千五百五拾両
一十三拇忽砲八挺
　但凡百三拾九両程
　　合計金千百拾弐両
一十五拇忽砲拾八挺
　但弐百四拾七両程

合計金四千四百四拾六両

一二十九拇臼砲八挺

但五百三拾両程

合計金四千弐百四拾両

一二十拇臼砲四拾弐挺

但百三拾両程

合計金五千四百六拾両

一十二斤一耳砲四拾挺（軍艦乗付用ニテ候得共、諸所砲台据付、又八狼烟場用ニ大門口其外砲台江備付相成候）

但百八拾三両程

合計金七千三百弐拾両

一二十斤長砲六挺

但千五拾両程

合計金六千三百両

一右同短砲弐拾壱挺

但六百四拾両程

合計金壱万三千四百四拾両

一八十斤爆砲八挺

但千弐百両程

合計金九千六百両

一三十六斤右同拾五挺

但四百六拾六両程

合計金六千九百九拾両

一百五十斤右同六挺

但千六百弐拾両程

合計金九千七百弐拾両

一二十拇忽砲弐挺

但三百六拾弐両程

合計金七百弐拾両

一十二拇長忽砲拾九挺

但百四拾両程

合計金弐千六百六拾両

一舶用自在砲弐拾壱挺

但三拾六両程

合計金七百五拾六両

一携臼砲拾弐挺

但拾六両程

合計金百四拾四両

一六百目（野カ）山戦砲拾六挺

但百三拾両程

合計金弐千〇八拾両

一六斤舶砲弐拾壱挺
但弐百拾六両程
合計金四千五百三拾六両
一十二斤右同拾六挺
但四百三拾両程
合計金六千八百八拾両
一十八斤右同拾六挺
但五百拾八両程
合計金八千弐百八拾八両
一十八斤右同一耳砲九挺
但五百両程
合計金四千五百両
一八斤右同四挺
但三百四両程
合計金千弐百両
一亜米利加式小船忽砲弐拾五挺
但百七拾弐両程
合計金四千三百両
一三十斤一耳砲四挺
但三百弐拾五両程
合計金千弐百両
一佛蘭斯式十二斤軽砲拾弐挺
但製造費并火薬庫等一式三百八拾両程
合計金四千五百六拾両
一右同六斤砲拾弐挺
但弐百三拾両程
合計金弐千七百六拾両
一試薬臼砲四挺
但弐拾両程
合計金八拾両
一荻野流壱貫目砲四挺
但三百五拾両程
合計金千四百両
一右同三貫目砲三挺
但五百八拾両程
合計金千七百四拾両
一右同百目砲拾壱挺
但八拾両程
合計金八百八拾両
一右同百目火箭筒三挺

但弐拾両程

合計金六拾両

合計砲数七百九拾四門

合計製造費金拾九万弐千八百弐拾三両余

此ヲ当時現在ノ惣数ニシテ、此内ヨリ御城下諸所ノ砲台又ハ東南西海岸砲台、或ハ江戸・大坂・京都藩邸、或ハ江戸田町邸内砲台装置・野戦砲ハ諸郷備付、或ハ佐土原又ハ私領ヘ払下ニナリタルモアリ、○小銃ハ和蘭式ノ剣銃ナリシカ、望ノ者或ハ他藩ヘ払出シニモナリテ、荻野流式十匁銃ヲ雷管機ニ改造セシ者ヲ専用セリ、此製造所ハ昨壬戌ノ冬ヨリ、鹿児島塩屋村ノ内字七曲硝石製造所趾ニ設立セラレ、数百挺至急新製シ、払下等ノ法方ナリ、製造担当者村田勇右衛門（経芳）其他数名ナリ、砲工ハ種子島（熊毛郡）・平佐（川内市）其外ヨリ召集シタリ（硝石製造所ハ、弘化ノ末高橋某カ担当ニテ設立セシカトモ、地味適セサルカ故、廃シタル趾地ナリ、○当時銃砲製造盛ンニシテ工人多忙、依頼ニ応シ難シ、故ニ日夜兼業セリ）○以上記スカ如ク、大小砲製造費及ヒ弾薬、或ハ諸要具、或ハ各所砲台建築、或ハ操練場ノ設立等種々ノ費途、凡十八九年ノ間ニ一百余万両ノ巨額ニ及ヘリト云フ（軍艦製造費ハ、又別途ナリ）

## 三六七　在江戸喜入攝津同僚ヘ報告

爰許之形勢、此頃何トナク穏成体ニテ、攘夷拒絶之沙汰モ延々相成、横濱表之商売等モ盛ニ有之、市中ナトモ先ツ静謐之姿ニテ、下々迄モ頻ニ

将軍家御帰城ヲ相願居候様子ニ候処、此節京都表御暇ニテ、大坂ヨリ蒸気船ニテ去ル十六日御帰城相成、一統喜悦之趣ニ相聞得候、右御帰城付、御相談之儀モ有之候間、加州侯（前田斉泰）初外拾弐侯早々参府被　仰出候段、別紙之通御坊主ヨリ為知申越、尤小笠原侯（忠幹、小倉藩主）ニハ於大坂御役御免、御城代松平伊豆守（大河内信古、参河吉田藩主）様江御預相成候由、定テ償金被相渡候一条ニ候半歟、此上攘夷等之御所置如何御評決可相成ヤ、猶致探索、形行追々申越候様可致候、然ニ於長州ハ既ニ兵端ヲ開、外夷ト戦争ニ及候由相聞得、勿論小倉村上銀右衛門ヨリ大坂マテ申越候注進状、御留守居差遣候付、大低模様ハ相分候、就テハ其許江ハオノツカラ下之關出張、唐物取締又ハ右銀右衛門等ヨリ時々御注進申上、具ニ御承達之儀ト存候、何分不容易事件ニオヨヒ、此始末如何落着可相決ヤ、爰元横濱碇泊異船之様子等為聞繕候処、長州戦争之風聞

旁段々之雑説〔朱〕別紙〔「造失」〕之通ニテ、其内英船御国許之容子為伺差越趣トモ相見得、此儀ハ猶亦別段聞合モイタシ置候処、慥ニ分リカネ候ヘ共、右通之風説モ有之、是ハ薩州ニハ無之、矢張長州江相廻候半、其趣意ハ蘭・佛江之義理立ニ申事候哉ニ相聞得候趣之一説モ有之、又外ニモ手付置候処、是以十カ八九迄ハ薩州江ハ参間敷哉ニ申説モ有之由、異説区々之事ニテ、イツレモ是ソト信用イタシカタク候ヘ共、右等之形行早々申上度旁相混、極々急飛脚差立、別紙〔朱〕〔「別紙散逸」〕聞合書等相添、此段以御内用申越候条、

太守様

三郎様被達　御内聴候儀共、何分モ御都合能可被取計候、且亦

御帰城等ニ付テ之仰〔朱〕〔「斯書逸ス」〕渡御書附等ハ、夫々表向申上越通ニ候、猶此末之形行追々可申越候、以上、

亥六月十九日　　喜入〔久高〕摂津

島津大蔵〔久徴〕殿
小松帯刀〔清廉〕殿
川上但馬〔久運〕殿
川上式部〔久美〕殿

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

## 三六八　喜入摂津小松帯刀へ書翰

尚々　大樹公ニモ去ル十三日摂海ヨリ蒸気船江御乗舟、過ル十六日御濱御庭江御着艦、直ニ御帰城相成、御府内下々迄歓ノ眉ヲ開候様子ニ御座候、諸大名様旁ヘ出府被　仰出候御名前表通申上候、

此御方様ハ入ラセラレス候テ、先仕合候、且此御屋敷御解毀、余程致急埒御役所廻リハ最早相済申候、御家初諸役座計相残リ候、是ハ先便奉伺置、未御指図不相達候間、折角奉待事ニ候、大井御屋敷ノ方ハ家作モ少ク候間、不日ニ御解毀相済可申候ト奉存候、

末筆ナカラ御家内様宜敷被仰上被下度奉願候、拙者ニモ暑気相凌キ申候間、乍慮外御放慮被下度御座候、何モ後音ト申上残候、随分御保養可被成ト奉存候、

一翰致啓上候、炎暑之節御座候得共、尚以御佳勝被成御座、御勤禄奉大慶候、去月廿二日白鳳丸ヨリ被差立候飛脚モ致着、貴墨辱奉拝誦候、陳ハ於其御地上々様被為揃、御機嫌克被為入、恐悦至極奉存上候、御互ニ御同慶奉存候、

勝姫様ニモ　御道中　御安康被為遊御座、去ル廿二日

被遊　御着、直様玉里江被遊御住候、実以恐悦乍恐安堵仕候、一存ニテ　御発駕御進メ申上候事ニテ、御道〔朱〕中江州辺ノ儀丈夫トハ奉存候得共、大キニ御案シ申上候処、御安着致承知大安心仕候、〔彦根ヲ云〕

一掃攘拒絶ノ期限モ何ト無打過、

一橋公ニモ御帰府相成、償金等モ弥被差遣候、事件旁ノ儀ハ先便ニモ申上候通、高猪太郎〔高崎五六〕トフニ為致着筈候間、御直ニ巨細御聞届為有之ト奉存候間、不能貴答候、当分海岸御手当向厳密御手相付候ヨシ、殊ニ御睨等モ被為在、御盛米ノ御事ト奉遙察候、其上余程一統人気モ相揃候ヨシ、是カ第一ノ強兵ニテ実ニ奉恐悦候、先々時季御尋労任幸便、貴答如是御座候、恐々百拝、

六月十九日　　喜入攝津

小松帯刀様

閣下

## 三六九　英艦渡来申立云々達書

六月廿日　　河内守

松平修理大夫家来呼達之覚

東海道生麦村一条ニ付、神奈川港ヘ先達テ英国軍艦渡来、其領海ヘ相廻リ候様、猶又今般申立候ニ付、急度差留置候処、右ハ此方申談ヲ不取用、押テ其表ヘ相廻リ候哉モ難計ニ付、此段為心得、松平修理大夫家来呼可達事、

廿日持帰、同夕宅ヘ留守居呼、

## 三七〇　汽船青鷹丸延岡藩砲発

六月廿日日州細島報信ニ、本藩汽船青鷹丸去十五日大坂発航、帰国セント瀬戸内ヨリ鶴崎沖・日州沖等ヲ航シ、細島ヘ碇泊、同十九日同港ヲ発シ鹿児島ニ向テ航海中、延岡領〔地名群ナラス〕ノ台場ヨリ砲発セリ〔内藤右近将監領地〕、不意ノ事ニテ大ニ怪ミ、冲ニ向テ航路ヲ転シ緩航セシニ、程ナク砲発ヲ止メタリ、幸ニハ砲弾船ニ達セス、皆中間ニ落タリ、殊ニ当日ハ風波強ク、晴雨計モ狂ヒタルカ故細島ニ引返シ、内藤家ヘ砲発ノ事由質問ニ及ヒシニ、重役ノ者出頭シ、誤認ヲ謝シ、　朝幕ヘ届出等ハ宥赦セラレンコトヲ厚ク依頼ニ依リ、砲台調練ニ見做シ宥赦シタリトソ、同夜大風ナリシカトモ、同港碇泊中異状ナシ、同廿六日夜着麗セリ、○攘夷布令以来、各藩共ニ異形ノ船ト見ルトキハ、一往ノ応接標旗ノ認定モ

ナク放発スルノ形勢ナリ、延岡ノ如キ小藩殊ニ要衝ニモアラサルニ、斯クノ如キ挙動アリ、攘夷ノ勅命幕府奉行ノ御受アリシト雖モ、未タ掃撃ノ期ハ令セラレス、現今横濱ニ於テ鎖港談判中ニアリテ、結局奈何ントモ確定セサルニ、長州ヲ初メ斯ノ如ク妄リニ放撃スルハ、暴行ト謂ハサルヲ得ス、其曲我ニ帰スルヤ論ナシ、彼レ我ニ対シテ無礼ヲナスニ於テハ、所断スヘキハ無論ナリ、実ニ曲ヲ求ムルノ妄行ニシテ、国辱ヲ来スノ大事ナリ、本藩ニ於テハ生麦事件ニ就テ来港ヲ待ツノ時ナリト雖モ、軽挙妄動ヲ厳誡セラレ、命令ヲ待ツヘシトノ令ヲ下サルヽコト数回、敢テ妄リニ戦端ヲ開カス、若シ渡来セハ曲直審論シ、然ル後渠戦端ヲ開カハ、我モ亦応セサルヘカラサルハ論ナキナリ、茲ヲ以テ海陸攻守ノ準備頗ル厳整、来港ヲ待タリ、

## 三七一　参考　道島正亮紀事抄

亥六月廿二日〔宋〕宮之城〔島津図書ヲ云ヘリ〕ヘ上京被仰付御模様ノ由、何等ノ事ニテ候ヤ、全ク不相分候、今一左右次第ト申事ノヨシ、右ニ付〔宋〕高橋〔縫殿〕家ハ上京無之トノ事ニ候、高橋家ノ上京ハ稍姉小路一件ト被察候、右ノ一条ハ大方嫌忌相晴レ候半、〔宋〕「仁禮〔平助〕」モ御用掛ニテ被召込置候処、御引渡ニ相成候ヤノ噂ニテ候、畢竟右様ノ御計略計ニテ、此節ノ難題ハ穏カニ成兼候半、当分ニテハ穏便ノ姿ニ候得共、従来如何成国家ノ難題醸出カモシルヘカラス、後世可畏トノ処置ナリト申人モ多クアリシ由、

## 三七二　茂久公御近習三名ノ不都合〔御内沙汰〕

椎原助一郎
大橋八郎右衛門
山本壮介

右三人、昨夜於御本丸御気色ヲ相損シ候振舞有之候由ニテ、種々厳敷　御内沙汰被為在、迚モ御供中ニ難召出候付、差返候ニ就テハ、此義表立被　仰付候事モ無之候付、幸伊作〔日置郡〕・川辺〔川辺郡〕両道難場ニテ、今日モ乍漸御通行被成、明日ハ本道御通行之筈ニ付、右御用日丈且御方ヘ御内用有之等ニテ差返候間、ホト能人気ニ被相拘様御取扱給、御帰殿ノ後、御当リハ御目通ニ不罷出様御取計被下度此旨早々申越候、已上、

六月廿二日　　中山中左衛門

大久保一蔵殿

益御機嫌克、今四半時分加世田地頭仮屋江御着、尚御機嫌克被為入候、御供中一同元気ニテ、御同慶奉存候、

## 三七三　神奈川碇泊英艦鹿児島ニ発航達書

六月廿三日達

松平修理大夫〔島津茂久〕

神奈川港碇泊之英国軍艦、其領海ヘ相廻リ可申モ難計段為心得申達置候処、昨二十二日大軍艦七艘分海之方ヘ向ケ致出帆候旨、神奈川奉行ヨリ申越候間、若領海ヘ致渡来候トモ、即今拒絶談判中ニテ未タ手切レ相成候儀ニ無之候間、穏ニ取扱候様可被致候事、

六月廿二日

此書面、或ハ閣老井上河内守殿〔正直、浜松藩主〕ヨリ、重役出頭スヘキ差紙ニ依リ、岩下佐次右衛門〔方平〕国老喜入摂津〔久高〕代理ニテ出頭セシニ、書面ノ趣ヲ以テ、現今拒絶談判中ナルカ故、穏便ノ取計専要ノ旨懇達セラレタリ、

編者曰、此達書ハ前之濱戦争後十余日ニシテ達シ、又ハ国老喜入摂津幕命ニ依リ汽船ヨリ下麗シ、携帯セリト雖モ、今其事ノ順序ニ関スルカ故、到達ノ時日ニ拘ハラス、茲ニ記載ス、

## 三七四　喜入摂津一橋殿ヨリ英艦鹿児嶋ヘ発航ニ就テ平穏云々演達

六月二十三日

同日国老喜入摂津、一橋殿ヨリ召喚セラレ親達ノ趣、今般生麥事件ニ就テ英国軍艦数艘横濱ヘ渡来、種々難訴ノ次第ハ、過日来達置タルカ如シ、然ルニ右船々鹿児島ヘ向テ出帆セリ、果シテ申立ノ通ナルヘシ、現今鎖港談判中未成否判然セサルカ故、平穏ノ処置アルヘキ旨、修理大夫・三郎ノ両所ヘ厚ク伝達スヘシ、御上将軍家ヲ云フニモ大ニ御痛心、呉々平穏ヲ望セラルヽカ故、万一手切ニモ及ヒナハ、談判ノ差問ナルニ依リ其辺厚ク注意シ、至急帰国スヘシ、就テハ汽船態々差向ラレシ故、乗組ヘシト懇達セラレ、同日閣老井上河内守宅ヘモ召喚セラレ、閣老名詳ナラスト喜入カ筆記ニ記セリ列座達シノ趣旨、一橋殿ト異ナルコトナシ、然シテ同廿四日講武所ヘ出頭、汽船ニ乗組、同日申刻頃乗付諸所碇泊、七月十四日日州細島港ヘ着シ、是ヨリ上陸、昼夜兼行同十七日着麗セリ、右ノ如ク示達ノ趣、或ハ江戸・横濱等ノ事情ハ即日陸地飛報ヲ出シ、己ハ筆生一名ヲ随ヘ、汽船ニ搭シタリ云々以上喜入摂津筆記ニ拠ル、此ノ達書或ハ報告ハ、喜入帰着ノ場ニ記スヲ至当トス、然リト雖モ月日編続ニ罹ルカ故、茲ニ記載ス

## 三七五　英艦渡来云々其他報告

六月二十三日報ニ、本藩ニ罹ル生麥事件ニ就テ、英国軍艦数艘横濱ニ渡来、請求条件甚タ猖獗ナルカ故幕府困却、加之鎖港ノ談判中ナルカ故、這ノ事ハ我レノ曲タルニ依リ、渠カ求メニ応シ償金ヲ渡シ、而シテ鎖港ノ談判ヲ全フセント、閣老小笠原圖書頭(長行)二三ノ同僚ト議定シ、　朝議ヲ経ス専断シテ金十五万両ヲ渡シ、而シテ家族養育料ハ本藩ニ向テ求ムベシトノ談判ニ及ヒタリト云々(這事実ハ後葉ニ詳出ス)、然ルニ長藩及浮浪ノ徒種々点策ヲ施シ、大和　行幸ヲ促シ奉リ、或ハ　将軍家帰府ノ願ナリト雖モ允シ玉ハス、鎖攘ノ実行急促セラル、ニ依リ、江戸ニ於テハ内外ノ重件一時ニ逼リ、百方議スル旨アリテ、閣老小笠原圖書頭専断ノ名ヲ以テ、将軍家東下暴徒ノ処分ニ決シ、五大隊ノ兵軍艦五艘ヲ以テ、大坂海ニ突出シタリ、其時　将軍家ハ鎖港談判切迫ノ旨ヲ以頻請シ、東帰ノ允命ヲ蒙リ発程ノ後ナリシトソ、故ニ小笠原カ専断敢進モ水泡ニ帰シタリ(将軍家御殿退京ハ六月三日ナリ、小笠原カ着坂ハ六月七日ニシテ、五日ノ差アリタリ)、而シテ小笠原許多ノ兵ヲ引ヒテ、上坂ノ挙動ハ上ヲ軽ンスルノ罪アリト　朝議鼎沸、剰ヘ同人ハ恣ニ償金ヲ渡シタル罪ヲ鳴ラシ、官位剝脱、大坂城代ヘ預ケラレ、謹慎ノ譴責ヲ被レリ、斯クノ如ク紊擾ナルカ故、洛ノ中外ハ素ヨリ伏・坂ノ形勢甚穏ナラス、長州ハ倍々暴威ヲ逞フシ、従テ浮浪輩ノ跋扈一層セリ、○又一説ニ、　将軍家東下、小笠原勇進上坂シタルハ幕府ノ勇断ニ出タリ、是ヨリシテ大ニ為ス処アラント一般冀望シ、鎖港談判ハ姑ク措テ長藩ヲ処分シ、暴公卿ヲ黜ケ、浮浪ヲ芟除シ、薩州老公(国父公)ヲ召サレ要路ニ置キ、會・薩両藩ニ守護ノ任ヲ与ヘ、中川宮ヲシテ主上ノ輔弼タラシメ、内政ヲ整治スルニ非ラサレハ、遂ニ元弘・建武ノ轍ヲ踏ムニ至ラント、心アル者頻ニ冀望セリ、然ルニ長州ハ倍々暴慢ニ募リ、剰ヘ下ノ關ニ於テ攘夷先魁ヲ力メタリトテ、厚キ褒勅ヲ下サレ、加之攘夷監察使トシテ、正親町少将公董朝臣御親兵三百余人ヲ引率シ、長州下向ヲ命セラレタリ(六月十六日発京)、此時長藩士在京ノ者百余人・浮浪士百余人、正親町殿家来ノ名ヲ以テ附従セリ、○下ノ關ニ於テ、夷船砲撃ノ報京師ニ達シタルヤ、国事掛参政非常附ノ公卿方、或ハ浮浪ノ徒時ヲ得タリト誇唱シ、夷船撃沈

セリトノ巷説ヲモ流布セシメタリト、此レヨリ嚮キ長州所轄内ニ於テハ、従来幕府掲ク所ノ制札ヲ廃棄シ、攘夷

勅詔ヲ掲ケ、全ク幕令ヲ奉セサル旨ヲ布令シ、萩城ヲ去リ、山口（周防国ニアリ）ノ旧城ヲ修築シ、隣近諸藩ニ応援ヲ促シタリ、然レトモ小倉・福岡・久留米・柳川・秋月或ハ中国ニハ廣島ヲ初メ濱田其他モ兵ヲ出ス者ナク、大ニ怪ミヲ入レタリトソ、此時長藩攘夷ノ先魁タリシ旨奏聞ニ及ヒ、

叡感アラント思ヒノ外、指シテ

感賞シ玉ハス、却テ

宸襟ヲ悩マサレタルニハ、長藩党与ノ公卿ニハ意外ナリシト云フ、是ノ説当時正義ノ堂上方ニ於テ、私語キ玉ヒシ事ナリトソ、○監察使正親町殿ハ六月十六日、長州ニ向テ出発セラレタリ、数百人ノ兵（附従ノ御親兵ハ熊本・高知・久留米・秋田ノ四藩ナリ）ヲ卒シ、威風凛然トシテ発程セラレタリ、当時ノ説ニ攘夷応援ノ為ナリト附従ノ徒路次跋扈甚シク、従前幕吏ノ通行ニ倍蓰シ、宿駅大ニ困却シタリト云フ、着長ノ前頃大膳大夫殿（毛利慶親・元徳）父子ハ門葉ノ輩、国老其他吏員ヲ従ヘ奉迎、最モ鄭重ナリ、是ヨリ曩キ（六月九日）金一万両ヲ献呈セラレタリ、献呈ノ前頃国中ノ豪商富戸ニ圧課シ、数十万金ニ及ヒタリ、其時諭告スルニ、

朝廷ノ御用途匱乏御困迫、幕府傍観シ顧ミサルノ趣ヲ鳴ラシタルカ故、国中当時ノ暴政ニ恐怖シ、異議ヲ唱ルコト能ハス、課出シタリト、故ニ国民ハ課出ノ金悉ク献呈セリト思ヒシニ、僅一万金ナリシヲ後日伝聞シ、大ニ不平ヲ鳴シタリト云フ、

## 三七六　江戸西丸炎上其他浪士横行等ノ報

六月廿三日京都・江戸ノ飛信着麗、曰ク、本月□日江戸西丸出火、霞ケ關辺或ハ町家ニ延焼シ、日本橋辺ヨリ芝金杉辺迄一円焼亡、近代稀有ノ大火、死亡モ多カリシト云フ、○当時江戸ニモ浮浪士多ク集リ、種々暴行ヲナセリ、西丸焼亡モ浪士ノ所為ナリト云フ、○京都モ去ル□日寺町辺ヨリ出火、北ハ三條南ハ五條辺迄一円焼亡セリ、是モ又浮浪ノ所為ナリト云フ、当時ノ巷説ニ、浮浪輩カ所論洛中ヲ焦土ニ変シ、人心ヲ一定シ、大和ノ旧都ニ皇居ヲ遷シ奉ルノ策謀ナリト、実トシヤカニ喋々、人心恟々生業ヲ安ンスルコト能ハス、又外国人兵庫・大坂両所ノ開港ヲ迫リ、不日大坂海ニ

各国軍艦渡来ノ形勢ナルカ故、幕府困難ニ迫リ、鎖港ノ評判ニハ関係セス、却テ新ニ開港ノ形況ナリ、茲ヲ以テ大坂辺ノ人心甚タ穏ナラス、加之浪士ハ各所ニ立廻リ、豪商富家ニ押入リ、強奪或ハ脅迫シテ金銀ヲ貪リ、或ハ攘夷軍用ト唱ヘ、否ム者ハ斬殺シ、其他此機ニ乗シ、流賊奸民諸所ニ起リ、山間ノ僻村ニ至ルマテ立入リ、刦奪等ノ所為多シ、然ルニ幕府ハ制抑ノ力ナク、恐怖極リタリ、洛中洛外モ稍同シキ形勢ナリト雖モ、守護職ノ手(当時会津)ヲ以テ漸ク維持セリト云フ、○五月廿日ノ夜四條寺町ニ於テ、家里新太郎(産地詳ナラス)ト云ヘル者暗殺セラレ、首ヲ四條橋ニ梟シタリ、此者開港説ヲ唱ヘ、無謀ノ攘夷主張ノ輩ハ彼我ノ形勢ヲ知ラス、国ヲ誤ルノ基ナリトノ激説ヲ立タリト、浪士等聞ヒテ、人心ヲシテ疑惑ヲ生セシムルノ奸賊ナリ、開港説ヲ立ルノ輩ハ、以来悉ク斯ノ如クナルベシトノ趣ヲ掲示シタリトソ、

## 三七七　京都雑報

六月廿四日京師雑報ノ中ニ、当時守護職(容保、会津藩主)松平肥後守殿職務上励精ヲ賞セラレ、絹地ノ直垂(鎧直垂)及ヒ黄金百枚ヲ賜ヒ、尚ホ抽精アルヘシトノ趣ナリシト、在京藤井良節・小松帯刀・中山中左衛門・大久保一蔵ヘ贈書左ノ如シ、

前文略ス、偖只今洛中ノ形勢ハ、追々本田弥右衛門ヨリ申上候事ニハ御座候得共、私承得候条々左ニ申上候、馬關攘夷之事早打ノ御届有之、堂上方ノ処ハ何レモ快トシ盛ト唱ヘ、奏

聞ニ及ヒシ節ハ何ノ御沙汰モ不為在、恐多クモ御心配ノ御様子ニ被伺シカトモ、既ニ

勅諚ニ出タル事候ニ付、褒

勅ハ下サレスシテ不相済訳ニテ、夫々其御運ニ相成候由ニ御座候、何分上ノ　思召ハ諸藩一致ニ無之、中ニモ薩長ノ間不和ナルニ、未タ和睦ノ場ニモ至ラサル処ニ、外ヲ破リテハ大害目ノ当リニ可生トノ叡念ニ被為在候由、ケ様ノ時宜ニ候間、宮ニモ甚タ御心配被為在、段々内々ヨリ被　仰上候趣モ有之候処、兎ニモ角ニモ　老公(国父公ヲ云フ)ヲ召サセラレ、万事御尽力御依頼、且ハ長州ト和睦シ、同意ニテ攘夷ノ功ヲ遂ラレ、又政事モ老公ニ御委ネ、幕府ヲ補佐セラレ候様、御直ニモ御依頼被遊度トノ

叡慮、殊ニ島津ハ寛急ヲ弁ヘ、堪忍ニ勝レタルカ故、長ト和睦ハ受付ヘク候得共、長州ノ処ハ内ト後ニ口々ニ謂立ツル訳アリトノ御事ニ候由、ケ様ノ事ニテ宮并陽明殿別テ御苦心被遊候、遠カラス又御上洛御依頼可為被在御模様ト被伺候、

右之通リ御差迫リノ御様子、承ルニモ涙ニ御座候問、一日モ早ク御張リ出シニ相成、

叡慮被安候コソ専一ト奉祈候、然シナカラ伝聞仕候処ニテハ、夷船御国ヘ渡来之儀差迫リ候趣、江戸表ノ注進モ有之、御国ニテハ御待構ヘ、御他事無之由ニ御座候得ハ、其事決着無之候テハ、御発途ノ運ニモ参間敷乎トモ奉恐察候、承ル処ニテハ、遅クモ来月中渡来可仕向ニ、爰元評判ニ御座候間、滞船モ七日カ十日許リニテ引取リ可申、素ヨリ夫々御見込モ十分御立相成候儀ニテ、長州ノ様ナル事ニハ相成申間敷、此方ヨリ御手出シハ被為在間敷ト奉存候、其御一条ハ恐ナカラ一国限リノ御訳、当地ノ形勢ハ日本重大ノ訳ト奉存候、今ノ姿ニテハ大混雑ハ遠カル間敷、其時ハ外夷処ニ無之、元弘・建武ノ如ク相成リ可申ト相考申候、就テ恐ナカラ外夷ヲ攘ハンニモ内治リ不申候テハ、如何程腕ヲサスリ候トモ詮ナキ事ニ可有御座候間、大抵ニ被召置、早々為引取ニ相成リ、一日モ速ニ御上洛内ヲ治メラレ候コソ、外夷御取押ノ根本ト奉存候、〔朝彦親王(近衛)〕宮并陽明殿モ其思召ノ様奉伺候、幕府ノ処モ何分口々ノ議論ニテ、誰モ決断ハ無之、一事ノ評議七日モ十日モ致シ、漸ク落着相成位ノ次第、衰ヘ果候趣ニ相聞得、一橋ニモ人望無之、決断ハ丸デ出来不申候由、非常ノ人物更ニ無之、誠ニ残多キ形勢ニ成立申候、會津ハ守護職丈ケハ立派ニ御座候得共、政事ハ丸デ不得手ノ評判ニ御座候、長ノ処ハ不相替様ヲ替ヘ、品ヲ替ヘ奸謀ヲナシ、丸呑（丸呑トハ大権掌握ヲ云フ）ノ手段只管ニ御座候、内ノ夷狄膝元ニアリテハ、本途ノ外夷ヲ掃フ処ニ無御座候、今ノ姿ニテハ大和カ吉野ニ　行幸ト相成リ、其時何程牙ヲ嚙候トモ詮ナク、其節ハ乍恐西ノ幕府ト申ス様ニテ、国内ニ縮マルヨリ外有之間敷ト大ニ懸念仕、同志中ノ談ニモ飲食モ喉ニ落不申、宮・陽明殿其外正議ノ方々ハ御同憂ニ御座候、幾重ニモ早ク御上洛御取鎮メノ道専一ト奉存候、御上洛相成候分ニテ人気治リ、又ハ奸賊手ヲ出スニ術少ナク相成リ可申、此度御上

洛ニハ御人数モ相応ニ被召列度ト、同志中申合候事ニ御座候、右外細々ノ事ハ、本田等ヨリ申上越候儀ト奉存候、唯此一件只今肝要ニテ、何モ差置申上候、以下略ス、

六月十三日

## 三七八　京師ノ形勢報告

六月廿四日在京某(姓名ヲ記セス)書牘ノ略ニ曰ク、過日概略報告セシ如ク、六月三日　将軍家関東帰府ノ勅命下リシニ因リ、同四日御暇御礼ノ為メ参　内セラレシニ、

勅諚之趣関白殿ヨリ御達シニ、東帰ノ上ハ速ニ鎖攘ノ実効ヲ揚ケ、奏聞スヘキノ旨厳命セラレタリ、而シテ同六日出発大坂城ヘ入リ、同十三日(異本ニ十二日)汽船ニ搭シ、同十六日江戸品川海ニ着セラレ、帰城セラレタリ、同十七日在府大小名及ヒ吏員ヲ会シ、奉勅ノ始末ヲ示シ、鎖攘ノ策諮詢セラレタリ、○将軍上洛ノ際ハ、滞京十日ニシテ帰府、直チニ鎖攘ノ談ニ着手スヘシトノ朝命ヲ下サレタルニ、幕府ハ滞京シテ処スル旨アラント百方懇願シ、滞京ヲ望ミタリシニ、

朝議変シテ長ク滞京セシメ、鎖港ノ談判ハ一橋殿ニ命セラレ、攘掃ノ大義ハ水戸殿ニ命セラレタリ、依テ二公ハ命ニ従テ東下セラレ、一橋殿ハ横濱鎖港ノ談判ヲ開カレタリト雖モ、外夷傲然承服セス、却テ我ヲ恐嚇シ、或ハ英夷ハ生麥事件ノ論談猖獗ニシテ、数艘ノ軍艦ヲ以テ其罪ヲ問ハント、其言論頗ル切迫ナルカ故、狼狽困窘為ス処ヲ知ラス、異議喧囂帰着ノ途ナク、数日ノ間群議ニ経過シ、

勅令期限モ空シク消耗セルカ故、一橋殿ハ困窘ノ余リ、遂ニ後見職辞セラル、ニ至レリ、然シテ

朝議又変シテ　将軍家帰府、速ニ実効ヲ揚クヘシトノ厳命ヲ下サレタリ、僅々数十日ノ間ニ斯クノ如クノ転換アリ、元来幕府ニ於テ、鎖攘ハ尤モ好マサル処ナリト雖モ、軽易ニ循奉シタルハ例ノ詐術ニシテ、事ヲ左右ニ託シ遷延シ、其間ニ威望恢復ノ計画ニ出タル者ナリ云々、

編者曰、一橋殿ハ幕府旗下中ニ人望ニ疎キハ、咸人知ルカ如シ、其因テ起ル所以ハ詳ナラスト雖モ、綽

名シテ豚一殿ト蔑唱セリ、一説ニ豚肉ヲ好ミ、旦夕食饌ニ欠クコトナキニ出タリトモ云ヒ、或ハ豚ヲ愛飼セラレシ故ナリトモ云フ、後見職ニ拝セラレショリ旗下中益々軽蔑シ、怒嗟罵詈甚シキニ至レリ、斯ク衆望ナキハ、安政五戊午年家定将軍薨セラレ、嗣ナキニ依リ、慶喜公ヲ入レテ嗣タラシメント冀望シタルハ、各藩及ヒ有志人ニアリ、家茂公ヲ入レント望ミタルハ旗下一般ニアリ、〔朱〕〔阿部潛談話記参看〕然ルニ大老井伊直弼断然家茂公ヲ入レテ嗣タラシメ、自ラ政権ヲ握リ、大ニ威権ヲ恣ニシタリ、家茂公ハ其時僅〔朱〕十二歳〔或ハ十三〕ノ幼冲ナルカ故、井伊大小専擅施政セリ、公ハ若齢ナリト雖モ、旗下中ニ於テハ頗ル人望アリ、元治二年大坂城中ニ於テ病危篤ノ際ヨリ薨逝ニ方リテハ、老幼挙テ歎惜、食ヲ忘レ、徳川ノ運機迫マレリ、嗣ハ必ス一橋殿ナラント大ニ憂患セリト云フ、或ハ嘉永ノ頃水戸公〔斉昭公〕一橋公ヲシテ嗣タラシメ、自ラ政務ヲ左右セントノ意アリト喋々シ、或ハ家定公ハ水戸公ノ姦謀ニ依リテ、病ヲ発シタリトノ説モアリタリ、斯ク悪説ニ罹リ、或ハ各藩ノ所望アリシヲモ顧ミス、井伊氏ハ家茂公ヲ入レテ嗣タラシメタルニ依リ、井伊氏ハ遂ニ天下有志者ノ悪ム処トナリ、剰ヘ驕慢暴戻ノ所為アリシカ故、遂ニ櫻田街上頭足所ヲ異ニスルニ到レリ、

## 三七九　五ケ所砲台及ヒ水軍隊大操練

六月廿五日、五ケ所砲台及ヒ水軍隊操練ヲ催サレ、太守公御出馬　御覧アラセラレタリ、又両御旗本及ヒ先後二軍其他御城下警衛等ノ諸隊ハ、砂揚場ニ於テ操練ス、惣物主川上式部〔久美〕出張セリ、

## 三八〇　英艦隊渡来ノ事由ヲ問ハシム

六月廿七日

投錨スルヤ、郷吏乗艦渡来ノ仔細ヲ問フ、英吏曰、国書ヲ護送セリ、明日鹿兒島ニ廻航シ捧クベシト云フ、此日〔揖宿郡〕〔同上〕頴娃・山川・指宿・〔揖宿郡〕喜入等ノ諸郷ハ、予テ布令ノ如ク、夷船ノ帆影ヲ見テ烽火ヲ立、或ハ早馬ヲ飛シテ注進セリ、谷山郷ヨリハ夷船ノ標旗英国ナルヲ報シタリ、斯ノ如ク相図ノ烽火狼烟ヲ見テ、一般待チ設ケタル事ナレハ、男女老幼海岸ニ出、遙望スル者夥シ、砲台守備ノ士ハ武装シテ〔股引・半天或ハ立揚袴、或ハ半首陣笠或ハ籠手・脛当・陣羽織等種々ナリ〕、各持

場ニ走セ着キ、或ハ両御旗本・御城下警衛等ノ諸兵モ悉ク出張セリ、予テ攘夷ノ布令或ハ生麦事件モアルカ故、直ニ開戦ト心得タルモアリテ、我レ先ニト走セ着キタリ、或ハ市街ノ輩（上町・下町居住ノ者）ハ老ヲ扶ケ幼ヲ携ヘ、山手ノ方ニ避ケ行クモアリテ、暫時甚タ雑沓セリ、烽火狼烟ハ夷船渡来ヲ報知ノ為メニシテ、非常出軍ハ早鐘ノ相図ニヨリテ、持場ニ参着スヘキ令ナリト雖モ、攘夷ノ布令或ハ生麦事件アルカ故、相図ヲモ俟タス出軍セシハ、士気奮興ノ一端ヲ知ルニ足レリ、実ニ盛ナリト謂フヘキナリ、

本日異状ナシ、夜入過頃ヨリ各艦奏楽シ、亥ノ剋ニ至リテ停メタリト云フ、

砲台其他ノ諸隊ハ各持場ヲ固メ、開戦ノ令下ルヲ待タリ、

当夜国老小松帯刀ヨリ各陣ニ演達、曰ク（軍賦役又ハ軍役ノ筆者ヲ以テナリ、）

開戦否ヤハ自ラ命令セラルヘシ、敢テ動揺軽忽ノ所為アルコト勿レ、或ハ弾薬準備ニ注意スヘシトノ厳令ヲ下セリ、

## 三八一　英艦隊当日ノ形況

六月廿七日

英艦渡来ノ相図ヲ聞テ、国老初メ大小ノ吏員・兵隊ニ関セサル輩、直チニ登城、当夜下町下会所ニ集会ス、御軍役方モ同所ニ出張セリ、而シテ国老等予テ持場ノ定アルカ故、各兵ヲ引ヒテ市街ノ要所、或ハ両城下ノ警衛ヲナシタリ（廿八九日ニ至リ、諸郷兵モ御城下ヘ着到セシ者ハ、市街ノ要所ヲ固メタリ、又内海ノ諸郷モ予定ノ如ク、各持場ヘ出陣シタリ、）

## 三八二　参考　安田助左衛門日記鈔

文久三年六月廿七日

七ツ半過沖小島祇園ノ洲ヨリ打揚ノ相図有之、異船七艘当夜谷山沖ヘ汐掛、

## 三八三　各砲台其他準備

六月廿七日

英艦ノ帆影ヲ見テ予テ定メラレタル如ク、各砲台其他ノ衛隊、直チニ持場々々ヘ馳出タルニ依リ、兵糧方・弾薬方等モ予定ノ如ク準備セリ、兵糧方ハ大乗院・福昌寺・草牟田村隆盛院・大徳寺・南泉院支坊、人馬寄所（人馬寄所吏員出張所ハ、松井十郎宅ナリ、○糧食ハ廿七日ノ夜ヨリ）ハ草牟田村市街ト定メラレタリ

シテ、各営所ニ運致シタリ、廿八・九日ニ至リテハ、各郷ノ兵隊来集シ、其人員夥キカ故、大乗院・福昌寺ノ支坊ニ分集シタリ、

## 三八四　各郷ノ兵隊各持場ニ出張ス

六月廿七日

英船来港ノ報告ハ、予定ノ如ク各郷隣近互ニ相通シタルカ故、何レモ迅速ニ出兵シ、城下ヘ馳セ続クモアリ、或ハ沿海ノ要衝ニ出張シタルモアリ、重富ヨリ内海佐多迄ニハ菱刈・諸縣二郡各外城ノ兵出張シ、谷山ヨリ山川迄ニハ西目諸郷ノ兵警衛セリ、物主談合役ハ皆城下ノ人ナリ」（軍賦令参看）」

（肝属郡）（伊佐郡）（宮崎県）（給良郡）（鹿児島市）（揖宿郡）

## 三八五　櫻島ノ警衛

六月廿七日

櫻島ニ在ル兵ハ、同島ノ士ハ勿論國分・清水・牛根・嘉入郡五ケ郷ノ人員ナリ、物主ハ加藤権兵衛、談合役（本マヽ）惣物主ニハ肝付兵部（兼両）、談合役郡山一介等ナリ、

（国分市）（垂水市）

## 三八六　兵糧弾薬ノ準備

六月廿七日

当時藩内米穀匱乏ナリト雖モ、藩庁ハ予メ貯蓄数千石アリ、或ハ米倉ハ両所共（米倉出物倉ヲ云フ）海岸近キカ故、春末ノ頃永吉村ニ在ル島津右門カ（知覧郷領主）別荘地内ニ倉庫ヲ建築シ、貯蓄シ、幾十日ノ連戦モ欠乏ノ患ナシ、此倉庫ノ地ハ海岸ヲ去リ、城山ノ後ニアリテ、敵ノ掠奪焼亡ノ憂曽テアルコトナシ、又嘉永ノ頃ヨリ連年製造貯蓄セラレタル糯ハ、御台所ノ倉庫ニ貯アリシモ、尾畔邸内ニ貯蔵セラレタリ（糯製造ハ嘉永二三年頃照国公ノ命ヲ以テ製造シ、以来細々増製或ハ新古貯ヘ替トナリタリ、）

## 三八七　英国軍艦七艘鹿児島湾ニ侵入ノ形勢

文久三年六月廿七日東微風快晴、申剋過ル頃各所ノ烽火ヲ揚タリ（烽火ハ山川、指宿、喜入、今和泉、谷山、佐多、大・小根占等ノ数十ケ所常ニ設ケテリ）、続ヒテ沖ノ小島・櫻島・大門口等ノ遠見番狼烟ヲ揚ケ（遠見番所ハ各砲台ニ設ケタリ、狼烟ハ遠見番人掌レリ）、或ハ号砲ヲ鳴シタリ、其時夷船大小七艘一列ニ、知輪島沖小根占ノ地方内海ニ向テ緩航進入セリ、申ノ中剋頃喜入地方ヲ航シ、其中小蒸気船二艘ハ沖ノ小島近ク徐航シタリ、是レ蓋シ浅深測量スルナラン、而シテ七艘共ニ谷山郷平川村七ツ島沖ヨリ、喜入郷ノ方ニ併列シテ（海浜ヨリ凡八九町十丁計リノ処ナリ）投錨シ、暫時ニシテ脚舟三艘ヲ以テ、平川村・和田村或ハ麓村ノ海浜、又ハ喜入・瀬々串海岸近ク乗廻レリ、